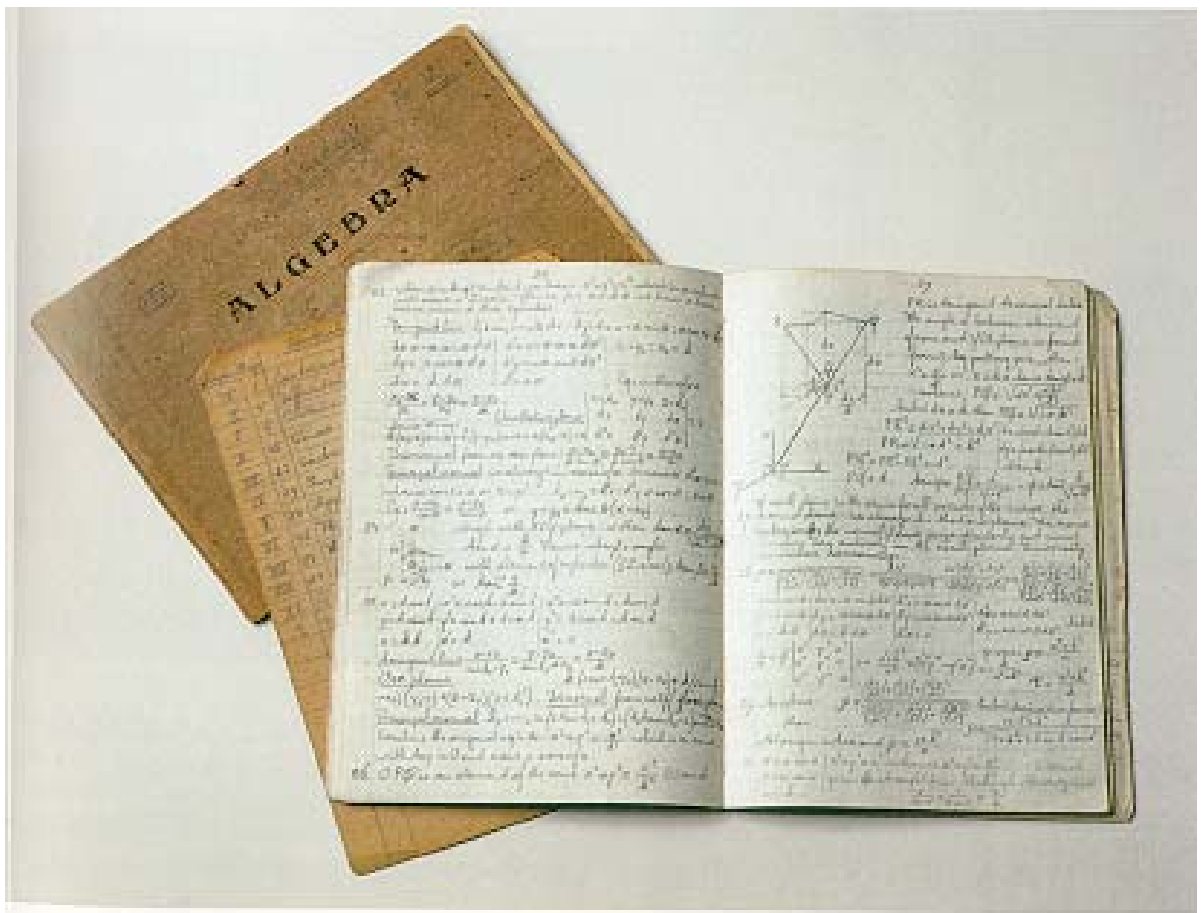


日記でみる日本占領時代の蘭印

カンピリに於いて書かれた日記



この出版物はオランダ戦争資料研究所が「日蘭歴史研究プログラム」の一環として行った『日記プロジェクト』の成果の一つである。「日蘭歴史研究プログラム」は、1994年に当時の村山富市首相が提唱した<平和友好交流計画>から生まれ、日本政府による助成金により運営されるものである。

2004年、オランダ戦争資料研究所

A digital version of this manuscript can be studied on <http://niod.nihon.nl>

日記でみる日本占領時代の蘭印

カンピリに於いて書かれた日記

編纂 : Mariska Heijmans-van Bruggen

編集 : Richard Voorneman

翻訳 : Michiko Visser-Kameyama and second translator

目次

背景	1
カンピリ ― 経緯	3
移送・居住	29
抑留所の組織／日本人責任者と欧州人責任者	53
日本人による抑留者の取扱い	70
作業・視察	96
食糧・物資	119
保健・医薬	140
抑留所外部とのコンタクト	172
イラスト	184
養育・娯楽・宗教	188
抑留者の精神状態、社会的、政治的意識	222
抑留者相互の人間関係 / 性の問題	231
戦争の経過についての報知と流言	244
出来事	260
1945年7月17日の爆撃後の収容所生活 ― カンピリ、ボスカンプ	281
抑留所での戦争終結の発表	309
人名表	317

出版にあたって

日本の蘭領東インド占領に関して残された一次資料は数少ない。日本の公文書は終戦時に大量に破棄され、インドネシアの資料は殆ど無いか、またあったとしても、その入手は困難である。一方、オランダの資料は主に戦後になって作成された報告書や声明書に限定されるが、その中で例外が戦時中に記された日記である。この日記を基に十一巻からなる〈日記シリーズ〉が編纂され、これはそのシリーズの一冊である。シリーズのうち五巻分の日記集はすでに『日記の中の日本占領』シリーズとして、ベルト・バッカー社（アムステルダム、2001-2002年）からオランダ語で出版されている。日記は現実の主観的表現ではあるが、日本占領下での日常生活の様子を良く表している。

ここで言う日記はすべて、オランダ人が記したものである。日本人管理下の収容所では‘書き物’をする事は禁じられていた。収容所外でも、家宅捜索の際に日記が見つかると思われる可能性がある。それでも多くの人々が敢えて日記を付けていたことから、日記が書き手にとっていかに重要な意味を持っていたかが窺われる。彼らの個人的な語りは、これまでに形成されてきた日本占領のイメージに新たな視点を提供するものである。

シリーズでは各巻毎に強制収容所、あるいは捕虜収容所に焦点を当てたが、収容所外の生活にも関心を注いだ。シリーズにはある日記を一冊、丸ごと収めたわけではなく、日本占領下の西欧人の日常生活がはっきりしたイメージが得られるように、取捨選択が行われている。

選択に先立って、複数の日記からの情報をいかに明瞭な方法で組み合わせるにはどうしたらよいか、熟考され、長い議論が行われた。一見すると、それぞれの日記から部分を選んで、日付順に並べるのが最も妥当ではないかと思われた。しかしこのように並べると、日記の各々の部分が提供する収容所生活の独立した側面についての情報を全体の中から抽出する事が難しくなり、そのために情報が失われてしまう恐れがあると懸念された。また、我々は日記の部分をさらに細かく項目分けすることで、全体がさらに読み易いものになるではないかと考えた。さらに最終的には、シリーズには各収容所毎、独立した巻が設けられ、複数の日記が出版されるということがあり、我々は複数の日記からの情報を並べ、比較することができるような方法を見いだそうとした。

そこで結論として、日記を各々、収容所生活の重要な側面を表す項目に分ける方法が選ばれた。項目毎に日記の部分を日付順に並べ、時の経過がはっきりと分かるようにした。さらに、こうすることで、シリーズ内の複数の日記に見られる話題の発展、例えば医療状況を、互いに比較することができる。しかし実際、項目内容はそれぞれ相互関係にあり、分け難い。したがって日記の部分の多くは幾つもの項目に跨るものである。

編纂にあたっては日記原本を使用した。ただし、読み易くするために、文章は現代オランダ語に統一する方法が採られた。また、紙不足から日記の書き手があまり考慮しなかった句読点や段落を付け加えることにより、読み易さを促進した。略語は幾つかの例外を除いて通常語に戻した。読み易いようにするためか、あるいは説明のためか、いずれにしても原本に後

から書き加えられた文章は、すべてカギ括弧で括った。プライバシー尊重の観点から、文中、書き手を著しく傷つけるような文脈、あるいは犯罪的な行為をしたなどの非難の文章に限り、その個人名を伏せるようにした。時には書き手自身が、ある状況の中では名前を伏せている場合もある。全体として、書き手の認識は個人的なものであり、彼らが置かれていた極端な状況に影響されているものであることを特記しておきたい。

使用した日記の著者およびその近親者からは、我々が彼らを捜し出せる限りにおいて、この日記プロジェクトに彼らの日記を使う許可を得ている。

カンピリ　－　経緯

女性収容所カンピリは南セレベス（スラウェジ）に、1943年3月から1945年9月まで存続した。カンピリに抑留された、最終的にはおよそ1,650名の女性と子供たちは、インドネシア群島の東部全域から来たのである。1943年3月にカンピリに収容された女性と子供たちの第1グループは、アンボンからの323名から成っていた。第2グループ、1,176名は1943年5月にマリノ（南セレベス）よりカンピリに移送された。1943年9月にはチモール島から来た106名の抑留者、第3グループがカンピリに到着した。1943年9月以降は、さらにバリーとマカッサル（ウジュンパンダン）からの少数の女性がカンピリに抑留された。これらの女性と子供たちは、カンピリに到着する以前、既にどんなことに耐え抜いてきたのであろうか？ これらの人々の大部分は、1942年の前半に日本人によって抑留され、従って既にある期間、日本人の収容所で過ごした。彼女たちがカンピリでの抑留以前の期間を、どのように経験したかということが、カンピリにおける抑留時代に彼女たちが形成したイメージへの影響となっていた。最終的にカンピリに移送された抑留者の「歴史」が以下に語られている。

「アンボン・グループ」

アンボンにおけるヨーロッパの一般市民は、1942年1月末に蘭印政府の命令により避難させられた。避難民キャンプはアンボンの町からおよそ2キロメートル離れた、森林になった溪谷に設置されていた。そこには男性、女性そして子供たち約400名が収容された。1942年2月3日にアンボンは日本人により占領され、2月5日に避難民キャンプは強制収容所の格付けを受けた。

収容所での状況は悪かった。食物は不十分であり、赤痢が蔓延した。降り続く雨は、竹製のバラックの棟を水浸しにした。その結果、日本人でさえ手に余り、それよりましな滞り場所が約束された。1942年2月26日に抑留者たちは、海岸にあるストヴィル収容所（Stovil, 原住民の教育を目的とする師範学校）へ移された。彼らは4教室を割り当てられた。

ストヴィルにおいても、状況は悪かった。石造りの建物の状態は、竹製のバラックの棟よりはかなり良かったが、空間不足は切実であった。この空間の欠乏は、セラム、テルナーテ、バンダ、ケイ諸島、ハルマヘラなど近隣の島々、そしてニューギニアからさえも引き続き新しい抑留者が加わるに従って増大した。小さな収容所には、最終的に500名ほどの人たちがいた。食糧事情は非常に悪かった。しかも配給された食物は、日本人の収容所職員に支払わなければならない。わずかな食事を補うために、密かに持ち込むことは避けられない、ということが明らかであった。そして露見した場合の厳しい処罰の危険にもかかわらず、食物を収容所内に内緒で持ち込んだ収容所外部のアンボン市民からの援助のおかげで、数十名の命が

救われた。価値ある物品のすべては日本人に没収された。医薬品は乏しかった。抑留の最初の2ヶ月間に10名が亡くなった。石鹼の欠乏から衛生状態も悪く、そのため殊に赤痢が蔓延した。教師であったJ. C. ファルダーポートウー ヴィアツ・ファン・クッホーン夫人は、收容所の責任者として任務を全^{まっ}うした。この婦人は、抑留者の状態改善を繰り返し日本人に対し強く要望したが、たいした成果はなかった。

1942年11月28日に男性たちは、ストヴィルからアンボン市の郊外にある收容所タントゥイに移送された。女性と子供たちも1942年12月27日に、同様にタントゥイへ移された。そこでは彼女たちは男性たちとは別に、バラックの棟に收容された。状況にはわずかな変化しかなかった。1943年2月15日にタントゥイは連合国の爆撃を受けた。それは、收容所に近接していた弾薬貯蔵庫に的が向けられたものであった。この爆撃により、その貯蔵庫から50メートル離れていた女性收容所は、最もひどく見舞われた。23名の抑留者が死亡し、大勢が負傷した。男性たちは爆撃後、アンボン市にあるアドヴェンツ教会へ、女性たちは海岸にあるベタニア教会へ移された。抑留者たちは最早、何も所持していなかった。ベタニア教会は262名の女性と子供たち全員のためには、いかにも狭すぎた。空間は一人当たり0.8メートル四方であった。そしてトイレと浴室は、これらすべての人たちに対して、たった一ヶ所しかなかった。しかも、当初は教会の傍に塹壕はなかった。爆撃の際、誰一人として教会から出ることは許されず、誰もが非常に^{おび}怯えた。抑留者は汚れ、突然、赤痢が蔓延し始めた。この悲惨さは1943年3月17日に、アンボンの港へ行く命令が出るまで続した。女性と子供たちは、アドヴェンツ教会からの男性たちと共に、未知の目的地へ向かう戦艦に乗船し、そこから出発した。

「マリノ・グループ」

マリノはマカッサルの東部70キロメートルの所に位置し、本来、避難民キャンプであった。そこへ1942年1月に、マカッサルから来たヨーロッパの女性と子供たちが、この町、マカッサルでのオランダ軍と日本軍との交戦の可能性を考慮して避難させられた。女性と子供たちは、電気と水道の設備のあるおよそ55の休暇バンガローと山荘、そして児童休暇地の建物に收容された。これはバンガローからわずかな距離に設置された幅の広い建物であった。戦前、健康の優れない子供たちがそこで回復することができた。1942年2月8日にマカッサルは日本軍により占領された。その翌日、マリノは日本軍機により機銃掃射された。目標は自動車の倉庫であったことが後日判明した。しかし、機関銃の炎は避難民に相当の恐怖を抱かせた。1942年2月25日、マリノに日本の兵隊が到着し、そこは強制收容所の格付けを受けた。2月11日に警察官舎に抑留され、マカッサルでの日本の侵攻中、後に残されていたヨーロッパの女性と子供たちは、1942年3月13日にマリノへ移送された。同じく3月にエンレカンから来た女性と子供たちから成る大グループは、マリノに抑留された。1942年8月に、

マリノから来たおよそ30名の女性と子供たちのグループは、マリノから徒歩で約20分ほどの所にある村、ロンバッサンの4件の家に強制的に移された。この制裁としての移動の理由は、当初は不明瞭であった。しかし、それは訪問した日本人の高位高官から約10日後に、処罰される人々へ個人的に通知された。この高官は、彼らの影でそれらの女性たちが日本人を非難する発言をした、と語った。恐らく彼女たちは、スパイによって密告されたのである。1942年9月に100名を超える女性と子供たちがスンバ、スンバワ、そしてフロレスからマリノに到着した。その中には多くのカトリック及びプロテスタントの女性伝道師がいた。これらの人々は1942年5月に日本人によって抑留され、7月にセレベスへ船で送られた。そこでは当初、マカッサルの警察官舎に収容された。1942年12月29日に15歳以上のすべての少年は、マカッサルの北方約200キロメートルの所にあるパレパレの男性収容所へ向けて、マリノを去らなければならなかった。マリノにおける収容所住人の最後の変更は、1943年1月26日に、約50名の混血蘭印系女性と子供たちが到着した時に生じた。住人の総数はその時点で、およそ1,200名に達した。

マリノの抑留者たちには、かなり行動の自由があった。これらの人々は、収容所からの外出は確かに許されなかったが、永続的な日本人の監視はなかった。当初、内政官吏がマリノにいる女性たちに関して責任があったが、さらに日本人の収容所長が任命された。カンピリへの移送当時、この職務は警察署長、イノの手中にあった。収容所の状況について情報収集をするために、数人の日本人が時々来るだけであった。定期的に泥棒に押し入られたことは、実際に日本人の監視不在の欠点であった。

マリノでのヨーロッパの指導全般は、オランダ語の教師で、戦前はマカッサルの高等市民学校に勤務のA. A. ヴェイヤース氏の管理下にあった。彼を補佐する女性たちが何人かおり、その中の一人がA. H. ヤウストゥラ夫人であった。彼女はフランス語の教師で、高等市民学校での元同僚であり、後にカンピリで収容所リーダーになるであろう。1943年1月迄は、すべての必需品はインドネシアのパサール（市場）で自由に購入することができた。そこではマカッサルからの多くのインドネシア人たちが、彼らの商品を提供していた。そしてそのようにすることで、女性たちにあらゆるニュースを知らせた。それぞれの家または家族は、自分たち自身の食物の面倒をみた。1943年1月に日本人から命令が出され、抑留者がまだ所持していた現金はすべて引き渡さなければならなかった。その現金は中央金庫に預けられ、そこから毎日、一人当たり最大限15セントで収容所全体の食物が購入された。ヴェイヤース氏が金庫の管理をした。

1943年5月1日に、目前に迫っているカンピリへの移動が通知された時、人々は、これが様々な分野における後退を意味することになるであろう、と恐れた。今までのところ食物は十分であった。そしてカンピリでは、電気も水道も設備されていなかった。一方、環境の変化に人々は利点を見出した。女性と子供たちは、1943年5月3日、4日、そして5日の3回にわたるトラックによる輸送でカンピリへ運ばれた。彼女たちはアンボン・グループの人々に迎えられた。これらの人々は、彼女たちのために食事を用意していた。また、これらの

人々は、4月上旬に『着の身着のまま、ごく最近マカッサルに到着した同国の人たち』のため
にということで、マリノの人たちによって自発的に寄付された衣類の大部分を着ていた。

「チモール・グループ」

1942年1月に、オランダ人社会はオランダ領チモールの首都クーパンより避難させられた。
人々は2ヶ所の避難民キャンプに収容された。一ヶ所はクーパン近郊の海岸にあり、もう一ヶ
所は中央チモールの山間部に位置するソエにあった。ソエには日本人の到着後、オランダ人の
家族のために強制収容所が設置された。家族は最終的には2軒の家に収容され、女性と子供た
ちは男性たちと別にされた。食事は合同で楽しめたため、家族同士の連絡は実際に可能であっ
た。

1942年6月に、ポルトガル領チモールから来たオランダ人の家族もソエへ移され
た。1942年8月に収容所の住人は、ロティとフロレスの島々から来た少数の抑留者により
更に拡大し、合計で約120名に増加した。空間を得るために、夫または父親が男性収容所に
いなかった女性と子供たちは、1942年6月に移動しなければならなかった。これらの婦人
たちが子供たちと住み始めたいわゆる「ボーフェンハウス（上の家）」は、他の家々よりもや
や高い位置にあった。この家の内部には水道の設備は無かったため、女性たちは毎日、何回に
もわたり水を汲むために下まで降りていかなければならなかった。衛生設備は良好であった。
しかし、収容所全体に家具または台所用品は殆どなかった。男性たちは菜園で働き、一方女性
たちは家庭内の仕事と炊事をした。自分たちの食糧在庫が使い果たされた後、抑留者は日本人
により配給された食物をもらった。抑留者が生活しなければならなかった環境は、徐々に悪化
した。オランダ人の収容所管理は存在しなかった。

1943年7月よりチモールは、連合国により頻繁に爆撃された。これが恐らく、1
943年9月5日に発表されたことの原因であった。それは、抑留者は翌日クーパンへ連れて
行かれるはずであり、そこでは彼らをセレベスに運ぶ古い船に乗せられる、というものであっ
た。マカッサルに到着後、男性たちは女性と子供たちとは別にされ、パレパレの強制収容所へ
移送された。女性と子供たちはカンピリへ連れていかれ、そこへは1943年9月10日に到
着した。

その他の移送

1943年9月に、チモールから抑留者グループが到着後、カンピリでの抑留者の総数は約1,
600名までに増加した。1943年11月に更に小グループ、とりわけマカッサルからの蘭
印系ヨーロッパの女性たちが、この収容所に入れられた。この中には、この町の日本人酒場で

勤めていた多くの女性がいた。最後にバリーからの13名の抑留者小グループが、1943年12月にカンピリに到着し、抑留者の合計はおよそ1,650名に上った。

1944年の中頃、収容所住人はなお再び増加するであろうと思われた。北セレベスのマナド（メナド）郊外にあった収容所アルマディディからの、女性と子供の抑留者たちの到着を考慮して、収容所に4つの新しい棟が増設された。しかし、予想されていた収容所住人の増加は実施されなかったことが、1944年9月に発表された。恐らく、マナド（メナド）からマカッサルへの船舶移送での、水雷攻撃の危険が大き過ぎたか、または日本が十分な船を手配できなかったことからであった。新設の棟々は1944年11月に、他の抑留者たちにより使用されることが許された。

日本降伏までのカンピリでの生活

強制収容所カンピリはマカッサルより南方、およそ20キロメートルの所にある低地に位置していた。収容所は、結核患者のための元療養所及び、それと境を接していた元精神病院の敷地にあった。カンピリに来た第1グループの抑留者たち「アンボン・グループ」は、元療養所に既にある石造りの建物7棟に収容された。「マリノ・グループ」のために、収容所の敷地に竹製のバラック12棟がクーリーによって建てられた。収容所はその時点で3つの集合体に分割された。バラック第1棟から第6棟までは集合バラックA、第7棟から第12棟までは集合バラックB、そして石造りの小家屋は集合バラックC。バラックの棟々は、4-5ヶ月する頃には既に建て直さなければならなかったほど、貧弱に組み立てられていたことが明白であった。新しいバラックの棟々は、より多くの寝場所を提供し、それは最初に「チモール・グループ」が、その後マカッサルとバリーからの抑留者小グループが到着した際に、必要であることも明らかであった。本来マナド（メナド）からの女性と子供たち用に新規に建てられたバラック4棟へ、1944年11月に収容所の住人が入居することを許された時、これは抑留者1人当たりの空間の拡大を意味するとして歓迎された。

1945年7月17日と19日に、カンピリは連合国の爆撃によって殆ど全体が壊滅した。この時点までは、爆弾は収容所の周りにしばしば落下したが、収容所内ではなかった。周囲及び最終的には収容所内にも頻繁に爆撃があった理由は、多分、カンピリの周辺に日本軍の陣営がかなり建てられていた、という事実からであった。その上、収容所から10キロメートルの距離に、日本の飛行場もあった。

1945年7月17日の爆撃の後、カンピリの抑留者たちは、カンピリ敷地外の森の中にあった応急収容所へ移された。抑留者たちからボスカンプ（森の中にある収容所）と呼ばれていた応急収容所は、支柱の上に建てられた竹製の大きなバラック10棟と、小さなもの36棟から構成されていた。それは恐らくそのような事変を考慮して、日本人の所長の命令により、以前既に建てられたものであった。ボスカンプ内の空間はわずかであった。しかも全体の

状況も、カンピリより著しく劣悪であった。しかし、抑留者たちには、確かに完全な防水ではないが、頭上には屋根があった。抑留者の大部分は日本降伏の時点では、まだボスカンプ内に残留していた。

セレベスはオランダ領ボルネオ、小スンダ列島、モルッカ諸島、ニューギニアの占領地域、及び太平洋の島々と合わせて、日本海軍の指揮下にあった地域に属していた。収容所の管理は、海軍の地域においては別の方法で統制された。これらの地域は当初、海軍当局の直接の管轄下に置かれていたが、後に海軍民政部に移管された。マカッサルにおいては、これは1943年12月1日に実施された。この移管は抑留者にとっては、何一つとして変化をもたらさなかった。

カンピリの最上位には日本人の収容所長ヤマジ タダシがおり、「ボック」(マカッサル語では豚)または「パー」(オランダ語では「お父さん」)などの^{いみょう}異名で呼ばれた。彼は1943年5月14日に任命され、日本降伏の時点までその任務に就いていた。日本側から彼に補佐が付けられた。抑留の全期間を通して、何人かの異なる補佐が所長に勤めた。彼らは日記の中に「ストッキィ」、「ドウ・トゥベイドゥ (第二番)」、「スナイダーチュ」そして「ダーンチュ」などの名前で見いだせる。カンピリのヨーロッパ人の指揮管理は、3期間に分けることができる。1943年9月までは、アンボン・グループ及びマリノ・グループは、それぞれ自分たち独自の男性または女性のリーダーと組織を持っていた。アンボン・グループは、ファルダーポートルー ヴィアツ・ファン・クウホーン夫人の指揮の下に、マリノ・グループは(まだ)男性収容所に移されていなかったヴェイヤース氏の指揮のもとにあった。1943年8月に両方のグループは、1人のリーダー、ヤウストゥラ夫人のもとに統合された。チモール・グループも同様に彼女の指揮下に置かれた。1944年12月末より爆撃までは、収容所全体の指導はファルダーポートルー夫人の手中にあった。彼女は爆撃後、ボスカンプのリーダーとなり、一方ヤウストゥラ夫人には、従って全般の指揮が任された。ヨーロッパ人の組織における、低いレベルでは集合バラックリーダー、バラック主任、そして各種「勤務班」の班長が指名された。

カンピリには、多くの異なる国籍の女性と子供たちが集められた。ジャワとは異なり、ドウ・バウトゥンヘヴェストゥン(外領一 ジャワを除く行政区域)の一部であると考慮されたセレベスでは、純血のオランダ人及び日本と戦争中であったオランダ以外の国の市民、さらに殆どの混血蘭印系オランダ人¹も日本軍の到着直後に抑留された。しかし、中国人とアルメニア人もカンピリの住人に属していた。「外国人」は別に確保されたバラック第8棟に収容されたが、混血蘭印系オランダ人はここではそのように考慮されなかった。また別の小家屋には、カンピリの男性抑留者も住んでいた。これらは日本降伏の時点では、医師A. マルセイユ、神父P. L. H. ベルチュンス、そして牧師H. スプレウエンベアフの3名であった。C. ファ

¹ 混血蘭印系オランダ人はユーラシア人、または蘭印系ヨーロッパ人とも呼ばれ、これらの人々は混血ではあるが、オランダ国籍を確かに有する。

ン・エフモントゥ神父はマルセイユ医師と同様、1943年3月にアンボンから女性たちと共にカンピリに連れてこられ、1943年5月にパレパレの男性収容所へ向けて出発しなけりばならなかつた。ヴェイヤース氏が1943年11月にそれに続いた。そのほか収容所にまだ残留していた男性と15歳以上の少年たちも、時と共にこの男性収容所へ移送された。スプレウエンバァフ牧師とベルチュンス神父は、それぞれ1943年6月と11月にパレパレからカンピリに移送された。これら男性たちは、彼らの宗教上の業務のかたわら、収容所内で別の仕事も受持っていた。牧師は同時に大工でもあった。また神父は鍛冶屋、配管工、そして蓄殺場作業員（彼は豚と牛を畜殺した）でもあった。マルセイユ医師もまた彼の本業を営むほかに、さらに別の役割を持っており、汚物溜めにつながる管が故障、または詰まった場合に修理することであった。さらにカンピリでは、年配の女性たちが一軒別の小家屋に集められ、「ミュージアム（博物館）」のあだ名をもらった。カンピリの修道女、プロテスタントの女性伝道師、そしてカトリックの女性伝道活動者から成る比較的大きなグループ、合計91名のために第1棟が確保されていた。最後に、収容所内には更に、いわゆる「小泥棒の家」があった。盗みをはたらいている現場を見られた抑留者は、そこに住まなければならなかつた。

カンピリの食糧事情は、比較的に良好であった。抑留の期間中、収容所ではヤマジにより菜園の設置を初め、豚、牛、鶏の飼育などによる自給自足が、可能な限り実施された。定期的にヤマジは蓄殺された豚を、収容所の炊事場へではなく、マカッサルにあった日本軍部隊へ運ばせた。しかもこれら全てが、抑留者がしなければならぬ大量、かつ頻繁に厳しい仕事をもたらした。収容所のための、とりわけ炊事、寝床の清潔維持なども含むこれらの活動の次に、日本人のために仕事をさせられた。裁縫と編み物のほかに、抑留者は高熱に耐えられるガラス風の鉾石、雲母を剥がす作業をしなければならなかつた。抑留者は、剥がされた雲母は日本の軍事産業のために使われていたらしい、と考えた。

日本人の収容所長は、伝染性疾患に対する大きな心配が生じたことにより、殊に赤痢を防止するために若干の対策を講じた。それらの一つは、1944年末に感染の危険を減少させるため、収容所自体に隣接する敷地、いわゆるキャッサバ菜園へ赤痢患者を移すことであった。その敷地は、その名前が由来するカスビ（キャッサバ）が部分的に植えられていた。また収容所内に病院も設置された。収容所での死亡者数は比較的少なく、カンピリでの抑留全期間を通じて子供21名と女性12名であった。医療管理は、マルセイユ医師、H. M. フットゥブルトゥー ヴェークハウトゥー女医、そして H. G. フェインストゥラー ヴォルトゥハウス女医の3名に託されていた。また日本人の医師たちが、収容所内で抑留者たちを手術するというこゝもあつた。

健康の分野における惨事は、収容所内に狂犬が現れたことであつた。これらの犬の噛み傷で2人の女性と1人の子供が亡くなった。1945年7月17日の爆撃の結果として、子供3名と女性2名が命を落とした。精神的な問題も抑留者の中に生じた。精神的な問題を持つ女性たちのために、「不思議な小家」が設置された。ヒステリーが重度の場合は、キャッサバ菜園の中にある石造りの小さな家トゥルンク（牢屋）へ、（一時的に）入れられた。殊にニュ

ースの欠如は、抑留がさらに長く続くに従って、抑留者の神経の負担を重くした。赤十字の小包は、カンピリでは決して受け取ることはなかった。1944年10月にカンピリは、75,000ギルダーの金額は確かに受け取った。これはヴァチカン経由で、オランダ領東インドのすべての抑留者に対して或る金額を贈与するために、1943年以来ロンドンでオランダ政府によって尽力された結果であった。それと同じ時期に、同額がスウェーデン政府経由で、オランダ領東インドの抑留者全員の間で分配された。ところがカンピリに関連する文献には、この点について何も伝えられていない。

収容所での不愉快な出来事は、女性たちがマカッサルでの尋問のため特警隊（海軍特別警察隊の略称。陸軍の「憲兵隊」と対をなすもの）により収容所外に連行されたことであった。日記のいくつかの断片に特警隊は「ゲシュタポ」または「オトリ」として表現されている。例えば、アメリカ伝道会の3名の婦人たち、ダイブラ嬢、オキーフ嬢、そしてセイリィ嬢は相当な時間にわたり尋問された。彼女たちは9週間後によく、カンピリに再び連れ戻された。A. L. ホートゥマンズ中佐の配偶者J. A. ホートゥマンズ トムボ夫人は、日本の占領者に抵抗をはたらき、マカッサルで7年の懲役刑を宣告され、カンピリ収容所には再び帰ってくることはなかった。

日本降伏後の出来事

日本の降伏は1945年8月16日に、抑留者たちに発表された。ヤマジはカンピリが明け渡されることになる迄、収容所長として留まるが、その退去がいつ行われるものか、まだ不明瞭であった。そのため諸々の品物、例えば、衣類やシーツ用の布地、靴、寝台、医薬品、チョコレート、その他おいしい食料品などが、収容所内に運ばれてきた以外は、降伏以前の状況と比較すると、たいした変化はなかった。その間、爆撃された収容所の再建が普通に進められていた。これも確かに必要なことであった。ボスカンプでの人々の健康状態は悪く、実際のところ100名の赤痢患者が発生したからである。1945年9月中旬に人々はボスカンプから退去し、カンピリの新築の棟々に移り住んだ。

降伏直後のこの時期に、ヤマジの命令により、ヨーロッパの収容所指揮管理による収容所報告書が作成された。平和が発表されて直に、ヤウストゥラ夫人により行われた抑留者一同を代表する、マカッサルの日本の陸軍司令部に対する証言によって、女性たちの間にさらに動揺があった。その中で彼女は、抑留者が抑留期間中に受けた親切な配慮と、正当な取り扱いに対する彼女の謝意を述べた。抑留者すべてを代表したこの証言は、一方ではこのことを知っていたのは収容所では3名だけであった、ということが一部の女性たちを憤慨させる原因となった。

1945年9月中にかなりの女性と子供たちは、カンピリへ迎えにきた夫たちによって引き取られた。夫たちは日本の占領中、マカッサルの俘虜収容所に滞留していたのである。

病人もまたマカッサルにある病院へ運ばれた。1945年9月23日にカンピリは、最終的に全体が明け渡された。この退去は、ヤウストゥラ夫人が率先して行なった。マカッサルのイギリス軍の隊長は、このためには何の措置も行わなかったことによるのである。女性と子供たちは古いトラックでマカッサルに移された。そして彼女たちの住居が見つかるまで、暫定的に受け入れ施設に収容されていた。マカッサルでは、パレパレからの男性たちとの家族再会が実現した。

収容所長 ヤマジ タダシ

下記の資料は一部、菊池政男の執筆による日本語の著書からの抜粋であり、そのオランダ語の題名は『Blanke huid en gele commandant (白い肌と黄色い隊長)』と表現されている。初版は1960年1月に刊行された。そして恐らくベストセラーになったことにより、同年さらに映画化もされた。その映画については後述する。その書物の中で著者は、カンピリの収容所長としてのヤマジ タダシの様々な体験を物語っている。ことによると所長の余りにも人間的すぎるイメージのため、この書物は歴史的出典としては不適當であるという事実にもかかわらず、ある特定の事柄については、それでも価値ある情報を提供している。

ヤマジ タダシは日本の四国、香川県に推定では1916年に生まれた。それは彼がカンピリの収容所長の職務に就任した当時、27歳であったことからである。彼は日本での学業を修了後、1937年に海浜団に入団した。1942年2月に第二等兵曹となり、マカッサル近郊での上陸作戦に参加した。占領中ヤマジは、マカッサルの海軍陸上警備隊(守備駐屯部隊)に、分隊長として勤務した。1943年5月にカンピリの収容所長に任命された以前は、パレパレにある男性収容所の警備課の一員であった。1945年9月のカンピリの撤退まで、彼はこの収容所において収容所長としての職分を果たした。その後、彼はマカッサルで臨時軍法会議による審判を待つ間、刑務所に留置されていた。判決は1947年7月5日に宣告された。ヤマジは『抑留市民に対する不適正な取り扱い』により戦争犯罪人として有罪が認められ、7年の懲役刑を宣告された。不適正な取り扱いは、殊にヤマジがパレパレで勤務していた期間に犯した虐待に関わるものではあったが、カンピリで犯した虐待も宣告では併せて熟慮された。『ヤマジが強制収容所カンピリのために、食糧をはじめ、医薬品、そして娯楽の分野においても、また日本降伏後、123人の抑留婦人たちが、被告に対する謝意さえ届けなければならない、と考えたほど多くのことを実行した』ことが軍法会議によっても同様に承認された事実のお蔭で、当初10年の求刑は上述の7年に減刑された。彼がこの刑罰に服したか否かについての事実に関しては、それぞれの資料で矛盾している。1960年に、その書物『白い肌と黄色い隊長』の出版及び同名の映画により、彼は日本で有名になった。ヤマジに関する最後に見いだした資料は、彼が1970年に自動車事故により他界したことを伝えている。

その書物『白い肌と黄色い隊長』は、1945年1月11日のフォスカウルーリムボーフ夫人の日記の断片に記されてことを、いくらか明瞭にする章を含んでおり、その中では次のように語られている。マカッサルでは女性が不足している。そしてヤマジはその町にいる彼の最高上司から、日本兵を「楽しませる」ためにマカッサルへ行っても構わない、と思う女性たちがカンピリにいないかどうか、尋ねる旨の指令を受けた。その書物の中では、ヤマジが1944年2月に（これに関し、ヤウストゥラ夫人のメモでは、私は1945年1月と思う、と書き留められている）民政部の警備課長からマカッサルの彼の元へ出向く旨、指示を受けたことが述べられている。ここで彼は、戦時状況の結果として、マカッサルでは軍人と同様エコノーム²である日本人の数が激増し、これらすべての男性のための「慰安」に関する問題が発生したこと、を知らされた。今や収容所カンピリの女性たちが、慰安婦として仕えることは可能であろう、と決定された。1週間以内にヤマジは、150名の女性の名簿を警備課に提出しなければならなかった。マカッサルの日本人売春宿のために、カンピリから女性たちは実際には決して連れ出されなかった、という事実を支える理由として、その書物の中では、ヤマジがその指令に対する単独抵抗を行なった、ということが記されている。ヤマジ側の反対、そしてその件に関してマカッサルで命令を指揮する、何人もの日本人将校の間での意見の不一致の後、最終決定は結局スラバヤ（ジャワ）の柴田副司令長官に委ねられた。この人物は、抑留の女性たちを「慰安婦」として使用し始める計画を拒絶した。

この話しの大筋が真実に基づくものであろうとも、詳細に関しては、いずれにしても一つ、あるいはそれ以上の不正確な点を含んでいる。そのようにヤマジは「慰安婦」の問題については、カンピリで誰とも話しをしなかった、と書物では語られている一方、その話題はかなり簡潔にフォスカウルーリムボーフ夫人の日記に提起されている。

波紋

1960年10月14日に、オランダ領東インド元捕虜、元抑留者及び引揚者同盟（NIBEG）の機関紙の紙上に、首相あてに送られた電報が掲載された。その中で、日本で上映されたセレベスの女性収容所を舞台にした映画『白い肌と黄色い隊長』について、憤慨が表明されていた。ここでは前述の書物と同名かつ日本語による映画化に関するものである。

要約すると、その映画は次の話を伝えている。セレベス島の女性強制収容所カンピリの日本人収容所長は、住人の生活が可能な限り快適であるように、あらゆることを実施する。それにもかかわらず彼は終戦後、報復のみを熱望した司法機関により死刑を宣告される。彼の

² 1942年12月末から1944年3月末まで、民間人抑留所は日本軍属による管理下にあった。彼らは一般にeconoom<エコノーム>（複数はeconomen<エコノームン>、原義は経済学者）と呼ばれた。<訳注：軍属には行政一般、運輸通信などの要員も含まれ、純粋の経済人（経済顧問）のみをさすものではなかった。>

ために有利になるような示威運動をする「彼の」女性たちによる介入があった後にのみ、判決は撤回される。この最後にあげた件は、完全に事実無根である。第一に、ヤマジは決して死刑を宣告されなかった。そして第二に、そのような示威運動は決して実施されなかった。しかし、オランダの元抑留者側の抗議は、殊に収容所の女性たちが、どう控えめに言っても、下劣な振る舞いをし、そして日本人の所長との性行為を試みようとした、というような印象を与えた映画の場面に関連していた。しかし、その他においても、映画は確かにカンピリでの生活を非常に誇張させた好意的なイメージを与えていたか、あるいはカンピリの3名の元抑留者が、あたかもその映画を見た後で、『映画は真実である部分に基づいているが、そこから完全に歪んだ、そして偽ったイメージを与えている』と述べたかのようである。

採用資料の出典

日記

シャボットウー コートウマン

法学博士、ヨアンナ・コーネリア・ヘラーダ・マリア、シャボットウー コートウマン、呼び名はヨーク。1911年3月26日、ウフストゥヘイストゥに生まれる。1941年12月にマカッサルのマロスウェフに住む。法学博士、ヘンドリック・テオドルス・シャボットウ、呼び名ヘンクと結婚。夫婦には二人の子供がある。ルッキイ（娘）、1936年4月3日ヴェイネン（ウィーン）生まれ。そしてバウドゥヴァイン・エリズ（息子）、1941年5月26日マカッサル生まれ。ヘンクはマカッサルの裁判所の特別代理登記官である。しかし、戦争勃発の際に動員された。彼は市の郊外にある飛行場で警備業務を勤める。1942年1月21日に、ヨークは蘭印政府の命令により、2人の子供と共にマリノの避難民キャンプへ向けて出発し、そこでは他の小グループの女性たちと一緒に山荘へ移る。ここで彼女は日本人のマカッサルへの到着、そして南セレベスで重要な陣地であるチャンバに近いオランダ軍陣地が、1942年2月27日と28日にかかる深夜に陥落したことを知る。ヘンクはチャンバよりエンレカンに到達する機会が明らかにあると判断し、彼はそこではA. L. ホートウマンス中佐に統率されるゲリラ部隊に参加した。このことについてヨークは記している。

『これを意識的に希望したとするには、彼は兵士の素質をあまりにもわずかしか持っていません。彼はチャンバで短期間ではありましたが本当に戦った後で、ただ一つの考えしか持っていませんでした。降伏せず、その先、戦争から自由な内陸の奥地へ進むことでした。様々な状況から、彼らはそれでもエンレカンに到達しました』。

若干の条件を要求することにより、中佐と彼の隊員は1942年3月27日に日本人に身を委ねた。それらの条件の一つは、空腹に苦しんでいると考えられるマリノにいる女性と子供たちに、エンレカンにある軍隊の食糧在庫の一部を輸送させる、ということであった。この方法によりヨークは、食糧を積んだ車の運転手の一人と判る夫に再会する。

『しばし、あたかも戦争は最早ないのだという感じがしました。彼はおよそ20名の他の仲間たちと立派な車で入場し、軍服姿でいつものブランダー・ブラン（オランダ人の度胸）で一周しました。このオランダ人のユーモアと向こう見ずな行動に対して、そこにいた5人の日本人は、完全に空しく消え去ってしまいました』。

ヘンクはこの後マカッサルに向けて出発し、そこで俘虜にされ、町にある歩兵野営地に監禁される。

1942年4月19日にヨークは日記をつけはじめる。日記は彼女がアメリカ人の民族誌学者ドゥボア嬢あてに書く手紙から成っている。その女性は開戦直前に（おそらく職業上）マカッサルのヨークの家に宿泊し、その間にアメリカへ帰国した。最初の何通かの手紙は、1941年12月8日に始まり、前記した期日までの概要が良く記されている。そして1942年4月からは、日常の出来事について語っている。

1942年8月にヨークはマリノで、12歳以上の子供たちに数学の授業を始める。彼女は資格のある教師ではないが、関心とたいへんな熱意からそれを行なう。パサール（市場）ではその後10月に、マカッサルからの俘虜たちは、どこか他の場所へ船で送られた、という情報が飛ぶ。この出来事についてヨークは記している。

『私はヘンクがこれら1,000人の中にいるかどうか、もちろん確かではありません。しかし、彼の年齢と健康を考慮すると、私はきっとそうだと想像します。彼からちょっと知らせがあったのは、今からおよそ5ヶ月前のことです。そしてこの予定されていた出発についてでさえ、日本人は手紙を書くことの禁止に、例外を作る理由を全く見出さなかったようです』。

後に、内密に受け取った何通かの短信で、ヘンクがそれでもマカッサルに留まったことが明らかになる。

その後1943年5月1日に、マリノの女性と子供たちはカンピリに移送されることになる、という通知がある。ヨーク、バウドゥヴァイン、そしてルッキキはマリノから5月5日に出発し、カンピリのバラック第11棟に収容される。カンピリではヨークは数学の授業を続行する。また民俗学の授業もあえて行う。そのうえ彼女は、1944年5月から収容所で、主にパチョレン（鋤作業）から成る耕作を、毎朝しなければならない12歳から20歳までの

少女たちの指導をする。1945年8月16日に降伏の発表があった後、ヨークはヘンクが降伏の直前に、セレベスからジャワへ移されたことを聞く。彼はそこでは、バタビアの第10大隊に駐屯していることが明らかになる。8月22日にそれで日記は終わっている。その後、それぞれ別々になったシャボットウ一家に、何が起こったかは知られていない。最終的にオランダに帰国したことは確実である。

シャボットウ夫人の日記は、1941年12月から1945年8月までの期間の出来事についての、たいへん明瞭な報告事項を含んでいる。日記書簡はアメリカにいる知人に向けたものであり、例えば、夫にあてたものではなかったという事実に、多分、日記の中では感情的なことには、わずかな場所しか空けられていない理由がある。子供たちの世話をすること、そして子供たちを心配することは確かにあり、わずかながら事務的に言葉にされている。まれに、ヨークは彼女の気持ちを記すために紙面を割いている。例えば、1945年3月22日に書かれた断片に見られる。

『私はここから出たい。女性ばかりのこの生活は、もうたくさんです。私は更にもう一人と知り合いになりたい、と思う必要などこれ以上全くないのです。私は一人で居たいのです。誰に対しても親しくすることなく、自分の好きなようにしたいのです』。

ヨークを悩ます収容所生活での他の面は、ニュースが欠乏することである。1942年11月に彼女は既に述べている。

『時々、不確実からの、この気持ちが、私を不意に襲うのです。日本人は私たちを自分たちの思いどおりにできるのです。新聞、ラジオ、電話、映画等の無いこの生活は冬眠のようです。来る月も来る月も何も起こることなく、飛ぶように過ぎ去るのです。アメリカではその間どんな書物が出版され、また私たちが再び普通の生活に戻るとき、古着姿の自分たちはどんなふうに見えるのでしょうか？』

戦後の社会生活について、ヨークは日記の中には何の考えも表わしていないが、インドネシア人の振る舞いに対する彼女の見解は、確かに表現している。日本人が、そのインドネシア人という言葉をもって、彼女によると『原住民及び蘭印人をも丸め込もうと試みた』。1942年9月に彼女は記している。

『私が見ることができる限りでは、積極的に党を選ぶ原住民は、ごくわずかしきいません。それは私たちを指示する者と、反対派を指示する者です。彼らは、より強力な者からの命令に従うことに慣れているのです。私たちが昔、もし彼らをさらに自立する人間にするように育成し始めていたならば、これは現在、恐らく

違っていたのです』。

フォスカウルー リムボーフ

1941年12月8日に日本との戦争が事実であるとき、コルネリア・エラー・ヘィアトゥラウトゥ・フォスカウルー リムボーフ、1899年10月24日、アイホーストゥに生まれ、はマカッサルのコーニングスラーン10番地に住む。夫、ヴェルナー・ヤン・フォスカウルは、この町にある州立ムロ学校（MULO、より広範な初等教育）で教員として勤務する。しかし、彼も動員され、蘭印軍（KNIL）の将校として受け入れられる。結婚前、フォスカウルー リムボーフはオランダでも教師であったが、その時点では既に教職には就いていない。恐らくフォスカウルー リムボーフは1942年1月にマリノへ避難したか、もしくは、その後の或る時点にマカッサルからこの収容所に移送された。これについて明確なことが存在してないのは、フォスカウルー リムボーフの日記は、彼女が既にかなり長い期間カンピリに抑留した時点の1944年2月29日に、ようやく始まるからである。彼女はその間、夫が1942年2月以来、行方不明であることを知る。彼は1942年2月28日、戦闘中に死を遂げたことが、戦後明らかになる。

フォスカウルー リムボーフはカンピリでは第11棟に住み、収容所では伝達係の任務を持っている。この職務は、ヨーロッパあるいは日本の収容所指揮管理から出される通達事項と命令を、すべての抑留者に伝達しなければならないことを含む。従って全てのバラックの棟々と小家屋へ、隈なく歩いていかなければならない。フォスカウルー リムボーフは日本の降伏まで、この職分を全うする。伝達係として彼女は何処にでも現れ、それにより収容所で起こるすべての出来事に精通している。彼女の日記はそのため、収容所カンピリの組織方法について、多くの情報をも提供している。日記の中で彼女は普通、自分自身を「伝達係」として記しており、そのことは彼女が誰か他の人について書いている、という錯覚を起こさせる。日記の形式も、従って事務的と言え、大部分は個人的な事柄に関わるものではなく、「収容所」の問題に関するものである。それでも彼女自身の物事に対する見解も時々、明瞭に表れている。1944年6月9日の日記断片がそのような例である。

『心配事のない、洗練された暮らしをしていた私たち。恩給、その後は小さな別荘、社会における私たちの階級と身分の保証があった私たち。私たちは、今、冒険家の人生を送っている。私たちは、かつて最も貧乏であった原住民よりも遥かにみじめに、バラックの棟に住み、米、クテラ芋、そして赤みがある草を食べ、空腹である。非常に汗をかくことで、衣服はひどくすり切れ、そのため収容所の扶助で衣類の施しを求める。私たちは夫たちのことは何も知らない。彼らがビルマまたは日本にいることは知っているが、彼らと再会するかどうかは、『神』の

みが知るところである。私たちは栄養失調性浮腫^{ふしゅ}、めまい、脚気に罹り、またその他の病気の症状がある。誰か他の人が皿の上に、私たちのものより大きい肉のかけらを持っているのを見れば、私たちはハイエナ（欲の深い人）なのだ。誰かがいっぱい盛られた皿を持って、棟の中を歩いているのを見るならば、まず皿の上に何がのっているか、次にその皿をしっかりと持っているその人を、私たちは疑い深く見る。そして、いつか平和である時、一体私たちは新しいより良い社会への用意があるのか、と考える』。

日記は1945年9月26日に、カンピリから最後に避難した女性と子供たちが、マカッサルに到着する時点で終わる。それから1946年10月1日付の手記が続く。その内容は次のように記されている。

『ヤマジは裁判にかけられるであろう。証人の一人は、パレで彼からひどく殴^{なぐ}られたスナイダース神父であろう！！ ヤマジは『戦争犯罪人』の名簿に挙げられるであろう！！ 大勢といってもカンピリの全員には及ばない、彼を『人間ヤマジ』として感嘆した婦人たちによって署名された証書』。

この最後の手記、そして確かに日記の他の部分からも、ヤマジがカンピリを2年半にわたり指揮した方法に対して、フォスカウルーリムボーフが持っている高い評価が明瞭に表れている。しかし、彼の時として予測できない行動の他の点を、容赦することは望んでいない。フォスカウルーリムボーフは1948年8月までマカッサルに留まる。この月に彼女は飛行機でオランダに向けて出発し、1948年8月13日に到着する。

ファン・ヴィアルンーハム

ヘィアチュ・ファン・ヴィアルンーハム、1902年12月9日、エンクハウズン生まれ。1941年12月9日、当時6歳の息子、クウンラートゥ、そして夫のヘァブンと共にマカッサルに居る。彼らは夫のヘァブンが、内務省（BB）の監督官として転任させられた先であるチモール島の山間部にあるソエへ向かう途中である。ヘァブンが仕事を開始してまだ間もない1942年6月に、チモールの首都クーバンへ転属させられる。ヘィアチュはソエに残る。1942年2月19日と20日にかけての夜、チモールではポルトガル領同様オランダ領でも、日本の攻撃が始まる。1週間後、島は殆ど完全に日本の支配下にある。

クーバン周辺での戦闘は2月21日に、既にオランダ軍の不利に終わる。その直後に日本軍がソエに到着し、オランダ人の家族は抑留される。ヘァブンは侵攻中、彼の部署に留まった。その後、抑留者の移送が、その結果として9月3日にソエからカンピリに向かう。ヘィ

アチュの日記は1941年12月からの報告で始まる。日々の出来事は1942年12月7日から記録されている。判読が非常に困難なため、日記からは、チモールからセレベスへの移送に関係する二つの抜粋のみが、原稿に取り上げられている。この理由により、筆者の詳しい紹介をすることも不可能である。日記は1945年11月28日に、次の知らせで終わっている。

『希望と恐怖の中で、さらに数週間を生き延びた後、ヘアブンは戦争の初期に既に日本人によって殺害された、という悲報が最終的に私に届きました』。

この通知を受け取った後、それ以上日記をつけることは、彼女にとってまず間違いなく全く意味のないこととなる。

ウッカーマン — テンプラース

ヨハンナ・カタリナ・ウッカーマン — テンプラース、1891年3月21日生まれ、が日記をつけはじめる1942年2月16日に、彼女はアンボン市の軍病院で赤十字の看護婦として勤務する。夫、ルウイス・ヘラートウ・ヘンリィ・ウッカーマンはその当時、蘭印軍(KNIL)の歩兵隊長として既に暫く留守である。ヨハンナには二人の息子があったが、どちらも既に両親宅には住んでいない。息子のトーマス・ジョージユ、1919年に生まれ、はアメリカ合衆国に在住。そしてもう一人の息子ディトゥリッヒ・ルットウフウルス、1921年に生まれ、はバンドンに住む。1942年2月1日に、軍病院は日本の軍隊に占領され、そして接收される。患者、看護婦、そして医師たちは応急病院へ移動しなければならない。

内密の短信の往復により、ヨハンナは夫が海軍飛行場ハロンで、俘虜にされたことを知る。ここからオランダ人の俘虜たちは、アンボン市にある中国のホテルを経由、最終的にはアンボンの湾にある、バラック建ての俘虜収容所タントゥイに監禁される。3月3日に他のオランダ人看護婦と病院からの患者と共に、収容所ストヴィル内での彼女自身の抑留が続く。

1942年10月28日、ヨハンナに知らせが届く。それは、オランダ人の俘虜たちがタントゥイから、そこで同様に投獄されていたオーストラリアの軍人の一部と共に、連れ去られたというものである。知られざる目的地に向かって、彼らは船でアンボンを去った。2ヶ月後、ストヴィル収容所に抑留中の女性と子供たちは、この同じタントゥイ収容所へ移送され、俘虜収容所の向かい側に收容される。男性市民は、そこでは女性と子供たちがいるバラックの隣の棟に滞留する。そして1943年2月15日の朝が明ける。ヨハンナはその日の出来事を、次のように描写している。

『13日と14日のように、11時に再び数多くの爆撃機が近づいてくるのを見た時、私たちは歓声を上げました。幸いにも大勢の子供たちは浜辺にいました。』

しかし、さらに多くの女性と子供たちはバラックの棟の中に、また私たちの棟と入り江の間にある敷地にもいました。私たちは飛行機を3, 6, 7, 8と数えました。突然恐ろしくなることに、9機目が収容所の隣接地に爆弾を投下しました。ファルダートゥさんは『海の方へ、海の方へ』と声を限りに叫びました。大勢の人たちは海に向かって走りました。しかし、他の多くの人たちは棟の中にも駆け込み、携帯用マットレスの下に這っていきました。街道の最初の爆弾で、私たちの棟の壁は倒壊しました。そして砲弾の破片により、何人かの犠牲者が出ました。2番目の爆弾は路上で、さらに多くの犠牲者 [を出しました]。3番目の爆弾は、ちょうど私たちの棟の後部に当たり、この爆弾の標的であったと思われる高射砲の傍でした。オランダ人の男性たちは、鉄条網の奥へ脱出し、妻や子供たちを助けるために駆け出しました。オーストラリア人たちも私たちを助けるために、そして自分たちの妻や子供たちを救うのではなく、窮地に陥っている人々を救うために、彼らの野営地から駆け出しました。彼らは死を覚悟で [走って] 行きました。それら勇敢な好青年はこの惨禍で、どれほど私たちを助けたことでしょう。9名のオーストラリア人は、このため彼ら自身の命を落とし、大勢が負傷しました。私たちからは男性が4名、女性と子供たち15名が即死しました。飛行機は頭上でうなり、140の爆弾が破裂しました。長い棟の屋根をはじめ、^{はり}梁、机、椅子、携帯用マットレスも空中に吹き飛ばされました。原っぱは、これらすべての死者と負傷者たちで、戦場のように見えました。負傷した大勢の人たちは、悲鳴を上げる子供たちに向って海に入っていました。水は血で赤く見えました。中には、体には何も傷はなく、爆風で衣服が体から剥ぎ取られ、裸で歩いていた人もいました。日本船に命中し、一瞬にして沈没しました。これは負傷者を海にさらう津波を引き起こしました。手から離れた子供たちは波にのまれ、^{できし}溺死する恐れがありましたが、救命されました。棟は完全に焼け落ちてしまいました。空は煤煙のため、まるで夜であったかのように暗く、中に入っていた全ての物は散乱していました』。

アンボン市のベタニア教会に1ヶ月ほど滞留した後、カンピリへの移送がそれに続く。

日記は1943年5月に終了している。特に人口過剰、食糧不足、悪い衛生状態等による結果としての、異なる収容所における健康状態について最も関心が向けられている。日記の後に、1945年8月までの期間に起こった幾つかの出来事について、短い報告が書き留められている。この報告は次の言葉で結ばれている。

『相互の友情と援助の揺るぎない絆は、アンボンの人たちが苦悩を共に耐えなければならなかった正にその時期に、たいへん大きな支柱となり、カンピリでも存在し続けました。そして女性たちに弱気になるのではなく、耐え抜くために必要

な力を与えたのです』。

ヨハンナが戦後マカッサルで、赤十字の依頼により、アンボンでの抑留時代について、報告書を作成することが更に知られている。1946年7月または8月にヨハンナは、その間に彼女が明らかに移っていたオーストラリアを去り、オランダに帰国する。そこで彼女は、その年の5月に既にシンガポールから到着していた夫と再会する。

コートウン

トニィ・ヴィクトリヌ・コートウンは1927年10月11日スラバヤに生まれる。アルフォンス・コートウンとマリア・フベアティナ・ヨスフィナ・アントワネットウ・コートウンー ドルハインの初子である。1941年12月に、家族はマカッサルのコーニングスラーン12番地に在住。その間、トニィには弟2人と妹2人ができる。彼らの名前は年齢の順では、エディ（弟）、フリイダ（妹）、ロウロフ（弟）そしてカーラ（妹）である。それ以外に、ジョージヌ・ユウヘニィ・マギラヴリイ嬢、呼び名シィンが、コートウン一家に同居している。シィンは蘭印系ヨーロッパの女性で、母親コートウンの^{きとご}里子である。いつからそうであるかは知られていない。父親コートウンはオランダ海運会社（K. P. M. ジャワを中心に蘭印諸島間を運航）の船長である。

1942年4月5日に、トニィは次の言葉で日記を始める。

『風邪で鼻をすすりながら、私はここ、小さな竹の家の中に座っています。そして私の二冊目の日記を始めます。一冊目はスプリットウン [日本人] のために、破かなければならなかったからです。最初に、日記さん、私はあなたに至福ある復活祭を祈っています。あなたがこの先何年も、復活祭の飾り卵を探すことができることを願っています。この日記の中で、オランダ領東インドへの侵攻以来、私が切り抜けてきたことを書き留めるつもりです』。

次に彼女は、それ以前の期間に起こったことの報告をしている。1942年1月12日に、コートウンの家族は、知人の所有物であるマリノ郊外にある農場リンブルヒアへ避難する。父親はオランダ海運会社の周航からその時点で既に帰着しているはずであったが、マカッサルにはまだ到着していなかった。不安な数日が過ぎ、彼はスラバヤにいる、という知らせが届く。家族はそこでジャワへ避難することに決め、この目的のためにマカッサルへ戻る。しかし、それは既に遅すぎ、計画されていた最後のジャワ行きの船は、もはや出発しないことが明らかになる。蘭印政府の指令で、ヨーロッパ人の女性と子供たちの、マカッサルからマリノへ向かう集団疎開が開始する時、コートウンの家族は改めてマカッサルを去る。しかし、マリノでは、彼

女たちのための場所は既に無いと判明する。それから彼女たちは、トニィによると『マリノから徒歩でおよそ半時間、3つの溪谷を越え』ロンバッサンに辿り着く。数家族はロンバッサンに滞留しなければならない。ファン・ディッフルンの家族も同様である。ミア・ファン・ディッフルンはトニィと同年齢で、二人の間は堅い友情で結ばれている。それは日本降伏までの長い全期間を通して、存在し続けるであろう。

マリノとは異なり、ロンバッサンの住宅は電気も水道の設備もない。報告には日付が記されていないが、恐らく数ヶ月後には既に、ロンバッサンに滞留している家族は、日本人の指令によりマリノへ移動しなければならない。

1942年8月2日に、トニィはようやく「挽回レース」（日記の遅れを取り戻す作業）を終え、ため息をついて言う。

『そして今、私は日記に追いついたのです！！ 何と書きまくったことでしょう。嬉しいことに、私は今から、その日ごとに書けるのです。すべてが現在形で書かれ、そして... 日付もあるのです！ バンザーイ！』

マリノではトニィは早速、秘密に行われる各種授業についていく。1942年9月27日に、彼女とミアは収容所で本当の「仕事」をもらう。

『素晴らしいでしょ！ ミアと私は「幼稚園の先生」としてファン・ネスさんに採用されたのです。私たちは... 良く聞いてください... 1ヶ月につき1ギルダー25セント稼ぐのです！ ミアと私は本当に嬉しくて、それを始めることで飛び跳ねてしまう』。

さらにマリノでは毎日、噂が広がっている。トニィは、自分自身は噂をもはや信じない、と書き添えてそれを日記に定期的に記している。例えば、1943年3月8日に、彼女は話している。

『カンピリへの移動はいまだに続いています。竹の家々はもう完成しています。周囲にあと柵を造らなければならないだけなのです。殆ど信じられないに違いありません』。

同じような噂は、その年の2月中旬から既にマリノで広まっている。しかし、移動の通知が実際に5月1日、収容所指揮管理によって確認されるまで、トニィはそのことを全然信じない。

1943年5月4日にコートウンの家族は、第2回目の輸送でカンピリに移送される。トニィはカンピリにおいて、様々な活動をしなければならないにも拘わらず、1943年6月には、それ以外に常勤の仕事をもらう。彼女はそれで、少女と女性からなるグループ「耕作班」

の一員となる。彼女たちは収容所の敷地の^{ヨシ}葦を取り払い空き地にし、その土地の一部をパチョレン（鋤作業）しなければならない。1944年10月にトニイは更に、雲母を剥がす作業を始めなければならない。しかし、この「工場」は1945年2月には閉鎖される。仕事をする以外に、トニイは通学もし、さらに彼女は物を考え出すことだけではなく、その考えを実演することにもたいへん独創的である。例えば、女の友だち数人とサーカスを演じる。さらにカンピリで1944年10月末から、少女クラブS. O. S.（私たちの勇気を救おう）により「発行」される新聞の編集員の一人である。

日本の降伏が発表された後、コートウンの家族は、さらに9月25日までカンピリに留まらなければならない。カンピリでのトニイの退屈はかなりのもので、ミア・ファン・ディップルンが9月11日にマカッサルに向けて出発した後は確実である。それでも25日にはコートウン家族も順番になる。

マカッサルでは、フレイリンフ広場の一時滞在施設に落ち着く。しかし、ここでも再び、退屈にひどく圧倒される。トニイは綴っている。

『毎日がゆっくりと過ぎ去っていきます。年長の人たちは午前中、家に行く[家を物色する]のです。エディと私は子供たちをおもちゃで遊ばせたり、歌ったり、庭の小石で模様を作ったりします。そして午後、私はいつも決まって[ミアが住んでいる]ヘネラル・ファン・ダールン通りへ行きます。そのほかは、無為に時間を過ごすか、表ベランダに腰掛けて広場をじっと見つめます。私たちは学校に行くこと、または必要ならば広場周辺のパチョレン（鋤作業）の命令を待ち望むのです』。

日記はこの時点から再び長い期間にわたり、報告ふうになる。

9月末にある知人が、お父さんコートウンの同僚であるファン・ヘイストゥ氏によって書かれた手紙を届けにくる。それは父親が戦争で生き残り、シンガポールの或る収容所に居る、という知らせである。カンピリで家族が父親コートウンから受け取った最後の、かつ唯一の知らせは、1944年2月5日付けの中央ジャワの収容所バンジュビルから書かれていた。

フレイリンフ広場の一時保護収容所で10日が過ぎ、コートウン家族はヘネラル・ファン・ダールン通りの家を割り当てられ、そこへ喜んで移り住む。それから母親が病気になる。発熱、食欲喪失、そして脚の負傷による悩みである。医師たちは往診をしない。そしてシンには、彼女を入院させることがうまくいかない。母親の病状は急速に悪化する。結局、トニイは母親を病院へ連れていく。このやり方で、病院の職員に母親の入院を説得させることを期待した。しかし、入院は拒否される。そして次のことが起こる。

『階段の上で突然お母さんは、私がかろうじて支えられるほどに倒れてしまう。ベチャ（三輪で客席が運転手の前方にある人力タクシー）の運転手が素早く駆け

寄り、私たちは彼女を階段の上に寝かせる。私はまた中に駆け込む。誰も見えない。再び外へ。彼女の上に毛布を掛け、リュックサックを頭の下に置く。彼女は再び意識を回復する。『ここで横にならせてちょうだい。家には行きませんよ』。私は彼女を説き伏せるように努力する。しかし、彼女は『幼い子供たちは、床の上で死ぬ母親を見ない方が良いでしょう』と思うのです。話しをすることは、彼女にとって最も辛いことなのです。再び中へ。長い廊下の最後まで行き、もう一度戻る。再び私は彼女を説得するように試みる。太陽は階段を真っ直ぐに照らし、暑い。彼女はしたくないし、私は彼女を立ち上がらせられない。私は怒りで狂いそうだ。おお、神様。私たちはそのために情熱的に祈ったというのに、それが平和であるとは、本当なのでしょうか！ しかし、私はきっとやってみせる！ 私がトニイ・コートウンという名前であることほど確かに！ 彼女をどこかに置き去りにして、あっさり立ち去る、という考えが私にひらめく。再び私は中に駆け込む。空いているベッドを見つけるために、誰かを探しているかのように見せかけて、部屋から部屋へと中を覗く。どこも満員だ！ 部屋を開け、覗き、部屋を閉める。また同じことを続ける。突然、修道女のマーカリアさんが脇の廊下から出てくるまで』。

トニイは彼女にすべてを話す。母親を中に運び込むために、直ぐ看護婦が呼ばれる。母親がたいへん重態であることは明らかである。そして彼女の命が危ぶまれる。トニイは、しかし、家ではこのことについて何も話さず、シンと一緒にさらに家事を進める。

マカッサルでトニイは奇妙な出会いをする。これについて彼女は記している。

『ある日、私たちがマロス通りを学校の方へ向かって進んでいこうとすると、突然、通りの脇に沿って仕事中の収容所長を見ます。そこにはまだ何人もの人たちがいます。それは本当にショック。でも最初の驚きの後、私たちは彼に『タバ トゥアン（こんにちは、トゥアン）』と親しげに挨拶をします。彼は明らかに上機嫌で、口を広げて笑うのです。本当におかしい。今度は彼の方が仕事に取りかかっているのです』。

母親は幸いにも一命をとりとめ、1945年11月末に再び家に戻ることが許される。その間、シンガポールにいる父親との通信が開始された。そして12月23日に彼、本人がマカッサルに到着する。1月末、オランダへ向けての出発が続き、そこには1946年3月8日に家族全員が到着する。

ファルダーポルトウー ヴィアツ・ファン・クウホーン

ヨハンナ・コルネリア・ヴィアツ・ファン・クウホーンは1892年11月1日、ヴァイヒュンに生まれる。教員課程を修め、1918年9月10日にプロテスタントの伝道師兼教師、ポップ・ヘラートウ・ヴィレム・ファルダーポルトウと結婚。ヘイ（夫の呼び名）は結婚の直後に、オランダ領東インドへ赴任する命令を受ける。最初の駐在地はサンジール諸島である。ここで3人の子供、ヘラートウ・マリイ（ヘアートウ）、ディルキュ・ヨハンナ・コルネリア（ヨーロッパ）そしてメンノ・ポップが生まれる。1937年にファルダーポルトウ夫妻は、ヘイが原住民教育の検査官の役職に就くアンボンへ向けて出発し、子供たちはその間、教育のためオランダに帰国した。

日本との戦争が勃発した後、ファルダーポルトウ夫人は日本の侵攻に際し予想される、アンボン市のヨーロッパ人及び中国人の住民のための、避難体制に関する指導を受ける。1942年1月末、避難が実際に必要であることが明白となる。この時点からファルダーポルトウ夫人は、避難民キャンプで指揮に当たる。その職務を、彼女がさらに移送されることになる次の収容所でも維持する。

日記は1942年1月6日に始まり、もろもろの解決すべき問題に関する、殆ど毎日の短い連絡事項から成っている。しかし、ファルダーポルトウ夫人にとっての不幸は急速におとずれる。1942年3月21日にストヴィル収容所で、夫が赤痢のため逝去するからである。しかし、彼女の収容所リーダーとしての多忙な活動は、彼女が喪に服すためにわずかな時間しか与えない。そして実際に彼女はそのことをひどいとは思わない。次の文章がそれを明白に示している。

『毎日が多忙であるため、過去に何が起こったのか、そして（戦争がなかったならば）何ができたのかを、座って考える時間がないことは幸いです』。

タントウイ収容所での爆撃という忌まわしい経験の直後、ファルダーポルトウー ヴィアツ・ファン・クウホーンは、他の抑留している男性、女性、そして子供たちと共に1943年3月17日にアンボンを出発する。船を1943年3月21日にマカッサルに停泊させるためである。その日は、夫が亡くなった一周忌である。上陸は翌日始まり、ファルダーポルトウー ヴィアツ・ファン・クウホーンは、これを次のように描写している。

『そうして悲しみに沈む行列は、波止場に沿って進んでいきました。負傷者といくらかの病人は、みすぼらしいワンピース姿の看護婦と看護婦の助手たちに助けられ、殆どの人たちは木靴を履き、何人かは裸足でした。そして船上でも同様に惨めな光景。ぼろを着た人々。大多数は裸足でした。何人かは頭の周りに布を巻き、そのほかの人々は何もかぶらずに。何枚かの皿、またはコップとわずかなぼ

ろ着などを、布または缶に納めた粗末な「手荷物」を携行しています。そんなふうにモルッカからのヨーロッパ人は、マカッサルに到着しました』。

カンピリに到着後、ファルダーポートウー ヴィアツ・ファン・クウホーンは、ここでも殆ど当然のように、率先して指揮をとる。常に順調に維持することは、期待ほど容易ではない。1943年4月19日に彼女は記している。

『食事は以前より、かなり改善されています。しかし、私は1日1人当たり、最大限15セントで維持しなければなりません。今、ある人たちは再び、さらに多くを要求するようになりました。きっと毎日、卵1個を欲しがるように違いないのです。惨めになることを、また再び直に忘れてしまうのです』。

カンピリでの食物は、実際のところアンボンよりも良好である。しかし、医薬品の欠乏により、4月3日と4日に2人の子供が、赤痢の結果による脱水症状で亡くなる。1943年5月初旬にマリノ・グループがカンピリに到着する際に、ファルダーポートウー ヴィアツ・ファン・クウホーンは日記に綴っている。

『第1グループは歌いながら、そして手を振りながら到着しました。車満杯にバラン（荷物）を積んだ陽気なグループは、3月22日にここへ入場したアンボンからのグループとは、本当に対照的でした。マリノの人たちは、全体的に卓越し、比較的自由に暮らし、収容所との関連が完全になく、大方の人々は戦争が何であるかをまだ知らないのです。その上、これらすべての奇麗な衣服、バケツ、たらい、トランク、手提げなどが、私たち極貧の小さい一団にとっては、別世界からのグループのように見えました』。

このイメージは現実でもあることが明らかになる。両方のグループの間は、その先の抑留生活の全期間を通じて、相互に異なり、意見の不一致を示し続ける。1943年9月2日に相互に相談をする時、アンボン・グループは殆ど空になっているマリノの会計と合同にすることを決める。『マリノの人たちは、私たちがまるで「異母姉妹」であるかのように常に威張ってはいるけれど、私たちは結局、ヤマジが言うように、いずれにしても「サウダラ（姉妹たち）」なのですから』。ファルダーポートウー ヴィアツ・ファン・クウホーンは更に語っている。

『私たちのお金は、それにしても歓迎されるのです。今月中旬に私はそれを大きな金庫に移すでしょう。多分それで、彼女 [マリノの人] たちが多くの衣類を寄付したアンボン連中のことは、これ以上それほど頻繁に聞かなくてもすむのです』。

日記には、一方のアンボン・グループと、もう一方のマリノ・グループとの緊張関係の多くの例が含まれている。チモール・グループが到着した後にも、ファルダーポートウー ヴィアツ・ファン・クウホーンとヤウストウラ夫人との意見の相違が、ある意味では象徴されている。

収容所長ヤマジに関するファルダーポートウー ヴィアツ・ファン・クウホーンの見解は、彼女の日記にも表現されている。明瞭なことは、彼女はいずれにしても、例えばフォスカールー リムボーフ夫人がするよりも、所長の否定的な面をより強調していることである。そのような日記断片からの一例が次のものである。

『ヤマジは[1943年]10月には収容所を去り、ヤウストウラが代理人として来るであろう、と話しました。私はそれを信じません。しかし、所長は彼に対するお世辞、または遺憾表明を求めるものか、そのことを私には言うことができませぬ。彼は数多くの善行の脇で、さらに多くの悲惨なことを彼の行動で示しているからなのです。それらは、粗雑な独断、気まぐれ、そのうえ粗暴で、非常にむら気であるため、数分後に再び何が起こるのか、私たちには決して分からない、というものです』。

日本の降伏後、ファルダーポートウー ヴィアツ・ファン・クウホーンは1945年9月9日までカンピリに滞留する。この日に彼女はマカッサルへ向けて出発し、そこで元抑留者のための宿泊及び保護施設に入る。ジャワでのベルシアップ期（独立運動（1945年10月から1949年まで）初期の騒乱時期）が開始する10月初めから、マカッサルでも状況は不穏となる。種々の暴動が起こり、砲撃もある。特にアンボンの住民は、インドネシア民族主義者の犠牲者となる。ファルダーポートウー ヴィアツ・ファン・クウホーンは1945年10月15日に溜息をつきながら語る。

『戦争が始まってごく短期間のうちに衰退すること以来、既に打撃を受けていた私たちの信望は、私たちが武装した軍隊を一切所有していないこと、またイギリス人とオーストラリア人が国内の混乱に介入することを望まないことから、極めてひどく傷ついているのです。今、恐らくは再び血が流されるであろうということ、そして「地球上の平和」は今もなお現実ではないということは、恐ろしいのです』。

これは彼女にとって大きな失望である。そのうえ彼女がその時点で、なおもオランダから何の通知も受け取っていなかったという事実は、彼女の3人の子供たちが戦争で生き残ったかどうかの確実性がまだないということで、さらに彼女を哀れな気持ちにさせる。1945年11月1日、彼女の誕生日に綴っている。

『53歳に私はなった。これはヘィが不在の4回目の誕生日です。これから何年続くのでしょうか？私は子供たちの近くで、この先の年を更に祝うとができるように願うのです。今もなお、私は子供たちからの知らせを待っています』。

そして翌日、彼女は娘から子供たち3人とも皆、戦争で生き残ったことを知らせる電報を受け取る。彼女の唯一の希望は、今、できる限り早くオランダに戻ることである。しかし、1945年12月21日に日記を終える時、オランダへの輸送はまだ明らかではない。

報告

ヤウストゥラ

日本との戦争が始まる前、アンナ・ヘンドゥリカ・ヤウストゥラ、1897年3月6日、メダン生まれ、はマカッサルにある高等市民学校のフランス語の教師である。1942年1月に、彼女は市の陸軍病院で赤十字の助手として勤務する。そこではオランダの軍隊が出発した後は、市民も看護される。1942年2月9日に日本人はこの病院を占拠し、看護婦たちに仕事を続行させる。ところが2月11日に彼女たちは警察官舎へ収容され、そこから3月13日にマリノへ移送される。

マリノではヤウストゥラは内密に授業をする。彼女はカンピリでも授業に専念することを望むが、ヤマジに収容所リーダーに任命される。ヤウストゥラは日記をつけなかったが、戦後、極めて詳細にわたる報告を書いた。それは彼女が体験したことの明瞭なイメージを呼び覚ます。特にこの報告書中、カンピリの1943年から1945年までの一切合切についての優れた説明により、この報告書からの抜粋が原稿としてこの中に取り上げられた。

収容所報告書

二つの報告書からの抜粋が、原稿に取り上げられた。それらは日本降伏後に作成された報告書に関するもので、つまり『カンピリ収容所報告書』及び『カンピリ収容所報告書の解説と補足』である。収容所報告書はカンピリの日本人収容所長の指示に従い、ヨーロッパ人の収容所リーダーによって作成された。この事実により、報告書に記されたイメージは、ことによると既に好意的過ぎる可能性がある。これはファルダールポルトウー ヴィアツ・ファン・クゥホーン夫人によると、確かにその例である。彼女は1945年11月30日に、この件について彼女の日記に記している。

『ヤウストゥラ夫人が提出したカンピリ収容所の報告書は、ヤマジにあてた賛辞に満ち溢れている。そしてその報告書の中では、私たちが強制収容所ではなく、あたかも楽しい休暇地で生活していたかのように確かに見える』。

これは従って「正式な」報告書を契機として、『カンピリ収容所の解説と補足』という題名による代替りの報告書を、なぜ彼女が作成したのか、についての理由でもある。総合してこれらの報告書は、カンピリの全てであるがままの、優れた全体像を提供している。

移送・居住

カンピリは1943年の3月後半に、民間人強制収容所として設置された。それ以前に、どこかほかの場所で収容されていた人たちを、3つの大きなグループに分けることができる。カンピリで抑留された第1グループの女性と子供たちは、アンボンから来た人たちで、1943年3月後半に着いた。最も大きい支部である第2グループの抑留者たちは、以前マリノに収容され、1943年5月3日から5日までの間に到着した。第3の支部グループである民間人抑留者たちは、それ以前はチモールで抑留となり、この収容所には1943年9月10日に着いた。

日記からの抜粋

ウッカーマン — テムプラーヌ

1943年3月17日

私たちは移動しなければなりません。海を越えて、どこへ？ もっとひどい所へ？ 教会の墓地に眠る46名の死者の親族たちは、今年、抑留中に多くの苦悩のもとで亡くなられた全ての方々に、最後の別れを告げることを許されます。乗船の規則が、私たち各人『軍隊らしく』従わなければならない。さもなければ……と、私たちに向けて読み上げられます。2時に、数台のトラックに乗り込み港へ向かいます。ベタニア³ さようならー。港で短い距離を歩かなければならなかった時、膝ががくがくしてしまいました。私たちみんな、すっかり弱りきり、歩くことにはもう慣れていませんでした。私たち移住者は、ヤップン⁴によって撮影されました。私たちの後ろに続いて来ていた、他の小さな教会から来たオランダ人男性市民と、病院から出された負傷者たちは既に乗船していました。インドネシアの病院では、負傷者の入院のために、1,229ギルダー払わなければなりませんでした。

私たちは船倉に集められました。そこは日本の畳が敷かれ、清潔でした。男性たちは別の船倉の中でした。鉄の舷窓⁵は閉まっています。中央には艙口⁶があり、私たちの頭上で開いています。それは灰色の軍艦です。エンジンが始動します。私たちは機関室の上に横になっていますので、体はぶるんぶるんと震えています。20名の修道女たちの修道院長は、この航海中の無事を念じ、休むことなくお祈りを続けることを決めます。半時間毎に祈禱を唱える

³ 収容所にあった教会の名前。聖書の中に出てくる地名で、ヨルダン西部、エルサレム (Jerusalem) 付近の、オリーブ山 (Mount of Olives) の麓にある村。

⁴ 日本人に対する軽蔑の意味を含めた呼称、ヤップ(Jap) の複数形。

⁵ 船のへりにある、採光や通風用の窓。

⁶ 艦船の貨物艙に搭載した貨物の積み卸しのため、上甲板に設けた四角い開口。

人が交替します。私たちは、一艘^{そう}の武装された大型貨物船に護衛され、上空では飛行機が旋回し、ジグザグに航海しています。船上での食事は結構なものです。

ウッカーマン — テムプラーズ

1943年3月18日

午後、警報です。日本人水兵たちはヘルメットを被り、ガスマスクと救命胴衣をつけ、完全装備で大砲を目掛けて疾走します。私たちの頭上の艙口は閉まり始めます。周囲はすべて固く閉ざされ、小さな赤いランプはついてます。私たち女性や子供たちは、救命胴衣無しでそこに座って閉じ込められ、まるで生き埋めにされたように感じました。しいんと静まり返った中で、恐怖^{おび}に怯える目。誰もが祈りました。小さなグループになった人々は大きな声を出して、また他の人たちは静かに自分たちだけで祈りました。ある人たちは、恐怖からお互いにしっかりと抱き合い、8才から12才までの少年グループは、上半身裸のまま、不安の目でお互いを見つめ合っていました。私たちは、どの瞬間にも、爆撃で空中に飛ばされる可能性があったのです。エンジンの騒音で、何も聞こえませんでした。それで私たちは、それが連合軍機からなのか、潜水艦からのものなのか判りませんでした。10分後にまた警報です。今度は頭上の棚板が滑って移動し、危機は去りました。またほっと一息つくことができ、生き返ったような感じでした。ところが、そうなのです。10分後に再び警報です。今度はもっと大きな恐怖^{ろうばい}。狼狽してはいけません。ぞっとするほどの静けさ。祈ります。

半時間後にまた安堵。私たちの頭上にある5枚の棚板が再び脇にずれ、新鮮な空気、一条の光。ヤップンは親切でした。おいしい食事。鮮魚、ジャガイモ、お野菜はカブ。私たちは舌づつみを打ちました。こんなご馳走はずいぶん長い間、味わうことはなかったのです。ところが、数時間後に10名ほどの大人が、男性部の方でも、疝痛^{せんつう}と吐き気を催し、非常に息苦しなっていました。時間がたつにつれて、ますますひどくなり、嘔吐^{おうと}と下痢が殆ど絶え間なく続きました。異常な水分喪失から、人々は、私もその一人であった訳ですが、私たちが瘦せ細る様子を見守ったのです。私は虚脱状態になり、4本の注射を打たれた後、意識を回復しました。その時はバケツいっぱいの水を飲み干したいと思うほど、それほど喉が渇き、しぼられた思いでした。私は、ほんの一滴の水さえも飲むことが許されませんでした。何ともひどい渇きでした。それは、私の誕生日に起こったのです。男性部でも何人かの殿方が、同じ様に深刻な状態でした。

⁷ 発作的に起こるはげしい腹痛。

ウッカーマン — テムプラーズ

1943年3月19日

最も耐えがたかった状態が過ぎ、私たちは少量の水とミルクを頂きました。負傷していた人たちは、船の前方と後方にある寝台にいました。日本人の船医は彼らを、たいへん人間的なやり方で治療しました。それは、私たちがマカッサルの港に停泊していた間のことでした。

ウッカーマン — テムプラーズ

1943年3月22日

男性たちは、マカッサルにあるタンクシィ（兵舎）へ数日連れていかれ、その後マカッサルより、およそ200キロメートル離れたパレパレへ移送されました。私たち女性と子供たちは、マカッサルより18キロメートルの所にあるカンピリへ。

カンピリは以前、オランダ領東インド⁸の結核患者療養所でした。縦5メートル、横6メートルの面積がある小家屋が立ち並ぶ広大な敷地は、かなり放置されていました。二段式のバレバレ(寝台)⁹に、一軒あたり少なくとも16名ですから、上下合わせて2つのバレバレの8倍になります。ごく幼い子供たちは母親と一緒に寝ていましたから、多くの小家屋では、一軒に24名から28名の女性と子供たちが寝ていたことになります。それでもアンボンと比べれば、この場所は私たちにとっては黄金郷なのです。

ウッカーマン — テムプラーズ

1943年4月4日

クーリー（日雇い人夫）たちによって、マリノから移動してくる1,200名の人たちのためと思われる、かなり長いバラックの棟々が建てられています。

ウッカーマン — テムプラーズ

1943年5月3日

400名の女性と子供たちが、私たちのカンピリ収容所に既にいます。明日また400名の一

⁸ 「蘭領東印度」とも表現される。

⁹ これらは竹製のもの。

団が、そして明後日は最後の400名が着きます。到着の折り、トラックの中で彼女たちは歌っていました。『我らはオランダを離すものかー オランダを敵なんかに絶対に渡すものか』。彼女たちの多くは小綺麗な身だしなみで、健康そうに見えました。まだきちんとしたトランク、バケツ、たらいなどを持っていました。彼女たちの到着を歓迎する、アンボンから来た人たちのグループが立っているのを見た時、彼女たちは「何と貧しく混乱した所なのか」と思ったのです。アンボンの人たちには、いろいろなことがあった後ですから、何も不思議なことではありませんでした。『ここは、何とひどい所なのでしょう』。彼女たちにとっては、天国から地獄へ来る、ということだったのです。マリノ・バンガロー、快適な山の気候、爆撃は無く、十分な食物。なぜならば、彼女たちはインドネシア人が販売していた品物は何でも、購入することが許されていたためでした。彼女たちは12棟の新しいバラックに、1棟当たり100名の割合で収容されました。

コートウン

1943年5月6日

二日後。私たちは、既にカンピリに落ち着きました！ 最初からお話しますと、5月4日の朝6時には、私たちはもう起きていました。みんな身支度をしました。毛布は詰められました。朝食をする時間は殆どありませんでした。ラビルウ¹⁰ もとっくに来ていて、持ち物を外に引きずり出すのを手伝ってくれました。すべてのバラック（荷物）の間に、私たちの2枚の棚がたいへん得意そうに立っていました。ヤップンは、通りで叫び合っていました。ようやくトランクをどこへ運べば良いのか、私たちに指示が出されました。エディ、ラビルウと私は、トランクをしっかりと掴み、引きずって山を降りていきました。『アパイトウ（それは何だ）？』。ラビルウはびっくりした拍子に、大型トランクを落としてしまい、間一髪で私のつま先が押しつぶされるところでした。『クンバリ（戻れ）。全員だ！』。お母さんも、また荷物と一緒に送り帰されました。結局、私たちは自分たちの「家」¹¹の前に、立っていなければなりません。そこにイノ¹²がやって来ました。「棚は中へ！」。私たちは棚を掴み、後で必ずまた取りにくると心に決めて、パガー（垣根）の後ろに置きました。私たちはまだ殆ど何も食べていませんでしたから、この頃になってお腹が空き始め、『こっそり摘まんだ』焼き鳥はすばらしい味でした。

私たちは、家の順に立っていなければなりません。そしてイノが、全員確かにいるかどうか点検にきました。そこへ数台のトラックが到着しました。『積み込め！』。みんなはトランクを持って、大急ぎで駆け出しました。エディとラビルウは直ぐにトラックによじ登

¹⁰ コートウン一家の親しい知人宅のジョンゴス（家事手伝い人）。

¹¹ 抑留者の住宅は、バラックではあったが、そこで日常生活を営んでいたため、そのように呼んでいた。

¹² カンピリへの移送当時、アンボン収容所での日本人所長。

り、私たちは所持品を素早く積み込みました。まず初めに、大型トランクとカバンを、その上に他の人たちのがらくた小物を。そのまた上に、大きな籠^{かご}、袋もの、小さな箆^{ざる}などを載せました。2回、手を大きく振って棚も積み込みました。そして、てっぺんでは私たちの携帯用マットレス¹³が、誉れに輝いて際だっていました。積み荷全体に綱が掛けられました。第1グループでは、あらゆる物が何度もトラックから振り落とされ、崖下に転がり落ちたことさえあったようでした。家族の名前が記録されました。

別のトラック数台が到着しました。イノは「愛らしい口??」を開け、「乗り込め!!」と叫びました。私たちは、まだ手元にあった小物を掴み、一番近いトラックの方へ走りました。でも、それは許されませんでした。イノは、まるで急ぎ立てられた豚のように、あちらこちらへ走り回りました。やっと、これはひど過ぎると観念の悲鳴をあげ、彼は一台の車に乗り込みました。『住宅36、ファン・ホッホの家族と住宅35は、このトラックに乗車!』。それで合計42名でした。トラックは超満員でした。そして、さらに私たち7名が同乗しなければなりません。それで私たちは他の人たちの上に、重なり合って横になってしまいました。なぜならばイノは十分時間を掛けられなかったのです。私たちはお互いにもがき合い、しまいには、自分の腕や足がどこにあるのか分からないほどでした。ファーフスさんのおしりが、プラスチックタン（もち米のご飯）が入っていたお鍋の中にちょうど入ってしまいました! お母さんは小さな腰掛けを、後で座るつもりで、一時も離さずしっかり抱きかかえていたのです。ところが、イノがそれを跳ね飛ばしたのですから、勢いよく空中に飛んでしまいました。荷物の積み上げを手伝いに来て、道路わきに立っていたポントウさんはそれを見て、反対側でそれをまた掴みました。またイノがそれを見て、今度はそれを確実に20メートルは先へ飛ばしたのです。ポントウさんは、また救いの神でした。

再び数台のトラックが到着しました。何のために今それが使われるものか、ちょっと不思議に思いましたが、直ぐに判りました。何もかもすべての物が、家々から引きずり出されていたのです。私たちが長い間使い馴染^{なじ}んだ二段式ベッドも、積まれたのを見ました。その間に私たちは、すべて空いている場所を獲得したのです。エンジンがかかり始めました! それぞれのトラックに、更にもう一人のヤップと原住民の警察官一人が、監視のため同乗しました。それから.....「マリノ、マリノ、あなたの奥さん、そして子供たちと共に、それは.....」。¹⁴ 私たちは、歓声をあげ歌いながら、イノとお偉方数人が立っていた所を、通り過ぎていきました。何とも恐ろしいその眼差しを見るだけで、私たちは本当に殺されてしまいそうでした! 90キロメートルの速力で、私たちのトラックは坂に向かって突進していきました。帽子は飛ばされ、空高く舞い上がってしまいました。いつの間にか私たちは、もう児童休暇キャンプ地に来ていました。

お母さんは腰掛けごと引っ繰り返り、立ち上がれませんでした。彼女を助けることは、

¹³ 麦わら、または海草などが詰められている。

¹⁴ マリノから来た人たちが、抑留生活のことを何となく歌ったもの。

私たちにもできませんでした。なお悪いことには、ネティ^{おぼ}小母さんのひよこが逃げ出し、彼女の体の上に集まってくる始末でした。その間トラックに乗っていた人たち全員揃って、あらゆる歌を合唱していました。でも、道がカーブした所で、次々に口をつぐんでしまいました。男たちは猛烈な勢いで車を飛ばして、溪谷の縁に衝突しました。それは、本当に恐ろしいことでした。リンチュ・ファーフスさんが車酔いになってしまい、彼女の近くに座っていた人たちにとっては、全く気分の良いことではありませんでした。幸いなことに、ファン・ホッホさんが空き缶を持っていました。それで使う度にそれは空にされました。なぜなら、少しも身動きできなかったからなのです。私たちの後ろに、もう一台トラックが走っていました。それには、とても意地の悪いヤップが一人同乗していました。わざと徐行して遅れる度に、今度は全速力で私たちの後ろ、わずか2センチメートル位のきわどい所まで接近してきて、嫌がらせをしたのです。ぶつかり合う前までの数回は、まだ良かったのですが... ドスン! その衝撃で私たちの車は、勢いよく前方へ飛んでしまいました。積まれていた荷物全体が後へ滑ってしまいました。ファン・ヴァーフルンさんの赤ちゃんは、その拍子に空中に飛び上がってしまいました。そして幸運なことに車の一番後ろの方に、うまい具合に着地したのです! 車の外側にぶら下げていたエディの腕は、もう少しで粉々に砕けるところでした。間一髪のところ、彼は腕を引っ込めていたのです。突然、私たちの車は止まってしまいました。激しくクラクションが鳴らされ、すべての車は静止しました。ヤップンがトラックから飛び降り、お互いに叫び合っていました。その男は厳しく怒鳴られ、名前が記録されました。そして再び前進していきましました。今度はファーフスさんの足がつってしまいました。とても痛くつらいので、ただ座って涙を流すだけでした。私たちは、彼女が足をちょっと伸ばせるようにするため、這うようにしてお互いに重なり合ってみたのですが、あまり役には立ちませんでした。私たちはリヴァンさんも、ちらっと見かけました。

そこはスングミナサでした。大きく揺れて、私たちはバロンボンに通じる橋を渡っていきました。これは、凸凹がいっぱいある、荒れたひどい道でした。車は次々にうねりながら続きました。私たちも同じように激しく揺れました。もうもうとした埃^{ほこ}りが舞い上がり、私たちは、勇敢にもその埃を吸い込んでしまったのです。しばらくすると、私たちがずっと沿って走ってきたカリ(水路)の向かい側に立ち並ぶ、白い石造りの小家の集まりが見えてきました。大勢の人たちが手を振って立っていました。それから、私たちはバラックが急に現れるのを見ました。橋を一つ渡り鉄条網の後ろに来ました。私は、ぞくぞくする震えが背中を伝わるのを感じました。「いつ、私たちはここから出られるのでしょうか??」。そのことを、ゆっくり考えている時間などありませんでした。私たちは原^{しび}っぱに着き、全員車から降りなければなりません。それは容易ではありませんでした。なぜならば、私たちみんな体が凝り足はすっかり痺^{しび}れていたからなのです。アンボンの人たちと、一日先に出発していた人たちが走って来ました。私たち全員、整列しなければなりません。そこは大勢のヤップンでいっぱいでした。ひどい混雑。次に続く命令は「礼」、「気をつけ」、「休め」でした。

「リハットゥ ルマ(家の中を見回れ)」と石造りの小さな建物からヤップが怒鳴っ

ていました。みんなは自分たちのバラ（荷物）をとりあえず持ち、乗車疲れで硬くなった体で足を引きずりながら、そいつの後から歩いたのです。焼けつくような暑さでした。私たちは、或るバラックに入らなければなりません。みんなは、入り口に立ったままでした。「私たちは、ここに入る以外にはなかったのでしょうか？」。すべて竹製の足場がある二段式ベッドでした。各々のベッドの間には、小部屋の仕切りというふうに空間がありました。ベッドの下には、アラン アラン（大きな葦の一種）が生えていました。「うわあ、ひどい」。おそれ驚いて私たちはバラックの中に飛ぶように入りました。ヤップは、私たちにベッドを示しました。一番下の段のベッドは、たちまちふさがってしまいましたので、私たちは、4、5台のベッドに別々に寝るようになってしまいました。

お母さんは、それはひどすぎると思いました。そして私たちは、とにかくこんな状態では寝ることはできない、とヤップにずばり言ったのです。直ぐ分かってくれました。やれやれ！ 荷物は再び取りまとめられました。私たちは、もうひと組になった人たちと一緒に、他のバラックに移ってもよいことになりました。そこは、まだ完全に空いていました。私たちは、後ろの部分を使うことにしました。正面の方は多分、ヤップンとの煩わしさがあるかもしてない、と考えたためです。さらさらした砂の中に、くるぶしの上までズブッと潜^{もぐ}ってしまい、歩くのにもものすごく苦勞し疲れてしまいました。次に一連の力仕事が続いていました。例えば、お母さん、シン、エディそして私は、汗をいっぱい飛ばしながら、大型トランクをバラックに運びました。

私たちがいくつかのトランクや貯蔵箱を、本当に苦勞して引きずり運んだ時、もうへとへとになって、立っていると足ががくがく震えてしまいました。アンボンから来た人たちも時々、少し手を貸してくれました。一瞬、私は殆ど携帯用マットレスでつぶされるところでした。突然、ベールを付けたある婦人が私の傍に立っていました。そして手をさしのべ、助けてくださったのです。私はその婦人が看護婦さんだと思いました。なぜならば、その方はごく普通の花模様のワンピースを着ていたからなのです。たいへん驚くことには、修道女であることが判りました。彼女たちは爆撃によって、すべての衣類を失ってしまったのです。

その間に、お水はすべて沸かさなければならぬということ、そして井戸水しかなく、また井戸はその時たった一つを除き、すっかり乾き切っていたと聞きました。これは、もちろんまた大げさだったのです。でも、とにかく水の出る井戸は、たくさんはなかったのです。そのひどい暑さのため、ものすごく喉が渇きました。お母さんの水筒からは、とにかく毎回ほんのひとすずりしかできませんでしたので、一滴の水も無いという状態にはならなくてすみそうでした。重い荷物を運ぶ最中に、私たちは、ファーフスさんが、その中に座ってしまったお鍋から、ヴァトゥ ジック（お菓子の名前）をつまみました。それは、とってもおいしい味でした。ただ、喉が渇いて仕方ありませんでした。お水は見る見るうちに減ってしまいました。

やっと私たちは荷物を中に運び込みました。その狭い場所にあっただらぐた物は、全く目も当てられません。それは混乱の固まりでした。まず初めに、私たちのベッドを整

えました。それから、その上に蚊帳^{かや}をつりました。カンピリはマラリア発生地として、もう長いこと良く知られていたからです。少したって看護婦さんが『マットレスはすべて、病院へ届けなければなりません。クッションは各自保持してよろしい』と大声で言いながら巡回して来ました。お母さんの携帯用マットレスを、どうしたらいいのかしら？ 急げ、急げ。チョキ、チョキ。携帯用マットレスはくずされ、5枚の布に裁断されて広げられました。それから、ものすごい速さでそれら全てを縫い合わせ、もう『クッション』にして確保しました。夕方、私たちは「アンボンキャンプ」¹⁵へ、彼女たちがその日私たちのために用意してあった食事と飲み水を、取りにいくことが許されました。それは、とってもおいしく出来ていました。日がもう短くなりました。がらくた物の山の中を随分かき回して、やっと石油ランプを見つけました。その時、これからまだ水浴びをするのかしないか？ という疑問が出ました。私たちは、本当に体の心^{しん}まで疲れ切ってはいたのですが、たいへん汚れていましたので、結局、水浴びすることに決めました。浴場の床はセメントで、真ん中に井戸がありました。その周り全体は、葦^{ヨシ}で作られた衝立^{ついた}で囲まれていました。そこは、だいたい60人位は入れる広さがありました。幸いなことに、その晩は私たちのバラックの棟には、私たちだけしかいませんでしたので、井戸もまた私たち専用でした。綱を桶につなぎ『汲み上げ』。私たちはシラムドゥン^{みずあび}（水浴）し、水を飛ばし合って遊びました。それは壮快でした。毎回、3人一緒に桶を引き上げました。それは1人では到底できないことでした。この水浴の後、磨かれたようにさっぱりしました。私たちは、それぞれのバレ バレス（寝台）に転がり込み、その夜はただぐっすり眠りました。

ヤウストゥラ

1943年5月

5月3日、4日と5日にカンピリへ向けて移送がありました。全員が一緒に行った訳ではありません。なぜならば、それ以前に時々人々は解放されたためでした。その中にはオランダ人と結婚していたドイツ人女性、さらに日本人たちと友好関係を結んでいた一見疑わしい人物が何名かいました。その内の或る人たちは後日、収容所へ連れ戻されました。

ヴェイヤース氏、マリノの責任者と呼ばせて頂くと、彼は私に第1番目の移送を指揮するように依頼しました。そして彼自身は、最後のグループに同行するつもりでした。各々の輸送は約400名を数えました。1人当たり、小型トランクを1個だけ持参することが許されました。このトランクは、その持ち主が出発する家の前に、置かなければなりません。私のものは、児童休暇キャンプ地の傍の通りに置きました。この家は最初の日に、全員揃って避難してしまいました。どなたかが、私の荷物も一緒に持ってきてくださることになっていました。幸いなことに、そのようになりました。他の人たちは時には、それほど好運ではありません

¹⁵ カンピリ収容所の敷地内にあった、アンボンより来た人たちが生活していた地区。

せんでした。日本人たちは、積み込み作業の際に我慢しきれなくなると、ある部分を路上に残したままあっさり行ってしまったからなのです。大方の人たちは、この置き去りにされた部分を次の輸送時に、一緒に運ぶことができた機転の利く知人がいました。それでも運ばれなかった物は、紛失したり持ち主が替わったりしました。

私が担当した輸送に関しては、都合よく行きました。私は、前回と同様、最後のトラックに乗っていました。私たちの前を、あだ名が「ママ クウン」という日本人将校が運転する乗用車が走っていました。彼は、車酔いになった二人の幼い子供を連れていたティルチュ・ノルさん、旧姓セトゥ・パウルさんに同情していました。私たちの行列は、兵隊が乗り込んでいた1台のトラックで、^{ふさ}塞がれてしまいました。私たちが通過した家々からは、もう誰も外へ出てきませんでしたが、時々、窓の隙間から出された手や親指が見えました。時には、誰かが親指だけを上に向けて出していたり、またある時は、指でVサインを出していました。

一瞬、私たちのトラックは微動もしなくなりました。修理をするには、時間が掛り過ぎることが明白でした。私たちは、後続していた軍用車に移されました。息が詰まりそうでした。なぜならば、殆どの兵隊は故障した私たちの車と後に残りましたが、それでも何人かの同乗者は、私たちとその隙間を分かち合わなければならなかったからなのです。「ママ クウン」も停止させられました。私たちが先へ走り続ける前に、彼はカンボン（小村落）で房になったピサン（バナナ）を買い、親切にもそれを私たちにご馳走し、顔にはちょっと奇妙な笑いを浮かべました。私は、この人が日本語と響く言葉、そして彼が貰ったあだ名「ママ クウン」と「ママ エディ」の二つの名前以外を発しているのを、いまだかつて聞いたとはありません。聞き及ぶところでは、彼は精神障害があるようでした。しかし、高貴な家柄の出であったこと、そして将校の階級であり、そのうえ実際に影響を及ぼすことができたのだそうです。私たちは、彼のおかげ好都合なことがありました。バナナのもてなしで歓迎を受けた後、また前進していきました。私たちは、他の列に追いつくことはできませんでした。

ある瞬間、私たちのトラックは、凸凹した草の生えた土手^{わだち}に、深い轍をつけて乗り上げてしまいました。右側には水路があり、左側は谷底深く流れる小川があり、その後方には、サワ（水田）になった平地が広がっていました。私たちは揺れてぶつかり合いながら更に走り、右折して水路に架かる橋を越え、そしてカンピリの敷地に着きました。私は戦争が始まる前に、一度ここに来たことがありました。その当時ここは、結核患者の療養所でした。私たちは、ひどい砂埃が舞い上がる中、敷地内に揺れながら進んでいきました。

他のトラックからは、荷物も人々も既に降ろされていました。彼女たちは小さなグループになって、自分たちの持ち物の傍に立っていました。その後方に、女性や子供たちの長い列が見えました。これは、アンボンとその他の島々から来た人たちでした。私たちがその後聞いたところでは、アンボンのタントゥイ収容所が大型爆弾により破壊された後、数週間早めにカンピリへ移送された、とのことでした。私たちは、マリノでは日本人の命令により、誰に割り当てられたものか知ることなく、彼女たちのために衣類を集めました。私が車から降り立った時、日本人は一人の威厳ある美しい白髪をした婦人を、私のところに案内してきました。『ク

パラ アンボン（アンボンの責任者）』と彼らは言いました。それは J. C. フェルダールポーター ヴィアツ・ファン・クッホーンさんで、アンボンの人たちのリーダーでした。日本人たちは、他の女性と子供たちを少し離れた所に集めました。アンボンの炊事場¹⁶ で、私たちのために食事が用意されていたこと、これからの3日間も同様であること、また、それ以降は私たち自身で炊事しなければならない、ということが私に告げられました。私が最初の数日間にこれまで手配できたことは、修道女たちをバラック第1棟に入居させ、児童休暇キャンプ地の人たちを、第3棟へ移動させたことでした。私自身は他の数人と一緒に第6棟に入りました。それは、いわゆる外側のバラックでしたので、私たちはその後「集合バラックA」¹⁷ と命名しました。

ヤウストウラ

1943年5月

収容所カンピリの様子を記述するには、今が適当な時期のように思われます。北側の縁に沿って灌漑水路^{かんがい}が延びていました。それは大きな治水ダムから数キロメートル先の、ジェネ ブラン（ブラン河）から流れが来ていました。この水路の上に、カンピリへの進入が許されていた橋が架かっていました。その土手から数メートルの所には、鉄条網の囲いが設けられていました。私の記憶が正しければ、私たちがポートと呼んでいたこの収容所の入り口は、閉鎖できませんでした。

入り口の右側に、私たちには判らない、日本語の文字で記された立て札がありました。進入通路は、多分50メートル位の長さでした。通りの左側には、私たちの「グダン（倉庫）」になっていた竹製の大きなバラックが建っていました。ここに食糧が貯蔵され、そこから配給されました。通りの右側は、2、3本の美しい大きな木が立つ凸凹した砂の地面でした。この地面はその後、牧場となりました。それも、たいへんな勢いで繁茂するアラン アラン（大きな葦^{ヨシ}の一種）（樹木が抜かれた跡地に生える雑草）を、私たちが素手で毎日のように抜き取ったおかげで、徐々に牧草地となり、普通の草が育つようになったのです。その進入通路は、私たちがその建物をポストと名付けた収容所長の家の所で終わっていました。ポストの左右に、屋根のついた渡り廊下でつながれた、2棟の細長い石造りの建物（パビリオン）がありました。左側の棟は女性病棟として、右側の方は小児病棟として設置されていました。小児病棟の隣には、10軒の石造りの小家、いわゆるアンボン小家屋が並んでいました。各々2部屋から成り、小さな台所、浴室とトイレが備わっていました。それは、しゃがみ式トイレであったと思います。女性病棟の隣にも、さらに2軒の小家屋（11番と12番）がありました。

¹⁶ アンボンより来た人たちが使っていた炊事場。

¹⁷ バラックの棟々が長く列になっているもの。

これらの家々と10軒のアンボン小家屋の前に沿って、最初の頃は轆^{わだち}らしいものが道のように延びていました。月日が経つにつれて、本当の道になってしまいました。平になった道をしっかり固めるために、所長がその上に瓦礫^{れんが}や石^まを撒かせたのでした。家々が立ち並ぶ側のこの道に沿って、またマリノの人たちのために建てられた何棟かの竹製バラックに沿って、所長はクーリーたちに雨水排出用の溝を掘らせました。その後私たちは、その溝の上に自分たちで竹の小さな橋を架けました。前記しました石造りの建物のほかにも、さらに3棟の竹製バラック、つまり共同炊事場がありました。これはポストの裏側に位置し、それとは屋根のある渡り廊下で繋がっていました。炊事場とポストのおよそ中間あたりに、煉瓦造りの深い井戸がありました。その向かい側に給水塔のようなもの、つまり高い台座に支えられた貯水槽がありました。この貯水槽から、ポストを初め両方の病棟と小家屋（これらはその後、給水から除外されました）は、送水設備を経由して給水を受けることができました。ところが、この貯水槽は圧力吸引ポンプの助けにより、井戸からの水で補充されなければなりませんでした。これは骨のおれる仕事でした。女性病棟の向かい側に診療所と裁縫作業場がありました。

本来カンピリは結核患者のための療養所でした。司令所、診療所と裁縫作業場は、その当時、医師、看護婦とその他の職員の住宅でした。一方、患者たちは、両方の病棟と小家屋に収容されていました。その敷地にはその当時、美しい大きな樹木が繁っていました。太平洋戦争が勃発^{ぼっぱつ}した際、その結核患者療養所から人々を避難させ、その後は長い間、顧みられませんでした。日本人たちは、そこが強制収容所として、明らかに適した場所であると思いました。彼らは大部分の樹木を引き抜き、空き地となった場所に12棟のバラックを建設しました。その棟々の間に、竹製の3つの小さな建物を設置しました。そのうち井戸がある真ん中の建物は浴場として利用され、一番外側のもはグダン（倉庫）に当てられました。ところが、戸締まりすることも、常時、監視することもできなかつたため、その目的には全く不適當でした。私たちは暫^{しばら}くして、それらの場所を幼児用教室と遊び場に、また一ヶ所は年長の少年少女のための諸活動の場所として利用しました。

6棟のバラックに沿って、その前側には屋根付き渡り廊下でつながれた、食堂と呼ばれていた長く伸びた棟がありました。第1棟、第2棟用の食堂には、水を煮沸して飲料水とするための場所がありました。その水は、井戸または収容所の北西に沿って流れていた小川からのものをセメントの水槽に溜め、そこまで担ぎ込まなければなりませんでした。細長い棟の中央部分は、第3棟、第4棟用、また建物の終わりの部分は第5棟、第6棟用の食堂でした。これらの食堂にも同様に、貯水槽と飲料水用の煮沸場所がありました。この長く伸びた棟の内部には、長い食卓を間にはさんで、細長いベンチが並んでいました。すべて竹で編まれたものでした。

寢室用バラック¹⁸の裏側にも、長く伸びた竹製の建物があり、同様に渡り廊下でそれらの棟とつながっていました。ここには、しゃがみ式トイレが設置され、各々の棟に8ヶ所あ

¹⁸ 日常生活用のバラックの意味で、それ以外の目的用のものと区別するための表現。

りました。ここの床は幸いなことにセメントで、寝室用バラックと食堂のように、ただ年数かけて相当踏み固められた、普通の土ではありませんでした。これらの粗末な便所には、洗い流すための水はありませんでした。そこへ行かなければならない時は、各自、水の入った缶を持参し、使用後はできる限りきれいに流し去らなければなりませんでした。

集合バラックB、つまり第7棟から第12棟までは、集合バラックAと同じように造られていました。それは敷地の北東側に位置し、診療所と裁縫作業場の斜め後ろにありました。これら2つの集合バラックの間には、途方もなく巨大なもの、つまり竹の柱で支えられたアコラデ形¹⁹をした屋根の教会用バラックがありました。この棟には側壁がありませんでした。それで嵐が襲来するや否や吹き飛ばされてしまいました。

修道女たちが場所を貰っていたバラック第1棟には、瓦礫造りの深い井戸があり、「修道女用の井戸」と呼ばれていました。第6棟と裁縫作業場の間にも、もう一つ井戸がありました。そちらの方を「妖精浴場」と呼んでいました。それは、私たちのカンピリ抑留第一日目の晩に、私たちが揃って水浴をしたからなのです。集合バラックBの方向へ、もう少し先に行った所に「男性用の井戸」がありました。これは私たち「マリノキャンプ」²⁰の3名の男性のために、確保されていました。第12棟の傍には「マリノ用の井戸」がありました。これは小家屋1番の向かい側に位置し、アンボンの人たちに使われていた「アンボン用の井戸」と対をなすものとして、そのように呼ばれました。これらすべての井戸は、乾燥期だけを除き殆ど常時、水を供給していました。カンピリは、この土地のやや小高い所に位置していました。そして地下水はすいぶん奥深く下がるため、井戸からはせいぜい泥が掬われるだけでした。日本人たちが各棟の間に掘ってあった土の井戸は、まだ十分に深くはありませんでした。直に乾ききってしまいました。彼らは繰り返し穴を深くし、ようやく一年のある時期には水が得られました。

シャボットウー コートウマン

1943年5月25日

こちらへの移動旅行は3グループに分かれ、3日間連続してトラックで実施されました。屋根も座席も無い、荷台の位置が高い軍用車でした。第1日目は35名の人たちが乗車しなければならず、 balan（荷物）は別の車で行きました。第1回目では、積み上げが素人なみでしたので、途中でいろいろな物が紛失してしまいました。後続の2日間はヤップン自身が介入し、すべての積み荷をしっかりと縛り付け、車も増えました。それで3日目には、私たち26名だけが乗りました。

一家庭あたりトランク一つ、という乗車規則は全然守られず、諸々の手荷物が持ち込

¹⁹ イスラム教や回教寺院に見られるモスク調の屋根。

²⁰ カンピリ収容所の敷地内にあった、マリノより来た人たちが生活していた地区。

まれました。携帯用マットレスだけは認められませんでした。イノ自身が最初の2日間、検閲に当たりました。2日目には再び睡眠用マットレスを持参した人がいて、彼は平手打ちにさえしたらしいのです。経験を通して賢明になり、私は使い馴染んだ携帯用マットレスを4つに裁断し、枕カバーに入れてしまいました。そのようにして、バウドゥヴァインと私は今一緒にバレ バレ（寝台）に寝ていますが、かなり柔らかです。ルック²¹ は格子縞の旅行用ひざ掛けの上にごさを敷き、その上で寝ています。こんな方法で人々は、それでもなお薄いマットレスの上に寝ています。しかし、大部分の人たちは、もっぱらティカール（寝台用むしろ）を使っています。竹製のバレ バレ（寝台）の硬さは、想像よりずっと心地良さそうです。

別に1台の車が家畜用に当てられ、鶏、山羊、あひる、豚さえもいましたが、犬だけは絶対に同伴させてはなりません。同じ棟にいる或る人は、小さなプードルをこっそり連れてきました。1日3回、彼女は犬を籠に入れて戸外に連れ出し、15分位息抜きさせていました。この動物は決して吠えない性質でした。その犬は「賢い」ことに、不自然に生きること耐えきれず、数日前の夜、死んでしまいました。

私たちが居る70ヘクタールの広い敷地の中央に、旧結核療養所のいくつかの建物がありません。現在それらは病院、衛兵所、事務所、そして3月末よりこちらに居るアンボンから移動してきた300名余りの、女性と子供たちの住宅として利用されています。この中心部の周囲には、竹製ベッドが各棟100台備えられたバラック6棟が両側に建てられました。1人用ベッドが二段式になって左右に並び、隣との間隔は平均1.5メートルありました。各自1台のベッドを使う権利がありました。偶然、2人の子供がいる私の所では（私たちの棟には103名の抑留者がいます）、小部屋のように1.5から2メートルほどの空間に、ベッドが二段になった足場が一つあるだけです。

バラック内の地面は砂ですが、話によるとセメントを敷くことが、計画に含まれていたようです。しかし、収容所は政治的理由から、予定より早く使用が開始されなければならなかったのです（マリノは軍隊の野営地に変更される予定でした）。6棟のバラックの間5ヶ所に井戸があり、その周りに浴室となる小部屋があります。バラックの後ろ側には更に5つの井戸、その後方に50のトイレがありました。

そのバラックの棟々の前に食堂付きの広い炊事場があり、これとバラックの間にも、また5つの井戸がありました。他の6棟のバラックでも、この3つの古い主要井戸と「アンボン地区」にある2つの井戸を除き、すべて殆ど同様です。

収容所全体は中国人の建設請負業者によって、40,000ギルダーで建てられました。水を供給する井戸をそれほど深く掘ること、また突風に耐えられるバラックを建てるには、随分安く出来上がったようではありましたが、3週間後には既に、後ろ側のすべての壁は飛ばされてしまい、扉のないトイレがあります。このトイレについては、それほど深刻ではありません。というのは、藤^{とう}をいくらか持っているトゥカン（作業夫）が、たいてい直ぐに使えるから

²¹ 筆者の娘、ルッキの別の呼び名。

です。しかし、この給水については、私たちが収容所に到着して以来、会話の主題でした。

コートウン

1943年6月1日

今日、突然、男の人たち全員が収容所を出て、パレパレへ移動しなければなりませんでした。アンボンから来ていた負傷者が、まだかなりいました。これで、私たちの神父さまも行ってしまわれるのです！ 修道女たちが、ちょうどキリスト昇天祭のために、すてきなことを考え出したところでしたので、残念です！ 15才以上の少年たちも、また一緒に行かなければなりませんでした。でも、ヴェイヤース氏と2人の医師は、ここに留まることが許されました。肺に一撃を受けて、移動ができないアンボンから来ていた男の方も、こちらに残りました。

シャボットウー コートウマン

1943年6月1日

私たちは5月5日の午後3時に到着しました。ヤップンは車から荷物を降ろし、その降ろされた場所に置いたままにさせました。私はすべての衣類をトランクに納めることができませんでしたので、一番厚地の物を着ました。スラックス、長袖のブラウス、その上にカーディガン、それにスポーツ用ジャンパー、最後にレインコート。そのポケットの中には、携行していたかった物が入っていましたので、身につけていました。幸いなことに、第1日目に到着した知人が出迎えにきていて、第8棟内に適当な場所を探してくれました。数日後、私は第11棟へ移りました。第8棟はインドネシア人、アメリカ人、バグダット・ユダヤ人²²、中国領事など、外国国籍の人たち用に確保されていたためでした。ヤップが先に立って歩き、私たちをこの棟に連れてきました。ところが、どこか他の場所、例えば、友人のいる所などに宿泊を希望した人は、その機会がありました。それからバラン（荷物）を引きずることになりました。あの旅の後、この暑さの中で、それはもう不人情にも過酷なものでした。私は人生で初めて自分の力の限界を感じ、その問題に直面したのでした。つまり、ここで気を失うことはできないのです。その時、誰もが同等に過度な負担に堪えていましたから、私を拾い上げてもらうようなことを、誰にも求めることはできません。

²² 推定では、イラク人またはメソポタミヤ・ユダヤ人として知られている一グループの抑留者は、バグダット・ユダヤ人と呼ばれた。ここでは、ヨーロッパが起源ではない、アジア系ユダヤ人を意味している。

シャボットウー コートウマン

1943年6月11日

バラックの棟々に100名の人たちが集まっての生活は、マリノでのように30名で家々に住むよりも、誰かしらの神経を消耗させることが、遥かに少ないことが明らかです。誰もがここでは、隣人との間を布で仕切りをしてもしなくても（バラックに入るとボンベイの商店街を思い起こします）、多かれ少なかれ自分専用の場所（隣のベッドとの空間）があるのです。

他の99名の同じバラックの仲間から見られるように、お互いに付き合っても付き合わなくても、個人の好きなようにしているのです。各人、自由に開閉できる自分専用の窓（マリノでは多くの口論となった課題）があるのです。騒音も思うほどひどくはありません。これらすべての布、竹、それにアタップ屋根（nipah（ニッパ）というヤシの葉でふかれた屋根）が騒音をたいへん和らげるのです。義務づけられた休息时间、1時から3時までは「大部屋警備係」が、子供たちが騒がないように気を配っています。同様に夜9時以降も静粛にしなければなりません。それでも、バラックの中央に子供のいない非常に騒々しい女性が数人いますので、多少は違反が出てしまいますが、このバラックを分かち合う同僚たちはかなり寛容なのです。

シャボットウー コートウマン

1943年8月2日

先週、新しいプリンタ（命令）。「新規の人たちが入ってくる。バラック第7棟は退去し、これら100名の人たちは、第8、第9、第10、第11と第12棟の5つの棟に、分散されなければならない」。子供たちは現在、収容所の半分に当たるこの部分では、もはや自分たち専用のベッドが無く、殆どは他の人と一緒に寝ています。それで、私たちの所は現在116名で、これも順調にっています。

バラック第7棟では幼児が多過ぎ、他の棟よりも構成が劣っていました。その上、この棟ではジフテリアが相変わらず発生していました。恐らく一人の保菌者がいたのですが、試験所が不足のため、これを更に検査することができないのです。いつもながら、この日本人のプリンタ（命令）もまた不可解で、バラック第7棟はいまだに空いたままなのです！

ファン・ヴィアルンー ハム

1943年9月8日

塩辛い波の上を私たちは、本当に浮いている。ゆるやかな青いうねりの上を、白い波頭を逆立

てた小波の列が、休みなく輪を描いている。海は孤独で、たなびく煙も見えず、遠く水平線のかなたまで、一艘の小さなプラウ船（快走帆艇）さえも見えない。確かに海は、たいへん信頼できるように見えるので、私はこんな風に永遠に漂っていたいと思う。船はこの見慣れない侵入者に迫る波をぬって、ゆっくりと航路を探し、果てしなく広がる海上の孤独な空間で、勝利の歌をエンジンの音に合わせ歌っている。

船上は本当に陽気で、心も爽やか。私は、私たちがあたかも新しい生活を求めて、新世界への途上にある移民者であるかのような感じがするのです！ 私たちは甲板と甲板の間に集められ、全く耐えられないその場所で、横になったり座ったりしています。最初に来た人々は、持参の小さなござを敷いて少し高くなった場所を占めています。また他の人たちは、樽、貯蔵箱、トランクの上、あるいは床の上に場所を見つけました。甲板全体が共同寝室に一変しました。朝、起きたとき、これら目覚めたすべての人々が、潮風で乱れ立った髪で、苦勞して起き上がる光景を見ることは、滑稽なものです。とりわけ第一夜は、大部分の人たちが心配で寝つかれませんでした。ところが、私は大変な疲労からひどい睡魔に襲われ、眠りの神モルフェウスに誘われるまま、たちまち眠ってしまいました。そして私は、その夜を無事に過ごせたことを翌朝、感謝しました。毎朝、わずかな淡水で、もし給水が止められている場合は、海の水を汲み上げて体を洗います。私たちは、これまで既に随分たくさんのに慣れてしまい、海水からさえも、もはや危害を受けることはないのです。

乗組員が、私たちはマカッサルに直行し、そこでマリノへ行くために下船する、と話してくれました。多くの人々は、それではつまらない、家族がいるジャワへ行きたいと思っているのです。しかし、不満はあっても現状を受け入れる以外にはないのです。私たちが到着する所ではどこでもきつと同じで、いずれにしても、再び即刻、抑留されることになるのだ、と私は想像するのです。

私たちのソエからの出発数日前に、アタンブア（中部チモール）の修道院から神父さま、牧師さま、そして修道女、合計40名ほどの方々が私たちの所に訪れ、超満員の棟に宿泊場所を探さなければなりません。それでも大勢で楽しく、彼らのおかげでとても良い雰囲気がかもし出されました。そして、それが私たちには必要だったのです。

その日私たちの出発前、歩哨が夜明け前に既に部屋に入ってきて、身の回り品を袋に詰め外に運び出すように急ぎ立てました。それから、片付けと掃き掃除でした。携行できなかった物は仕分けされ、使える物はヤップンが取り上げ、そのほかはごみ捨て場へ運ばれました。次に、私たち一同、清掃をさせられ、手元に残った所持品は、自分たちでしっかり管理しなければなりません。棒に葉っぱを付けた代物を使ってでも、とにかく掃かなければなりません。本当に掃きまくったのです。私たちは舞い上がる埃の中に隠れ、歩哨は慌てて退散してしまいました。これらすべての子供や女性たちを見ることは愉快的なものでしたが、その一方では、若僧たちがこのようなことのために、人を追いたてることができる、ということに心の中では常に逆らう気持ちが生じるのです。

何回も繰り返し掃き掃除をした後、やっと何台かのトラックが到着しました。みんな

電光石火、自分たちの持ち物を可能な限り積み込みました。暫くして私たちは、もう安全な視界内にある身の回り品の上に、本当の女王さまではないけれど「王座」を占めたのです。私たちは爆撃後のクーパンの様子を、一刻も早く知りたくて仕方がありませんでした。実際、名前があげられた場所では相当の被害を受けたのです。大部分の所は崩壊し、ヤップの誰もが、もはや滞在できない居住不能な場所となってしまったのです。私たちは一方では災難を悲しみ、また一方では嬉しくも思いました。修道女たちのおかげで、私は青と白のエプロンを頂きました。後で自分用に肌着と、クウンラートゥのために数枚のブラウスを作りたいと思っています。その上、私は石鹸を頂いて、たいへん幸せでした。石鹸だなんて、考えてもみてください。何と贅沢ぜいたくなことでしょう！ もう半年も、それを使って洗うことはなかったのですから。私たちは多くの小型帆船と出会うようになり、マカッサルに近づいていることがはっきり分かります。

ビマから私たちは、私たちのために[?]のようにして出帆する[?]小舟のすぐ後ろを追っています。²³ 飛行機が船の上空で旋回しては、また飛び去っていきます。乗客たちの間に旅行が終わろうとする瞬間にある、ごく普通の混乱が起り、誰もが既に自分の荷物を取り集め詰め始めました。それでは私も速やかにその例に従いましょう。私たちはどこへ運ばれていくのでしょうか。そして、それは長い期間なのでしょう。いずれにしても、この小航海は単調な収容所生活での快い小休止になったのです。

コートウン

1943年9月10日

今朝、ホスリンハ医師と数人の少年たちが、パレへ移されました。しばらく前に、バラック第7棟は退去させられ、他の数ヶ所の棟に詰め込まれました。それで12才以下の子供たちは、一緒に寝なければなりませんでした。所長によると、また新しい人たちが来るだろう、ということでした。けれども、2週間たつと希望する人は、その棟にまた戻ってもよいことになりました。アンスおほ小母さんも、また戻って行きました。そのときは、そこは50名しか入れなかったため『静かな棟』と名付けられました。ところが昨日また突然、彼女たちは全員そこから出され、他の人たちの所に分けられてしまったのです。今日、人々が到着する予定である、と伝達されました。ある人は、それはドイツ人の女性たちであると言いきり、また他の人たちはパカトにずっと収容されていたリヴァンさんの家族か、誰か他の人たちに違いない、と言いつづけていました。収容所全体が緊張していました。

バスが近づいて来ると「アンボンキャンプ」から知らせがあったのは、だいたい2時15分前頃でした。みんなは、原っぱ全体と派出所が見渡せる食堂へ向かって、走り出しました。原っぱには運搬作業班の人たちのみが、立ち入ることを許されました。一番目のバスは、

²³ [?]の部分は、日記の原文が判読不可。

もう橋を渡り収容所に入ってきました。私は、私自身がここに到着したあの時と、まるで同じ寒気の立つ震えを感じました。また、人々は抑留されたのです。両側から大勢の人たちが手を振っている中、バスは教会用のバラックに向かって走っていきました。この人たちは、一体なんとたくさんのバラン（荷物）を持っていたこと！ みんなバスから降り、既にバラック主任に指名されていたアンス小母さんの指導で、誰もが自分の場所の割当をもらえる棟へ、行かなければなりません。チモールからの人たちであることが判りました。

何人かの修道女たちもそこにいました。全部で12名。全員合わせて108名でした。これらの人々は今までヤップンの下で、ずっと良く扱われていたのです。つまり、彼女たちは夫と一緒に住宅内に収容され、彼らにお金を払う必要もなくヤップンの世話になったのです。それで、彼女たちにはまだかなりの所持金があるのです。私たちの貯えにとっては、思いがけない幸運です。マリノはしばらく前に既に、「アンボンキャンプ」と会計を合同にしていました。それは経済的だったのです。

シャボットウー コートウマン

1943年9月15日

私たちの圧制者たちの運営組織におけるもう少し詳しい見解を、友人の一人から入手しました。彼女はチモールからの100名前後の人たちと一緒に、ロティから9月10日にここに到着しました。彼女はもう一人のオランダ人女性と一緒に、ロティから最初クーパンに移されました。そこで1、2週間の内に、私がこの1年半にしたよりも、より良くヤップンを知ることができたのです。彼女たちの依頼により、ロティの或るメナド人宅へ連れ戻されたのです。そこでの状況が彼女たちにとって、あまりにも良すぎるのが分かり、自分たちの日々の糧を満たすためにクボン（畑）を、一緒に耕さなければなりません。時々、日本船が島に立ち寄りました。ちょうど6週間ほど前に実際に占拠され、彼女たちはクーパンの北方に位置するチモールの女性強制収容所へ、連れてこられたのです。そこでのアメリカ軍の攻撃が激しくなった時、彼女たちはかなり大急ぎでこちらへ移送されたのです。

コートウン

1943年9月20日

今朝、また男の人たちと少年たちが去っていきました。アンボンから来ていた病人の最後のグループと、私たちの所の少年たちでした。少年たちは、まだ15才にもなっていない位なのです。それなのに、所長はその少年たちを厄介すぎると思いました。その上、バラック第12棟に侵入し損害を与えたのは、原住民ではなく彼らであった、と言い切ったのです。

ファン・ヴィアルン ー ハム

1943年9月22日

そして今、私たちは再び陸上のどこかマカッサルから外れた所にいます。私たちは今からだいたい3週間くらい前に、ここへ乗りつけました。その時、私たちは急いでやって来た女性たちが私たちの車に殺到し、あたかもそれ以外のことは決してしていなかったかのように、積み荷を降ろす様子を驚きの目で見張ったのでした。私は正直に言って、ここへ来てまだ間もない、ということが想像できないのです。なぜならば、既に久しく大勢の昔馴染^{なじ}みと挨拶^{あいさつ}を交わし、また新しい人たちと知り合うことで、ここに何年も居ることがまるで本当であるかのような、多くの印象を受けたからなのです。

大勢の人たちはまだあまり馴染めないのです。そして多かれ少なかれソエに戻ることを切望しているのです。なぜならば、彼女たちはマカッサルに到着後、夫と離ればなれにされ、彼らは別のトラックで私たちが進んだのとは違う方向に出ていくのを見たからなのです。ここからおそらく160キロメートルは離れていると思われるパレパレには、つまり男性収容所が設立されました。カンピリは私たちが居る場所の名前です。そこは以前、結核闘病者のための快復静養地でしたので、きっと健康に良い地域に違いないのです。現在ここには、モルッカ（マルク）、南セレバスそしてチモールの島々から来た女性と子供たちばかり合計1,600名ほどがいます。

コートウン

1943年10月2日

バラック第6棟は崩れそうなので、立ち退かなければなりません。人々は教会用のバラックに集められました。その側面は完全に開け放しで、とても寒いのです。

コートウン

1943年10月5日

バラック第1棟、第2棟そして第5棟も退去させられました。グダンス（倉庫）は今、超満員です。新しいバラックは、かなり頑丈に建てられています。もっと多くのベッドが置かれていることは確かです。今までは一区画に10名でしたが、今は20名です。2つ並んだベッドを一对として、それが二段式になったものを作りましたので、これが可能だったのです。居心地よさそうでしょ？

コートウン

1943年10月15日

授業が終わって12時に家へ帰ってきたとき、私は自分たちの棟から5時には退去しなければならない、と聞いたのです。もちろん、ものすごい騒ぎ。私たちはどこへ行かなければならなかったのでしょうか？ どこでも満員でした。確かに棟々は襲撃されていて、所長はとにかく退去させたのです。しかし、どこへ？ 数名の人たちはまだ食堂に、そして10名ほどの人たちも、まだ教会用バラックに留まることができました。でも、残り的人たちは？ 辛抱強く待った後、やっと新しいバラック第2棟、と指示されたのです。ところが、もともこの棟に入るべき人々は、私たちがそこから再び出ていくまでの数日間は、そのまま食堂に待機しなければなりません。さもないと私たちは指示された時間に、そこから出られませんでした。激しい^{にわ}俄か雨になり、私たちは寝具類を苦労して、引きずっていかねばなりません。バレ バレ（寝台）を足場から持ち上げて取り外し、その上に何もかも積んで第2棟まで運んでいきました。ずいぶん遠かった上、ひどく重かったのですが、それをしない訳にはいきませんでした。それでエディと私は、たいへんな思いをして引きずって先へ進んでいきました。途中まで来たとき、またもや雨がぽつぽつ降り始めました。一目散に走ったのです。くたくたになって、私たちは第2棟に着きました。お母さんはその間、荷物をずいぶん整頓しておいてくれましたので、私たちのバラック（荷物）の大部分を、倉庫に納めることができました。それで私たちは、幸いにも大半の荷物を整理できました。

ちょうどその後、急に雨が降り始めました。どしゃぶりでした。私は、それから食堂に移る必要があった人々を手伝いました。雨が小降りになるのを待って、また荷物を第2棟へ引きずって運びました。うんざりすることに、すべてを直ぐ中に運び込まなければならなかったのです。そうしなければ濡れてしまいましたし、中は竹とアタップ（nipah（ニッパ）というヤシの葉でふかれた屋根）でめっちゃめっちゃでした。しまいには、あたりまえに扉から中に入ることもできませんでした。私は、最後の部分の小物を取ろうと、また第9棟にちょうど戻ったそのとき、激しくきしむ音を聞きました。叫び声。私は急いで駆け出しました。そしてバラック第12棟の食堂が一体どんな風に崩れ落ちたのか、ちょうど見ることができました。風雨が激し過ぎたのです。人々は、素早く机や長椅子の下に這っていき避難しましたので、誰もすり傷を負わずにすみしました。

まだ燃えていた火は、一瞬のうちに消されました。食堂の奥に座っていた他の人々は、どの瞬間にも残った部分もまた倒壊するに違いないと予想して、それ以上そこに残りたくはありませんでした。所長が巡回してきました。彼女たちは、いずれにしても教会用バラックに入らなければなりません。バラック第2棟の人たちは、私たちが彼女たちの棟に入ってきたことを、とても怒っていました。でもヤップがそう言ったのであれば、私たちにはどうすることもできませんでした。ところが、それからは彼女たちの浴室やトイレなどは、使うことができなくなりました。私は毎回、水の入った缶を持って、ずっと先のバラック第9棟まで走ら

なければなりません。実は他の人たちもまた同じでした。それはばかげたことになったのです。お母さんは修道女たちが集まっていたお隣へ、ちょっと行ってみました。修道女たちは、第2棟についても多少指導的な立場にありました。というのは、第2棟のその人たちはマリノで、これらの修道女たちと一緒に生活したことがあったのです。それが効いたのです！

シャボットウー コートウマン

1943年10月16日

昨日の午後、弱い竜巻で私たちの食堂の屋根が落下しました。バラックは揺れましたが、倒れずに持ちこたえました。これらのバラックの棟々は、建てられてから5ヶ月の今、完全に生命を脅かす状態です。3週間前から各棟はすさまじい速さで取り壊され、建て直しされています。4棟が同時に作業に入っているということは、つまり400名以上の人たちが食堂、グダンス（倉庫）、その他の収容能力を越えたバラックの棟々、さらにヤギ小屋の中に至るまで寝ているのです。とりわけ70名の修道女たちの修道院長は、それを我慢して受けています！今週は私たちがそこを使う番になっていますので、バウディの病気が良くなっていることを願っています。

コートウン

1943年11月1日

マカッサルからこの収容所に、50名ほどの人たちが追加で到着しました。その中には、今までずっとヤップに仕えてきた大勢の女給がいます。高い踵^{かかと}の靴を履き、絹^すの透けて見えるワンピースを着ています。その上、けばけばしい厚化粧という、ものすごい品のなさ！古いがらくた物が転がっている私たちの収容所にはそぐわない、見るに耐えないものです。

前もってボックスは、50名の「オラン ナカル（『娼婦』、道徳的に不品行な人々）²⁴が来ることになっている、と既に知らせていました。彼はそれで、嬉しく思っていないようでした。彼女たちはとにかく全然、快く受け入れてもらえなかったのです。すべてのものが、彼女たちから取り上げられたのです。ワンピース3枚だけは持つことを許されました。オーデコロンや練り歯磨きなど、彼女たちが結構大量に持っていた品物は、所長が私たちにも分配したのです。いわゆる衣類基金を担当するファン・マストウリフトゥさんは、その後、所長からそれはひどく叱られました。彼女は所長には内緒で、洋服を取られた人たちに、ワンピース数枚を返して上げたためなのです。彼女たちは着るものを何も持っていなかったのですから、取り上

²⁴ コートウンさんが表現した「女給」と所長が言った「オラン ナカル」とは同じ人たち。

げたことがとにかくあまりにも愚かなことだったのです。

コートウン

1943年11月25日

今朝、ヴェイヤース氏と何人かの少年たちが、パレに送られました。所長はヴェイヤース氏をもう一度、叱りつけることにならないかと、それがとても心配なのでしょう。とにかくヴェイヤース氏は、収容所のすべての女性たちから離れて再び男性たちに会えることを、もう長い間うれしく思っていたのだと、私は信じています。

シャボットウー コートウマン

1943年12月12日

昨日、午後2時に一陣の突風通過の際、市場用のバラックとすべての食堂が崩壊ほうかいしました。収容所の新規に建てられた所ではない一部分では、竹材が重なり合いながら、ゆっくりと落ちていきましたので、誰もその下敷きにはなりませんでした。

フォスカウルー リムボーフ

1944年9月5日

午後強い突風。人々が狼狽ろうばいしている間に、大部分のトイレは強くきしむ音を立てながら崩壊した。伝達係²⁵が偶然最後で、第10棟の人たちに向かって投げキスをしながら、その瓦礫がれきの中から出てきた。そして、彼女自身が所属するバラックの扉から人々がちょうど溢れ出てくるのを見た。半分は驚きの、半分は喜びのうちに、人々はその廢虚はいきよの中から最初にバケツが、そして伝達係が現れるのを見た。背中に負ったすり傷が九死に一生を得た証となり、みんなから称賛を受け快く見られた。

フォスカウルー リムボーフ

1944年9月18日

「新しいバラックのいずれかへ引っ越しを希望する人たちは、どうぞ本日、それぞれ所属のバ

²⁵ フォスカウルー リムボーフさん自身。

ラック主任に申し出てください。これにより、前回の命令は解除されます。トイレが完成次第、新設の棟々へ引越してきます」。この通達は、非常な動揺をもたらした。約3ヶ月前に、これらのバラックは、移動してくるようになっていた新規の人々を考慮して建てられた。初めは迅速に作業が進められた。その後停滞し、クーリーが来なくなり、トイレを完成させるためのセメントの供給もなくなった。そして見逃せない点は、新参は誰も来ない、と判明したことである。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月8日

本日、新しいバラックへの移動が開始された。すべての棟々は今、入居が可能となる。木曜日の6時までに全員、移転を完了していなければならない。

フォスカウルー リムボーフ

1945年1月19日

所長は、午前9時半にマカッサルへ向けて出発し、午後1時の食事には戻ってくるはずである、と言っていた。ところが、夜8時に帰宅、全く言葉もなく、意気消沈している様子であった。所長に、教会用バラックが倒壊したことが告げられたとき、黙ったままで、それを見に行くこともなかったため、このことが原因ではなかった。

そうです。昨日、オルハさんが神父と稽古をしていたときに、それは起こった。しかし、幸運なことに、オルハさんは息子のヴァンヤくんを叱ろうと、ちょうどバラックに戻っていったところであった。そして神父と彼の手伝いをしていた少年たちは、ちょうど外へ出てきた。なぜならば教会用の棟は、不吉な音を立ててきしみ、^{ゆる}緩やかな動きで方向を変えていったからである。傍観者たちは、さらにピアノがその後方に生えていた竹で前に押し出され、それから横にずらされるのを見ていた。点検のため、偶然、取り出されてあった反響板は、そのため破損を免れた。従って、すべてが順調に進行した。

少し後に各棟に依頼されていた奉仕活動の人たちは、不要となった。なぜならばヤッピュ2番（「第二番」）がクーリーたちと^{さんごう}塹壕のマンドール（人夫頭）とを伴って到着し、ピアノをV（ファルダーポルトウ）さんの事務所に搬入させたためである。その晩の予定であった上演、つまりオルハさんの伴奏による神父の朗読は、従って教会用の棟が再建されるまで延期される。ヒアトウン・ホスハルク²⁶の詩の一つ『私はどこで死ぬのだろうか知らない』は、

²⁶ Geerten Goschalk. オランダの詩人（1884年－1958年）。ここに書かれている題名「私はどこ

神父が朗読することになっていた。そしてピアノの事件のことを考えてみれば、それは今ならば『私はどこで倒れるのだろうか知らない』と変更できると、オルハさんが冗談を言った。

教会用のバラックは、今朝、既に各棟の作業班の女性たちによって殆ど取り外された。彼女たちは、つまり非常な木材不足をきたし、どのようにしてパップ²⁷を作り、また水を沸かしたらよいか分からなかった。そして、この教会用バラックの崩壊は神様のお導きを受けたのだ、と考えた。集合バラックAのリーダーは「獲物^{えもの}は、獲物」というモットーで、それを運び出すことを黙認した。ところが、V（ファルダーポルトゥ）さんはそれに干渉し、竹材を取り除く作業は所長から許可を得ていたのか？と質問した。その答えは否定的であったため、彼女はアンスさんに所長の所へ行き、それが許されていたかどうか、聞いてくるように指示を与えた。彼女はそれを実行した。所長は静かに座って意気消沈し、一点をじっと見つめていた。音を立てて楊枝^{ようじ}で歯をつつくことが、彼の唯一の動きであった。彼は不自然に怒り、竹材を搬出することを禁止し、それから再び凝視し始めた。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月11日

それからノーアさんは直ぐに、こちらへ移送される途中で水雷攻撃に遭った、と噂されていたマナド（メナド）の女性たちのことを尋ねた！ 「いや、そうではないのだ」とヤマジは言った。彼女たちは去年、食糧供給を考慮して既にこちらへ来るはずであった。あちらでは、それが容易に行われなかったためである。そして、ここに新規に何棟かのバラックが建てられたが、その後、所長は再び彼女たちが、あちらに留る旨、通知を受けていたのである。

で死ぬのだろうか知らない」は、この詩人の作品ではなく、ムルタツウリ（Multatuli）、本名エドゥワットゥ・ダウエス・デッカー（Eduard Douwes Dekker）、1820年ー1887年、オランダの詩人・作家によるもの。この詩は彼の名作「マックス・ハーヴェラー（Max Havelaar）」の中で紹介されている。

²⁷ オートミールなどを煮詰めた、おかゆ風のもの。

抑留所の組織／日本人責任者と欧州人責任者

日記からの抜粋

ヤウストウラ

1943年5月

収容所の内部組織は、実際にはどのように構成されていたのでしょうか？ 最上部に日本人の収容所長、ヤマジ タダシがいました。彼はカンピリでの任務時、推定では24才位でした。彼には一人、時には二人の日本兵の補佐が付いていました。そのような勤務に最も長く就いているのは、オカジマという小柄で親切な若いヤッピー（日本兵）²⁸ でした。彼は直ぐに「ダーンチュ」というあだ名を貰いました。もう一人、カンピリで同様にかなり長く勤務したのは「ネイフン エン ハルフ（九指半）」でした。彼の指は十本ではなく、九本半しかなかったことで、このあだ名が付けられました。もう一人ほかにいたのは「アプルヴァング（りんごのほっぺ）」でした。優しく、まだとても若いヤッピーで、真紅の丸い頬をしていました。「ネイフン エン ハルフ」には、用心深くしなければなりませんでした。彼は正真正銘の短気でした。ある時、彼は抜き出した刀を持って、ある女性を追いかけたのです。その人は、彼に対して、いわゆる生意気であった、というものです。私はこのようなことがあると、それがどのように進展するものか皆目判らず、いつも断末魔の思いでじっと耐えたのです。日本人の収容所役人たちは、権利を行使しました。彼らは強い支配力でした。

収容所リーダーの次には、集合バラックリーダーたちがいました。それは3人でした。集合バラックAでは、最初、ズス・ファン・ホーアさん、その後、ティヌ・クレイさんでした。集合バラックBでは、ノーア・ファン・マストウリフトウさん、その後、もし私が勘違いをしていなければ、ヤンス・ラウエンダイクさん。アンボンの人たち（集合バラックC）には、ファルダーポルトウさんでした。更に、各々の棟にはバラック主任がおり、またアンボン小家屋では、それぞれに小家屋主任がいました。これらの人たちは、諸規則が遵守されているか監督し、また彼女たちのバラックや小家屋の運営が、順調に進行するように配慮しました。バラックの各棟には、その棟担当の看護婦さんもいました。彼女たちは患者の世話を初め、その人たちの食事を運び、女医さんが患者往診の際は同行しました。バラック主任の仕事は、容易なものではありませんでした。誰かを説き伏せることを請け負うことは、殆どの場合かなりの説得力も要求されました。

所長及び収容所リーダーからの通達事項は、伝達係のC. フォスカウル ー リムボー

²⁸ 日本人に対する軽蔑の意味を含めた呼称ヤップ（Jap）に、オランダ語で小さなものを表現する場合の語尾「ユ」（je）を補足したもの。

フさんによって、定期的に配布されました。彼女は通達事項のために備えられた連絡簿に、それを読んだ確認として、頭文字で署名させました。バラック主任たちは、それらのことを、その棟に掛けられた石盤に書き写しました。通常、通達は棟の中で、更に口頭でも伝えられました。これらの管理職以外に、勤務班長と称する人々がいました。彼女たちは、実行されるべきある特定の業務の一部を担当する班の責任者でした。それで、医療班は2人の女医、フットゥブルトゥゥ医師とフェインストゥラ医師、そして彼女たちを手伝う、看護婦さんたちと助手の人たちで構成されていました。それとは少し別に、男性の医師 A. マルセイユ氏がいました。彼はヤマジの指示で、衛生監督の担当にさせられました。彼は粗末な便所の管理、つまり時には汚物用の穴さえも掘ること、そして蠅退治の世話もしなければなりませんでした。少しも羨やまれるような仕事ではありませんでした。次に、用地整備班がありました。これは、通路、排水溝、小規模な橋と草地の整備を担当しました。時には、バラックの棟々の屋根や壁の修理も行いました。

更に、特別食用炊事場、また野菜洗浄、お米とトウモロコシの粉碎、唐箕^{とうみ}²⁹などの作業場が、独自の部門として備えられた共同炊事場がありました。そしてドラム班は、炊事に使われる大型ドラムを洗わなければなりませんでした。購買配給班は、当初は自分たちで購入できたのですが、私たち自身の所有財源が底をつき、その権利を失ってしまいました。彼女たちは民政部（在マカッサル）が食糧供給を手配した後、数台のトラックで搬入された積み荷を降ろすこと、そして配給の世話をしました。購買配給班にはその一部を成す、つまり運搬作業班のほかに「扶助」業務もあり、可能な限り衣類、履物、石鹸などを、公平に分配しなければなりませんでした。食糧供給の別の業務部分として、収容所内で働いた菜園班と、収容所の敷地外に自分の仕事場を持っていた、キャッサバ班³⁰がありました。それから完全に日本人のために働いていた養豚場がありました。ソックスを編むこと、桜の花（記章のようなもの）を刺繍すること、そして最後に、雲母板³¹を正確に剥がすための作業場なども、同様にすべて日本人のためにありました。裁縫作業場は、部分的に日本人のために稼働していました。収容所全体のために、いくつかの小人数に分かれた幼児グループ、小学校、そして高等市民学校³²の生徒たちが働きました。これらすべての勤務については、後ほど改めて取り上げます。

いくつかの仕事は、義務的な雑役として行われました。主なものとして、汚物除去、給水、粗末な便所での監視、除草作業、そして、お粥作り^{かゆ}がありました。誰がどの役割を担当したのでしょうか？ その雑役は例外として、誰もが、ある特定の仕事をしなければならなかった、というように「強制」はされなかったと私は思います。雑役は、皆が当番でするより仕方がなかったのです。私たちはポリチ タンクシィ（警察官舎）とマリノでも、既にかなり

²⁹ 穀物を精選して、殻などを除去する農具。

³⁰ キャッサバは熱帯地方では最も重要な主食の一つ。サツマイモに似た巨大な根茎があり、その澱粉はタピオカの澱粉とって食用にする。

³¹ 通信、電気関係の絶縁部品として軍用に使われた。

³² 大学進学のためのオランダ上級中等教育コースで、現在の制度とは異なる。

の経験を積んでいました。それでも当然のことながら、収容所の設置に当たり、すべてが同時にその目的に適合するように出来上がった訳ではありません。勤務部署と役割が構成され、月日と共に発展したのです。新しい勤務班が設置され、最初にその班長探しが行われました。次に誰がこの仕事を希望するか求められました。志願者が超過した場合は、最適人者が選抜されました。希望者が十分でなかったならば、私たちはその作業を少人数で行いました。

コートウン

1943年5月5日

朝早く、お母さんはもうヤウストゥラさんの所に、行っていなければなりません。ヤウストゥラさんはお母さんがしばらくの間、この棟の主任になるでしょう、と言いました。お母さんは、それをする気など全然ありませんでした。ところがヤウストゥラさんは、すべてのことがもう少し整い、彼女が業務全体の状況をより良く把握できるようになるまでの、臨時のことなのだと言いました。あれこれ反論はしたのですが、お母さんは仕方なくその仕事を引き受けました。

コートウン

1943年5月6日

お母さんは通達を配布するため、そして各作業班、例えば、炊事班、給水班、菜園班、大部屋警備係、トイレの監視係、野菜洗浄班等々を編成するため、東奔西走し終日留守でした。私は、すぐに幾つかの監視係に配属されました。盗難、蓋をし忘れたおまる、隅々に残飯が落ちていないか等、それは精鋭な目で点検して回りました。

ウッカーマン — テムプラーズ

1943年5月14日

日本人の収容所長ヤマジが、収容所内に住むために来ます。所長は、マリノ部宛³³の命令はヴェイヤース氏に、アンボン部宛³⁴のものはファルダーポートゥさんに与えます。

³³ マリノより来た人たちを管理する部門。

³⁴ アンボンより来た人たちを管理する部門。

コートウン

1943年5月15日

一週間は単調に過ぎていき、すべてが立てられた計画通りに進んでいます。7時15分 — バラック主任による点呼実施。7時15分から7時30分迄 — スポーツ。7時30分 — 朝食。8時30分 — 畑仕事。9時30分から9時45分迄 — コーヒーの休憩。9時45分から11時30分迄 — 作業。12時30分 — 昼食。12時30分から4時迄 — 自由活動、お裁縫など。4時 — コーヒーまたは紅茶休憩。4時15分から5時30分迄 — 作業。6時 — 夕食。8時30分 — 各棟内での所長による点呼実施。11時以降は、誰も外出は許されません。毎週土曜日は収容所全体のボンカル（清掃）。毎週日曜日はお休み。

ヤウストウラ

1943年5月

私たちの収容所の運営はここ数週間、揺らぎながら進みました。私が偶然出会った他の棟のある人たちから、なぜ私は収容所リーダーの役割に携わらないのか、と尋ねられました。それについて私は、教師としての自分の役職を再び引き受けたからです、と答えました。それは真実でした。私たちは、いくつかの小グループの子供たちに、戸外で授業をしました。ヤマジは、そのことを黙認していました。私は、収容所の運営は揺らぎながら進行していた、と言いました。この状態が長く続いてはならなかったのです。ある日、ヴェイヤース氏は、私にパサール（市場）での購入の役割を、どうか引き受けては貰えないだろうか、と頼むために私の棟を訪ねてきました。私は不本意ながら聞き入れました。そういう訳で、私はヤマジと定期的に会いました。所長の家、つまり司令所は進入道路が終わる所にあり、市場用のバラックは橋から見ると、通りの左側に位置していました。私がこの新しい役職を引き受けてから間もなく、私はヤマジの所へ呼び出されました。彼は、私がタンクシィ（兵舎）と、その後マリノでもクパラ（責任者）であったことを、婦人たちから聞き及んでいたと話しました。彼は、私が今カンピリでも、またクパラになるべきであると考えていました。私は、彼の申し入れに反対し、きっぱりと断りました。ヤマジは私に一週間、考える猶予を与えました。その後、私は再度、彼の所に行かなければなりませんでした。彼は、私がクパラになることを希望するかどうか尋ねました。私は『いいえ、トゥアン』³⁵ と返事をしました。それに対して彼は『それでは、お前は、わしに協力したくないのか？』と尋ね、私は『あっ、はい。もちろんです』と答えました。所長は『よろしい。では、お前は今からクパラになる』と言いました。そう言われては仕方があ

³⁵ カンピリ収容所では、抑留者が所長であるヤマジを「トゥアン」と呼びかけた。これはインドネシア語で旦那様、ご主人様という意味の尊称語である。

りませんでした。ヤマジは、また、カンピリが最早二つの収容所（アンボンとマリノ）ではなく、一つの収容所となることを決定していました。

シャボットウー コートウマン

1943年6月11日

早速ヤップンは日程表を作成しました。6時30分（すべて日本時間）ー 起床、6時45分から7時40分迄ー 体操、7時15分から8時迄ー 畑仕事、8時から8時30分迄ー 朝食、8時30分から10時迄ー 畑仕事、その後コーヒー休憩と各自の用事（洗濯！）、昼食、1時から3時迄ー 義務づけられた休息、それからバラック内での仕事（裁縫）、そしてお茶の休憩、4時30分から5時30分迄ー 畑仕事、6時30分ー 夕食、7時30分ー 点呼、10時ー 全員在宅。

シャボットウー コートウマン

1943年6月13日

私たちがここに到着してから一週間位すると、ここに設けられていたマカッサルの警察警備は、もはや十分ではないように思われ、数人の日本人がこの警察業務を指導するため、また、私たちを見張るためにやって来ました。これは余計ことではありませんでした。なぜならば、あらゆる種類の人たち、殊に蘭印人は、これらの警察官たちと関係を結び密輸に余念がなかったからなのです。

コートウン

1943年6月15日

あっ、そうそう、私がまだ話していなかったことがあります。毎晩、7時半に点呼があります。それで、ボック、ヴェイヤース氏、そしてファン・マストウリフトウさん（集合バラックリーダー）が巡回してきます。みんな、それでベッドの前に立ち、彼らがバラックの前に立ち止まると、深くお辞儀をしなければなりません。時々、ボックはバラックの中まで歩いてくるか、または脇の方から、全員ベッドの前に立っているかどうかを見にきます。子供たちは、その時ベッドに寝ていなければなりません。ああ、ここできちんと服従しない人は、災いに遭うのです！

コートウン

1944年1月7日

今朝、生徒たち全員、派出所の前に集合させられました。所長は、そこから私たちを何人かの女性教師と一緒に、牛の牧場へ行かせました。この牧場は柵で囲まれています、たいへん特別なように思われるこの機会に、そこに入ることを許されました。

私たちは、各組毎に整列しなければなりません。ヤウストウラさんも出席していて、持ち運ばれた演壇のような所に立っていました。所長に代わり、彼女は正に『そのニュース』を伝えたのです。これからは毎朝、仕事に取りかかる前に、この牧場のこの場所に、整列しなければならないようになりました。ヘアデスさんは私たちに、いくつかの指示を日本語で与えることとなります。例えば、マイネレ（前へならえ）！ キオツケ！ ヤスミ（休め）など。私たち全員、キオツケの姿勢をとると、ヘアデスさんが『脱帽』！ と号令をかけるのです。それに続いて私たちは、女王様に、そして祖国にオルマツト ブザール（最大の敬意）を表すため、たいへん深いお辞儀をしなければならなかったのです。（そのために顔を西の方角に向けさせられたのです！） 私たちは、そのことを全く理解できません！ バラックの中でもそれからは、命令は日本語で出さなければなりません。それは次のようなものです。『キオツケ！ 』... 所長が来ると『レイ！ 』。所長が出ていくと『ヤスミ（休め）！ 』。そして、その少し後で『ワカレ！ 』。この点呼は、とてもばかげた見せ物のようになってしまいました。お母さんが彼女の日本語を始めると、とてもおかしくて吹き出してしまいます。そしてお母さんがこの年になって、日本語をしゃべるとは一体誰が想像したことでしょう！！

コートウン

1944年5月4日

お母さんは今日正式に、バラック主任の役割を辞めました。すべての反対にもかかわらず、今度とはとにかく、そうすることを頑張り通したのです。そこで、新しい人を選ばなければなりません。評判の悪い人 ドゥ・クルゥは、彼女の女友だちイスラエルさんを主任にするため全力を尽くしています。そのことがドゥ・クルゥにとって、何かの得になるからなのでしょう。大多数の人たちは、ローフマンさんか、お母さんを再び選びたいのです。でも、お母さんは私たちが既に言ったように、みんなが百回も彼女を選んでも、とにかくもうしません。ローフマンさんにしても、しばしば病気ですし、そのうえ足が不自由ですのです。

コートウン

1944年5月8日

今朝、イスラエルさんが正式にバラック主任に指名されました。いつも、何か追加でしなければならぬことに、とても怠慢な人だったので、どのようになるかは誰も知るはずがないのです。お母さんは予め彼女に、ドウ・クルウについて警告をしたのです。

フォスカウルー リムボーフ

1944年6月26日

今朝の動揺は「アンボンキャンプ」のリーダー、V（ファルダーポートル）さんの失脚に起因している。ヤマジは、彼女をこれ以上リーダーとして望まなかった。ヤマジはJ（ヤウストウラ）さんに対し、このことを繰り返してあり、ヤウストウラさんは、この「アンボンキャンプ」のために別のリーダーを探す努力をしなければならなかった。そこで所長は彼女に今朝、「一体誰が後任となったか」と非常にはっきりと聞いた。そのことによって、V（ファルダーポートル）さんの失脚は確実である。P（パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル）さんが今回「アンボンキャンプ」の正式な新リーダーとなった。

フォスカウルー リムボーフ

1944年8月5日

夜の7時は点呼である。7時2分前に、この点呼で巡回する「第二番」が寢室の扉の角に、パンツ姿で恥ずかしそうな表情で現われ、二言三言日本語でつぶやく。その言葉は誰にも理解できないが、それでも、その意味するところは明瞭である。彼のズボンは外のベンチの上にある。ズボンについてしまった一点のしみを、彼はいつも几帳面であるように、直ちに洗い落としていた。そのズボンは乾かすために外のベンチの上に置いてあった。そして今、彼のズボンを求めた。「さあ急いで。お前たち、彼にズボンを渡さないか。彼は行かなければならないのだ。いずれにせよ、パンツ姿で点呼に回れるものか?」。それは言われた通りにされた。ヤウストウラさんに対する丁寧なお辞儀がすんだ後、ヤウストウラさんを先頭にその後ろに「第二番」が続き、彼らは点呼をして回った。

コートウン

1944年8月24日

テオ・ベアレントゥ君が叩かれた！ 突然ぞっとするような悲鳴を聞いた時、私たちは学校にいました。はっ、と驚いて私たちは飛び上がり、司令所の方をじっと見つめました。そうです。司令所の隣に、両手を柱に縛られたテオ君が立っていました。所長は狂ったように彼を打ちまくったのでした。テオ君の大きな悲鳴！ 4組（スーズ・ルウルとミアリィ・ティルマン）でちょうどフランス語を教えていたヤウストゥラさんも直ちに立ち上がり、全速力で原っぱを横断していきました。驚くことにヤウストゥラさんはヤマジに話しかけながら、ごく普通に彼とテオ君との間に立ちました。テオ君は膝まずいて柱にぶら下がっていました。ヤマジはあらゆることを怒鳴ったのですが、持っていた彼の棒をとにかく投げ捨てたのです。彼ら二人は司令所に入っていました。暫くすると所長は外に出てきて、自分の自転車に乗って行ってしまいました。私は足が震えてしまい本当に少しの間、座らなければなりませんでした。あの愚か者は、いつも所長を怒り狂わせ、結局、大声で鳴きわめくことになるのです。誰か他の人が、また問題をうまく取りまとめなくてはならないのです。マカッサルにいたとき、私たちはヤウストゥラさんから「ジャンは飛行機でパリに向い、雷雨のため一時間遅れて到着した」というフランス語を習ったのでした。その当時の素直な彼女が、これほど勇敢なことをするとは、一体誰が想像したことでしょうか。明日の朝早く、私は特に『彼女』に一礼します！

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月9日

ヤマジは自分が収容所を不在にするようなときは、警報を鳴らすべきか否かについて、「第二番」が決断を下すことになる、とノーアさんと約束をした。従って、ノーアさんと私たちの警報発動に係わる責任はなくなった。しかし、「第二番」にとっては、この責任は相当に重くなるであろう。彼が私たちに、びくびくして「警報を鳴らしましょうか??？」と尋ね、私たちは、「ええ」とうなずく。それから「鐘を鳴らせ」と彼の『命令』が出されることを、私たちは今から既に想像するのである。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月18日

土曜日の朝、養豚班長は豚が少年組名簿を食べてしまった、と伝達係に報告した。これは毎朝行われる点検の際、養豚場、屠畜場、牛世話係の修道女そして牧師の所へ順次回覧される表で、

さぼっている少年たちを抜き出すためである。ところが、よりによって今朝ちょうど、所長は少年たちの厳格な点検を実施したく、3名の集合バラックリーダーたちを事務所に呼び出し、直ちにその少年組名簿のことを尋ねる！

その新しい名簿はその朝まさに養豚班長の所に届けられ、記入してから他の収容所の関係部署に回覧する旨依頼された。しかし、ヤマジがそのことを尋ねたその時、その名簿がどこにあるか、誰も言えなかった。結局、エルスさんは牛世話係の修道女の所へ、そして伝達係はバラック第1棟へ大急ぎで行った。その結果、エルスさんはその名簿を持って入ってきて、『会議』の結果として次の命令を伝達。「第6と第7学年、及び高等市民学校の生徒たちは、明朝7時に学校にいななければならない。そして今後は、豚飼育少年組も7時30分には学校の傍^{そば}に整列しなければならない」。

この対策は大いに必要であった。なぜならば80名の生徒中少なくとも30名は、毎日、無断欠席していたからである。ここの母親たちは年長の少年たちにてこずっており、所長の介入をたいへん感謝している。昨日、所長は罰として、何人かの少年たちを1時間にわたり、自転車に乗った彼の前を走らせた。彼らは、しばしば禁止されたにもかかわらず、パイア畑の中で遊んだからである。最後に彼らは額を平手で打たれ、それから棟に帰ることができた。

フォスカールー リムボーフ

1944年11月19日

午後6時にヤマジは、ヤウストウラさん、ズスさん、ノーアさん、P（パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル）さん、ヘアミィさん、G（フットゥブルトゥ）医師そしてM（マルセイユ）医師を呼び集めた。彼らは所長に付き添いキャッサバ菜園に沿って、またバラックの棟々の限界にある森の外側に沿って、散歩をしなければならなかった。これは、警報時に必要となり得る避難場所を見つける目的のように思われた。その詳細は、公表されてはならないようである。それらの焼夷弾^{しょういだん}が、収容所は傷つけられないという所長の理論に、驚きを与えたようである。ヤウストウラさんは今週また学校へ行き、来週は再び収容所リーダーとして任務に就く。ヤマジは、彼女に安静療法の意味で短期間キャッサバ菜園に住むことを勧めたが、彼女はそれを希望していない。ところがノーアさんは、もし来週ヤウストウラさんが運営権を引き継ぐとすると、彼女は少しの間、息子のエディ君と共にそこへ行ってもよいか尋ねるでしょう。なぜならば、ヤウストウラさんは「私はもう疲労困憊^{こんぱい}、くたくたです。私は数日続けてただ『眠りたい』。『睡眠以外何もいらぬ』と話していたからです、と言った。

フォスカウラー リムボーフ

1944年12月10日

夜8時少し前に、伝達係は所長のところに呼ばれた。前側の事務所にM（マルセイユ）医師、エルスさん（記録を取っていた）は座り、所長は立っていた。「タベ トゥアン（こんばんは、所長様）、私を呼ばれましたか？」と伝達係はいつものように言った。所長は「そうだ」と答え、ほかには何も言わなかった。それから伝達係は、何が起こるものか強い好奇心で、確実に10分間は立って待っていた。エルスさんは書き続け、所長は注意深く眺め、彼女が作ったインクの上を指摘した。所長はボッド（愚か者）とは言ったが笑った。再び無言、またエルスさんの筆記。

伝達係が、もの問いたげにM（マルセイユ）医師の方を見た時、彼は「新しい規律です」と言ったが、伝達係にはそのことがよく分からなかった。ようやく出来上がり、所長はその書き上がったものをランプにかざして乾かし、下の方に彼の印鑑を押した。そして伝達係に手渡ししながら「すべてのバラック主任たちは、それを良く読み、自分たちの棟で各人がそれを十分理解するように、伝達しなければならない」と言いつけた。「彼女たちは署名をしなければならない」と所長は言葉を足して立ち去った。伝達係は棟々を回り、この『命令』は所長より直々に来たものであることを強調した。命令は次のように記されていた。

第一に、子供たちは、この雨期に風邪を引かないように、暖かい衣類を身につける。

第二に、入浴後³⁶、各人、木靴を履く（その木靴はどこで受け取るのかと、これを読んだ者全員が言った）。

第三に、就寝時、扉と窓を閉める。

第四に、早い就寝 — 10時に消燈。

各バラック主任はこれを良く読み、その棟の人々に伝達しなければならない。9時少し前に、伝達係はこの作業を完了し、命令伝達簿を真っ暗闇に包まれた、もう誰もいないと思われる事務所へ返却にいった。念には念を入れて、その真っ暗闇に向かって「タベ トゥアン！（こんばんは、トゥアン！）」と言ったところ、「お前、もう終わったのか？」と所長は、その真っ暗闇の中から聞く。「はい、トゥアン！」と伝達係は答える。「全員がもう署名を済ませたか??」。「はい、トゥアン。全員です！」。「トゥリマ カシ（ありがとう）」。「トゥリマ カシ ヤ！！（ありがとう）」³⁷ と所長は言う。「クンバリ、トゥアン（どういたしまして、所長様）」と伝達係は返事をし、そして暗闇の中に姿を消す。

³⁶ ここでは浴槽に入るのではなく、桶にくんだ水をかぶる、と理解される。

³⁷ 「ご苦労さん」という気持ちを込めた表現。

フォスカールー リムボーフ

1944年12月14日

所長はヤウストウラさんに対して、「病院には、かつて雲母の剥離^{はくり}作業をした人がまだいる」と言った。「はい、トゥアン。恐らくそうです」とヤウストウラさんは気力なく返事をした。所長は次に「赤痢病棟には何人いるか」と質問した。「何人の赤痢患者がいるか？」とヤウストウラさんは聞いた。「いや、そうではなく、赤痢病棟には今までに雲母の剥離作業をした者が何人いるか」と所長は刺々しく言った。「それは、私には分かりません」とヤウストウラさんは答えた。「それでは、誰が知っているのだ」と所長は続けた。「そのことを、正確に知っている者はいません」。「それに関する名簿はありません」とヤウストウラさんは言った。「忌々しい、『アクサマ（あつ、貴様！）』。お前は収容所リーダーであるにもかかわらず、こんなことも分かっていないのか？ お前は、収容所リーダーであるのに、問題を処理することも知らないのか？？」と所長は怒鳴った。

ヤウストウラさんは自分の事務所へ向かった。伝達係がヤウストウラさんにまだ何かできることがあるかと尋ねると、彼女は意気消沈して「いいえ、食事に行きなさい！！」と答えた。伝達係はできる限り急いで食事を済ませた。そして、また直ぐに事務所へ戻っていったが、ヤウストウラさんは既に彼女の棟に帰った後であった。伝達係は、ヤウストウラさんが、P（パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル）さんと話をしている最中のところへ来てしまった。ヤウストウラさんは邪魔されたくない、と伝達係に素っ気無く言った。暫くして、P（パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル）さんは立ち去った。そして、ヤウストウラさんが、伝達係には用事がないと言ったので、伝達係はP（パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル）さんと一緒に行こうと思った。ところが伝達係は考えを変え、ヤウストウラさんに「何か困ったことがあったのではないかと尋ねた。「ええ」とヤウストウラさんは答えた。「たった今、私はいくつか不愉快なことを聞きました。そして、もうじきリーダー会議が行われます」と言葉不足した。「もう行きなさい」とヤウストウラさんはまた弱々しく言った。そして伝達係は突然、P（パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル）さんがヤウストウラさんの収容所リーダーとしての失脚について通知しており、午後の会議は役職問題であろうと理解した。何と、やはりその解任問題となった！！！！ 神父と牧師も同様にその場に呼ばれた。神父は、「ヤウストウラさんを1週間、キャッサバ菜園へ休暇に行かせては！」とこの問題の解決策を出した。ヤマジは、これは良いと思った。そして彼女が収容所リーダーとして、また復帰することを希望するかどうかについては、その決定をヤウストウラさん自身に委ねた。しかし、他の理由から彼は、山から見下ろすように、些細なバラック内の諸問題には干渉せず、それらのことはバラック主任たちに一任させなければならなかったのだ！ 常にみんなを宥^{なだ}めるのでもない。口論しないように、時には彼女たちの思い通りにさせ、混乱が起こったとしても、このようなことは成り行きに任せるのだ、と言った。ヤウストウラさんは、そのような方法で収容所を運営できるだろうということ、それにより所長は不要であるということ、所長に請け合

わなければならなかった。しかし、現状のようでは、所長は辞めることはできなかった！！ そしてヤウストウラさんは、神父と牧師にも助言を求めなければならなかった。彼らは男性であり、また、まるで山の上に立っていたかのように、上方から見守ることができたのである。所長は、それは支配することでなければならなかった、と言った。「日本のことわざー スプレティ バウ アイル (水のように匂う)。支配というものは水のようなものだ。それは匂わないうが、そこにあることは誰でも分っているのだ」と言った。ヤウストウラさんがキャッサバ菜園に行くその週は、P (パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル) さんが代理を務めるが、あたかも、それは今後ずっと続く交代であるかのように見える。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月26日

またしても連絡簿の歴史に残る画期的な出来事。本日より、所長が最初に連絡簿を見なければならぬ。所長が彼の承認印を下の方に押してから、漸く伝達が許される。伝達係がヤウストウラさんに「これからは、所長はどの伝達事項にも彼の承認印を押したいということで、私たちは以前ほど容易には連絡簿を貰えない」と言うと、ヤウストウラさんは『**けれども私たちは順応致します！！**』。そうです、私たちは、そうしますとも。私たちはヤップなんかには『**負かされる**』ものですか」と冷静に言った。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月31日

動揺。本日『パレの第二マンドール (人夫頭)』からカンピリのニョニヤ マンドール (女性人夫頭) あてに書かれた一枚の郵便葉書が、所長により命令伝達簿の中で公表された。その葉書には、パレで亡くなった34名の方々の名前が挙げられ、その多くは神父様であった。

所長からの命令は、^{なかなずく}就中、彼の指示に従わない者は5回棒で叩かれる、というものであった！！ Lさんは第6棟のバラック主任としての仕事から、さらに教育担当の役割からも解かれ、1月1日から^{とうみ}唐箕係である。ヤウストウラさんは、第6棟のバラック主任及び収容所リーダーとして指名された。10時30分の時点では、この状況はまだ同じであった。

伝達係が11時半に事務所に来たとき、所長は狂ったように歩き回っていた。ヤウストウラさんは収容所の代表として、「祝賀会を開催する必要はないのでは？」と所長に尋ねるために来ていた。悲嘆なことがあり過ぎた。所長はひどく立腹して「その悲しみに沈む女性たちは、自分たち自身で対処すれば良い」と答えた。しかし、所長は命令伝達簿に「1月1日、月曜日、祝賀会は中止。通常勤務日」と記させた。すべての祝賀会用の特配食品は、豚の飼料

に当てられる。伝達係がヤウストウラさんとちょっと別に話をしたとき、伝達係は「収容所の全員が、この決定で貴女に気を悪くしている。しかし、貴女がもし祝賀会を開催させるようにしたとしても、みんなは『また貴女に』腹を立てたでしょう」と言った。ヤウストウラさんは「それは分かっています。私は今、他の人の犠牲になっているのです。私は昨晚、所長に私の辞任を申し出ましたが、彼はそれを受け入れませんでした。所長は私に自分自身のことではなく、収容所のことを考えるべきであると言います」と話した。その朝さらに時間が経って、養豚班長Hさんが「一体全体また何が起きているのですか？」と尋ねた。「なぜ」と伝達係は聞いた。「実は、所長は私を呼ばせ、ヤウストウラさんのこと、そして私が彼女とした話について執拗しつように聞いたのです」とHさんは言った。「それが何か特別なことだったのですか」と伝達係は尋ねた。「いいえ、そうではありません。どれもこれも個人的なことばかりなのです」とHさんは答えた。第6棟に沿って来たとき、伝達係はまだ何か他にも特別なことがあったかどうか尋ねるため、さらにヤウストウラさんの所へ行った！！「ええ。今、起こったことで、所長は私を解任しました」と言った。「どんな風だったのですか」と伝達係は聞いた。「そう、所長は中に、私は外に立っていました。それから私は所長に呼ばれました。『お前は、ここでもうこれ以上勤務する必要はない。お前の棟に帰れ』と怒鳴ったのです。私は事務所をあるがままの状態、そこから立ち去りました」とヤウストウラさんは言葉を閉じた。

その後、所長は神父と牧師を呼びつけた。そしてヤウストウラさんが彼らに、祝賀会を開催するか否かについて、彼らの見解を求めていたかどうかを尋ねた。彼らは、そのことについて何も知らず「いいえ」と答えた。所長は「しかし、彼女はそのことを収容所一同の代表として質問をしたにもかかわらず、殆ど誰もそのことについて知らない。それでは彼女は、それを質問する前に、勤務班長たちの意向を聞かなければならなかったのだ！」と言った。所長は、祝賀会に関する計画を立てなければならなかったその同じ勤務班長たち、さらにV（ファルダーポルトゥ）さんをも含めて、会議を持つよう集合させた。それからファルダーポルトゥさんは、祝賀会を開催しないことについて、彼女たちの意見が求められていたか否か、一人一人に尋ねた。[いいえ]。誰の意見も求められていなかった。それからヤウストウラさんは、中に入らなければならなかった。そして所長からヤウストウラさんに、次のように告げられた。第一に、ヤウストウラさんは収容所リーダーから解任され、雲母剥離班長となる。そして第13棟に移動しなければならない。第二に、V（ファルダーポルトゥ）さんが収容所リーダーとなる。第三に、ヤンス・Lさんは、第6棟のバラック主任になる。第四に、祝賀会は実施される。それからヤウストウラさんは立ち去ってよかった。所長の事務所の壁に掛けられたヤウストウラさんの名札には、制裁を受けるべきものとして『赤線』が付けられた。これが、彼女への感謝である！一年半の間、収容所のために心身ともに犠牲にしたというのに。

フォスカールー リムボーフ

1945年1月2日

10時に所長はバラック主任、集合バラックリーダー及び勤務班長たちを集合させた。所長は外で一人のクーリーを罰として叩いていたため、この集まりに少し遅れてやって来た。その男は、明らかに水で薄め過ぎたミルクと、何らかの関係を持っていたのである。それから所長は中に入ってきて、いつも外出から戻ると直ぐするように手を洗いにいった。そして50名もの人たちを目の前に見て「アパ（何と、まあ）」と驚いたかのように言った。それから所長は、奥の部屋は狭いので全員表ベランダに来るように促し、一同その通りにした。そして所長は、特に呼ばれたヤウストゥラさんを含む出席者たちに、今後は異なる方法で運営される、と通知した。

班長たちは、今後は命令を履行することに関しての責任を課せられる。彼女たちが理解できないすべての事柄は、『彼（所長）』に質問することができる。しかし、一度理解したのであれば、棟の『内外』を問わず、それを果たすことに彼女たちは責任があった。さらに所長は、誰でも心にあることは恥じらうことなく、それを発言するように求めた。そして神父が「子供たちは非常に疲れている」と学校の休暇延長を要望した。これは承認され1週間追加された。次に収容所リーダーの問題が取り上げられ、それぞれの意見が求められた。所長は、「ヤウストゥラさんは、なんてかわいそうに！ 彼女は除外されて！ と考えてはならない。しかし、収容所にとって重要なことのみを考えなければならない」と説明した。収容所は、所長がそう言っていたように、我々ニョニヤス（婦人たち）のもので、所長のものではない。私たちは、所長を私たちに好意をもつ一人の友人として、考慮しなければならなかった。

所長は、ヤウストゥラさんはもはや以前と同じではないと思った。また所長が、誰かに罰を与えたかったとき、彼女は『常に』両者の間に介入したので、彼はそれを迷惑なことだと思った。そのことは所長の面子にかかわり、彼を困惑させた。彼女は常に^{かんしょう}緩衝役としての本分を過ぎる勤めをしていた。所長としては、それをして貰いたくなかった。ヤウストゥラさんは、事実疲れていたと言った。以前はAさん、Bさん、Cさんがそれぞれ異なる意見を持っていた場合、互いの意見を熟慮し、3人のうち誰が正当か、を言うことができた。しかし、もはや彼女は、それができなかった！！！！ ヤウストゥラさんが実行したすべてのことにおいて、命令を下した所長は頭として、そして最終決定をしたのは首としての彼女自身であった、と考えたのである。所長は異なる婦人たちの意見を求めた。所長がアメリカ人のDさんに、何回にもわたり意見を聞いたかったことは、顕著なことであった。所長は、彼女が他の国民に属していたことで『離れた立場』にあった、と言った。そして所長はDさんから是非とも意見を聞いたかった。Dさんは、彼女の棟には6つの異なる人種がいたが、既にずいぶん長い間その人たちと生活を共にしているため、彼女たちの悲しみや喜びの感情を推し量ることができる。また彼女は、できればヤウストゥラさんに収容所リーダーとして戻ってほしい、と皆が思っていることを既に知っていた、と答えた。アンス・Hさんは、収容所全体がヤウストゥラさんに収

容所リーダーであって欲しいと思っている、と言った。それからV（ファルダーポルトゥ）さんが発言した。彼女がリーダーの立場から離れていた半年間に、彼女は「マリノキャンプ」について多くのことを知ることができた。今なら、おそらく以前とは異なる方法で、対処し考慮することができると思う。「マリノキャンプ」の大多数と「アンボンキャンプ」の半数は、新しい棟々へ移動した。従って「アンボンキャンプ」と「マリノキャンプ」をこれ以上、区別する必要はないのである。彼女がリーダーに選ばれたならば、彼女は一個人ではなく抑留者の一員として、それを引き受けるであろう。私たちは、それで所長と協力しなければならないこと、また、所長を友人として考慮することを考えなければならなかった。私たちの女王様は、ドイツ軍の占領が始まったとき、国民にラジオを通じて「各人の義務を果たしなさい」とおっしゃった。そして私たちは、ここでも、それを実行しなければならない。そしてその義務を実行しない人たちがいたとしたならば、彼女は所長に報告することをためらうことはないのである。なぜならば、その人たちは、罰を受けるに値するからである。ヤウストゥラさんは現在まで、たった一つの矯正手段をも持たずに、すべてのことを運営しなければならなかった。しかし、最早それは変わったのだ、とV（ファルダーポルトゥ）さんは言った。次に、炊事班長が話を始めた。「所長様、貴方は諸々の対策を講じられました。私たちは反対し、結局は理解したそれらのことは適切でした。例えば、赤痢患者を収容所の外部に移動、日曜日には整理整頓のため働いたこと等など、私たちは後になって、やっと貴方の対策が良かったことを悟りました。そして今、ヤウストゥラさんは疲れているので、役職を辞めなければならない、と貴方は言います。そして『**貴方**』はV（ファルダーポルトゥ）さんが運営に当たる、とおっしゃいます。『**貴方**』は常に、収容所の『**ために**』なることを示してこられた訳ですので、私はそれに賛成いたします」。それから、P（パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル）さんがヤウストゥラさんは雲母剥離班長ではなく、フランス語の教師になることを許されるかどうか尋ねた。所長はそれを承知した。さらに所長は、収容所業務に関してヤウストゥラさんは熟知しているので、V（ファルダーポルトゥ）さんの相談役になるべきであると言った。その時Aさんが、そうなると今後はV（ファルダーポルトゥ）さんと同様、ヤウストゥラさんとも話し合いをしてもよいか質問した。これは猛烈に反駁された。「それはいけない。二人を仲たがいさせてはならない」。V（ファルダーポルトゥ）さんは『**収容所リーダー**』であり、ヤウストゥラさんは棟の業務について助言を与える、ということである。さらに所長は、2、3ヶ月毎にリーダーを交替させ、普通の人たちをその役割に参加させることで、彼女たちの視野が広げられることは良いことである、と思っているようであった。その会議は10時15分から1時15分まで続いたため、誰もが疲れ果てて戻ってきた。

シャボットウー コートウマン

1945年1月4日

カンピリ内部政策のいくつかの実例ー 2、3週間前『パー』(所長)は、かなり予想外なことに、私たちの収容所リーダー(15ヶ月前から)のヤウストウラさんを解任しました。所長は3名の集合バラックリーダーと3名の男性(医師、牧師、神父)を「ラキ ライン ピキラン ダリ プレムプアン(男性は女性とは異なる考え方をする)！」として呼び集め、彼ら全員にヤウストウラさんについての、収容所の見解を尋ねました。実際、誰も反対意見を提起しなかったにもかかわらず、所長は『誰か他の人を希望』していたことが明白でした。所長によると、ヤウストウラさんは私たちの不従順を言い繕うことに『トゥルラル ピンタール(賢すぎる)』というものでした。理由は恐らく、これ以上のことのようにです。現在、勤務に関連するすべての班は適切に編成されていて、『パー』はあらゆる些細なことに干渉する時間の余裕があるのです。所長の事務所の壁に、800枚の札を取り付けさせました。その一枚一枚に勤労している人の名前が書かれています。病欠者は毎朝、所長に直接、報告されなければなりません。この変化した状況で、ヤウストウラさんは自分自身で決断することに慣れている実践力のあり過ぎる人物でした。現在、新しい作業服、または肌着を作る布地が必要になると、初めに希望する人のトランクの中が点検されます。実際に不足している場合は配給券をもらいます。本人が、それを所長の所へ持参し、所長がそれに捺印してから、やっと希望のものが得られます。数週間前から『パー』もまた、自分の連絡簿を持っています。彼はその中に、各棟のバラック主任と他の人たちのための伝達事項を書かせ、自分で署名をしています。以前はヤウストウラさんのみが、これをしたのです。

ヤウストウラさんの『失脚』から数日後、ヤウストウラさんから『所長の満足を得るように勤務しました』。そして今、キャッサバ菜園にある小家で短い休暇を楽しみました、という知らせが届きました。一週間後、所長はヤウストウラさん呼び戻しました。しかし、彼女は所長のいら立ちを感じ、実際には、もう当分の間リーダーになることを望みませんでした。『パー』は2日、3日すると、彼にとって再びブラット(厄介)になり過ぎるまでは、これについて違った考えをしていました。そして彼女を家に帰しました。そのきっかけは、こんなことでした。11月初めのある日曜日の朝、所長は2人の女性を呼び出しました。彼女たちに(パレパレにいた)夫、子供たち、オランダの家族など、あらゆることについて聞きました。彼女たちはこれが何のためなのか全然分からなかったのですが、ひどく不安になり、夫たちは無事なのか、尋ねるために所長の所へ戻って行きました。所長が夕方、集合バラックリーダーの一人に、両名とも『爆撃』により亡くなった、と話す迄は『いや、何もない』とのことだったのです。ヤップの妻たちであれば、そのようなことは明らかに朝の時点で即座に察していたことでしょう！ 12月の末、パレパレでは更に多くの犠牲者が出ていた、との噂が流れました。しかし、これは1月になってようやく公表されることになるのです。12月30日の夕方、私たちは突然、パレパレの俘虜となった人たちから『マカッサル、12月15日』付の何通かの

短信を受け取りました。手紙が届かなかった数名のパレパレから来た女性たちは、心配の余り所長のところへ行きました。このことは恐らく所長を苛立たせたのです。所長は12月31日に彼の連絡簿に、パレパレで亡くなった合計34名の方々の名前を記入しました。その内の5名は、ここにいる女性たちの配偶者でした。彼女たちは、そのことをまだ知りませんでした。

1月1日のプログラムに、大祝賀会『ラマイ スプルティ スタンプル (遊びに出かけるのと同じくらい楽しい)』(それはまず、クリスマスの時点で行なわれているべきであった)、と記されてありました。そのために『パー』は、特別たくさんのお砂糖、石鹸、豚などを提供していました。これらの死没が知らされた後、ヤウストゥラさんは、この祝賀会は開催しなくてもよいのではないかと尋ねました。『パー』は、それに同意はしたものの、それは単に上辺だけであることがはっきり判り、所長が激怒していることは明白でした。所長は祝賀会用のすべての特配食品を取り戻したのです。その結果『人々』は祝賀会をぜひ開催したいという別の考えを持ち、数人がこれを告げに所長の所へ行くと、彼は会議を開くように集合させました。それは、収容所はこの祝賀会が必要であったこと、またヤウストゥラさんは収容所全体の意見を示したのではなく、彼女の個人的な見解からだったのだということ、所長が説明するため、また私たちが今ヤウストゥラさんは退任すべきだとは思えないのか、と所長が私たちに尋ねるためでした。『そうです。もしトゥアンが、彼女とこれ以上チョコ チョク (お互いにうまくやっていくこと) ができないのであれば、退任した方が良いでしょう』とみんなは思いました。所長は『いや、そうではない』と言いました。それは問題ではなかったのです。これは、私たちの収容所であり、彼女は私たちのリーダーであったのです。所長は、単に外界との連絡だけのためにいたのです。ですから、それは私たち次第だったのです。ヤウストゥラさんは、そのとき幸いに自分で『チャペ (疲労した)』と言うだけの分別があったのです。そして所長は、これが理由であるとは思わなかったにもかかわらず、アンボンの元リーダーをヤウストゥラさんの後任として指名しました。これは疑いもなく、やや説得力に欠ける人物で、この人も同様にそう長くは続かないはずで、なぜならば、一年以上も前に所長は彼女を『ピンタール ブス (悪賢い)』として解任していたのです！

フォスカウルー リムボーフ

1945年1月17日

昨日の所長からの命令は、正当な理由があり大騒ぎとなった。5つの勤務班は、出席率100パーセントでは、一人当たりマグカップ (大型コップ) に2杯の砂糖、90パーセントでは2本の石鹸、80パーセントはマグカップで2杯のカチャン (ピーナッツ) を貰った。また所長は収容所リーダーの事務所で、午前10時から10時30分まで、午後3時30分から4時迄の間、配給券に捺印をすることを連絡簿に記入させた。所長はそのために、部屋の角に書き机をはすに置かせ、今朝、捺印することを既に始めた。

フォスカウルー リムボーフ

1945年2月12日

集合バラックリーダーの問題は緊急となる。ベッツ・Eさんはその役目に関心があり、やりたいと彼女は言う。しかし、さらに熟考の結果、全く不適任と判明する。収容所のためという気持ちからではなく、むしろ彼女自身のためであり、しかも彼女は自分で世話をしきれない2人の子供さえあるのだ。所長は、今度はアンス・Hさんに、2つの集合バラックリーダーになる気持ちがいかと尋ねた。アンスさんは、それをはっきり断った。それから所長は、用地整備班の班長となる他の人を探し、マウス・Dさんに聞いてみたが、彼女は希望しなかった。

これらすべてにおいて顕著なことは、所長の行動に踏み切れない態度である。もう以前のように命令を出さず、忠告をするだけにし、何の強硬手段も取らないのである。そのような例として、命令では、消燈！ 毎晩、所長は集合バラックリーダーたちから、この義務づけられたことが、ますます守られなくなっている、と指摘を受ける。所長の返事は「それにしても今は雨期、構わない！！」。所長は、彼の月間予定表に、2月12日炊事場検査と記入したものの、それを実行しなかった！！ 今、バラック主任たちは「所長自身いずれの計画も、実行していなかったので、私たちも同じように手抜きをする」と言っている。そのことは集合バラックリーダーたちにとって、仕事をさらに難しくしている。ところが、そこへ今朝予告された検査が、なんと突然実施される。『本当に』行われる。アンス・Hさんとヤンス・Lさんは、彼女たちの普段の前掛をはずしてワンピースを、マルセイユ医師は彼の白衣を着用しなければならない。そして彼らはV（ファルダーポルトウ）さん、そして所長と共に共同炊事場へ向かった。そこで所長は爪の検査をし、評価の点数を与えた。共同炊事場は4点、新集合バラック8点、養豚場4点、特別食用炊事場4点、集合バラックBは7点、そして集合バラックAは7点半。しかし、集合バラックAとBでは、所長が爪の検査をすることを素早く知らされており、短くきれいであるように用意しておくことができたのである！！

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月5日

昨日、4時15分前にグダンインスペクティ（倉庫検査）が開始された。所長は3時に予告をし、アンボン小家屋より、グダンス（倉庫）のみならず浴室も点検を始めた。伝達係がそのことを迅速に至る所に通知したが、なんと半時間後にはアンスさんが「『終了』。来週また続行」と言いに来た。所長は、すべてをなお一層『軍隊らしく』したいと思っている。倉庫班長は倉庫の前に、他の班長たちも同様に家またはバラックの棟の前で、気を付けの姿勢で立たなければならない。また、倉庫の中には古いトランクや竹などの廃品を放置してはならない。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月21日

点呼は、既に長期間にわたり殆ど実施されず、それは例外となった。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月23日

午後また騒ぎがあった。初めに、既に3ヶ月になる特別食用炊事班長のヴィル・SさんがV（ファルダーポトウ）さんに話したところでは、所長は今朝ヴィルさんに、たいへん疲れて青ざめた顔色をしていた、と言った。それから、特別食用炊事場での仕事が、彼女にとって厳しくなり過ぎたのではないか、あるいは、ちょっと休暇を取りたいのではないか??と聞いた。「いいえ」と彼女は答えた。彼女は疲れてはいなかった。また仕事が辛くなり過ぎたのでもなかった。今、彼女はV（ファルダーポトウ）さんから、これが東洋人の解任表明の作法であること、そして前回、班長であった看護婦のドゥ・Jさんが彼女の後任を勤めることになる、と偶然聞いた。ヴィルさんはそれを公平に受けとめ、夜、所長の所へ行き彼女の辞任を表明した。しかし、どのような誤りをしていたのか、直ちに尋ねた。所長は、そうではなく、彼女はまだ若過ぎたこと、また特別食炊事班長はずっと年長で、もっと押しがきく者であるべきである、と話した。彼女の辞表は受理された。いつから実施されるかについては、彼女は必ず連絡を受ける。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月24日

昨日は、所長がまた活発な一日であった。ベレミィさんは所長の所に来なければならなかった。「お前、今やっていることは気に入っているか」とヤマジは聞いた。「はい、所長様」。「気に入っています。とても気に入っています!!」というのが、ベレミィさんの返事であった。「そんなに、気に入る必要はもうないのだ」。それからヤマジは「お前は、家事の手伝いをしなければならない。あつ、そうだ。そして今後は、夜10時15分前に、鐘を鳴らさなければならない」と言った。「承知しました、トゥアン」。「私は鐘を何回鳴らさなければならないのですか??」とベレミィさんは聞いた。「子供たちが、それで目を覚ましてはいけないので、長すぎないように!!」と所長は答えた。それで彼女は、毎晩鐘を連続5回鳴らした。しかし、十分に響き互らなかつたため、これからは5連打を2回することになった。それにより、集合バラックリーダーたちは、今後はその時間に口笛を吹く必要はなくなった。

さらに所長は、ヴィルさん、V（ファルダーポートゥ）さん、それと共同炊事班長と長いこと話をしていた。そしてヴィルさんは、野菜搬入班長の役割が勧められた。これは嫌な仕事で、野菜を配達するファン・Dさんと、野菜を準備する炊事班長との間の緩衝役である。ヴィルさんはこの仕事を断り、Fさんが今度それになるはずである。その次にヴィルさんには、給水班長の役割が勧められた。ファン・Sさんは血圧が高くなったことで、この役割を継続できなくなったのである。ヴィルさんは、人々が各々義務づけられたとおりにバケツの水を共同炊事場に運んだかどうか、を点検するこの仕事に関心がなかった。彼女は所長の思いやりを得ることにより、また断ることができた。

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月22日

連絡事項「フォスカウルさんは、バラック主任と勤務班長たちが不在のため、連絡が取れないことが頻^{ひんぱん}にある。彼女たちを探しに行くことは、時間の浪費となり、フォスカウルさんにとってそれは実行不可能である。そのため連絡事項の受領を許される代理人を指名することが依頼されている。また、この連絡簿を8時30分から9時迄と3時30分から4時迄、事務所内で一覧することができる」。

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月28日

所長は収容所リーダーの事務所で、彼女が他の人と会話中、そこに座りアンスさんに知らせる。V（ファルダーポートゥ）さんは、もはや一人では役目を果たせない。彼女は疲れており間違いを起こしたりする。それで、彼女、アンスさんが収容所第二リーダーとなって、V（ファルダーポートゥ）さんの下に来る気持ちがあるか??と尋ねた。アンスさんは、実際に自分は受けが良くないと思っていたし、今、突然このことを聞いてひどく驚いた!! ひょっとしたら彼女は、そのことを考えたいのか?ああ、彼女はそうしたいのだ。それをV（ファルダーポートゥ）さんに通知することをアンスさんに任せて、ヤマジは立ち去る。V（ファルダーポートゥ）さんは、この敗北を公正に受けとめたが、それは彼女にとってやはりひどく応えた。

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月29日

所長は収容所のためを思い、内閣と同等ほどの全く新しい構成を定める考えを持っている。それでファルダーポルトゥさんは総理大臣、その下にノーアさんが続き、アンスさんと一緒にすべての勤務班長との仲介役となる。そしてファルダーポルトゥさんは内務をそのまま維持する。つまり、それはすべての集合バラックリーダー及びバラック主任との協議である。次に食糧はアンスさん、宗教はヤウストゥラさん、医療業務はM（マルセイユ）医師、スポーツはアンス・ドゥ・B r. さん、娯楽はWさんとファン・d・Mさん、衣料品倉庫はBさん、そして他の内務はノーアさん。しかし、彼女はこの指示された役割に関心がない。

所長は命令伝達簿に発表する。「朝の点呼の際、祖国への敬意のしるしとして、1分間の黙祷が遵守されなければならない。それで、私たちは顔を西の方角に向けなければならない」。所長は、これを厳格に実施するでしょう！！ 所長の口頭による説明は、「それで、お前たちは全員、気を付けの姿勢で立ち、いいかね、そして、ニョニヤ『ボング』（トー・テン・ボーム夫人）がいつもしているように、それがちょうど始まるその瞬間には、『カクス（トイレ）』には行かないこと！！！」であった。所長は、それを笑いながら伝達したにもかかわらず、トーさんは不愉快に感じ、後になって「一体、所長はどうしてそれを知っているのだろうか？？？ 確かに私は、ある時コーヒーを飲み、またある時はトイレにも行く。でも、『どうして所長はそれを知っているのだろうか？？？』」と言った。

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月3日

それは不思議であるが、本当なのだ。ヤマジと長くいればいるほど、ヤップとしてではなく、また単に所長ということでもなく、私たちは所長が一人の人間であることがさらに分かってくるのである。その週のように、所長は高官訪問が間近に迫っていたことから緊張し、「アダダリ スタッフ（参謀によるものなのだ）！ タフ スタッフ（お前は参謀を何だか知っているか）？」と尋ねた例である。ヤマジは、ひどい汗を流しながら高官と散策し、その後、高官と共に教会用バラックに着席した。伝達係は、所長が収容所のことで面目を尽くし、この視察が首尾よく運ばれることを、ヤマジのために願っていた自分自身を知っており、そのように考えているのは、自分一人ではなかったことも知っていた。もし何か不手際なことが起り、収容所長として望ましくない印象を与えてしまうならば、所長のために心から後悔することになるのである。それは、私たちが徐々に彼の中に、人間性を見られるようになっていくことによるものである。過去2年間、彼は西洋人の中のアジア人であると同様に、ここでは収容所長であり、また一人の人間でもあることが分かってきたのである。

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月4日

所長からの命令。「オキーフさんとオルハさんは、ダンスと音楽に完全に専念できるよう、裁縫作業場と用地整備班での、彼女たちそれぞれの役割を免除された」。さらに大臣の名前があげられ、ノーアさんの代わりにGr. さんが、アンスさんの代わりに炊事班長のデン・Hさんが来る。さらに、ノーアさんはキャッサバ菜園のファン・Dさんの下で働くように決められた。なお、この内閣の課題における最終決定は、全然話し合われていないようである。『クパラバトゥ（頑固な）』そして強情なGr. さんは、収容所の人たちと付き合うことは完全に不向きであり、ましてヤマジとうまくやっていくには、なおさら不適任である。さらに監督を全く許容しない炊事班長は、不運にも一日早く、つまり6月1日の金曜日ではなく、5月30日の木曜日に仕事を開始したアンスさんを、役割から除外した。先週アンスさんは、日曜日はスポーツリーダー、月曜日は勤務班長、水曜日には食糧班長に連続して指名された。そして6月1日の金曜日には突然、バラック主任の役割だけにされた。

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月26日

V（ファルダーポートゥ）さんは、まだ病気である。ヤマジは朝「事務所には誰がいるか？」と尋ねた。「ニョニヤ N（N夫人）が、タイプを打つためです」と伝達係は答えた。伝達係は、所長は午後、伝達係が義務を忠実に果たしているかどうかテストするために、きっとV（ファルダーポートゥ）さんの事務所にいると予感した。4時15分前に所長は入ってくる。ヘニイ・Nさんと伝達係は、丁寧に挨拶するが、所長は挨拶を返さない。ところが、所長は伝達係に「あの人、HM夫人を呼べ」と言いつけた。「誰をお呼びしたら宜しいのでしょうか、トゥアン」と伝達係は丁寧に聞き返した。所長は第7棟の方を見ている！「あっ、Gr. さん？」。所長は「そうだ」と言う。伝達係は第7棟へ駆け出す。Gr. さんは不在で、彼女は養豚場にいる。伝達係は速やかに、また事務所へ向かう。所長がちょうどマルセイユ医師にがみがみ言っている最中である。5連打5回、つまり「所長の機嫌に！！ 『要注意！！』」の合図である。「Gr. さんは棟にはおりません。只今、養豚場におります！！」と丁寧に報告した伝達係の方を、所長は怒って見た。「彼女を呼べ」と叫ぶ。「かしこまりました、トゥアン」と答えて、伝達係は養豚場へ向かって走りだした。「パウさん、直ちに所長の所に行かなければなりません！」「行けません」が彼女の返事。「作業の真っ最中ですから、抜けられません。分かるでしょう??」。伝達係は「でも、とにかくそうしなければならないでしょう。所長はとても短気ですから！！」ときっぱり言った。Gr. さんは、急いで手足を洗い伝達係と一緒に行く！ 私たちが来ると、所長はちょうど立ち上がり、Gr. さんがまだ中庭にいるあたり

から「お前、もう各棟にあれを手配したか??」と彼女に向かって怒鳴る。「まだです」とGr.さんの返事。「なぜ、まだなのか。わしが、それをしなければならぬと言ったのだ!!」と所長は叫んだ。「ニョニャ V (ファルダーポートウ夫人) は病気です、トゥアン」。「それは関係ない」と残忍な声で所長は言う。「お前が、それを手配しなければならぬと、わしが言いつけたのだから、それを手配するのだ。ルカス (急げー)」。それから、所長は黙って立ち去った。Gr.さんと伝達係は、興奮が静まるまでちょっと腰掛ける。するとGr.さんは「私、それをしませんよ。それなら所長が私を辞めさせればよいのです」と言う。伝達係は彼女に賛成し「そんな荒々しい取扱いを受けた後、私は所長に『もし貴方が私の仕事にスナン (満足) していないのであれば、私は辞表を出します』と言ったことでしょう」と告げた。Gr.さんは決心し、立ち上がって「私、ファルダーポートウさんの所へ行きます」と言う。Gr.さんが戻ってくると「棟の新しい計画について、5時30分にリーダー会議」という連絡事項がある。すべてのリーダーたちは、この新しい計画に『**反対**』である。会議は、Gr.さん、ティヌ・K1.さん、ヘアミィさんそしてヤンスさんは、所長の所へ行き、バラック第3棟の作業員の人数を14名から18名に増やす依頼をすることを決定する。彼女たちがやって来ると、所長はポストの玄関口に立っていて、Gr.さんが、話し始めようとする、所長は「しゃべるな。退散せよ!!」と激昂する。所長は、彼女たちの目前に握り拳^{こぶし}を振りあげて立っている。彼女たちは逃げ去る!!

日本人による抑留者の取扱い

日記からの抜粋

シャボットウー コートウマン

1943年6月11日

本当にヤップの所長の用心さは徹底的なものです。毎日、病人には氷が用意され、今では毎月アンボングループの女性たちの体重が量られます。昨日、これが初めて行われ、平均体重は52、4キログラムでした！

シャボットウー コートウマン

1943年6月13日

正真正銘の警官で、誰もが怯えているイノは、食事の時間にバラック内を歩きまわり、マリノで秘密に隠しておいた数々の本があるのを見つけたのでした。翌日、私たちは全ての本を（宗教に関する書物は別です）手渡すように、もう一度命令されました。しかし、私たちの親切な所長のおかげで、これら80冊の本は『図書館用』とされ、焼却される代わりに、私たちの手元に残ることになりました。

シャボットウー コートウマン

1943年8月11日

やはり、私たちの健康状態について、彼らは無関心でないことが判ります。今日、2回目の赤痢注射を2本受け、現在もなお、毎月第一日目に体重が量られます。蚊帳用のチュール³⁸も到着しました。

³⁸ 網地の薄布。

コートウン

1943年9月25日

ああ、ああ、また、かなりの感情を整理しなくてはならなかった！ 今日の午後、オリィ・ファン・ドゥリイストゥという15才の女の子で、確かに変わっている子が所長に呼ばれた。なぜなら、所長に言わせると、オリィは決してお辞儀をせず、いつも彼をいらいらさせるからだということだ。しかし、オリィは今度は本当にそれを改めるだろう。彼女は、医者たちの介入が必要になるまで、殴られ蹴飛ばされた。そこらじゅうに青黒いあざができ、出血していた。それにもかかわらず、泣き声一つあげず、涙も流さなかった。所長はこれをとにかく大したものだと思った。夜遅くなって、所長はかっとなって感情にかられてしまったからだと謝りに行った。この出来事に加え、カワットゥ（鉄条網）の所で、抑留者の手紙が入った竹の筒が発見されたことさえ起きていたのだった。クーリーがこの手紙を所長に持って行き、当然のこと、彼はこのことで実にひどく怒っていたのだった。

コートウン

1943年11月8日

再び、収容所にたいへんな大騒ぎが起きた。ご婦人方が寝るとき、電灯を消すのを忘れ、当然のこと所長はそれに気がついたのだ。今朝、彼女たちをカスピタウン（キャッサバ菜園）にあるトゥルンク（牢屋）に閉じ込め、彼は次のメモを各棟に回覧した。

抑留者各位。今晚、数人の女性たちが電灯を消すことを怠った。その為、一ヶ月の監禁という罰を受ける。一日に一回（午後12時）食事、週に一回入浴、午前7時に便所に行くことを許可する。彼女たちのように収容所全体に危険を及ぼす者は、誰でも、このように処罰されるであろう。

彼女たちは全員で9名、私たちの棟のムールニッケルさんもその中に入っている。もう年配の婦人だが、元気良く、他の人たちと一緒にキャッサバ菜園に行った。

コートウン

1943年12月4日

劇的な事件。フラワーヴェロットゥさんは今日の午後、医者たちのところへ行かなければならなかった。彼女はちょうど交番の前にいたその時、お米などを積んだ車が到着し、所長は彼女に積み荷を下ろす手伝いをするように呼びかけた。フラワーヴェロットゥさんは医者に行かなければなりませんし、実際には既に医者の方にいなければならないのですと言った。「積み荷を下

ろせ」と所長は叫んだ。その時、フラージェロットゥさんは腕の調子が悪いので、お手伝いできませんと答えた。確かにそれは本当で、彼女は重いものを持ち上げることもできない。昔、腕の手術を受けたこともあるが、所長はそれを信じもせず、腹を立てた。特に、彼女がクーリーの居る所で、彼に口答えしたからだ。所長はフラージェロットゥさん、そして同じように積み荷下ろしを断ったドゥ・フラーフさんも交番へ引きずった。彼のこん棒が出てくる番である。12回目をたたく時に、彼はフラージェロットゥさんの腎臓をぶち始め、それから彼女は悲鳴を上げだしたのだ。

安息時間中だった為、誰もまだ少しもこのことに気が付かなかった。バラック第12棟にいる私たちは悲鳴を聞くやいなや、すぐに『フラージェロットゥさんだ』と叫び、食堂へ飛んで行った。私たちはちょうどヤウストゥラさんが司令所の中へ走るのを見た。それから問題はすぐに片付いた。フラージェロットゥさんは診療所へ運ばれた。至る所出血し、洋服は完全にずたずたになるまで叩かれ、布の一部は肉へ深く食い込んでいた。それは恐ろしい光景だった。皆はすっかり取り乱したドゥ・フラーフさんと二人の子供たちを直ぐにベッドに入れることができた。一時間後に、フラージェロットゥさんは自分の棟に運ばれたが、横になることも、座ることも、つまり何をする事もできない。

コートウン

1944年1月3日

収容所には、本当にいつでもまぬけ者がいるものだ。さて、今晚、ある婦人が日記の一部を皆の前で、それも大声で、しかも食堂で読み上げるとは。もちろん、誰か、あるスパイ（抑留者）がそれを耳にし、所長に告げ口をした。彼はかんかんになって怒り、その婦人の所に行った。その人は数回かなりのピンタを受け、彼女の日記は全て取り上げられた。今度はこれを全部、所長に聞かせなければならない。なぜなら、日記には何か大事なことが書かれてあると彼が考えるからだ。くだらない事なら彼女は読み上げないだろうというのが所長の推論だった。彼女はの間ずっと小家屋に閉じ込められた。今では、日記をつけることは極度に厳しく禁止され、さらに、もう何のクンプラン（集会）も開いてはならない。

フォスカールー リムボーフ

1944年5月12日

1944年5月12日金曜日は恐怖がテーマの日である。ゲシュタポ（日本軍の憲兵隊）がツアーリングカーでやって来て、ここから4人の女性たちを連れて行った。所長は、皆が全棟から立って眺めているのを見た時、激怒した。彼は荒々しい動きで、皆に立ち去るように合図した。

皆は好奇心にせきたたれ、去らなかった。女性たちを乗せた車が走り去った時、全員手を振った！！ それから、所長は司令所の横にある家々のうちの一軒に行き、その家の全員が眺めたという理由で、皆は家から外に追い出された。彼は彼女たちに事務所の前に行って立っていないといけないと言い、後で殴るだろうと告げた。所長は彼女たちを立たせままで、自分はその間キャッサバ菜園に行き、一時間半後、戻って来た。眺めた者は全員、事務所の前に来て立っていないといけないと知らせた。皆はそのようにすると、彼は数人を殴った。

フォスカウルー リムボーフ

1944年6月8日

3人のぶるぶる震えている幼い男の子たちが事務所の前に立っている。年長は8才で、年少は3才である。彼らはクテラ芋（キャッサバ）をキャッサバ菜園から盗み、所長に現行犯で押さえられた。男の子たちは事務所のところで所長を待っていないならなかった。もちろんのこと、彼は直ぐに自転車でやって来る。男の子たちは事務所の中に入らなければならず、年長の少年は、土からクテラ芋を掘ったスコップを持って来なければならない。ほんの少し後で少年が戻って来ると、所長は真剣なままだいるのに一苦労する。なぜならスコップの薄板は大きなスプーンぐらいしかなく、握り柄は30センチメートルの長さもない、太い曲がった枝である。本当に3歳の男の子が容易に扱えるスコップである。男の子たちは少し身震いし、おのき泣きながら、所長の前で気を付けの姿勢をとらなければならない。ティダボレ『ヤットゥ（盗むのオランダ語）』（盗みをしてはいけない）と所長は言った。彼は収容所にいる数人の女性たちから習っているオランダ語のレッスンをここで実践した。彼は定規で男の子たちの額を軽くたたき、直立しろと言って足をぶつ。手を脇に置けと言って手をたたく。彼はまるで少年たちの脳を打ち砕くつもりであるかのように、ミニチュアのスコップを持ち上げるが、最後の瞬間に彼はそれをやめる。全ての出来事により、男の子たちの震えは増大する。それから、デイジィはコップに水を入れて来なければならない。所長は小さなインク棒で、子供たちの額にゼロを描き、洗い流してはならないぞと脅かして言う。男の子たちは泣いて、ぶるぶる震えているが、やはりほっとして自分たちの棟へと姿を消す。

フォスカウルー リムボーフ

1944年7月20日

Sさんはますます奇妙になっていく。彼女は今日もまだキャッサバ菜園で働いた。所長が来るのを見た時、彼の方に走って行き、彼を抱きしめ、足元にひざまずき、「所長さん、我らの神の勝利はそこにあるのです」と叫んだ。ヤマジはこれにびっくりし、涙が出るほどであったと

後で言った。という訳で彼が数人の女性たちの笑い声に極度にいらいらさせられたのも決して無理はなかった。当然のこと、彼は『あっはっは、あっはっは』というトニイの笑い声（ひどくけたたましい大笑い）に特に注意を注いだ。彼はトニイを呼び、直ぐに彼女の棟に戻らなければならないと言った。トニイはきっと後になって罰を受けるであろう。そしてその通り、あとでファン・Dさんと一緒に呼ばれ、何故、笑ったのかと彼はトニイに聞いた。もし誰かが気が狂ってしまったら、どんなに恐ろしいものかと彼女は感じなかったのか？ そのように人が笑えることを彼には理解できなかった。トニイはどうでも良いという態度で立っていたが、ヤウストウラさんはきちんと立つよう優しく熱心に勧めた。トニイがそうしないでいると、所長は火の点いているタバコの吸いさしを彼女の顔に投げた。笑った為の罰として、明日は養豚場に行かなければならない。ファン・Dさんの番がきた時、何故、彼女は笑うことを禁じなかったのか？？ 彼女はクパラ（責任者）ではないのか？ そうではあるが、彼女はどこにでも居られないので、その笑い声が聞こえなかった。『お前はクパラ（責任者）か、それともそうではないのか』とヤマジは言った。これは彼が至る所に干渉しようとする時、ファン・Dさんがヤマジに対してよく使う言葉であった。もし彼女の雑役中に何が周辺に起こったかを全て知らなかった場合には、それなら彼女は責任者として役に立たない。こうして、彼女は解任され、ファン・Dさんとトニイさんは立ち去った。

フォスカウルー リムボーフ

1944年8月12日

通知。所長は私たちと子供たちも、彼にそしてお互いに挨拶をしなければならないことをまた忘れ始めていることに気づいた。合図、用心せよ。彼は腹を立てている。今週のある夕方に、伝達係は連絡簿を戻すために、もう一度事務所に行き、ヤマジが『はーい、はーい』と怒鳴っているのを聞いた。しかしクーリーに対して言っているのだと思い、伝達係は何も見ずに、素早く通り抜けた。ところが、わめき声は止まらず、ついに彼女が振り返って見た時、所長は彼女自身を意味していることが分かった。そして彼は「ニョニャ M (M夫人) を呼べ」と叫び、彼女は言われたようにした。翌日、ヤウストウラさんは「すぐに見なかったのは、誤りでしたよ」と言った。確かにそうだと伝達係は同意し、どんな怒鳴り声でも、とにかくちょっと見てみることを次回からの教訓とみなした。数日後、所長が再びわめいたり、怒鳴ったりしているので、伝達係は即座に見たが、今度は実際にクーリーを意味していた。

フォスカウルー リムボーフ

1944年9月10日

今朝、ヤマジは猛烈な怒りで医者を攻撃した。M（マルセイユ）先生はかろうじて叩かれるのを逃れたが、医者として停職処分された。そして、F（フェインストラ）先生が再び医師の役目を行なわなければならないと、M（マルセイユ）先生は今後、ただ『肥料溜め』が良く機能するようにしなければならないとヤマジは言った。彼は全ての下水溝を肥料溜めに引き、土を起こし、掃除しなければならないと、M（マルセイユ）先生は言った。「はい。しかし、排水が悪いせいではありません」とM（マルセイユ）先生は言った。彼はパイプの中にカーブがあることが原因であり、それは穴のちょうど後ろにあるため、セメントの一部をたたいて開けない限り、誰にも届きませんと付け加えた。しかしヤマジは反論されたので、かっとなった。彼はエルスさんに竹を持って来るようにと叫んだ。そして怒った目つきで、即座に命令に従い始める代わりに、自分自身の意見をあえて言ったM（マルセイユ）先生を睨んだ。ヤウストゥラさんは所長のそばに居て、共同炊事場の井戸などについての色々な質問をし、注意をそらせようとした。有り難いことに、彼は気分を晴らし、井戸に注意を払った。それから、M（マルセイユ）先生は命令を実行し始めることができ、竹が見つかるまで、待ち続けなかった。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月6日

日曜日に13棟へ移った人たちは、今日の午後、急に所長の命令で教会用バラックに移動しなければならないと。彼が説明した理由では、彼女たちがバラックの周りを十分に消毒しなかったためだというのが、後でノーアさんと話して、本当の訳がはっきりした。それは彼が何か命じた時、彼女たちが笑ったことで、それは常に潜伏していた彼の劣等感を刺激するのだった。13棟の人たちは、日中で一番暑い時に、教会用バラックに移らなければならないと。そこは後になって、まるで地獄にいるかのように風が吹きまくり、囲いなどどこにもなく、杭の上には屋根があるだけだった。彼女たちが身を切るような風の中で数時間過ごした後、ノーアは全員が13棟に戻って良いという許しを得た。今後は皆はもっと礼儀正しくしなくてはならないことをしっかり心にとめて置かなければならなかった。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月22日

ヤマジは昨夜、どんどんと増加している赤痢患者への厳しい隔離命令にもかかわらず、まして

その中には非常に深刻なケースもあるのに、4名の婦人たちが道からバラックの中にいた患者たちと話をしていたのを発見した。彼は罰として彼女たちを病院の洗濯部へ送った。

フォスカールー リムボーフ

1944年12月9日

私たちはこの日を再び思い出すでことあろう。今朝、伝達係はヤウストゥラさんから大急ぎで事務所へ来るようにと言われ、赤痢患者の荷物をキャッサバ菜園に運ぶため各棟2名の人たちをよこせという命令を全棟へ直ぐに届けた。昨日は、22人の患者たちがバラックへ戻ることができた。伝達係が事務所に戻って来た時、所長が棒を手にして裏ベランダに座っているのを見た。バラック第1棟のリーダーを呼ばなければならないと彼は叫んだ。伝達係は走り去り、修道院長を呼びに行くと、彼女は本当にびくびくして、直ぐについて行く。伝達係はまだ同じ場所に座っている所長に、修道院長がいらしていますと知らせる。その間に、幸いにも既に歩いてやって来るヤウストゥラさんを注意して見るが、ヤマジは彼女に出て行けと怒鳴り、呼びはしなかったと言い足した。ヤウストゥラさんは修道院長がたぶんヤマジを良く理解できないでしょうと丁重に言う。あっちへ行けと彼は叫ぶが、『ヤウストゥラさんはそこにとどまる』。一瞬、彼は叩こうと脅かすが、それから『あー。よかった。ほっと一息』。彼は修道院長に向かって話し始め、こうして彼はヤウストゥラさんがその話し合いに残ることを黙認した。

それからヤマジは修道女のRさんについて、修道院長を叱りつける。彼女が修道女のRさんをもっと良く教育し、毎日しつけに取り組むべきであったのだと修道院長のせいにする。修道女のRさん、エルスさんとニタさんは看護婦としてきちんと命令に従わなかった為、今後は、共同炊事場で働かなければならない。急に向きを変えて、伝達係に彼女たちを呼んで来い。急げ！！とぶつきらぼうに言う。伝達係はキャッサバ菜園に駆け出し、その3人がそこで今朝、ヤマジにひどく叩かれたことを聞く。修道女のRさんは棒で打たれ、エルスさんは耳のあたりを。そしてニタさんは打たれて地面に倒れ、彼の軍隊靴で胸を蹴飛ばされ、その靴の跡がブラウスに付いた。3人は即座に出て行き、事務所の前に立たなければならず、修道院長も同様であった。ニタさんは胸がひどく痛み、まっすぐに立つことがなかなかできなかった。彼女たちは短く、きつい響きで、あの恐れられている怒り狂った語調で怒鳴られ、共同炊事場のハリハリクルジャ（日常の仕事）に送られた。修道院長は目にいっぱい涙をためてバラックに戻ったが、また呼び出された。その時、彼は修道女のRさんについて修道院長を再び攻撃した。Rさんは彼の命令したことを直ぐに行なわず、その時クーリーたちがその場にいたのだ。という訳で、それは殴る、たたく際によくある状況で、本当は面目の問題であることは明らかだった。

今日の午後は朝と同様、興奮で満ちていた。5時ごろ、Wさんが事務所に来て、厳しく禁止されていたキャッサバ菜園に行ったために、罰として、立っていなければなりませんと

言った。Wさんは何故、そうしたのだろうか？ ここにいる彼女の病気の子供にたいへん必要であるおまるを取りに行ったのだった！ さて、とにかく、所長がいらっしゃるまで座りましょう。後でどのくらい立っていなくてはならないか分かりませんからとヤウストウラさんは言った。彼女が言い終わるか終わらないかのうちに、私たちはヤマジのわめく声を耳にする。彼はいつの間にか来たので、誰も気がつかなかった。彼は棒を持ち、すばやく前の方へ来て「両手を上にあげろ」とWさんに叫び、直ぐにぶち始めるつもりである。ジャンガン ブギトゥ トゥアン（やめて下さい。所長様）とヤウストウラさんは言うが、ヤマジは彼女を脇へ押す。彼は再び棒を高く上げると、ヤウストウラさんは半分泣きながら「ティダ ティダ トゥアン（いけません。いけません。所長様）」と頼む。彼はそれから棒を地面に置き、Wさんに向かってけたたましく、食いつくような口調で、怒鳴り始める。とは言っても、何でもぶたれるよりはましである！ 彼はWさんにどこで働いているかを聞き、即座に仕事を変えなければならない。彼女はファン・Dさんの所のキャッサバ菜園で働き、その上に野菜用荷車を引くのだ。これは雨季には、通常よりもずっと重くなる。それから、Wさんは彼女のバラック主任であるヘアミィ・Nさんと共にバラックに戻ることができる。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月14日

あのような日がもう『一日』あるならば、私は白髪の老人になってしまう！！ そして、今日が本当にその日と言える。集合バラックリーダー、学校の責任者たちなどの集会被開される少し前に、ヤウストウラさんが所長の所に呼ばれた。雲母の一片に何か書かれたことが明らかにされ、ヤウストウラさんは誰がそれをしたのか知ってはいなかったが、彼女は『知らなかった』。雲母工場リーダーのズス・ファン・G（ホーア）さんが呼び出されたが、彼女も誰がやったのか知らなかった。『12時前に』判からなくてはならぬと所長が言った。10時にクリスマス祝いに関する話し合いが行われ、その後、伝達係はその祝いについての連絡を各バラックへ届けた。伝達係が12時に診療所に入ろうとした時、HBS（高等市民学校）の生徒たち全員が、事務所の前に整列して立っているのを見た。その時、生徒たちは彼女に気がついて、「ヤウストウラさんがお呼びです」と叫んだ。伝達係はそこへ駆け出して行くと、所長は彼女に、罰を受けた4名の女性たちが直ちにキャッサバ菜園から来なくてはならないと知らせた。ということは、赤痢（病棟）に行かなければならないのですか？ そうだ。ルカス（急げ）、ルカスー（急げー）！！とヤマジは怒鳴った。はい、トゥアン（所長様）。そして伝達係は『走り去った』。もしかしたらSさんを連れて来ようと、最初にバラック第13棟に行き、それから赤痢病棟に行き、そこで他の二人に警告し、その人たちと戻る途中で、第3棟にいる4番目の人に伝言を届けた。赤痢病棟の二人と一緒に事務所に来た時、Sさんは既にそこに立っていた。もう一人足りないぞと所長が言った。彼女を既に呼びましたから、直ぐに来るで

しょうと伝達係は答えた。そしてそれはその通りであった。4番目が現れた時、そのことが所長に丁重に告げられた。彼女は他の三人の所に立たなければならなかった。それから尋問が始められた。ズス・ファン・G（ホーア）さんは手に持っていた雲母の一片を読み上げた。そこには「この苦しい時期をお助け下さい！ 窮地からお救い下さい！！！」と書かれてあった。お前たちのうちの一人がこれを書いたのだ。いいえ、違いますと4人全員が答えた。もしかしたら誰か他の人が書くのを見ましたか？とヤウストウラさんが尋ねた。いいえと彼女たちは言った。ヤマジは何と答えたのかと聞いた。4人がしたのではありませんとヤウストウラさんは返事をした。いずれにせよ、彼女たちに罪があるのだとヤマジは言った。以前、子供たちはここで気持ち良く働いていたが、この4名が来てから、子供たちの心は『真っ黒』になり、魂は汚れてしまった。彼はそっけなく、痛烈で、ぶっきらぼうな調子で話し、それから腰を下ろし、もうもうとしたタバコの煙を吹き出した。彼は人々が食堂用バラックから立って覗いているのを見た時、アンスに向かってその人たちを連れて来いと言った。二人の女性が来て、4人の女の人たちの後ろに立ち、日にさらされなければならなかった。彼女たちは午後の1時から晩の8時半まで立っていた。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月25日

カンポンス（小村落）の赤痢患者数は日ごとに増え、現在では60から70パーセント増加した。マカッサルの軍人の間では、20から25パーセント増えた。そしてここ収容所では、7パーセント以上になったことはなく、今のところ急速に減っている。これは所長の厳しい対策のおかげである。ある時には少し荒っぽく見えたが、今では効果的だったことがはっきりする。しかし人々がどのようにこれを解釈するのかを知ることは奇妙なものだ。ところである人は、ここでは赤痢患者がとても少ないことを所長は本当に感謝した方が良いと言った。私が考えるには、パーセントで分かるように、『ここ収容所における』彼の対策のおかげで、患者がたいへん少ないことを『私たちこそが』有り難く思うべきだと伝達係は言った。

コートウン

1945年1月14日

これでそれもまた終わった。雲母剥離^{うんもはくり}作業中、突然私たちは全員、司令所に呼び出された。そこには数人のヤップンがいて、ヤマジが不機嫌であることがすぐに分かった。ヤウストウラさんもそこにて、私はこの雰囲気^{うんもはくり}を少しも信用できなかった。ほら、ご覧なさい。どういうことかと言うと、彼らは雲母の入ったクランジャ（かご）の中に、何か書いた跡のある雲母の

一片を発見した。それはつまり、収容所外に対する知らせであったのだろう。考えても見て下さい。たぶん5万もの非常に薄い膜の入ったかごから、彼らはそのうち2, 3個を取り出すのだから!! 張本人は直ぐに申し出なくてはならなかった! 私はその人がぎょっとしたことを想像できるが、誰も何も言わない。ヤマジは怒り狂った! ともかく私たちは太陽の下で、長い間立っていた。その間、ヤウストウラさんとファン・ホーアさんに話しかけられ、時々、ヤマジのどなり声がした。最終的にヤウストウラさんは、二人の女の子が何か非常に罪のないことを書いたのだと日本兵に説得することができた。私たちはおしゃべりをしてはいけないので、お互いに言いたかったことをそのようにして書いたのだった。その後、私たちはお決まりの忠告を受け、退散することができた。

フォスカウルー リムボーフ

1945年2月23日

午後5時半、所長はV（ファルダーポルトゥ）さんに数々の名前を書かせた。それらは夕方7時に彼の所へ食事に行かなくてはならない人たちの名である。その中には、彼女自身とヤウストウラさんが入っている。ヤマジはぬかるみのため、裸足になって走りながら「おれが自分で料理する」と叫ぶ。V（ファルダーポルトゥ）さんは名前を調べていると、ズス・ファン・G（ホーア）さんが入っていないことに気づく。彼女はヤウストウラさんを省き、その代わりにズス・ファン・G（ホーア）さんが行くことを提案し、ヤウストウラさんは次回の食事会に出席できる様に手配すると母親であるかのように付け足して言う。伝達係は「所長がヤウストウラさんの名を挙げたのですから、もちろん彼女が行くべきです」と激しく反対する。V（ファルダーポルトゥ）さんは、それならトーさんにちょっと所長の所へ行って、ズス・ファン・G（ホーア）さんが招かれていないのは、勘違いではないかどうか尋ねてもらおうように言った。その間、所長は共同炊事場へ駆け込んで行った。そこで彼は豚肉を切るのを手伝っている。トーさんが、トゥアン（所長様）、ニョニャ ファン・G（ホーアさん）も行ってよろしいですかと聞いた時、ヤマジは仕事から目を離さずに、「来てもよいぞ。そしておまえもだ!!」と答える。このようにしてトーさんは突然、招待を受けたのだ。それは楽しい食事会だった。ただヤマジは初めは7時に招待したにもかかわらず、後になって、彼女たちを6時半に来させたがった。その結果、招待されなかった伝達係が再び至急伝言を届けることになった。6時半にゲストが来た時、テーブルには2つの石油こんろ・お皿いっぱい盛られた脂肪なしの生の豚肉・カンクン（青野菜）・みずみずしいパイヤ、そしてなまのタマネギが置かれてあった。3人の日本兵たちは順番に特別料理を作っている。熱い平なべから食べものがお皿によせられた。「なんとも言えないほどおいしいです」とゲストたちが言うと、所長は最高の気分になった。彼はご馳走を料理し、代わりがわりに話をしたり、食べたりして、ヤマジのきびしい青年時代の話をした。彼が牛乳配達をしていた際、仕事のないときには勉学した。また時には

金を借りるために、教科書を質に入れなければならなかった。そしてこの収容所の人たちが、家族のいきさつをいっさい知らず、いつか再会できるのかどうか！！について、どのように苦情を言ったか。しかしヤマジもまだ一度も日本から知らせを受けておらず、家族にまた逢えるかどうか何も知らなかった。そうですか。でも戦争後、『彼は』少なくとも生計を立てることができそうですが、私たちはどうすればいいのでしょうか？とノーアが話した。それについてヤンス・Lさんは、戦後、ここオランダ東インドで十分、仕事を探せられるかしら！と言った。その時、所長は他の人たちにノーアについて「彼女はちょっと『ヒステリー』だから」と言った。この言葉は近ごろ彼の口癖になっている。彼は付け加えて述べた。「おれがこの食事会を行なったのは、君たちが楽しんで、一生懸命働いてくれることを願っているからだ。招かれなかった女性たちは、気を悪くしないように。次回には、また他の人たちを招待するだろう！！」

フォスカウル — リムボーフ

1945年3月7日

収容所のうわさ — 男性たちは近辺にある島に船で連れて行かれた。第二のうわさ — その船は水雷で攻撃された！！

フォスカウル — リムボーフ

1945年3月11日

所長はアンスさんと呼び、誰がうわさを流したのか？と尋ねた。アンスさんは知らなかった！それならば誰がそれについて話したのか？ ああ、たくさんの人たちです。後でアンスさんはそのうちの数人の名前を挙げ、それから、Sさんが所長の所に行き、うわさは本当ではないと彼が言ったことを聞いたと付け足した。所長はV（ファルダーポルトゥ）さんが鍵を持っている正面口を通して、事務所の中に入りたい。伝達係はこのことを所長に言い、『裏口なら』開いていますと大声で言う。しかしヤマジはよりによって正面口から中に入りたがる。という訳で、伝達係はその鍵を取りに行かなければならない。ルカスー（急げー）と彼は伝達係にしつという音を立てた。「はい、トゥアン（所長様）」。そして少ししてから、伝達係が鍵を持って戻って来ると、ヤマジの自転車は裁縫作業場に置かれあり、彼は中に入っていた。しばらく後で、彼はV（ファルダーポルトゥ）さんの事務所に来て、伝達係はSさんと呼ばなくてはならない。その後、バラック第5棟のV. d. M. さんも呼ばれなければならない。この人たちは各自別々に聞きただされた。そのあとV. d. M. さんは棟に戻ることができ、アネチウ・Hさんと呼んで来なければならない。彼女が中に入ると、所長は非常に丁寧に「椅子に座りなさい。腰をかけなさい」と言い、煙草をすすめ、誰からそのうわさを耳にしたのかとアネチウ・

Hさんに尋ねる。「それは私には答えられません。私はその噂を聞いて、Sさんに本当かどうかききました。そして、Sさんは何も本当ではないですと言いました」と彼女は答える。Sさんがもう一度、中に呼ばれ、アネチウ・Hさんは再び同じことを話さなければならない。それから、ヤマジはSさんに向かって激怒する。「おまえは立っている。2週間前におれの所に来て、おまえの子供に英語を教えるのも良いかどうかだけを尋ねた。おれが食事を済ませた後、おまえが来たのだ。そしておれは、ファン・Vに聞いてみると答えただけだった。おれはつい今朝この噂を聞き、これが正しいかを問うために、すぐにマッカサルに行ったが、噂はナンセンスなのだ。おまえは悪い奴だとSさんを怒鳴りつけた。彼女は泣き始めた。「抑留者たちの中にいる混血人（印欧人）は他の者たちに悪い影響を与える。おれは女性たちの面倒を見るためにここにいるのだ。ニョニヤス（婦人たち）に厄介な目に遭わせるな。おまえは裁縫作業場で働いてはならぬ。ブラス（殻をむいた米）をふるいにかけるか、米でも製粉しろ」。その時アンスは、Sさんはお米を炊いても良いですか？と尋ねた。ヤマジは「だめだ。だめだ。あそこにはたくさんのニョニヤス（婦人たち）がいる。その中に入ってはならない」と答えた。それからSさんは自分の棟に戻らなければならない。そして仕事に行く時だけは外に行ってもかまわないが、晩には棟から出てはならない。Sさんが挨拶もしないで去ろうとした時、ヤマジは怒り狂って彼女を呼び戻して言った。アンスさんを指差して「最初に『年配者』に挨拶をするのだ」。そしてもう一度、彼女の新しい仕事について怒りながら話し、その後、いかめしい顔をして「出て行け!!!」と怒鳴った。

コートウン

1945年3月23日

男の子たちは『討伐遠征』から戻って来た。所長は数人をマンゴの木の下で捕まえ、怒って少年たち全一団を持ち場に整列させた。それから解散し、駆け足で収容所を出て行った。所長は手に籐のむちを持ち、自転車で後ろについて行く。列からはずれたり、遅れたものはむちで打たれた。今では男の子たちは賢くなり、初めのころからゆっくりと歩き始めたが、少し経つと、やはり次々とむちで打たれた。突然、一人の男の子が大きな泣き声をたて、地面に倒れた。そして、それから何が起きたのか？日本人とは不可解なものだ！所長は自転車から降りて、『座れ！』と命令した。皆が疲れ切って、慌てて、不安そうに座ろうとしている間に、所長はちょっと男の子の頭をなでて、冗談を言い、自分も座った。15分の休憩後、全員、歩いて戻った。その男の子はヤマジの自転車の後ろに座ったのだった！！

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月25日

所長の態度により、考えさせられた。所長はノーアさんに、戦争が終わるまで、グダン（倉庫）の班長として勤めないかどうかと尋ねた。そして彼がこれを聞いたその口調は、戦争の終わりがそれほど遠くないのではないかという印象を与える。昨夜、家の裏で仕事をしていたV（ファルダーポートゥ）さんの所に誰かが来る。警告。「所長が前にいらし、話があるので貴女にちょっと時間があるかどうか聞いています」。V（ファルダーポートゥ）さんが家の前に来た時、所長はもう一度とても丁寧に「時間がありますか??」と尋ねた。こんなことは、一年前には想像にも及ばないことであった。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月4日

地元の警官が昨日所長に、カスビ（キャッサバ）^{ひとやま}一山が牧場の木に隠されいたと報告した。修道女のTh.さんが呼ばれ、誰がそれをしたのかを探し出さなければならなかった。その時刻には二人の少年しかいなかったため、それはかなり容易であった。それから、その二人は事務所に行かなければならなかった。それはヘンキィ・W君とルディ・M君であった。所長は少年たちの前にたいへんきびしい顔をして座り、証拠物件として置いてあったキャッサバを指差しながら、誰が盗んだのだと聞いた。僕ですとルディ君が言った。お前たち二人でやったのか？ はいと二人は答えた。地元の警官が、ヨーロッパの少年たちがキャッサバを盗んだと知らせに来た。お前たちはその警官に対し、恥ずかしく思わないのか？ おれ自身当惑したとヤマジは言った。さて、地元の人たちはヨーロッパ人についてどのように考えるだろうか？ なぜ、盗みをしたのだとヤマジは聞いた。何の返事もない。お前たちはそれを炒めるつもりだったのか？ と尋ねると、はい、そうですと二人は答えた。どこでだ？ バラックの炊事場ですと二人が言った。いつキャッサバを盗んだのだ？ 僕たちが牛用のキャッサバの葉っぱを取りに行かなければならなかった時です。それから、ヤマジはルディ君に「おまえは悪い子だ。以前、既に禁止された手紙をパレパレに送るつもりだったろう」と言った。違いますとルディ君はびっくりして返事をした。確かにそうだ。おれはまだそのことをはっきり覚えていると所長は言い返した。これでこの件に関する話し合いは中止となった。二人の罰は、牛や豚小屋で働き、その後はキャッサバ菜園のファン・Dさんのところで働くことだった。「なぜかという、お前たちはそれほどキャッサバが好きだからだ」。ヤマジは立ち上がり、「お前たちは明日からすぐ新しい仕事につくのだ」と言った。バイクトゥアン（分かりました。所長様）とV（ファルダーポートゥ）さんは喜んで言った。それは今回ヤマジが彼女に賛成したからだ。しかし夕方、ヘンキィ君は母親と一緒に所長の所へ行き、本当は彼が一人でやり、ルディ君は打たれる

のを恐れて、話す勇気がなかったのだと話した。修道女のTh.さんはすべてを目撃したが、禁じなかった。ヘンキ君はアンブン（許し）を請い、許しを受けたのだと話した。

私たちは皆、この盗難事件がこのように手ぬるく終わって残念に思った。というのは、この頃、非常にたくさんのものが盗まれるので、厳しい罰があれば、見せしめの効果が上がったであろう。

フォスカールー リムボーフ

1945年4月9日

午後、再び『テイリップ』騒動が起った。収容所リーダーの事務所は5時まで全て静かだった。その時、所長が歩いて来て、私たちがまだ彼を目にする前に、ニョニヤ コスター（コスターさん）！！と彼が叫ぶのを聞いた。彼女は、はい。何ですか、トゥアン（所長様）??と答える。ニョニヤ テイリップ（テイリップさん）を呼び、教会用バラックに長いすを並べなければならないニョニヤ ファン・G（ファン・Gさん）も呼び寄せろ。伝達係は初めにテイリップさんの所に行き、伝達係が司令所を通りかかった時、彼女が戸口の踏み段に座っているのを見た。伝達係はテイリップさんに所長の所へ来るようにという命令を伝えた。私はまた何をしたというのでしょうかと彼女は言った。私は知りません。貴女は心当たりはないのですかと伝達係は尋ねた。裏切り者がヤマジに言いつけることを、どうやって分かると思いますか？それには第六感が必要で、そんなもの私にはありませんよとテイリップさんは高慢に！！答えた。伝達係はテイリップさんが「最初に、ちょっと特別食用炊事場へ行くわ。娘のエルスに知らせるわ」と言うまで、彼女と一緒に歩いた。「おやめなさいよ。長く待たせば待たすほど、所長はもっと怒りますよ」と伝達係は言って、一緒に行き、収容所リーダーの事務所に入った時、収容所リーダーは立ち上がって言った。「テイリップさん、所長が呼びです。何の用事か私は知りません。お座り下さい」。そして、収容所リーダーは彼女に所長の事務機の反対側にある椅子をすすめた。めがねを取れとヤマジは乱暴な口調で言った。テイリップさんはめがねをはずした！おまえはまた、もめごとを起こしたな？と彼は怒鳴った。すると、いいえ、違います。トゥアン（所長様）と彼女は返事をした。おまえは年配の人たちに迷惑をかけるのだ！！と彼は言った。あの人を呼んで来いと彼は伝達係に命じた。彼女はそれがテイリップさんの同居人を意味することだと分かり、ドゥ・Hさんと呼ばせに行った。彼女が入って来た時、テイリップさんの腰掛けていた椅子に座らなければならず、テイリップさんは立たなくてはならなかった。なぜなら、おまえはドゥ・Hさんより若いからだというのが所長の理由であった。それから、ドゥ・Hさんが話を始めた。テイリップさんは日曜日の朝いつものように3人組のオルハさん、キティさんそしてリィさんの訪問を受けた。ドゥ・Hさんはドアをたたき、後で共同炊事場へ食事を取りに行かなくてはならないこと忘れないようにとテイリップさんに言いたかったが、テイリップさんは彼女に話しをさせなかった。『今』、お客様がいらしてるか

ら、話せませんとテイリップさんは威張って言った。12時半に、ドウ・Hさんはもう一度試みたが、結果は同じだった！それからドウ・Hさんは思案に暮れて、小家屋主任の所へ行き、テイリップさんの代わりに食事を取りに行きたいかどうか尋ね、彼女はその様にした。所長はこの事を既に聞いていた。多分Sさんからであろうが、彼女は今朝、V（ファルダーポートゥ）さんの事務所で、それを否定した。しかし、とにかくこの件に関して、ヤマジはテイリップさんを今、連れて来させた。彼はドウ・Hさんに、誰も彼女の部屋に入ってはならなかったのか？とも尋ねた。そして、奇妙なことに、マレーシア語が良く話せるドウ・Hさんさえもヤマジの言うことが理解できず、何をおっしゃたのですか？とV（ファルダーポートゥ）さんに聞かなければならなかった。ヤマジは日本人のしわがれ声でマレーシア語を話す。その為、彼と余り話しをしない人たちには分かりにくいのだ。ドウ・Hさんが彼の質問を確かめて答えた時、彼女は立ち去ることができ、ヤマジはテイリップさんに向かってわめき始めた。彼はまたスサ（問題）を起こしたら、エルスと一緒に小家屋1Aのグダン（倉庫）に移らなければならないぞと警告した。収容所リーダーにはウルス（手配しろ）と短く言った。収容所リーダーは自分が追い出されるような気持ちになり、これを伝達係に任せて良いですか？と尋ねた。だめだ。自分で手配しろと彼は言った。それから収容所リーダーは出て行かなければならなかったが、伝達係に自分のそばにいてくれるように頼んだ。伝達係はその通りにした。ヤマジはそれからテイリップさんが途方に暮れ、泣きながら立ち去るまで彼女の顔を何度もたたいた。彼女は「お医者さん、お医者さん」と叫んだ。それから彼女はバラックの棟々の裏側を通り、第1棟に逃げ、助けて、助けてと叫びながら中に入った。所長は最初に彼女の後を追って、オルハさんを見た教会用バラックまで来た。そして所長はオルハさんにテイリップさんを事務所に連れ戻すよう命令し、彼自身は特別食用炊事場へと歩いた。丁度、リハーサルをしたかったオルハさんは、テイリップさんを探しに行ったが、その後で彼女を『見つけられません』と事務所に言いに来た。それから、ちょうど所長はテイリップさんと一緒に入って来た。彼がオルハさんを見た時、脅かすように指を揺すり『おまえも』用心しろよ。分かったか？と大声で叫んだ。それから所長はテイリップさんを強くぶったので、彼女は机にぶつかった。オルハさんは動かずに、おとなしくそばに立っていた。それから、所長は伝達係を呼んで、水を持ってこい。バケツいっぱいだ！！と怒鳴った。伝達係は診療所へ走り、バケツに水を入れて素早く戻って来た！！伝達係はテイリップさんが階段に座って吐いているのを見る。血も吐く。それをかせと所長は伝達係に向かってどなる。彼女はちょっとためらって見る。誰にかしら？と彼女は考える。所長はかっとしたしぐさでバケツを取り、それをガチャンとテイリップさんの上に持って行く。それと同時にテイリップさんは頭から爪先までずぶぬれになる。それは驚くほどの効果がある。テイリップさんは急に立ち上がるが、再びハンカチに吐き出す。やめろと所長はどなる。直立せよと彼はわめく。彼女は吐き出すのをやめ、まっすぐに立つ。それから所長は「既に何度も彼女に忠告し、彼女の娘にも度々、母親に注意するよう言ったが、彼女はそれがまるで分からないようだ！！」と再びわめき始める。

それからV（ファルダーポートゥ）さんが小家屋主任のKさんと握りこぶしを作っ

ているエルスさんと一緒に歩いて来る。V（ファルダーポルトゥ）さんはずぶぬれの戸口の踏み段をまたいで中に入って行き、他の二人は外で立っている。それから伝達係はエルスさんの方に行って、彼女の母親にコート又は何かそのようなものを持って来るよう勧めようとするが、伝達係はそれ以上ことばが出なかった。というのはエルスさんは「私に話さないで下さい。『女性』が私に話しかけることには我慢ができません」と叫んだからだ。伝達係は、分かりました。エルスさん。あなたに良いと思ったからですと穏やかに答える。エルスさんは握りこぶしを作ったままで立ち続ける。突然、彼女は激しい怒りの爆発で、自分の前にある低木を引っ張り始める。所長は外を見ると、エルスさんの母親テイリップさんも外を見る。そして所長は、あそこにあるあれは何だ？？と尋ねると、テイリップさんは、伝達係が彼女の娘に立ち去らなければいけないと言うように、恐れながら合図する。伝達係は所長の質問に答えずに、エルスさんに素早く、出て行きなさい！！と言う。いやですと彼女は首を振る。所長はもう一度、今度は気短に、何だ。誰がそこにいるんだ？と聞き、彼は立ち上がる。伝達係はやむなく、エルスさんですと答えると、所長は外に出て、エルスさんの所に行く。おまえはここで何をしているのだ？？と彼女に聞く。私は母を待っているのです。所長様とエルスさんは青ざめながら言う。所長は低木の方を眺め、地面の上の葉っぱを見て、エルスさんに、おまえは低木に当たって怒りを静めるのか？？と聞く。所長はエルスさんの頬を手のひらでぶったため、彼女は急に真っ赤になる。それから所長は、事務所の中へ入れと言い、エルスさんが中に入ると、彼女がうめきながら許しを請うまで、平手や手の裏で代わるがわりに、左右の頬をたたく。それから所長は「おまえは心からでなく、口先で許しを求めているのだ」とどなり、再び何度も繰り返してぶつ。その為、母親も一緒にうめき出す。その後、母親は立ち去っても良いが、オルハさんは残らなくてはならず、腫れ上がった顔をしたエルスさんは事務机の前に立たなければならない。それから所長は彼女に父親のように話し始める。「エルスよ。おまえの思考過程は間違っている。エルスは「母親」のことだけを考えているが、エルスは他のことを考えなくてはならないのだ。エルスはいつも他人は誤っているを思っているが、最初に「母親」が正しくないということを忘れてはならない。『トゥアン（所長様） ヤマジ』がぶつたとエルスが耳にすると、おまえは即座に『トゥアン ヤマジ』が間違っていると考え、『トゥアン ヤマジ』に腹を立てるが、おまえの思考過程に問題があるのだ。戦争が終わったならば、エルスは多分いつか結婚し、恐らく子供を持つであろう。もし誤った思考過程を持っているならば、どのように分別あるしつけをすることができるだろうか？もしおまえが困難に出逢ったら、くよくよしないで、神父、修道女たちまたは所属のバラック主任と話してみるのだな」。神父を呼べと所長は伝達係に言い、エルスさんは立ち去ることを許された。神父が中に入って来た時、所長は彼に言った。「神父さん」と所長は言い始めた。「ちょっと前に、テイリップがバラック第1棟へ逃げた。それから私は1棟に行って、テイリップがどこに隠れたのかを修道女たちに尋ねた。彼女たちはテイリップがそこにいるのを知っていた。その時、修道女たちは私に嘘をついた」。声を荒げて「私はびっくりした。模範を示さなくてはならない『修道女たち』が、その修道女たちがうそをついたのだ。裁縫作業所で働いている一人の修道女がいた。神父はその修道女に理由を

聞かなければならない」。はい。トゥアン（所長様）と神父は答えた。それからヤマジはテイリップさんたちの宗教を聞いた。トゥルット 牧師！（テイリップ親子は牧師に属している）であることがはっきりしたその時、私たちプロテスタントは良い印象を受けなかった。それからオルハさんは、用心深くしなさいと更にきびしく忠告され、もしテイリップさんとそんなに良い友達ならば、彼女に注意を払いなさい。オルハさんにはその演説がよく分からなかった。なぜなら彼女はマレーシア語を知らないからだ。しかし収容所リーダーが簡単に説明した。それから、所長はV（ファルダーポトウ）さんの「テイリップさん用にどこからバレ（寝台）を取りに行かなくてはなりませんか」という質問に、「バレ（寝台）など必要ではない。あいつらは動物のように地面の上に横になれるのだ」と答えた後で、彼も去って行った。

高齢の婦人たちがSchr.さんを通して、食事について不平を言い、食べ物が足りなすぎると述べた。これからは彼女たちは食事をバラック第6棟から持って来なくてはならない。そうすれば自分たちの目で、他の熱心な働き者の女性たちがもらえるものを見ることが出来る。更に、彼女たちは今後、朝には野菜洗いをしなければならないだろう。その結果、不足分について気をやむ時間はおそらく少なくなる！！

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月28日

警官が収容所の中に入り、司令所、診療所、そして牧師の仕事場へと走りまわる。何を探しているのですかと伝達係が尋ねると、トゥアン（所長様）だと彼は答える。「所長は見つからないでしょう。病気でキャッサバ菜園に寝ています。収容所責任者に伝えて下さい」と伝達係はちょうどやって来るV（ファルダーポトウ）さんを指差しながら答える。飛行機が来ました。15機ですと警官はあえいで言う。警報とV（ファルダーポトウ）さんが叫ぶと、ベレミィが鐘を鳴らし、少しすると、M（マルセイユ）先生がキャッサバ菜園から走って来る。所長は既に横になりながら、腹を立てている。なぜなら何の警報も鳴らなかったからだ。それで、M（マルセイユ）先生を行かせたのだ。ダーンチュはなんの警報命令を下さなかった。彼がまた叩かれなければ良いが。かわいそうな人だ！彼は所長の代理として、クーリーたちが女性たちと話さないように、注意を払うためにバラック第6棟にいた。何という代理であろう。半分閉じて膨れ上がった目と、はれて青みがかった顔をして、ある一点をじっと見つめてうずくまっていた。ちょうどテイリップさんの時のようであった。彼はブロック1棟のバレ（寝台）の上に座った。哀れな男、所長のサディズムの犠牲者なのだ。所長は今やいかなる政治的理由があっても、私たちを打ったりすることができず、彼のサディズムをかわいそうなダーンチュに当たり散らすのだ。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月29日

その日ヤマジは蒸し風呂に入り、M（マルセイユ）先生、アーリィさんとケイス・Nさんにも入るように招いた。そうして、彼ら4人は隣同士になり、お尻を丸出しにしてベンチに座る。笑い転げてしまうと修道女たちが言った。その後、ドラムかん運びの女性たちが入ることを許された。ヤマジは彼女たちがそれを断ったことを『非常に』奇妙に思った。

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月24日

動揺の午後であった。初めにV（ファルダーポートゥ）さんは所長に、米が盗まれ、それはたぶん、唐箕係^{とうみ}³⁹によるものであり、今回、唐箕係を裁縫作業場に転属させるのが良いのではないかと知らせた。それは誰だ？と所長は尋ねた。S. さんです。それから彼は「倉庫班長であるS c h. さんと呼ばせ」と言い、S c h. さんが伝達係により中に入ってきた時、彼女は所長の事務機の反対側に座らなければならない。それから所長はS c h. さんに「米が盗まれたことを耳にした。それは皆の食事が余りにも少ないから起きたに違いない。腹が減るから、盗みをするのだ！」と言った。なぜそんなに少量の米を配るのだ？ 私は十分なお米を配分しますが、炊事班長は全てを炊かないのです！ 彼女は毎日米を蓄え、今では大量の米が残っていますと倉庫班長は返事をした。所長は、それは良くない。炊事班長はおまえが配った全ての米を炊かなくてはならない。おれは全員に十分食事を与えたいからだ！ そして食べ物をもっと脂肪がなくてはならない！ 100リットルのココナツ油をもっと使え。照明用の油が残っていたら、食用に使用しろ。そして再び、肉にはクテラ（クテラ芋）を混ぜろ。おれは人が腹を減らし、その為に盗みをするのはいやなのだと言った。

Eさんの問題が出た時、それにより、M（マルセイユ）先生はかろうじて殴られずに済んだ。罰（盗癖）のため赤痢用地に住んでいるEさんは、一度客を迎えても良いかどうかとM（マルセイユ）先生に尋ねた。そして彼はだめですと答えた。その時Eさんは、誰もそんなに早く赤痢にはならないわと言った。しかしM（マルセイユ）先生は、それは赤痢の問題ではなく、権力の問題ですと答えた。そこでE. さんはヤマジが許可を与えなければならないのだと理解した。Eさんはそのことを所長に尋ねると、彼は笑いながら、だめだ！と答えた。Eさんはその時、M（マルセイユ）先生は赤痢を怖がってはいませんと言った。所長は笑って去って行ったが、午後になって、『そうか、M（マルセイユ）先生は俺が赤痢を恐れていると嘲笑したのか？』とM（マルセイユ）先生に腹を立てた。彼は死人のように青白くなって『も

³⁹ 穀物を精選して、籾殻（もみがら）などを除去する係。

もちろん、違います!』と答える。そのようにE. が言ったぞ。E. を呼び、スザンも連れて来い。彼女の為に訪問することが頼まれたのだった! それから、全員が彼の前に立った時、スザンはやっとのことでM (マルセイユ) 先生がパンチでぶたれる! ことを防ぐ事ができた。日本人の訪問があり、ヤマジと一緒に巡回し、その後で、表ベランダで座って話し始めた。その間に、M (マルセイユ) 先生、スザンさんとEさんはV (ファルダーポルトゥ) さんの事務所ではらはらしながら待っている。なぜなら、恐ろしい殴打はまだ終わってはいないからだ。それから一時間ほどして、牧師が来て「所長がM (マルセイユ) 先生にテニスをしないかどうか! と聞いています」言った。

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月25日

つまり、それは一昨日のことだった。その時はたいした結果にはならなかったが、今朝、最初にEさんだけが呼び出された。所長は彼女に再びM (マルセイユ) 先生が言ったこと「プルカラ クアット サジャ、つまり権力の問題であり、赤痢の問題ではないこと」を繰り返させた。不快な、頑固な顔をしたヤマジは、また怒り狂った。そして彼はEさんに向かって、「自分の旦那が『死んだ』という手紙を受け取ったとしたら、おまえは何と答えるんだ? 」と聞いた。Eさんは真っ青になって「そういう手紙を持っているんですか??」と、どもりながら言った。そうではない。例として挙げたのだ。赤痢に対し十分に注意しなかった為に、人が死んでいくことは、どんなにひどいことであろう!! 既に今まで、このような死亡通知をどのくらい受け取らなかったであろうか??と所長は言った。Eさんはまだこの驚きから半分立ち直っただけだった。M (マルセイユ) 先生とスザンさんと呼ばなければならなかった。彼らがまた三人で所長の前に立った時、彼は怒鳴りつけた。『それは非常にひどいものだった』。

シャボットゥー コートウマン

1945年6月19日

所長は100人の人たちが食事を終えた後、収容所全体の全ての大人たちに今一度、おいしい食事を取らせたいと考えました。グループは、約120人からなり、様々な勤務班ごとに分類され、3週間のあいだに、7回の食事会が催され、そのために収容所のヤギが畜殺されました。食事が終わると、その雰囲気はふさわしく、たいへん愉快的な劇がしばしば上演され、収容所の全員が入場することができました。

コートウン

1945年6月27日

朝の爆撃だ！ バラック第12棟、私たちのバラックは罰を受ける！ 今晚、空襲警報が出されたならば、バラックから出てはいけない！ はっ、はっ、何という罰なこと！ 私たちはやっとのことで気持ち良く横になられている。何故かといえば、数人が狂犬に恐れているため、夜、バラックから出て行きたくないからだ。本当にここでも神経がびくびくするほどの大騒ぎだ。空襲警報、混乱、犬ども、赤痢などいろいろある。心の中はいつも『なにか』に用心している。

シャボットウー コートウマン

1945年7月9日

この狂犬のために、警報が鳴ったその晩、誰も棟から出たがりませんでした。最終的に「全員、外へ出る」という命令が出ました。棒やサプリディ（ほうき）で武装し、出かけ、防空壕の入り口は障害物でふさがれていました！ いつものように感情的に、所長は初め外に出たがらないバラックの責任者たち数人を怒鳴り、その内の一人を地面に叩きつけました。長い間、このようなことは起きませんでした。それから、罰として数棟のバラックの人たちに「バラックに戻れ。激しい攻撃があっても外に出てはならぬ！」と命令が下されました。彼は、私たちの裏側にあります飛行場が猛烈な攻撃にあっている最中でさえ、この命令を維持したのですが、これは翌日の夜には解除されました。

作業・視察

報告書

カンピリ収容所報告書

作業に関する報告

A. H. ヤウストウラ

働ける状態にあった人たちは、誰でも作業に参加した。可能な限り、仕事の選択は婦人たち自身に一任された。このようにして、彼女たちはそれぞれの才能、体力、または家庭の状況に最も適合した仕事を選択することができた。小さい子供をより多くかかえている母親たちは、負担がより軽い仕事を貰った。ここでの抑留の初期には、その仕事は、しばしばたいへん辛いものであった。敷地の整備、共同作業の開始、井戸の改善、ポンプの取付、そして負担の重い作業に対するクーリー（日雇い人夫）の増員を行なった後、作業の厳しさが軽減された。殆どの婦人たちは、現在の諸規則に満足していた。定められた仕事は、多くの人々にとって幸いなことであった。それにより婦人たちは、自分たちの精神的な健全さを維持した。

カンピリ収容所報告書の解説と補足

ファルダーポルトウ

一日に200人のクーリーが作業をしていたのは、僅か数回だけであった。それにもかかわらず、1944年の中旬からは、通常6人から10人のクーリーが作業に当たっており、それも、しばしば彼ら全員が不在であることもあった。その作業の大部分は過酷であったこと、また女性たちの力の限界を遥かに越えるものであったため、この仕事は誰からも、恩恵としてみなされることはできなかった。肉体的にすっかり碎かれ、そして、それによる諸々の苦悩が、いまだに洩い結果となっている女性たちさえ非常に多くいる。決められた日課は、それでも個人的な思いや心配に耽り過ぎることを防いだ。人々は夜、すっかり疲れ果てて床につき、容易に寝入ることができたため、くよくよ考え巡らす時間もその機会も残されていなかった。この状況は多くの人々にとって、精神的な健全さを保持するために良かった。

日記からの抜粋

ウッカーマン — テンプラース

1943年3月22日

炊事班と菜園班が編成されました。草は2メートルの高さにまで伸びていました。毎日、菜園班は仕事を貰い、それを完了しなければなりません。土地を開墾するため、その草を地面から全部抜かなければなりません。首の回りに汗とり用の布を巻き、飲み水用のコップを腰のベルトに付け、パチョル（鋤^{くわ}）を肩に担ぎ、女性たちは毎朝7時に仕事を開始します。道路とスロッカ（下水溝）を收容所の女性たちが造ります。大きな土の断片が掘り起こされ、肥料を与え、カスビ（キャッサバ）を植え付けます。彼女たちは、肥料を施すため汚物溜を空にします。それでも、アンボンと比べれば、この場所は私たちにとって黄金郷なのです。身を粉にして働く、単調で骨の折れる肉体労働ではあるのですが、ここには空間があり、それに食事もアンボンよりは僅かながらましのです。

コートウン

1943年5月18日

昨日私たちは、セレベスから司令官長の訪問を受けました！ たいへん威厳のある高官を迎えるため、また大がかりな準備をする結果となりました。例えば、がらくた物の整理やすべての通路のはき掃除等など。ヤップの高官が近づいてきたときは、私たちは仕事の手を休め、彼にだけお辞儀をしなければなりませんでした。高官はそのうえ多くの随員を伴っていました。そして私たちの所長は、尊大な姿勢でその前方を歩きました。その偉い方は、いくつもの勲章と金の袖章で飾られ、まばゆく立派な姿で歩きました。

コートウン

1943年6月11日

今日、私は正式にそして常勤として耕作班に入りました。その前の数週間は、私はこの班で雑役をしました。ところが、昨日、所長は突然、耕作班のために1棟あたり6名欲しかったのです。私は、この班で雑役をしていた期間中、ずっと満足していましたし、いまだかつてこんなに快適な気持ちになったことはありませんでした。それで、私は直ぐにお母さんの所へ行き、その常勤の仕事に申込をしたのです。幼稚園の設置はいずれにしても実現しないのです。私たちは、ローイアッカースさん、スレウさん、フレイトゥ・ファン・ダー・カーさん、イヌク・

ペッドゥモースさん、ヘアダ・コーニングさんと私から成る、本当に楽しい班です。私たちは、鉄条網の内側に生えている全てのアラン アラン（大きな葦^{ヨシ}の一種）を、取り除かなければなりません。私たちは、また自分たちの所有物として考えてよかった、各人専用のパチョル（鋤）ももらいました。とても自慢に思い、私はそれに自分の名前をペンキで書きました。私の一日の時間割は今こんなふうです。6時半起床、7時から8時まで畑仕事、8時から8時半まで朝食。8時半から9時半までパチョレン（鋤作業）。9時半から10時までコーヒー休憩。10時から11時までパチョレン（鋤作業）、その後は自由時間。もちろん水運び、食事の受取りなど、義務づけられた雑役は引き続きしなければなりません。午後3時から4時までパチョレン（鋤作業）。その後はまた自由時間。それは、そんなに悪い仕事でもないでしょ？

シャボットウー コートウマン

1943年6月12日

私たちがカンピリに来たとき、12名で自発的に用地整備班を構成しました。ヤップンは、しばらくこれを成り行きに任せていましたが、作業が彼らにとって十分迅速に進行していないことが直に判りました。彼らは、私たちが罰を受けるべきである、と考えました。なぜならば、十分に深くお辞儀をしなかったというように、私たちの振る舞いが相変わらず陽気過ぎたためでした。罰を受けることは、畑のためになる必要がありました。彼らは一定の場所を割り当て、それを一日のうちに開墾させました。つまり、アラン アラン（大きな葦^{ヨシ}の一種）を除去することでした。もし作業が午前中に完了しなかったならば、午後それを続行しなければならなかったことになっていました。大勢の人たちが集まり、作業道具も十分揃い、ニッポンは大量のパチョルス（鋤）とスコップを手配していましたので、2時間後には全てがきれいになりました。

私が初めて重い鋤で硬い地面を叩いたとき、それは気が狂いそうな感じでした。最初の時間は順調にいきました。しかし、その後はひと打ちする毎に一息入れなければなりませんでした。それでもなおこの作業は、アンボンの人たちがここへ来たとき、家の所まで伸びていたアラン アランを、抜き取らなければならなかったことに比べれば余程ましでした。彼女たちは道具を求めましたが、「ティダ アダ（ありません）」。この人たちは、仕方なく素手でテーブルナイフを用いて作業を始めました。私自身、彼女たちがアラン アランの下を何本かの竹竿で掘り、数人が寄り添ってその塊を転がしているところを見ました。

それから直に耕作作業の一日の時間割が決まり、実際には各棟5名から8名（ですから12棟で100名弱）畑へ行かなければならませんでした。私たちはヤップに、残りの人たちは炊事、水運び、または子供たちの世話をしなければならなかったこと、あるいは病気であったことを説明しました。実際に彼女たちはかなりの部分を耕し、クテラ（クテラ芋）やバナナの木を植えました。

ある専門家が計算したところ、この土地全体にクテラ（クテラ芋）を植えたと仮定す

ると、これら1,500名の人たちのちょうど一日分の食糧に相当するようです。これで私たちの食糧を一体どのように得たいのか、この計算からでは直ぐに判りません。

それ以外の作業に関しては、私たちの棟では毎週、交替があります。毎週月曜日、人々は新しい雑役で始めます。私は1週間、他の5人と一緒に夕食の炊事をしました。午後、何時間にもわたり、熱いぶった火の近くでの作業はうんざりさせられるものでした。好ましい雑役は、最後の週にした水運びでした。1班に2人、それが3班あり、それぞれの班は午前中に5杯、午後にも5杯、合計10杯分のたらいの水を、3分ほど離れた所にある井戸まで、汲みにいかなければなりませんでした。私たちは、朝6時（オランダ時間で5時）、まだ月が輝いている頃より始めました。これら、たらい5杯分の水を運ぶには、1時間まではかかりませんでした。そして、その日の残りは私自身のための時間でした。

シャボットウー コートウマン

1943年7月18日

所長は、神経戦といったようなものを実施しています。毎日新しいプリンタ（命令）です。今日、日曜日はそれに当たり、教会はお休み。だれもが畑で働きます。というのは、明日、高官訪問を迎えるためです。バラック周辺のアラン アラン（大きな葦ヨシの一種）が生えている全ての原っぱは、鋤で耕され整備されなければなりません。そのため私は、今朝5時15分過ぎ（オランダ時間で4時15分過ぎ）には、朝食のポップを作るための火を起こしていました。7時半には用意ができ、朝食をすませ、食堂の清掃（清掃はここでは、いつもサプリディ（ヤシの葉で作ったほうき）を使ってはき掃除）をしました。次に、浴室も同じ方法できれいにしました。9時から9時半までは鋤作業で、私は下水溝を掘り、11時から11時半までは原っぱでの作業、そして今晚ちょうど今、6時から7時までは再び溝を掘ります。私たちは、今日午後3時にリーダーから呼ばれたとき、作業を中断し、今晚これを月の光の下であることを約束してありました。それで、現に今、作業はもう殆ど全部完了し、かなりきれいに見えます。これが『高官訪問』での唯一、有益なことで、来訪があることは私たちにとって、ゆっくりと恐ろしい幻になっていくのです。

シャボットウー コートウマン

1943年8月2日

それから裁縫作業場が開設され、毎日、各棟から2名ずつ出て9,600本の半ズボンと9,800枚のふんどしをヤップンのために縫い始めます。

コートウン

1943年8月20日

また、新しいこと！ 常勤の編み手が来なければなりません！ 各棟から2名出す必要があります。そしてその人たちは、ヤップンの靴下を編まなければなりません。1ヶ月あたり2足。編み物に関心がある他の誰でも、糸と針を受け取ることができるのです。お母さんも、長靴下1足分の糸をもらいました。

コートウン

1943年12月2日

また、新しいこと。今朝早く点呼の少し後で、私たち一同『草むしり』のために整列しなければなりませんでした。原っぱの向こう側まで膝で這いながら、すべての長く伸びた葉を抜かなければなりませんでした。7時半に、私たちは食事に行くことを許されました。

コートウン

1944年1月17日

ブル！ フィリピンの総監による大視察！ 収容所全体が、もちろんまた大騒ぎ。

コートウン

1944年1月18日

所長は神経を非常に苛立たせています。そして全てを点検するために、収容所内を気が狂ったように歩き回っているのです。グダン（倉庫）の中には今日、原住民の人たちが運び込んだお米と果物が積まれています。もし私たちも、それを分けてもらえるのであれば、また訪問があってもいいのです！ 昨日の夕方、図書館用に書物を積んだ車がまた到着しました！ ここは、もっと素晴らしくなりそうで、私たちはもう離れたくありません！ 神父さまは、3頭の水牛をつぶさなければなりませんでした。それらは今、炊事場に広げられ、ぶら下がっていますが、けっこうすてきな飾りです。今晚遅くなって、また伝達事項がありました。明日、私たちは全員、新しい青い制服を着なければなりません。

シャボットウー コートウマン

1944年2月17日

今日、ずいぶん前に予告されていた視察が終了しました。噂によると、赤十字が視察に来るはずであったのだそうです。私たちは4日間、用地の整備、蚊帳^{かや}の洗濯、部屋のボンカレン（清掃）などのために、あくせく働きました。トゥカンス（作業夫たち）は、壊れた窓や扉の修理をしました。

私たちの行動は正確に指示されていました。だれも可能な限り、予め入浴を済ませ制服を着用します。この制服は繕ったものは構いませんが、ほころびがあってはなりません。お化粧品は禁止され、『カラウ プル スカリ ビサ パカイ ベタッ セディキットウ』（本当に必要な場合は、おしろいをほんの少し使うことが許されます）。この時間、雑役は非番の人たちは、編み物や繕いものをするので、忙しくしていなければなりません。しかし、例えば、新しい衣服を縫うことは認められませんでした。

一分の違いもなく車は入場し、大急ぎでこの広々とした敷地の至る所を歩いてから、きっかり1時間後に一行は姿を消しました。車が柵の外へ走り出たとき、所長は背伸びをして、視察団受け入れ委員会を編成した収容所の仲間<女性たち>（靴を履かなければなりません。私はいつかまた、靴を履いて歩くことを習わなければならないのでしょうか？）に向かって『トゥリマ カシ（どうもありがとう）』『ベソツ（明日）は休日』と叫びました。所長は、それほどほっと安堵したのです！ 所長は、賓客^{ひんきやく}に対して、いつもそれほど、びくびくしている訳ではありません。先週は5名のヤップンの来訪があり、所長は彼の世話をするジョンゴス（家事手伝い人）である14才の少年2人に、「養豚場へは行ってはならぬ」という命令のもとに、訪問客を案内させました。収容所の住人で彼の女性調理師は、彼女の個人的な考えでお茶を出したため、後で殆ど平手打ちにされそうになり、更に役割からも除外されそうになったのです！

フォスカウルー リムボーフ

1944年4月1日

翌日、所長の命令に従い、キャッサバ菜園のすべての木材は直ちに運び出さなければならない。各棟から少なくとも10名の大人が、手伝いに行く必要がある。年長の子供たちを連れていく。今日は、ごまかしは許されない。この命令を私たちは顔に汗を流して実行する。最近、通常の勤務日の方が休日よりも静かである。毎週日曜日のために、所長はあれこれ雑役を考え出す。

コートウン

1944年4月9日

復活祭！ 朝、修道女たちの棟の戸外で、厳かな聖ミサ。その聖ミサの儀式がまだ終わらないうちに、私たちは朝もまだ早かったのに、何かが起こったと思われる、普通ではない騒がしさをもう聞きました。ええ。その通りなのです。子供も大人もみんな、すべての班は9時に牧場に整列しなければなりませんでした。楽しみにしていたこの日は台無し！

ともかく私たちは9時に牧場へ。ものすごい混雑でした。みんなは、それぞれの知り合いをさがし、少なくともお互いに復活祭の至福を祈り合うことだけはしました。9時少し過ぎに、所長とヤウストウラさんが牧場に姿を見せました。全員、整列しなければなりませんでした。各棟毎に、そしてその脇に各々のバラック主任。それから所長は、まるで家畜の体格検査をしていたかのように、列に沿って歩いてきて（彼の考えによる）いわゆる頑丈な婦人たちを選別し、その人たちを作業の厳しい様々な班に配属しました。

そして「最後を飾る瞬間」が来て、全員牧場の縦の位置に一行に並ばされました。次に、各人の足元に生えている草を、牧場の向こうの端に完全に到着するまで、抜き取っていかなければなりませんでした。アラン アラン（大きな^{ヨシ}葦の一種）は鋭いので、勢い良く引き抜くと、指はかなり深く傷だらけになってしまいました。11時半少し前に牧場全体のすべての草が抜かれ、私たちは帰ることができました。みんなが一張羅で、地面を見つめて這いながら草をむしるのは、何とも奇妙な光景でした。

フォスカウルー リムボーフ

1944年4月14日

ところで、視察が実施され、それは注目すべきものであった。整理整頓についての正にその通知が、全部の棟に行きわたるや否や新しいものが来た。これが再び各棟に伝達された頃に、また別の新しい連絡事項が届く。そうすると前回までのすべての通知は取り消され、また全く新規のものが来た。

午後2時に私たちは事務所にいた。所長は『ひどく』そわそわして、自転車で رفتり来たりしていた。ナンバー2（「第二番」）に、誰かが姿を見せた場合には所長を呼ぶように指示を与え、やっとな彼の寝室に姿を消した。ところが、所長は自分自身が最初にクラクションを聞き、真っ先に走っていった。それは副官で、高官訪問に際しひと足先に着いたのだ。所長は敬意を表して彼を迎え入れ、所長自身、副官のカバンを車から持ってきた。それから二人は腰掛けて高官訪問を待つ間、話をしていた。

半時間ほど後、そうです。クラクションが鳴り、所長はヤウストウラさんに対して、そして伝達係に対して「訪問客がもう到着するところだ、と収容所全体に知らせろ」と怒鳴り

つけている。ヤウストゥラさんは一方の集合バラックへ、伝達係は別の方へと走った。ヤウストゥラさんがまだ戻ってこないうちに、所長は再び彼女を呼んでいるところであった。彼女は直ぐ駆けつけてくる。

貴賓である陸軍大将と二人の将校を乗せた車が、入り口に乗り付ける。所長は彼らに椅子をすすめ、自分もその傍に腰掛けた。「第二番」は右手に帽子、左手は軍刀をしっかりと握り、直立不動の姿勢をとっていた。それから彼らは、もちろん最初に養豚場へ向けて歩き出した。俄か雨の不意打ちを受け、日本人の運転手を通して雨ガッパとパヨン（傘）を取りにいかせた。私たちは激しい雨のため、彼らが事務所に戻ってきたことが聞こえなかった。突然、所長は貴賓と共に開かれた扉の前に立っていた。所長は、陸軍大将がゆっくり入り口を通れるように、脇に退いた。私たちは飛び跳ね、気を付けの姿勢をとりお辞儀をした。そして所長が日本語で二言三言、想像するところ私たちが何者であったか、を説明しているのを聞いた。陸軍大将と両方の将校は、ほんの一瞬私たちの方をじろりと見ていたが、それから無言のまま表ベランダの方へ進んでいった。

車は玄関に乗り付けた。それから彼らは車で大きいグダン（倉庫）、そしてバラックの棟々へと向かった。そこから彼らは、再び表ベランダへ戻ってきて腰掛けた。しばらくすると所長は慌てて玄関に入り、『クパラ アナック（責任者の子供）』を呼ぶように指図する。不明瞭な指示ではあったが、私たちはちょっと思いめぐらし、それは第9棟のクパラ（責任者）のアナック（子供）のことであり、その子が呼ばれるべきであったと判断した。所長はその女の子を呼ぶため、ちょうど事務所に居合せた他の人を既に行かせたが、時間が掛かり過ぎた。それで更に伝達係もまた行かされた。伝達係は幸いなことに、ちょうどイエニィちゃんと出会い、直ぐに彼女と一緒に戻ってきた。収容所リーダーである J（ヤウストゥラ）さんは、もどかしい思いで待っていて、その少女と一緒に表ベランダへ行った。J（ヤウストゥラ）さんの事務所にはその間、それまで無かった小包が一つ置かれていた。陸軍大将はイエニィちゃんに片言のマレーシア語で、彼女がどこで生まれ、どの位マカッサルに住んでいたかを尋ねた。J（ヤウストゥラ）さんはイエニィちゃんに通訳をしてあげなければならなかった。というのは、その少女はヤップがマレーシア語で言っていることが、全然分からなかったのである。少し経って所長は慌ただしく入ってくる。その小包を手に取り、伝達係に向かって、第9棟バラック主任の子供たちの所へ届けるように言う。小包の内容はサンドイッチ用のお皿2枚、板チョコ5枚、ボンボン摘み、そして石鹸であることが判った。その棟の人たち全員が集まってきて、歓声が上った。しかし、この小包は誰から送られたものか?? 誰もそれを知らなかった。そして第9棟のバラック主任は良い時機を見計らって、所長に尋ねるつもりであった。夕方、イエニィちゃんは所長の所へお礼にいった。所長は、時々するように、あっさりと戸惑いがちに「ふん、ふん、ああ、ああ、スダ（もう、いいのだ）」と言った。

翌日、「学校は再び続行してよろしい」との通知。所長はマカッサルへ出かけていったが、途中で出くわした訪問客の車で少し経つともう戻ってくる。彼は猛烈な豪雨にもかかわらず、この訪問客と共に収容所全体を隈なく巡る。訪問客の一人は、巻かれた紙を手を持ってい

る。それらの原住民運転手一人は、パヨンス（傘）と雨ガッパを取ってこなければならなかった。「第二番」は、これについては知らないのである。彼がしばしばするように、ちょっと、うとうと居眠りをしていたように思われたが、そのとき不意に極めて活発になり、綺麗な雨ガッパを2着持って現れる。それらを所長の家事手伝い少年たちは、持っていかなければならない。それから彼は更に、雨よけ帽子4つを一回の動作でわし掴みにする。これらは収容所リーダーと話をしている4人の婦人たちが、帽子が大きかったため廊下に置いていたのである。伝達係は遅れをとらず介入し、その雨よけ帽子を廊下に置いておかなければならないことを、ヤップに納得させることができる。

シャボットウー コートウマン

1944年5月7日

3日前から私は他の勤務範囲を受け持っています。5月5日は私たちがここに抑留するようになって1年になりました。私はこの1年間ずっと数学の授業のほかにも、1週間に8回、午後、棟で仕事をしました。例えば、ポップを作り、飲料水用に水を煮沸^{しやぶつ}すること、食堂と浴場の清掃、お鍋洗いなどです。大多数の人たちは、いわゆる中央勤務に就いています。主要の食事は両方とも共同炊事場で用意されています。さらに菜園、養豚場または乳牛小屋、裁縫作業場などで働くことです。しかし、現在私は『中央勤務』でも仕事をしています。12才から20才までの83人の少女たち（そのほかの年令の少女たちに関しては、私は午後まだ通学している少女たちのみを指導しています）のために、畑仕事の指導をしています。そして、彼女たちは朝8時30分から9時30分まで、そして10時から11時まではパチョレン（鋤作業）をしなければなりません。

私の前任者たち2人は、『心身ともに参って』（ある病気で、このことは後で取り上げます）しましたが、私はたいへん気に入っています。猛烈に照り返す太陽の下での最後の時間は暑いのですが、その反面、それは彼女たちにとっては少し責任のある仕事であるため、彼女たちの気構えにかなり左右されます。これらの子供たちの一部は、まだ小学校に通^{かよ}っているのです。そのほかは、高等市民学校で午後3時15分から5時30分まで授業があります。それから、これらの子供たちには20分間、夕食の時間があります。6時に彼女たちはキャッサバ菜園で、灌水の手伝いをしなければならぬためです。そこでは果てしなく広がる不毛の土地を、女性の手によって、1,600名の人々の野菜を収穫しなければなりません。彼女たちの宿題に加え、これらの少女たちは通常、家族のために洗濯をし、弟や妹たちの水浴びの世話をし、母親のために毎日、バケツの水を共同炊事場へ運ばなければならぬのです。

フォスカールー リムボーフ

1944年5月11日

静かな午後になりそうで、土砂降りであった。そして伝達係は、収容所リーダーのところへ病人名簿を持参するために、診療所へそれを取りにいった。そうすることで、収容所リーダーは自宅に留まることができたはずであった。しかし、そのようにはできなかった。

5時にすさまじい豪雨の中、車が玄関に乗り付け、そこから将校が降り立つ。建物の裏側から、ずぶ濡れの所長が帰宅。貴賓の方へ走り、その前で最も正式な姿勢で立つ。硬直して外側にピンと反った所長の手の指は、ズボンの脇、つまり縫い目の上に置かれ、将校の言葉への返事として『はあ、はあ、はあ』と連発した。それから彼は、伝達係の方へ走っていった。彼女はJ（ヤウストゥラ）さんと呼ばなければならない。『急げ』『急げ』。ヤウストゥラさんはこの緊急呼び出しに即刻、伝達係と一緒に現れた。所長は彼女を既に待っていて、そわそわしながら遠くの方からもう話し始める。今から10分以内に『極めて重要な高官訪問』を迎える。各人『オルマット ブザール（最大の敬意）』を示さなければならない。「キオツケ」のことを喚起すること。私たちは大急ぎで事務所の清掃をしなければならない。すべてが綺麗になっていなければならない。私たちは勤務班長全員を呼び集め、彼女たちは直ちに整列しなければならない。「彼女はそのことが分かったか?」。「はい。彼女はそのことを理解しました」。ヤウストゥラさんは所長と一緒に事務所に入っていく。所長はその間、神経質に些細なことにこだわる。「彼女たちに良く思い出させなさい。これは、プリンタ クラス（厳格な命令!!）である」。「はい。私たちは、そのことを忘れないように致しましょう」とヤウストゥラさんは返事をした。そして全てのバラックに沿って私たちの^{ほんそう}奔走が始まったが、それを達成しなかった。極めて重要な高官訪問は、その5分後には既に到着した。しかし、彼らは出発にあたり速やかに立ち去ったので、私たちは所長が望んだ通りの姿勢で、どしゃぶりの中にいたのである。

極めて重要な高官訪問の一行は養豚場まで車で行き、そこから集合バラックAに戻ってきた。それから、貴賓の一部は司令所へ、残りは所長と共に病院と共同炊事場へ回った。J（ヤウストゥラ）さんは副隊長から見事なフランス語で話しかけられた。この訪問高官の中に飛行中隊の隊長がいる。隊長の見解を伝えるならば、私たち女性はここで良い生活を送っていた、と彼は告げた。それから行列全体が戻ってきて、表ベランダに座った。所長はそわそわしながら収容所リーダーに向かって、レモネードを持ってくるように言った。幸いなことにベレミィさんが食堂にいて、グラスに注ぎ、ちょうどその週当番であったドウギィ・Mさんが中に運んできた。

それからJ（ヤウストゥラ）さんは所長に、扉が閉まっている第3室にいるこれらすべてのクパラス（責任者たち）は、一体今何をすべきであるのか、と尋ねた。彼女たちは、『前に』整列しオルマット ブザール（最大の敬意）を表さなければならない。つまり、『高官方』が車に乗り込んだならば、深く頭を下げなければならない。そして彼らが出発したならば、勤務班長たちは棟に帰ることを許されるのであった。そのようになり、所長は高官が乗車する少

し前に、ヤウストウラさんに腕で合図を出した。『高官』は敬礼し車に乗り込み姿を消した。二番目のヤップは電光石火、扉を開閉しなくてはならない。副隊長は私たちに本当に規律正しい挨拶をしてから、三番目の車に乗り込んだ。終了後、所長はヤウストウラさんに礼を言った。

シャボットウー コートウマン

1944年5月28日

この、かつて開墾されたことのない、セレベスの土地から1,700名の人たちに食べさせるために、どのくらいの労働力が必要であるか、あなたは想像することができます。菜園での作業は3組に分けられ、いわゆる「キャッサバ菜園」では、子供のいない若い女性たちのみが作業に当たっています。その作業は非常に厳しいため、彼女たちは他のあらゆる義務から免除されています。これらの女性たちの一人は明けても暮れても、鋤を引く水牛を誘導しています！ 今までのところ、まだ時々雨が降りました。また、その間にも畑には水が注がれましたが、乾期にはどう仕様もなく、私たちは、乾燥状態で繁茂する唯一の植物クテラ芋の葉に、頼る以外にはないのです。所長は今しがた、10名のクーリーを灌水のために配置しました。これは喜ぶべきしるしです。それは、私たちの中からこれ以上の労働力を引き抜かない、と所長が今判断することがはっきりしているからです。

二番目の作業で、非常な労力を必要としたのは養豚場です。所長は、当初500匹と数をあげました。そして皆は、それは不可能だと思っていたのですが、実際には殆ど達成したのです。最後に建てられた幾つかの小屋は、板張りの床があります。(私たちは、竹張りの床どころか地面に座っているのです)それから15頭位いる乳牛小屋があり、必要不可欠な場合にミルクがもらえます。水牛は外部から運ばれ、ここで神父さまと2人の女性、そして数名の少年たちによって、1週間に5頭から6頭がつぶされます。豚は極めて特別な場合にのみ蓄殺されます。これらは太らせてから販売されるのですが、水牛2頭分の価値があります。

200羽前後のアヒルは、病院のために卵を供給してくれます。噂によると、3,500羽の鶏が来るようですが、これは素晴らしいことになりそうです。私は卵がどんな味をしているか、だんだん分からなくなってきました！ 勤務班の名を続けてあげましょう。用地整備班の20名前後の人たちは道路の補修をし、(クーリーによって)伐採された木材をここから炊事場へ苦勞して運び、あらゆる予期しなかった臨時の仕事を処理します。

購買班と運搬作業班の両方で約12名の人たちが、主に石油や椰子の油の入ったドラム缶をトラックから降ろすのです。しかし、この作業で足をくじくなど、非常に多くの犠牲者が出ています。裁縫作業場での仕事は一点ごとに支払われ、42台のミシン(私たち自身が持っていた、もう古くなったもの)のうち1台として1時間稼働されない状態にあることは許されません。人々の労働時間は長く、最大限の生産成績を収めます。1日にズボン15本です。例えば、2,3週間前に思いがけない作業命令がありました。ある日曜日の午後、男性用長ズ

ボン40本が裁断され、そして仕立てられたのです！ そのようなことは、ふつうマカッサルに寄港する船のためです。

同様に編み物も支払われます。白い男性用のソックスと長靴下です。すべての体の弱い人たちと高齢者をこの仕事に就かせたことは、最も巧妙な計画です。一ヶ月に長靴下3足またはソックス4足を、納めなければなりません。ソックスを2足こしらえる毎にひと巻き分の糸が余るため、大勢の人は自分たちの自由時間に率先して編み物をしています。この稼いだお金は金庫に蓄えられ、私たちのお砂糖や果物がそれで支払われます。

最後に、炊事、ドラム缶洗い、野菜の洗浄、バラック内の仕事を担当する班があります。この最後にあげた仕事の内容は、お粥作り（これは共同炊事場ではなく、バラック毎に行われます）、共同炊事場から食事の受領、共同炊事場用の水の汲み上げ、コーヒー、紅茶用のお湯を沸かすこと等々を含みます。これは小さな子供があり、バラックから離れられない女性たちが担当する仕事で、各棟に10名ほどいます。この仕事を私自身も1年間しましたが、これは最も長い自由時間をもたらしました。私にとっては、午後（1週間に8時間）担当する数学の授業との関係で、たいへん好都合でした。ご存知のように、私は今月の初めから他の仕事を担当していますが、これまでのところたいへ気に入っています。

フォスカールー リムボーフ

1944年6月27日

所長により、年配で体の弱い婦人たちから成る班も初めて設けられた。彼女たちは鉄条網の外側の水田で、サウイ（白いからし菜）を間引きしなければならない。すべての棟から、所長の命令に従って、最年長者たちがこの仕事に割り当てられる。彼女たちが水田に到着すると、そこにはヤマジが立っている。

お年寄りたちは、彼の前で義務づけられたお辞儀をし、仕事に取りかかりたいのだが、彼は「プラン（家へ帰れ）」と言う。彼女たちは、彼の意図するところが良く分からなかったものと思われる。というのは、彼女たちはまだ全然何もしていなかったからなのだ。そしてもう一度お辞儀をする。ところが所長は、「プラン（家へ帰れ）」と一回目よりも更に強く繰り返す。おお、そう。それならば、とお年寄りたちは考え「トゥリマ カシ（ありがとうございます）」と呟きながら、もう一度お辞儀をし、またバラックへ帰っていく。勤務からは除外された、と扶助の帽子の下から、おどけた顔でお互いに笑いながら言い合う。

フォスカールー リムボーフ

1944年9月4日

上級士官の視察が日曜日に予定されており、日曜日は清掃、水撒き、カーテン開放、そして午後は義務づけられたスポーツなど、完全な勤労日課が割り振られた、と土曜日に通達された。これらの作業の開始を告げるため、追加に鐘を鳴らすことが決められた。午後、^{しゃくねつ}灼熱の太陽のもとで、彼女たちはスポーツをしていた。そしてスポーツリーダーが、この競技を一時中断してもよいか、所長に尋ねにいくと『それはならぬ』とのことであった。みんなは運動を続けなければならなかった。ところが、15分後に彼は『**競技を続行してはならぬ**』と命令を伝達させた。彼女たちは、最初の車が視界に見えてくるまで待ち、それから直ちに開始しなければならなかった！！！！棟々に次のように伝言されなければならなかった。「所長が来客と共に通りかかったときは、年少の子供たちに十分注意を払わなければならない。子供たちがはやしたてたり、または『タベ（こんにちは）』などと、大声を出してはならない。また、賓客と所長をもう一度見ようと他の場所へ走っていくことも、同様に許されない。『**所長は、許されないことをして貰いたくないのだ**』。

その日曜日の午後4時に、所長はヤウストゥラさん呼びつけた。「賓客の到着は近づいている。「カシ オルマット ブザール（最大の敬意を表す！！）ことを忘れぬように」と収容所内を^{くま}隈なく言って回らせた。伝達係は高官訪問の到着のしるしとなる、もうもうと立ち込める埃がどこにも見えなかったので「彼は、どこに訪問客が到着するのが見えるのか、私には分からない」と考えながら、至るところに伝達して回った。ところが、誰も姿を現さなかったため、5時15分前にヤウストゥラさんは、みんなはいつスポーツを終えて家に帰ることが許されるか？尋ねにいった。所長は「5時半に鐘が鳴らされることになっており、それから各人、帰宅してよい」と言った。5時半少し前に、車で外出していた彼の第二の男が戻り、即刻伝達した。「点呼なし。訪問客は明日、来所する。一週間の休暇を貰っていた裁縫作業場は、実際に開業していなければならない！！」。

月曜日に命令が回ってきた。「訪問は11時に予期されている。すべて申し分なく秩序正しくなければならない」。11時15分前に彼はヤウストゥラさん呼び、「11時15分前であると言って回らせろ！！グダンス（倉庫）の扉は開け、視察のためすべて用意万端でなければならぬ。『昨日と同様』である」と言った。最後に言われたこの部分は、愉快的雰囲気をかもし出した。なぜならば、昨日と同様に訪問客の無いことを、再び期待したからである。

ところが、最も予期されていなかった時間、つまり午後1時半に、視察の為であることが明白な3人のヤップンが姿を現した。彼らは所長と共に「アンボンキャンプ」の方へ、そして集合バラックAを通過してバラック第7棟の食堂の方へ歩いていった。それから所長が立てた計画に従えば、照りつける原っぱを横断して学校へ向かうはずであった。そこで彼らは考えを変え、裁縫作業場、診療所、そして病院を経由して事務所へ戻り、車に乗り込んだ。私たちが一日半忙しくさせられたこの訪問は、半時間もかからなかった。それから所長からの命令が

伝えられた。「本日の残りの時間は自由。そしてスポーツをすることも認める」。至る所から喝采^{かつさい}と安堵^{あんど}の叫び声が起り、各人その午後をしばしほっとした気持ちでゆっくりと過ごした。

フォスカールー リムボーフ

1944年9月15日

昨日ヤマジは、終日クーリーに付き添っていた。彼らは、カリ（水路）と共同炊事場の井戸を接続することを実現させた。早速この機会が利用され、3つの部分からなるポンプ管を新しくする作業が行われた。このため所長は、炊事係の女性の一人を呼んだ。その人は牧師を呼ばなければならなかった。しかし、牧師はちょうど養豚場で作業中であつた。「それならば神父を呼べ」。「神父様はまだ畜殺中です」と誰かが叫んだ。次に医者が呼ばれた。彼は到着するや否や「井戸の中へ入れ！」と怒鳴られた。「いいえ、トゥアン」と医者は答えた。「何だと、お前はしたくない」と激怒して叫んだ。「そうではありません。私は入りたくないではありません、所長様。私は、それをする勇気がありません」とM（マルセイユ）医師は言った。「勇気がない??」。「お前が言っていることを聞いている女性たちを前にして、それでも恥ずかしいとは思わぬか??」。「もし井戸に入っていないのであれば、お前は牢屋^{ろうや}に入らなければならぬのだ」。医者は「それならば、私は牢屋に入る方がましです」と彼としては極めてきっぱりと言った。所長は、もはや医者を説得させることは到底できないであろう、という確信から「では、わし自身が井戸に入る」と言った。

そして本当に彼は綱の梯子を伝わって、井戸の中へ降りていった。そこから外に向かつて、3つに分かれたポンプ管を降ろすように指図した。彼女たちが、ふるいと一緒にその管を逆向きに降ろすと、「わしは、それをここでは回転させることはできぬ」と怒り狂って叫んだ。そして彼女たちが笑ったので、「わしが下にいる間は笑うな。わしが上ってきたら笑え」と怒鳴った。所長は自分の満足のいくように、すべてを取り付け終えたとき、背が低く太った体格にもかかわらず、猿のように実に柔軟に登ってきた。そして人々は彼が本来、マストに登ることに慣れている水兵であつたことを思い出した。ところが、彼は自分の力を過大評価していた。井戸の縁から2、3メートル下の所から、彼女たちに竹竿を降ろすように叫んだ。そして彼女たちがまだここで探していた間に、彼は梯子を降ろすよう大声で命じた。彼女たちがここでまだ探していた間に、彼は「もう十分休んだので、この先さらに登っていける」と大声で言った。そして、それをやってみせた。私たちは、彼の頭が井戸の縁から現れ、東洋人の切れ長の目でせせら笑いをしているのを見た。それから彼は、最後のところで井戸の縁に足を投げ掛ける力はもうなかった。その間に姿を現した牧師は所長の両腕を掴み、周囲にいた婦人たちは彼の足をしっかりと持ち、一同、力を合わせて彼を井戸の縁から担ぎ上げた。彼が外に出てきたとき、拍手が少し起こったことは、一方では彼をたいへん喜ばせたが、他方では非常に当惑させた。そして彼はクーリーたちの方へ歩いていき、溝の中を前かがみになって覗き込んだ。

クーリーたちは彼に何が起こっていたか、あたかも見なかったかのように溝を掘っていた。このことに彼はたっぷり10分間は確実に費やし、それからさり気なくゆっくりと彼の部屋の方へ歩いて姿を消した。

フォスカウルー リムボーフ

1944年10月6日

出来事は以前より更に速く、次々に続いて起こるように見える。裁縫作業場の拡張は猛烈な速さで続行されている。裁縫作業場の勤務者として抜き取るために、すべての業務部署で尋ねられている。本日の発表— 裁縫作業場のために、新規に75名が求められた。縫合『と』裁断ができる者、縫合『または』裁断ができる者、『または未経験者』。

コートウン

1944年10月16日

私たちは、雲母剥離係になりました！ 畑に向かって出発する代わりに、私たちは今朝、司令所の隣にある小家屋の一軒へ入って行きました。そこには、ベンチや椅子と一緒に小さなテーブルが幾つかありました。2, 3人のヤップンが、小部屋の一つで立ち話をしていました。私たち全員がそこに腰掛けると、何の目的なのか話がありました。私たちは、ガラス状で縁がぼろぼろに崩れ易そうな、だいたい縦4センチ、横3センチで、数ミリメートルの厚さの薄片をもらいました。『小さなナイフ』が分配されました。私が思うには、これは貯蔵箱の周りに止めてある金属テープで作ったものです。そして、それを使って私たちは雲母の一片を、『剥離』しなければなりません。つまり、何片かのとても薄い膜状のものに剥すのです。気が遠くなるような精巧な作業！ 出来上がったものは、私たちの前に並べて置かなければなりませんでした。それからヤップンが点検に来ました。その男たちは、それをするのが器用なのです！ 私たちが良いと思ったものでも、彼らは更に2枚から3枚に分けたのです。私たちは、粉々にしないこと、という忠告つきで小さな薄片をもう一度もらいました。ゆっくりすることはよいのですが、上手に仕上げなければなりません。じっと見つめながらその剥片に苦勞し、その間にも左右を観察しながら、思う存分おしゃべりを楽しみました。それが男性たちを苛立たせたため、静粛にするように命令が出ました。それは到底できないことでした。なぜならば、私たちは笑いを抑えられなかったからです。その一人は他の一人よりももっと斜視でした。ついに、上手に剥離された剥片は全部、注意深く籠に入れ、くずもすべて無駄なく別の籠に集められました。それは戦争素材のためらしいので、モットーは「慌てずにしましょう」。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月15日

高等市民学校の上級女生徒たちは、2、3週間前からズスさんの提案により、また所長の承認を得た規則に従い、水の入ったバケツを鎖状に並んでリレーしなければならなかった。これらのバケツは、各棟から一時的に借りなければならなかったが、明日からはもう必要ない。説明をすると、バケツのリレーは殆ど誰からも気に入られる手段ではなかったのである。満足した者はバケツも無く子供もいない人、従って極端な少数派であった。これらの女生徒たちが『**確実**』にしなければならないことは、今日になって明らかになった。

一昨日以来、度々ヤップンの来訪があり、彼らは小家屋8番と9番へ行った。次に昨日は、いくつもの籠にいっぱい雲母が着いた。そして今日、高等市民学校の女生徒たちは雲母剥離作業に配属された。アンスさんは毎日午後、20名の婦人たちを探し集める指示を受けた。これらの女性たちは、この雲母剥離班での作業を午後の勤めとしなければならない。雲母剥離作業は戦争の目的らしい、と思われている。もし、これが本当であれば、日本は雲母剥離作業場を正当化できるように、故意に夷弾いだんの話をしたのである。オーストラリア人たちは、私たちがここに抑留していることを知っているので、私たちはこの収容所のどこにも恐れを感じる必要はない、という所長のノーアさんに対する主張は、焼夷弾が私たちに示した事実とは殆どと言うよりも、むしろ全然合致『**しない**』。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月18日

朝のうちにM(マルセイユ)医師は所長より、すべてのトイレ、ごみ捨て場、下水溝に石灰を撒くように指示を受けていたが、これはまだ完了していなかった。午後ヤマジの命令により、大人全員が水の入ったバケツとサブほうき(箒)を持って、清掃するために各々の食堂へ行かなければならなかった。その後、彼は棟毎に石鹼を配給し、みんなは2回目の清掃をする必要があった。今度は天井もするのである。その結果、第1回目のすべての作業は無駄であったことになる。そしてヤマジ自身、散在するいくつもの食堂と食堂の間を、絶え間なく自転車で往復していたので誰もが非常に忙しく働いた。水はちょうど再び偶然にも水位が高くなっていたカリ(水路)から、バケツにたっぷり汲むことができた。ヤマジの点検活動のおかげで、次の食事時間中、明るく濡れた食堂が私たちの目前で輝いた。伝達係は連絡簿だけではなく石鹼も持って巡回していたとき、一瞬、トコ スラバヤ(スラバヤ商店)⁴⁰のように感じた。

⁴⁰ 筆者が戦前に利用していたと思われる商店。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月1日

所長は来週から、毎日『一回』パンの給食を開始したいため、運搬作業班は必要と予想される穀粉を作るため、製粉班に変わった。そのため、かなりの製粉作業、ふるい掛け、そしてパンを焼く作業が、これに伴うにもかかわらず所長はこれを達成した。彼は、一度に50のパンを焼くことができる巨大なかまどを設置させた。運搬作業班は従って殆ど無くなった。

クーリーたちはトラックから荷降ろしをした。その作業を最初の頃は婦人たちだけで、その後はクーリーと婦人たちが一緒に行なった。所長は、明らかにクーリーとはもう関わりたくないのである。キャッサバ菜園班も完全に解散された。以前いた50名のうち、まだ8名が残っている。そのほかは全員、現在125人が働く裁縫作業場へ移った。水田作業は現在、大部分がクーリーによって行われている。10ヶ月ぶりに、2台の荷車満載のクラッパース（ココナッツ）が再び入荷し、みんなは有頂天になる。ヤウストウラさんが所長にこのことを依頼してあったもので、彼はこの要望を聞き入れたのである。

コートウン

1945年1月4日

ものすごい人数のクーリーが、今日、収容所にどしんどしんと歩いて入ってきました。100人と聞いています。彼らは防空壕を掘り始めたのです。各々の防空壕は70名用に計画されています。それらには更に屋根が付けられるようです。

コートウン

1945年1月30日

『耕作班はクテラス（クテラ芋）の掘り出しでえーす！』 休息時間は終わってしまった！ ひどいことだ！ 私たちの休みの日にいつもそんなことがある！ 幸いなことにエリィ・ムールニッケルさんと私は、偶然、今朝もう私たちの水を共同炊事場に運びました。7杯のバケツの水を私たちは毎日運びます。私たちの分4杯、ムールニッケルさんの分を2杯、そしてローフマンヌチュさんの分1杯です。水はたらいの中に五等分され、各々のたらいの脇にバケツが一つ付きます。たらいの内側には、はっきりしたかき傷が付けられ、線ひき係全員がバケツ5杯分であるかどうかを、もう点検しました。

もう一度、クテラ芋を掘り出すお話に戻ります。このところ毎日のように雨が降り、クテラ芋を土の中から掘り出す必要があります。それで7番、8番、9番のトイレ裏の畑へ行

かなければなりません。少年たちも呼び出されます。パランス（なた）を使います。それは泥の固まりなのです。そのための作業が準備され、誰もが何かしら役割をもらいます。パチョレン（鋤作業）、植物を引き抜くこと、クテラス（クテラ芋）を掘り出すこと、籠に詰めて市場用バラックへ運ぶこと、幹を少年たちの所へ持っていくことなどです。彼らは熟練した手つきで、それらを細かくします。なぜならば、これらの幹を再び繁殖させるからなのです。

時々、雨が少し降りますが、たいしたことはありません。引き抜き作業をする人たちは、その植物から落ちる水滴からでさえずぶ濡れです。ようやく、本当にやっと作業が終わり、少年少女たちは帰ることを許されます。私たち年長者は、木切れが入っている籠をキャッサバ菜園へ、それからファン・ディユンさんとフリーさんの所へ運ばなければなりません。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月8日

所長はV（ファルダーポトウ）さんの事務所に入ってきた。そして伝達係に向かって「黑板をきれいに拭け」と言った。伝達係は雑巾を掴もうとしたがヤマジが既にそれを取り、自分で黑板をきれいにした。そのことから、私たちは彼が『**どんなに**』神経過敏になっていたかが分かった。それから彼は黑板の左側から始め、上から下へと明らかに彼が最善を尽くしたと判るように、私たちには無論、皆目分からなかった何かを『**日本語**』で書いた。それから彼はヘニィ・Nさんに向かって「ハリ イニ ダタン フウヴェルヌール フウヴェルヌール、ムライジャム 9.40（本日、総督方の来訪、9時40分より開始）」とここにオランダ語で書け、と言った。

それでヘニィさんは所長が脇に立ってじっと見ている所で、できる限り綺麗な文字で「総監方の視察、9時40分より開始」と書いた。そして所長は、伝達係に『**掃除をしろ！！**』と大声で言ってから出ていった。それから彼は朝、同じように清掃のため配置してあった警官を、長い槍をもった兵隊と共に柵の外側に整列させた。これらの兵隊は今朝、新しい制服で行進して到着した。彼らは、この制服を司令所の裏手で脱ぎ、それから草刈をするため、作業ズボンに着替え上半身は裸である。そして今度は、青い制服に身を固めた長槍を持った兵隊は、パレードを始める姿勢で柵の傍に、その隣には、ヤマジの命令により、一昨日支給された新しい制服を着た警官が立っていた。「命令第36号。1945年3月8日。視察が順調に行われたことに対する褒美として、本日これ以降、すべての勤務を免除」。この視察に関連して、神父はたいへん容易な方法で、豚を収容所の消費に貰うことを心得ていた。ヤマジは畜殺の責任者である神父に対して、「明日わしが訪問客と共に一巡してきたときは、お前は畜殺中ではなければならない」と言った。「そんな小さな水牛には、たいした時間は掛かりません。そんなことが、どうしてできますか」と神父は尋ねた。「明日の分は大きな水牛だ。お前はそれをまだ見ていないのか？」とヤマジは聞いた。「まだです。しかし、もし更に豚も一匹畜殺する

のであれば、私はもっと長い時間取りかかっていることは確かです」と神父は答えた。「よし、分かった」と所長は笑いながら言った。それで収容所では明日は豚、つまり『ナシィ ゴレン（香辛料のきいた焼き飯）』が食べられる。（がっかりさせられることに、所長はそこから20キログラムの赤身の肉を取り、マカッサルにいる同僚に持っていった）。

その視察そのものは平穩のうちに進行した。10時15分前きっかりに、訪問客は2台の車で到着した。最初の車には少し地位の低い役人が、二番目の車には重要人物が乗っていた。このような「地位の高いヤップンの高官」がそうであるように、また彼らは重要な何様であるとは見えなかった！ 彼らは10時に散歩を開始し、無論また真っ先に養豚場へ、それからキャッサバ菜園、新集合バラック、共同炊事場、集合バラックAへ行った。彼らは11時にはV（ファルダーポルトゥ）さんの事務所にいたので、この視察を記録的な時間で消化したのである。

前を歩いていた所長は、その後ろに続いていた最高位の賓客に、外側からその事務所を示し、説明のための言葉を少し添えた。それから彼らは表側の方へ歩いていった。そこではV（ファルダーポルトゥ）さんが（規則に従い）入り口の扉のところでお辞儀をしていた。そして伝達係はその後ろで（これも規則に従い）お辞儀をしていた。次に彼らは裁縫作業場、集合バラックB、そして学校と診療所へ行き、それから司令所へ戻り、その少し後に出発した。ヤマジは、その日の残りの時間はもはや姿を見せなかった。疲れたとみえて「第二番」の部屋へ行き読書をしていた！！

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月16日

ディッキィ・B君は、次の月曜日に所長宅で仕事を始める。以前、彼が実際に順番になったとき、母親がそれを飛ばさせたのだった。彼女は、所長から代償として残飯をもらうことが慣例となっているそこでの仕事を、息子がすることを望まなかった。ところがディッキィ君自身はずっと彼女に腹を立てていて、「畜生め」と言った。「一日中お腹をすかせて歩き回っている僕が、3週間もの間、十分な食事にありつけるチャンスをもたらえるというときに、母さんは邪魔に入る」と彼女に向かって言った。そして今、母親はそのような訳で所長に尋ね、息子はそこで働いてもよい、という承諾を得た。所長は実際には『背の高い』少年を希望していなかった、ということについては何も言わなかった。彼は、背の高いジョンゴスン（家事手伝い人）を見上げなければならないことを『望まなかった』ことについて、かつて確かに言ったことがあった。そして今までのところ、この例も決してなかった。

このジョンゴスン（家事手伝い人）の慣例は、だいたい一年ほど前に、少年ドウ・G君とB君たちで始められた。当初は、殊に前記した日本人の食卓からの残飯による役得のことで、憤慨の大騒動をひき起こした。しかし、その間『正に』この役得のおかげで、たいへん好

評になった。上記したディッキィ・B君の理由づけを見てください。

コートウン

1945年3月26日

今朝、私たちは養豚場で、また肥料を引きずらなければなりません。みじめなことです！ウジ虫がうごめいているその樽は鉛のように重く、それをキャッサバ菜園へ完全に運び込んだら、足ががくがく震えてしまう。何回かしてから、私たちは樽の半分まで入れることにしました。そのことで文句を言われたのです！口喧嘩！「高等市民学校の淑女たちは、そうであることを気高く思っているのか、または体がきゃしゃに出来過ぎているのか？」「そうではない。私たちは、ただ怠け過ぎただけなのだ」等々。私には全然分からない。彼女たちは私たちの手助けなんか全然欲しくないという、そんな感じを受ける。それならば、それでも構わないわ！

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月28日

養豚班は全員が呼び出され、12名の婦人たちが他の勤務、主に裁縫作業場と穀物作業班に異動させられた。その目的は、養豚場が今後は70名の少年たちによって営まれることにある。現在すでに54名おり、殆どすべての婦人たちは除外される。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月19日

防空壕は、少なくとも牧師の担当であった部分だけは完成し、残りはクーリーたちがする。牧師は所長から謝礼として一日休暇を貰った。彼は喜びに輝いていた！！「日曜日でもなければ、休日でもないのに『それでも』私には休みがある」。何をするつもりかと妻が尋ねた。「何もしないさ」と彼の返事。「ただ自由であること！！」。そして彼は所長から、更にチュ（お酒）も一本貰った。それには言葉が添えられていた。「わしは、お前が酒を飲まないことを確かに承知している。だが、お前はそれを他の人たちに、いつか奢^{おご}ることができる」。ヤマジの示した厚意は素晴らしく、牧師をたいへん喜ばせた！！

1945年4月29日

安息時間の真最中に、伝達して回るバラック主任に驚かされる。「すべてのカーテンを揚げてください。『高官訪問』がこちらへ向かっています。バラック内とその周囲の清掃をしてください」。こうして、私たちの日曜日午後の安息時間は過ぎていく。そして第1棟のバラック主任による、その時間の始めに伝えられた「今日は日曜日なので、安息時間を3時ではなく3時半までにする」という通知は取り消しとなる。私たちはベッドから飛び出し、伝達係は司令所へ急ぐ。そこでは所長が病気のため、ひどい汗をかいて歩き回る。重要人物付きの3名の伝達係は、既に表ベランダに立っている。所長は、すべての命令をV（ファルダーポルトゥ）さんに与える。彼女は、それらのことを伝達係に知らせるため教会用の棟に向けて走り、命令を伝える。「訪問客が着席するまでは、幕は閉めておかなければならない。それから開き、直ちにダンスは開始されなければならない。その後、ダンスをする者は一列に並び、Gさんが「キイツケ（気を付け）」と号令をかける。それから全員がお辞儀をし、来客はそこから去る」。

高官方は到着するや否や、養豚場の方へ行った。（おそらく最初の2ヶ月間は、マカッサル向けに豚は畜殺されないであろう。それは、成長した豚がいなかったためであり、収容所としては毎回、豚の脂40キログラムの違いがある。）彼らが新しい集合バラックと、特別食用炊事場の視察をした後、教会用バラックに到着すると同時に、すべてがプログラム通りに進んだ。しかし、予定通りでなかったことは、豪雨が始まったことだ。所長は重要人物の後ろで、3人の伝達係の間に挟まれて着席していた。病気の身である所長は、毎回ヤップンから拍手の褒美^{ほうび}をもらうダンスについての説明を、陸軍大将に耳打ちすることに苦勞し、その間にも後ろを振り返っては外の豪雨を心配そうに見る。

それから彼は立ち上がり、V（ファルダーポルトゥ）さんに向かって「アダ パヨン？（傘はあるか？）」と聞いた。V（フェルダーポート）さんは伝達係に「貴女、傘を取りにいらしてもらえますか??？」と頼んだ。伝達係はもう随分前にパヨン（傘）のことで所長に依頼してあったが、それをいまだかつて貰っていなかったため、その『パヨン（傘）』という言葉で、雄牛に赤い布を振るように所長に激怒し、彼女は所長を不機嫌そうに見た！ところが彼女は「はい。第1棟から」と言って走っていき、修道院長に5本の傘を直ちに渡すよう頼んだ。暫くしてその5本の傘を腕に抱えて、教会用バラックに再び入ってきた。V（ファルダーポルトゥ）さんとアンスさんはそれを見たとき、どっと笑い出した。彼女は傘を所長の後ろに置き、「パヨン アダ トゥアン（傘はそこにあります、トゥアン）」と控えめに^{つぶや}呟き、高官の一行の前で丁寧にお辞儀をしてから姿を消した。少し経って彼らは出発したが、土砂降りだった雨はわずかな霧雨に変わっていたため、所長は迷いながら傘の方を見て、その一本を取り上げた。そして5本全部を掴んだものの、またその全てをそこに戻し、貴賓と共に診療所を経由して司令所へ向かった。

コートウン

1945年5月25日

やれやれ、また終わった！ 食事時間の少し前に、所長からの命令が来た。「オキーフさんのグループは『高官訪問』にあたり、ダンス披露しなければならぬ」。それで、そわそわしてしまいました。私は衣装のことで、野兎のようにフレティさんの棟へ急いで向かいました。それから、とにかく全てを作り上げるために、縫うこと縫うこと。教会用バラックの中に、列になったかなりの椅子が並べられました。訪問客が到着する前に私たち一同、もう一度ダンスを練習しました。特に小さな子供たちには、それは確かに必要でした。そして、それからただ待ちました。やっと彼らは、のんびりと、ちょっと威張って入場してきました！ 本当に腹が立つこと！ 私たち全員、もちろん『微笑む』ことなく踊ったのです。彼らは、終わった後にもまだ拍手喝采していました！ お母さんは、私たちがそれをしたことに、賛成ではなかったのです。幸いなことに、ダンスをすることは禁止しませんでした！ 夕方警報。数時間続きました！

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月31日

今朝10時にマカッサルに出発した所長は、2時半に非常に心配そうに慌ただしく戻ってきた。彼は即刻、V（ファルダーポートウ）さんと呼ばせた。彼女に向かって半分は吃りがちな言葉で、思案しながら頭を掻き「アパ サヤ マウ ビラング（何と言ったらよいのか?）」と言う。高官訪問があり、このことを全棟に伝達しなければならない。バラック内とその周辺のはき清掃、洗濯物の取り入れ、オルマット ブザール（最大の敬意）を表すなど、いつもの規則に従うこと。

所長は『非常に』不安そうである。彼は、自分の犬を後ろに伴い自転車で教会用バラックに入場する。彼は、「長椅子を完全に取払い、そこに安楽椅子4脚と小机が1つ、そしてその後ろに鞆の背もたれが垂直な椅子5脚」、と指図する。それから彼は長いこと鏡の前に立って、髪をびしょびしょに濡らし、分け目を付けようと試みるがうまく行かない。しばらくして賓客は到着し、当然ながら最初に養豚場へ、そして集合バラックCとA、さらに教会用バラックに立ち寄る。

3名は安楽椅子に腰掛ける。所長と副官は、後の背もたれが垂直な椅子に腰掛ける。彼は2、3人の耕作少年たちが、その訪問客に運んできたレモネードをせわしく飲みクッキーは断わる。予期していなかった出演にもかかわらず、たいへん順調に進んだ独特な踊りを、賓客は関心を示して見た。そして彼らは、学校と裁縫作業場に沿って司令部の方へと姿を消し、少し経って車で去る。豚運搬用の荷車に過剰の残飯が見つかり、私たちはその罰として今後は

お米を減量される。

コートウン

1945年6月26日

私は今しがた、ベレミィさんが彼女の会食で歌った詩を手に入れました。私は、彼女も何かし
ようとするのを、ほんとうに素晴らしいと思います。彼女は、実際たった一人きりの小さな
班なのです。

カンピリ、私は小さな椅子に座っている。

あなたは、それが何処なのか、きっと知っています。

カンピリ、行動の開始を知らせるときと危険時に鐘を鳴らす。

カンピリ、女性たちは全員、私のいるこの場所を通り過ぎる。

わたしは、思い思いの格好をした屈強な女性たちが、あくせく働くのを見ます。

食糧・物資

報告書

カンピリ収容所報告書

一般概要

A. H. ヤウストウラ

1943年5月3、4と5日にマリノグループがカンピリに到着した時、初めの数日は、アンボングループがこの人たちの食事を用意しました。このアンボングループは既に1943年3月22日、カンピリに着き、最初から1943年9月6日まで共同で炊事を行ないました。ここでは誰一人、炊事用具を持っていませんでした。

しかし、マリノグループは自分たちのなべや平なべを持って来て、5月6日からバラック炊事班により、棟ごとに炊事が行なわれました。用具が古くなり、最低限必要な台所用品がなくなるため、これらについて改善が行なわれなければなりません。大きなドラム缶が供給され、アンボングループの炊事場では石造りのグダン（倉庫）の仕切り壁が壊されました。大きな釜戸のたき口が煉瓦で造られ、このようにして共同炊事場が出来上がりました。

この共同炊事場は1943年9月6日に使用開始されました。バラックではそれぞれ朝食用パップと飲料水、コーヒーと紅茶を用意し続けられ、病院用炊事場は初めから第1棟に置かれ、病院の患者用飲食物が準備されました。1943年9月21日に病院の炊事場は活動範囲を広げ、医者の方箋による特別食が個々のバラックの患者にも調理されました。こうして病院用炊事場が特別食用炊事場となり、常に約200人分用の食事が用意されました。1944年6月、共同炊事場では自分たちで粉碎した米粉、デデッ（もみ殻）そしてウビ（芋）の粉でパンを焼きました！一人につき一週間に一回、パン4切れ、後には一週間に二回、半人前用のパンに増えました。

初めの数週間の食料の備えはマリノの時と同様に、クパラ カンボン（村長）が全て持って来ました。1943年5月の最後の週より、食料はマカッサルから定期的に車で運ばれ、その一方、クパラ カンボン（村長）は一週間に二回、少量の果物、卵、野菜、水牛のミルクを供給しました。収容所では1943年12月6日から少量の自製牛乳が得られました。

グダン（倉庫）には十分に備えがありました。それらは赤米・白米・クタン（もち米）・ジャガイモ・赤豆・白豆・カチャン イジョー（小エンドウ豆）・カチャン タナ（殻をとっていない落花生）・玉ねぎ・塩・塩水魚・ココナッツ・ココナッツ油・グラ ジャワ⁴¹（赤シュロ糖）・グラ パシール（グラニュー糖）・インドネシアの醤油・トウガラシ・様々な香料・コー

⁴¹ 文字どおりの意味はジャワの砂糖。ここではある種のヤシの樹液から得られる。

ヒー・紅茶・石鹼・サブ（箒）・サブリディ（ほうき）・縄でした。

一日おきにマカッサルから2台の車が来て、在庫を補充し、卵、新鮮な肉、野菜を補給しました。1943年12月からはマカッサルからの食糧補給は米・塩水魚・ココナツ油・紅茶・コーヒー・香料と最も不可欠な物に限られました。野菜は自分たちの菜園より供給され、およそ毎週の仕事日には収容所内で水牛が蓄殺され、時々豚も蓄殺されました。収容所での規則は、毎日3回の米食、朝食はおかゆ、昼食と夕食はブイヨンと米、時々サンバル⁴²、また野菜と肉の量は季節や水牛の大きさによって左右されました。米食の単調さの変化として、たまに自分たちの芋畑から掘り出したウビ（芋）を食べ、週に2回半人前のパン食が得られました。

カンピリ収容所報告書の解説と補足

ファルダーポルトゥ

カンピリでの食糧事情は最初の年は比較的良好であると言えますが、徐々に月日が過ぎれば過ぎるほど、どんどん悪化していきましたが、多くの抑留者たちにとってあまり惨事にならなかったのは、その大部分はキャッサバ菜園や野菜畑での女性たちの継続的な労働のおかげです。

これらの菜園では日が経てば経つほど、より多くの野菜が収穫され、婦人や子供たちのビタミン不足による兆候が現われたにもかかわらず、殆どの人たちは余りひどい症状になりませんでした。

1945年7月17日の爆撃まで、全部で17匹の豚が収容所のために畜殺されただけでした。爆撃により、沢山の豚がひどい火傷を負った時、収容所は、より多くの豚肉を手に入りました。所内でのヤギにはたいへん面倒が掛かりましたが、1945年5月に初めて収容所にヤギを畜殺することが許されました。水牛は一日に一頭畜殺と、かなり良く手配されていましたが、たいいていの水牛は非常に小さく、痩せていました。ほんのたまに、牛肉の全量が50キログラムの時がありましたが、普通は25から30キログラムで、これを約1600人で食べなければなりませんでした。そこで一人につき一日の割当は、平均4平方センチメートルの肉と100グラムの水のようなブイヨンでした。

カンピリ収容所報告書

衣類および他の必需品の小包補給

N. M. ファン・マストゥリフトゥー パンテクック

カンピリに抑留された第一グループの女性と子供たちはアンボンにあった収容所から移動し

⁴² インドネシア料理で使われる赤とうがらしなどでできた調味料。

た人たちで、アンボンでの爆撃の際、事実上すべての衣類を失いました。この人たちにはカンピリ到着後、自発的に手放され、セレバスのどこかで婦人や子供たちにより収集された衣類が都合されました。最後のグループ（セレバスにある収容所に抑留された女性と子供たち）もカンピリに移送された時、すぐに自分たちの衣服がここでの重労働に適していないことに気がつきました。

この点については、比較的早く仕事着を採用することによって対処されました。それは差し当たり、収容所運営で重労働を行なう人たち用だけでした。他の人たちに対して、この管理会は避難の際に残された家財からの衣類発送を受け取りました。一年後にはこの人たちにとっても、衣類不足がかなり深刻になり、そこで収容所長と相談し、上記に示した条件の下で、全員に仕事着が使用できるように決められました。きちんとした洋服のなかった人たちはさらに自分たちで選んだレーヨンのワンピースをもらいました。

布の分配は時には停滞しましたが、常に限られた量で続行することができました。戦争期の状況下で、皆の必要に応じるのにたいへんな苦勞をしましたが、度々、何の理由もなしに、不満が蔓延^{まんえん}しました。

配給制の設定は改善をもたらしました。つまり、この配給制の効果はより公平な配分（収容所長監督の下）をもたらすにちがいないという意見があったからです。そして収容所での素朴な生活様式は、必要であるものを結果的に少なくさせていくことに段々と気がつき始めました。衣料管理会にとって、配給制は管理上、改善を意味しました。それは各々が受領したものに、はっきりした概要がつかめたからです。管理会は与えられた衣料で、収容所での指示された任務を十分に果たすことができました。

カンピリ収容所報告書の解説と補足

ファルダーポルトゥ

カンピリ到着時に衣服をまだ持っていた人たちにとって、衣類状態は1944年の半ばまでかなり良好でした。貧しい階級に属している人、またはアンボングループのように全てを紛失してしまった人たちにとって、これは非常に深刻でした。特に、雨季には多くの人たちにとり、衣料欠足は大きな困難をもたらしました。人々は着替えを持っていなかった為、時々、古く継ぎだらけの衣服を濡れたままで着ていなくてはなりませんでした。

蚊帳の供給も最初の年は完全に不十分でした。1943年11月7日の調査では、332名のアンボン出身抑留者のうち312名は蚊帳を持っておらず、305名は毛布さえありませんでした。1944年には蚊帳が徐々に手に入り、最後には各自に渡りました。毛布の支給に関しては、特にアンボングループにとって、たいへんひどい状態でした。アンボングループのおよそ200名は全抑留生活中、一枚の毛布も持っていませんでした。1945年の爆撃後、ようやく毛布を所有していなかった人たちは毛布として新しい米袋を受け取りました。

日記からの抜粋

ウッカーマン — テムプラーズ

1943年3月22日

衣服の入った箱がマリノから私たち宛てに到着します。そこは以前、山中の行楽地で、車では2時間半かかり、マカッサルの上部に位置します。現在では、マカッサル及びその周辺に1200人のヨーロッパ女性や子供たちが抑留されています。タントウイ⁴³の惨事で、焦げたエナメル引きの皿やマグカップ（大型コップ）以外、私たちは何の陶器類も持っていません。見つけた缶または石油こんろの下の部分を用い、食事をする人たちもいます。

シャボットウ — コートウマン

1943年6月1日

時々、抑留者たちはカンピリで自分たちが以前持っていた洋服に出会うこともあります。私たちがここにいた時、アンボンキャンプの人たちに空の缶^{から}、お皿や石鹸を少し供給しました。この人たちは（石鹸の代用として）絞り出したココナッツで体を洗い、未だに陶器の破片で食事をし、ほつれを縫う人たちもいます。女性たちは私たちの黒ずんだ洋服を着て歩いています。彼女たちは感謝の印として、私たちのグループが到着した日々にも料理をしました。

シャボットウ — コートウマン

1943年6月11日

食事は良くなっています。マリノ退去の際、ヤップンは金庫を持参し、その中にはおよそ3ヶ月分として、1200掛ける15セントがまだ入っていました。アンボンキャンプは現地人の長により食糧が供給され、初めのうちは私たちも同様でした。しかし値段はとても高く、お米はほとんど十分ではありませんでし、サユール（調理された野菜）に野菜の数切れが見つかり、一日に半分腐った小さい種類のバナナが手に入っただけで喜ばなければなりません。そして100人用分として、グラ ジャワ（赤シュロ糖）4つで我慢しなくてはなりません。ただ肉、魚や卵はマリノの時よりいくらか多くありました。私たちはこれについてヤップンに指摘したところ、彼らは現地人に腹を立て、彼らは食糧の供給を自分たちで着手しました。現在では週に数回、彼らはマカッサルからトラックを送ります。特に野菜の量はかなり増

⁴³ 大型爆弾により破壊されたアンボンにある収容所。

え、コーヒー、紅茶、白砂糖そしてカチャン（ピーナッツ）も少量ですが、毎週受け取ります。個人的に言いますと、私にとってたった一つ欠けているものはお砂糖なのです。

コートウン

1943年6月20日

人々は気が違っているのではないのかしらと思う！ 私たちはまた一騒動の場面に出会った！ 所長、ヤウストウラさん、ヴァイヤースさんたちなどの警告にもかかわらず、収容所ではいつも密輸をしようとする人たちがいるのだ。今度は「ボック」（ヤマジのあだ名で、豚の意味）自身がクーリーと一人の女性を現場で押さえた。

そのクーリーは牢屋に入れられ、その女性、フルシャーさんは交番に行かなければならなかった。最初に、彼女の全ての現金が取り上げられた。フルシャーさんは現金をまだ持っていた為、もう少しで打たれるところだったが、ヴァイヤースさんが彼女を弁護し、女を打たずに男である彼を殴らなくてはならないと言ったおかげで、容赦された。それからフルシャーさんはどこがくらくらするのかと問い詰められた。

クーリーが連れ戻され、フルシャーさんが言ったことと合っているかどうか確かめるために尋問された。「ボック」は後ろに向かって、何かわめき、二人の警官が駆け出してやって来た。「ボック」は太いこん棒を取り、クーリーを殴りつけた。気絶？ クーリーはまた打たれて生気づけられ、あるいは井戸水をあぶせられた。フルシャーさんはそれを目の前で見なければならず、彼女がちょっと目をそらしたり、目を閉じたりした時には、彼女も殴られた。所長は容赦なく、まるで獣のようであった。所長が疲れた時、クーリーをそのままにして放っておき、フルシャーさんは一ヶ月のバラック拘禁を受け、戻された。あの人たちはこれでいい加減に分かったのかしら？

シャボットウー コートウマン

1943年7月18日

3週間後には私たちの現金は使い果たされ、これにより食事に変化するかどうか、誰もが気になっています。私の考えでは多分変わらないと思います。日本人は私たちの健康をある一定の状態に維持させたいでしょう。それは毎月、私たち1500人の体重を量ることで分かりやすく、食事をもっと少量になってはならないのです。全抑留者たちの為に、彼らは私たちに金銭を稼がせるという見せかけの解決法を探します。約25台のミシンのある裁縫作業所が設置され、ミシンを持っていた私たちの数人はこれを手放しました。裁縫作業所で勤務するように指名された人たちは日給1ギルダー、手縫いの人たちは日給40セントを稼ぎ、これらは全て

収容所全員のためになります。これが何のために必要なかはっきりしません。金銭を手に入れることはヤップにとって困難ではないに違いないからです。

シャボットウー コートウマン

1943年8月2日

数日前に西洋風の衣類の入った大きな箱が届き、他の人たちと同じように、私は子供と一緒に古いスリッパなどをもらう為に列に並びました。自分たちが着ていた洋服を見つけ出した人もいました。多分これらは全て現地人に盗まれ、カンボン（小村落）から今、返還されたのです！

コートウン

1943年8月10日

今朝、マカッサルから洋服を積んで2台のトラックがやって来た。それらは衣服が必要な人たちの間で分けられるのだろう。私たちは洋服2着、1着はシインともう1着はフリイダ用、そしてシインにはパジャマを注文した。多くの人たちは自分たちのものであった衣服が分配されるのを見た。私たちは頼んだものをもらえた。

シャボットウー コートウマン

1943年9月5日

私たちの現金は本当にお仕舞いになってしまった様です。実際には既に以前から予期されていましたが、私たちのリーダーに元気づけられた後、隠されていた多額の金銭が入ってきました。典型的なことは、グダン（倉庫）には現在のところ多量の在庫があることです。低価格な日本軍の仕入れのおかげで、おそらく私たちは一日15セント以下で暮らしたのでしょう。

アンボングループはあと5ヶ月暮らせる蓄えがあります。ニッポンはこれを分配させたいのですが、約1ヶ月すれば現在と同様な状況になる訳です。金銭がなくなった後でも、私たちは今と同じ方法で食事を得ることが決まっているようですが、その代わりにヤップはできる限り多くのことを私たちに要求するでしょう。

裁縫作業所はおよそ20人から45人の裁縫係に拡大されなくてはなりません。彼女たちは私たち用と同様、ニッポン用のものも裁縫します。私たちには、例えば蚊帳、そして炊事係や耕作班の人たちには紺の仕事着を作ります。残念ながら生地は並外れに質が悪いです。それから3週間以来、ニッポンのために白いスポーツ用靴下が編まれ、毎月約100足を引き

渡さなくてはなりません。(賃金として1, 50ギルダーが勘定され、この金銭が私たちの為に使われるのです!)

コートウン

1943年9月6日

昨日、急に数台のトラックが椅子、テーブル、ベッド、たんす、棚などを積んで入って来た。トラックにあった物は全てマリノから来たがらくたで、何人もの人たちは自分たちの持ち物があるのを見た。全部が降ろされ、教会バラックにどさりと置かれた。当然のこと、カンピリの人たちはまたもう一度、椅子に座る心地はどうであったかを感じたかったが、すぐに『立ち入り禁止地区』とされ、楽しみはお仕舞になった。

コートウン

1943年9月21日

今日、全集合バラック用の共同炊事場使用が開始される。集合バラック一棟による使用は、一週間前から始まり、毎日一棟ずつ追加された。この機会を記念して6種類のおかずとナシィクニン(サフランのジュース入りの黄色いご飯)を食べた!! それはパーティーのご馳走だと言えるものだった。いつもこのようにおいしいことを願います。

コートウン

1943年11月23日

食事は時間が経てばたつほど悪くなっていく。今では、ご飯と薄いブイヨンだけで、数日間おきに野菜と魚が少しもらえる。

シャボットウー コートウマン

1943年12月12日

昨日、午後2時、一陣の突風通過の際、収容所の新規建設されなかった部分である市場用バラックと全ての食堂が崩壊しました。竹材が重なり合い、たいへんゆっくりと落ちてきましたので、誰も下敷きにはなりませんでした。

市場用バラックには2ヶ月間分の米がおよそ30トン、砂糖、塩、多量の玉ねぎ、木材などが貯蔵されていました。雨が降ると、これら全てを直にどこか他の場所に保管しなければならため、全員が手伝いました。救い出せるものなら何でも取り出すために、自然に打ち解けた共同作業が行われました。しかし、これらの濡れた玉ねぎはおそらく腐ってしまうでしょう。これよりひどいことは、一ヶ月後には米はかび臭くなり、食べられなくなるでしょう。この数週間の食事は特にお粗末で、ごくわずかな肉、半分腐った塩漬けの魚、そしてしばしば少量の野菜でしたので、これは厳しかったです。その日、マカッサルとここのある橋はバンジルデ（洪水）で流れ去り、その結果として、今日はカンボン（小部落）のパサール（市場）で1700人用に40束のカンケン（青野菜）を買うことができました。私たちはこの3週間、殆ど何のお砂糖も得られませんでした。グラ ジャワ（赤シュロ糖）の入っていない、かび臭い米のかゆで一日が始まりました。数々の奇妙な収容所疾病にかかるのは、私だけではありません。舌は腫れ裂け、私の足には厚く赤い斑点がでています。

コートウン

1944年1月19日

そこで私たちはその週、何の理由もなくコップとお皿をもらった！！ 何と楽しいパーティーだったのだろう。でもこれは、本当に必要なのであった。大勢の人たちはブリキ缶で飲み、お皿は壊れているか、又は漏れていた。もちろん全員が何かを貰ったわけではなく、ひどい場合だけのことだった。シンもコップをもらった。

シャボットウー コートウマン

1944年2月17日

私たちは益々自給をするようになり、マカッサルからのトラックはめったに来ません。水牛は現地人によりここに届けられ、神父様、牧師様そして2人の婦人たちにより蓄殺され、始末されます。先週の日曜日、子供が死亡して以来、私たちは現在では毎日水牛1頭（以前は3日に2頭）、そしてお砂糖を週に2杯の代わりに3杯いただきます。私たちの状況を改善するために、このような出来事が必要であるとは残念なことです。

フォスカウルー リムボーフ

1944年4月22日

翌日、大きな箱に古着を積んだトラックがやって来た。石鹸、糸、靴などのものを除いて、全て衣料品倉庫に保管された。

コートウン

1944年4月23日

所長はパンを焼く事を決め、各棟順番にパン食をとる。なんて素晴らしい事だろう。本当に信じられない。それはお米ととうもろこし粉で作られるだろう。米粉は自分たちで製粉しなければならず、それで今は『製粉班』がつくられる。所長は製粉台を既に注文した。これで私たちは少ししたら、16日毎に1回パンを食べられることでしょう。

シャボットウー コートウマン

1944年5月28日

数ヶ月以前から、野菜はもう運ばれて来ません。私たちは自製の野菜で生きているのです。勿論、これらの生産物はたいへん変動があり、時には十分過ぎるほどあり、それからほとんど何の野菜がない週もあります。これを埋め合わせるために現在では、『小屋（皆が住んでいる棟の部門）』の近くに個人菜園がつけられました。

フォスカウルー リムボーフ

1944年6月4日

ヤマジは大袈裟ではなかった。彼は J（ヤウストウラ）さんに、金庫調査が9名の人たちにより行われるであろうと言った。それは大変な事だと J（ヤウストウラ）さんは所長に言った。そう言ったのは10日前のことで、この10日間はカーテンをかけたか、簿記に数字を入れ込んだり、作成したばかりの帳簿を無効と宣し、再度数字の順番を変えて他の帳簿に記入させたり、事務所を完全に変えるように費やされた。

J（ヤウルトラ）さんは10日もの間、面会時間がなかった。なぜならこの面会時間を入れなくても、彼女の日程は既にぎっしりと詰まっていたからだ。6月1日からヤマジは毎日、彼らは明日来るであろう！という予報で私たちを喜ばせました？？そして毎回、彼

が私たちが騙していること、あるいは時々、彼自身も彼らが来るであろう????? と考えていることに気がついた。昨日は、少なくとも帳簿が用意され、表ベランダに置かれてあった。そしてもし彼らが今度来なかったら、ヤマジは彼自身をごまかしている!!! と私たちは理解する。

8時から私たちの寝場所にあるカーテンを上げなければならなかった。今、4時に彼らが訪れた。来たのは9名ではなく、8名で、それに非常に痩せて見えるダックスフントであった。この侵略に対し、椅子が十分になかった。そのため、一部の訪問者は立ちっぱなしでいた。J（ヤウルトラ）さんは帳簿を見せなければならなかった。そして彼らは50ギルダ一足りない事を発見した。それは有り得ない事です。全てきちんと合っていますとJ（ヤウルトラ）さんは堅く、説得力を込めて答えた。彼らは再度計算すると、今度の不足高は30ギルダだった。そんなことはあり得ませんとJ（ヤウルトラ）さんは言った。もう一度勘定すると、今回は合っていた。彼らは領収書のことが分らなず、説明が欲しかった。それはできません。領収書自体がその説明なのですとJ（ヤウルトラ）さんは返事をした。

キャリィさんは水牛について詳細を説明するために呼ばれた。6月1日には水牛6頭がいて、1頭につき186ギルダ、6月4日の現在では水牛は4頭いる。これら水牛4頭はまだ食べられてはいないのか？ それらは牧場にいますとJ（ヤウルトラ）さんとキャリィさんは答えた。水牛を見せなさいと日本人たちは言った。

J（ヤウルトラ）さんとキャリィさんは窓に寄りかかった。あー、困った。いつも事務所の前牧場に歩いている水牛がなぜどこにも見えないのだろう。こんなにたくさんのヤップンの帳簿調査訪問の際には、整列しなくてはならないと水牛は感じないのかしら。そこらじゅうにある水牛の糞は4頭の水牛が実際にまだ生きているという証拠にはならない。さてヤップたちは水牛を見ていないので、何か詐欺行為があるのではないかと言う顔をする。

調査中、彼らはもちろんの事、養豚場の方へ歩いていく事を決めた。そこはここへ訪問に来る各々のヤップが減じることのない注意を引き付ける所だ。散歩の途中で4人は考えを変えたらしく戻って来て、ダックスフントを連れ、車でマカッサルに消え去った。散歩の後、同行者の残りが事務所に戻って来た時、帳簿に関しての興味は少し減ったようだったというより、なくなったようであった。彼らは水牛について質問もしなかった。ただ一人だけ、一番手前の部屋に入って来て、ドイツ語とマレー語半分半分で細かいことをいくつか尋ねた。それから帳簿に判を押し、訪問者は車に乗り、去って行った。

フォスカウルー リムボーフ

1944年7月16日

昨晩は、所長の最新の命令により、誰もが動揺した。朝の野菜取りでは、共同炊事場一般用に使うため、棟々の間に生えている全ての大きなサウィ プラント（白いからし菜の植物）を取

り去らなくてはならなかった。これが動揺をもたらす原因となるのは理解できることだ。なぜなら人々は自分たちのつましい自由時間を使い、そして後で自分たちの家族に役立てることができるだろうという目的で、それらを植えたからである。中には公正に理解し、それならスタ（もう構わない）、収容所用に使われてもと言う人がいたが、他には、夜中に全部のサウイ（白いからし菜）を個人用に抜き取るものもいた。

フォスカウルー リムボーフ

1944年8月1日

日曜日以来、食事は、初めにヤマジ、または彼の不在にはヤウストゥラさんにより検査されなければならない。それから許可が下りた場合は、その後、食事のベルが鳴る。今まで所長は検査の際、「ほう、ブカン マイン（それほど、悪くない）」と感心して言った。それは主に米の質についてであり、僅かな米の量や小さいサイコロほどの肉が4つと大きじいばいのサユール（調理された野菜）の付け合わせのことではない。

フォスカウルー リムボーフ

1944年9月2日

ヤウストゥラさんは全バラック主任たちを呼び寄せ、臨時会合を開き、次の事を報告した。一昨夜、所長がマカッサルから戻って来たすぐ後で、彼女は彼の所へ来るように呼ばれた。そして所長が終業時間少し前である郵便局へ行き、そこでセレベスの全抑留者のために、オランダから郵便為替が届いた事を聞いたとヤウストゥラさんに話した。どのくらいの金額であるかについて、彼は今はまだ言えなかった！

フォスカウルー リムボーフ

1944年9月12日

ヤマジはヤウストゥラさんに、私たちが一人につき郵便為替46.64ギルダーを受け取る事を知らせた。つまりオランダはセレベスに2000人の抑留者がいると計算し、民間寄付で集められた10万ギルダーを送ったのだ。

収容所内の調理の件に関し、大きな動揺が起きた。私用炊事禁止にもかかわらず、フースさんは料理をして捕まった後、ヤウストゥラさんに呼ばれた。「空腹なので、私は料理し続けます。もし捕まえられたら、もちろんぶたれるでしょう」と彼女は言った。「もちろんで

す。しかし、ヤップが不機嫌な時は、無罪の人たちが罰を受けるという可能性が常にありますよ」とヤウストゥラさんは反対を唱えた。「そんなことはありません。今まで所長が人をぶつた時は、それはいつも正当でした。だから心配することはないです」とフースさんはヤウストゥラさんに言った。

ヤウストゥラさんは日曜日の安息時間に見回りをした時、フーシュ（フースの別名）さんが料理をしているのに出会った。これは二つの違反であった。すなわち、二つ目の違反は安息時間に、彼女が自分の居場所になかった事だ。ナシィ ゴレン（香辛料入り焼き飯）を今作っているんですねとヤウストゥラさんは彼女に聞いた。違います。米くずですとフースさんは返事をした。それを火から取りなさいとヤウストゥラさんは言った。いやですとフースさんは答えた。ヤウストゥラさんは3度も止めるように催促したが、フースさんは全て拒否した。J（ヤウストゥラ）さんは火にかかっている竹付きの平なべを取り、脇にどかした。平なべを取り上げる時、その中身が地面に落ち、ヤウストゥラさんはフーシュさんに、それを片づけなさい。さもなければ彼女の他の平なべも同じようになるでしょうと命じた。フースさんは言われたようにしたが、怒り狂って「さあ、所長の所へ連れて行けば良いでしょう！！」とヤウストゥラさんに怒鳴った。「そんなことを言う必要はないのです。私はその様なことは決してしません」とヤウストゥラさんは堂々と答えた。「それなら、私が自分でヤップに話しに行きます」と狂ったようにフースさんは言った。「好きなようにしなさい」とヤウストゥラさんは答えた。

それからフースさんは所長の所に行って、彼女と子供たちが空腹のため死にそうだと報告した。ヤマジはヤウストゥラさんを呼び、彼女に食糧について質問した。十分にありますと彼女は答えた。空腹に苦しむことはありませんが、午前中に、ただ自分の子供たちに何かおいしいものを作ってあげたかったです。なぜならパップ（朝7時）と午後の食事（1時）の間がこんなに長いからです。だが、皆は何でそれを作りたいのだ？ ご飯の残りですとヤウストゥラさんは答えた。ふーん、だが飯の残りがあるということは、米の配給が多すぎる訳だ。配給を減量することができるな！！とヤマジは言った。J（ヤウストゥラ）さんはそれを止めさせるように苦労した。この話し合いの結果は、各棟ごと一週間に一度、共同炊事場で何かおいしいものを作る事を、彼が許可したことだった。

フォスカールー リムボーフ

1944年10月4日

ライデン市解放⁴⁴ そしてオランダからの郵便為替の徴収。ヤマジは今朝、マカッサルから郵便

⁴⁴ ライデン市は1574年5月以来、スペイン人に包囲され、飢饉およびペストの流行に苦しんだが、1574年10月3日に解放され、その祝賀行事が現在でも毎年行なわれている。

為替の現金を持って来るために小さい皮製のトランクを貸してくれるように頼んだ。伝達係は軽率にも言葉を思わず出した。「私が持っています。所長様」。それから彼はそのトランクを見た。伝達係が自信満々でそれを置くと、彼は「もっときれいなものはないのか??」と尋ねて、彼女を直ぐにからかった。私は知りませんと伝達係は答えた。彼女は歴史的なものとなるトランクを受け取るための機会を失うと思ったが、大丈夫であった。というのは、所長はそのトランクを「第二番」(日本兵のあだ名)の方にずらした。彼は少ししてからそれを持ってトラックに乗った。「第二番」を去るのを見たものは、彼がいつ、そして『或いは』小さいトランクを持って戻って来るのを見るだろうかと思った。なぜなら午前中ずっと、エンジンのうなる音や爆音が聞こえたからだ。私たちは全員、興奮した気分を感じた。

夕方になって、「第二番」が戻って来た。彼が到着した時は、既に暗く、全部のヤップン紙幣を入れるには、そのトランクは小さすぎたのが分った。その結果、入れられなかった包みは「第二番」にばらで運ばれ、表ベランダにあるテーブルの上に置かれた。それからヤルストラさんが呼ばれて来た時、閉じられた包みに全額、つまり7万3千ギルダーがテーブルの上に置いてあった。それらは普通の紙幣の束であり、収容所の費用の支払用に毎月入って来るものであり、何の署名もないので、好きな限り印刷することができる。

これは収容所の多くの人たちにとって大きな失望であった。また今朝、1944年10月4日のリーダー会議で金が送られたのはバチカンを通してであると連絡された。ヤマジはタウパティカン(お前たちはバチカンを何だか知っているか)?と聞いた。はい、それは小さなカトリック教の国家ですとJ(ヤウストゥラ)さんは答えた。ヤマジはこれに同意し、バチカンと関係のある一人のヤップが送金を手配したのだと話した。多くの人たちはこの事であらう意気消沈したが、論理は次の通りである。オランダが占領されている間は、オランダ人はオランダ東インドへ一切送金ができなかった。しかし、オランダが自由であるということは、今、オランダは日本にとっては敵地にいると推定されると、つまり中立国であるバチカン(または国際赤十字、しかしこれは日本に認可されていない為、除外される)を通して、送金の助けを請うことができる。

ヤウストゥラさんは今朝、各個人に支払いが行なわれることを全リーダーに連絡した。つまり45ギルダーずつで、残額の2600ギルダーは裁縫作業場の金庫の800ギルダーに追加して、ここにいる外国人に分けられるであろうということだった。既に数週間に渡り、砂糖が不足しているのを考えると、絶え間のない空腹のため、45ギルダーよりもむしろ砂糖が欲しかった。

フォスカールー リムボーフ

1944年10月22日

午前中、神父は豚を畜殺し、それから女性たちはそれを直ぐに包装し、送付できるように事務

所に届けると、「第二番」が来て、その豚は畜殺する必要はなかったのだと言った！

ヤマジに問い合わせることができなかった。というのは彼は朝8時に出かけて、いつ戻って来るか、誰も知らなかった。その豚は前側の事務所に置かれたままで、一日が過ぎて行き、最終的に決断を取らなければならなかった。豚肉が悪くなる前に、どうにかしなくてはならなかった。そうして6時15分に炊事班長に次の命令がなされた。ヤウストウラさんの責任下で、その豚を収容所に使用する。炊事班長はあまり意気込んではいなかった。これは彼女にとって、土曜の夜にかなりの余分仕事となるからだが、収容所にとっては、日曜日またナシィゴレン（香辛料入り焼き飯）にお目にかかれるので良いことだった。

残念ながら、そのようにはならなかった。後でヤマジが帰って来て、豚が置いてあるのを目にして、私用車でその豚をマカッサルに届けよという命令が素早く下された。錯覚よ、消え去れ。

フォスカウルー リムボーフ

1944年10月30日

そうこうしている間に、裁縫作業所で何かが起こった。デイジィさんは彼女はこの悪い食事で、『プフ（ふー）』（デイジィさんの主張に特別な力を入れる為のため息）4時間半も裁縫作業所で座っていることはできないし、それをし続けることもできませんとヤマジに言った。ヤマジは、私たちが戦争中の国にいること、彼がおかずなしで、お米だけを食べさせることができることを私たちには理解できないのだろうかかと怒り狂った。ヤウストウラさんが直ちに呼ばれ、彼は、近頃女たちは何について話しているんだ。食事についてか？ なんとということだと彼女に怒鳴りつけた。ちょうど6時になってから、食事を給仕しても良いと、両方の調理場に伝えなければならなかった。

フォスカウルー リムボーフ

1944年10月31日

ヤマジは畜殺する必要はないと神父に叫べ。昨日起こった事の後なので、厄介な知らせであった。そしてヤマジは野菜に対し、全仕事を費やし、それには彼の汗が滲んでいるにもかかわらず、高く評価さえされていないと言った。なぜなら女性たちは、またクテラ芋、またテロン（なす）と軽蔑するように話す。彼は罰として、もう野菜を与えないであろうと脅かした。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月2日

デイジィさんが言った言葉が理由で、罰として食事は、今でも僅かで、たいへん貧弱だった。私たちは昼食には、ご飯と油で揚げた小さな魚を食べた。それは魚の身より骨のほうが多かった。夕食はご飯に水っぽい玉ねぎソースだった。しかし、朝になるころに、うれしい知らせが広まった。炊事場班長がヤマジと呼ばれ、彼は班長がたいへん痩せたと思い、処罰手段を停止しようと言った。

今日は2頭の水牛が畜殺され、150個のパンが焼かれるだろう。また自分たちの順番でない棟（普通配給につき、バラック棟のみがパンを受領した）さえも、パン一切れをもらえるだろう。それはニョニヤス（婦人たち）が空腹に苦しんでいたからだった！そして余分に2袋の砂糖、かご14個の野菜が分配されるであろう。更に返却しなければならなかったきゅうり、バナナも今や分配しても良かった（ただ残念なことに、半分はもう腐っていた）。数日以前より、空腹に悩んでいた収容所は、今や大喜びで、私たちは乏しい食事の日々の後、この『脂肪』を十分に高く評価した。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月6日

今朝はかなり多くの大袋の青色の生地が入って来た。各自2着の仕事着だと所長は言った。それらはできる限りきちんと裁縫作業場で縫合されるであろうし、それが必要な者は券を一枚受け取ることができる。ヤマジは券の配分を勝利の喝采と呼んだ。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月17日

彼は時々、非常に『独断的』に仕事にとりかかれることが、昨日の千枚のハエ取り紙の件ではっきりした。彼は表ベランダに腰掛け、入って来る子供たちに向かって微笑んだ。それから、彼は年少の子供たちが持って来たハエに対し、マグカップ一杯の砂糖をあげ始めた。ヘアミィさんはこれを書き留めなければならなかった。年長の子供たちがたくさんハエを持っていても、マグカップの4分の1、又は半分の砂糖をもらっただけだった。ハエが取れずに、ただ空のマグカップを持って来る小さな子供たちもいて、彼は笑いながら、砂糖と交換するようメモを取らせた。子供たちはグループになり、ヘアミィさんに書かれた券を持って、グダン（倉庫）で自分たちの分の砂糖を取って来るのが許された。バケツにハエが一杯になると、M（マル

セイユ)先生はいつものようにそれらをごみ捨て場に投げ捨てた。しかし今回、ハエで現金、また、好ましくは砂糖がもらえた。M(マルセイユ)先生に隠れて、風のように素早く、ごみ捨て場から、できれば手でブリキ缶に入れ、再びハエが集められ、所長の所でもう一度、砂糖と交換された。

フォスカールー リムボーフ

1944年12月20日

今朝、ヤマジの命令が下された。それらはクリスマスの休暇および表題・家族通知、つまり誰が入院し、退院したかについてであった。P(パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル)さんは今朝、収容所の過半数はテンテン(ピーナツクッキー)を作ることに『賛成』であったと通知した。この件が回覧された時、皆はこれを読んで驚いた。ノーアさんはどの棟がテンテン作りに『反対』か、各棟別ごとにきちんと調べるだろうと言った。ちょうど、P(パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル)さんが来て伝達係に、点呼はないでしょうと知らせると、伝達係は皆はテンテンの通知にびっくりしたと言った。P(パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル)さんは、そうですか。私、今時間がありません。私はこれから食事に行くところですとそっけなく答えた。ところで、それは所長の命令なのだと彼女は立ち去りながら言い足した。それならば、収容所の過半数ですと書かれてあつてはいけませんと伝達係は言い張った。それは命令ですので、仕方がないのですとP(パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル)さんは答えた。それでは、貴女はいつ所長と話したのですか?と伝達係は尋ねた。所長は既に一日中、外出です。私は大グダン(倉庫)班長からそれを聞きましたとP(パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル)さんは言った。私は今晚、ちょっとそこに寄ってみましょうと伝達係は答えた。

問い合わせにより、16棟がテンテン(ピーナツクッキー)作りに『反対』で、現物の砂糖発給に『賛成』であることが分った。なぜなら、前回、共同炊事場でテンテンをこしらえる際、非常にたくさんの裏金が流され、5000個のうち3200個が配られたのだった。ともかく、P(パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル)さんはクリスマス用配分前には、もう変更することはできないが、新年用配給の『前には』所長に相談してみるだろうと考えている。

フォスカウルー リムボーフ

1945年1月26日

本日の通知。民政部⁴⁵からの1660.15ギルダーが裁縫作業場により受領された。

コートウン

1945年2月3日

私たちは洋服がもらえる!!!! ああ、こんなことがありえるのかしら? 黄色いブラウスとつり付きの紺色スカート。さあ、これはうれしい補足物。なぜなら衣類の数は惨めになっているからだ。全てが「雲母一剥離一作業場」で裁断や、その種のことが行われた。と言うのは、未だに日記につけるのを忘れていたが、雲母剥離作業は終了したのだ。その後、私たちは、あー、単調さの苦痛。ズボンにボタン穴を縫わなければならないのだ。数え切れないほど! けれども今は、また気分の良い畑仕事をしなくてはならない。私の第1作品(ボタン穴)がズボンにある人たちを、私は本当に可哀相に思う。

シャボットウー コートウマン

1945年3月22日

食事はこの数週間わずかです。朝食には、ほとんど十分なパップさえなく、それから、昼食は、1平方センチメートルの肉を5個とクテラ芋5個と一緒に炒めたご飯で、夕食は頻繁に、ごはん小さじ一杯の野菜とマグカップ半分のいわゆるブイヨンで、脂肪分がありません。それから、これに加えて週に一回、マグカップ一杯にカチャン(ピーナッツ)・マグカップ一杯より少し多い量のお砂糖・マグカップ約四分の一のコーヒー豆、パップ用スプーン一杯のお茶をもらいます。週に2回、夕食には、配給米半分を差し引いて、パンが3切れでます。全強制収容所に訪ねたことのある日本の高官総監が、カンピリにおける食糧事情は特別に良好であると述べました。当然のこと、彼の言うことは正しいのです。3年間の戦争後、私たちは空腹というものを未だ知らないのです。しかし、他の人たちがもし私にヨーク、何て顔が青いのでしょーと言ったならば、それは特に、かなりの重労働のことを考慮すると、栄養分のある食糧の欠乏のためであることを、私は勿論知っているのです。

⁴⁵ 日本海軍の部門。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月25日

近頃、私たち全員、朝から晩までひどく飢えて、ブンキル（ピーナッツやココナッツを絞った後の残り）を食べる豚をうらやましく思う。もしこれを粉にし、焼いて、水で混ぜたパップの上にかけて、何とおいしいことであろう。そして少ししか手に入らない砂糖の代用になるだろう。収容所に脚気の兆候が現われ始めた時、私たちは豚の餌『デドゥッ』（もみ殻又は残りもの）をもらった。毎週でるコップ半分の砂糖に、毎週コップ一杯のブンキルも貰えたらいいのに、と今私たちはため息を吐くが、その様にはならないだろう。なぜなら、豚の方が私たちより高く評価されているからだ。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月13日

1945年4月13日の金曜日は、多くの常時、特別食受給者たちにとって、本当に運の悪い日であった。所長はきびしく干渉し、畑にいた約300名の人たち（特別食受給者）のうち、大部分が直ちに特別食受給から外された。所長のそばを通り過ぎなければならなかった人たちに、彼はチュクック（十分だ）と言った。つまり、もう特別食をもらえないということだ。3歳以下の子供たち、70歳以上の老人とその他の人たちで、合計約150人が残った。

まず第一に、畜殺の血は以前、特別食用炊事場や共同炊事場へ行ったが、今後はバラック棟用になる。つまり、私たち大多数は特別食用炊事場から、決して何も得ることがなく、殆ど一日中ベッドに寝たままの人たちが、脂肪のたっぷりある、おいしい食べ物をもらうことを私たちはじっと我慢して見ていなければならなかった。最大限の雑用をする私たちが、お腹をすかして一日中歩き回っていなければならぬのに、収容所のために何の仕事もしない寝たきりの人たちが私たちよりもっと量の多い、よりおいしい食べ物を得られたのだ。私たちは今、大喜びである。なぜなら、このような状況は長期において収容所にとり、大惨事となるであろう。と言うのは、収容所を動かす健康な人たち、今まで強かった人たちは、現在の食糧状態にうんざりするに違いないので、私たちは所長の処置に喜んでいるのだ。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月28日

棟々の米不足に関連する今週の通知。ドラムかん運びの女性たち、炊事係そして修道女たちは、自分たちの職場、あるいは棟で食事すること！ 今までそうであったように、両方の場所で

食事をしてはならない。伝達係は最初に、収容所リーダーの下書きを共同炊事場の班長に見せなくてならなかった。そして、班長に変更または追加をしなくてはならないかどうか尋ねると、班長はざっと目を通して「はい、よろしいですよ」と答え、イニシャルの署名をした。後でわかったことには、班長はドラムかん運びの女性たちと炊事係の人たちに、やはり、まだ米をあげているのだ。彼女に言わせると、その米はドラム缶の一番底からのもので、いわゆる同意したという通知を承知の上で巧みに言い逃れた。

シャボットウー コートウマン

1945年5月16日

前回日記を付けて以来、食糧事情の問題はいつそう切迫しています。所長は数回に渡り、余儀なく、米配給を減少させました。そのため、今では、およそ4週間以来初めて、私たち多数は今までよりもっと少ない量のご飯を、いただくのです。この状態を空腹と表わすことは間違いでしょう。ただ、『私のお皿はもう空になったのですか？』という不快な感じがするだけです。

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月25日

ヤマジは共同炊事場で忙しく、昼食用として、大変おいしい煮込みを自分自身でかき混ぜ、私たちは全員、おいしく食事をした。夕食用として、所長はチェレン（いのしし）全てを料理させ、そのため私たちは再度、おいしい食事をした。彼はまたキャッサバも炒めさせてくれた！！これから私たちはもっと米をもらえる。水田の最盛期が始まり、予想以上に良好である。

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月28日

今まで以上に、私たちの食事は良くなる。『一週間』用に割り当てたココナツ油の蓄えは2日間で使い果たされてしまった。更に、今日はロシアに対する日本軍の勝利を豚肉入りナシイゴレン（香辛料入り焼き飯）の料理で祝う。明日のバラック作業班祝祭のごちそう用に、牛が畜殺された！これは本当に家畜保有数の完全な清算となるのか、それとも偶然なことなのだろうか？

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月30日

所長は娯楽クラブ用に一人前の食器を購入する。ロールドオート⁴⁶の缶に入った砂糖に対し、スプーンとナイフまたはフォーク（彼は抑留者から買う）を購入。また、ほうろう引きの皿と交換に、娯楽クラブ用には石製の深いお皿。多くの人たちはこの申し出を有り難く利用した。なぜならば石製の皿は壊れやすい、所有するには不安だからである。

コートウン

1945年5月30日

私たちの『カーボーイ（弟）』は野生カモの卵を家に持ち帰った！！しかし約百人もいる棟で、『秘密』の卵をどうするのか？ 私たちはお母さん、又はエディだけでそれを食べてもらいたかった。それなのに、二人は皆が一口もらえるように、卵をかき混ぜなければならないと言い張った。それにデ・クルーのような人が隣にいたら、簡単にはいかないものよ。ともかく、うまくいった。それは、それはおいしかった！

コートウン

1945年6月9日

私たちのディナー！ 耕作班！ ほとんど全ての女の子たちがワンピースを着た。全くお祭りのようだ！ 私たちのグループはベランダの右側の部屋に座る。それから、さあ、おいしく食べましょう！ お皿一杯のごちそう！ 全てがピンクと黄色の旗で飾られた。私たちは本当に楽しみ、ありとあらゆる歌をうたった。

コートウン

1945年6月21日

誰だか色々な調理法を集めているらしい！ なんて一生懸命な人だろう！ まあ、いいわ。私たちは食べ物のことを話すだけ。そして全ての話題はどんな事があっても、結局また食べ物のことになる。それは一番おいしいメニューから、『チーズを挟んだ丸パン』、チーズを挟んだと

⁴⁶ 皮をむき蒸し、ローラーでつぶして乾燥したオート麦。

でも小さい丸パン、そしてチーズを挟んだとっても、とっもちいさーい丸パンまでである。

コートウン

1945年8月12日

今日の午後、警報が鳴り、再び近くに黄色い爆弾の雨が落ちた。警報解除の合図の後、女の子たちはお米を運ぶために呼び出された。ミアと私は小さなたらいを持っていったが、途中で戻って来た。ボスカンプへ行く途中、警報が再び鳴り、私たちは森の外れに飛ぶように走った。たらいをそこに降ろし、^{かんぼく}灌木を通り、ウタン（森）の奥へと逃げた。飛行機が近づいて来て、私たちは直ぐに地面に横になった。私たちはさらに物音一つ立てずに横になっていると、その時、ミアが急に『見える。見える。あなたに見えないものが見える』^{はず}47 と言った。それは、私たちのロンバッサン時期の表現で、近くに何か食べられるものがあることを意味する。私は注意して見た。そう、見つけた。パッションフルーツ^{はず}48、実がたくさんなっている木！ 私たちは飛び上がり、枝をもぎ取り、摘み取った。つまり私たちは喜びで狂わんばかりだった。私たちは嘔み切って、次々と無くなるまですすった。おいしい！ 私たちはたいへん楽しい思いをし、急に警報解除の合図の鐘を聞くまで、警報のことなど何も考えなかった。

⁴⁷ オランダの子供たちの遊び歌の一部。この後に、『その色は～色です』と続き、他の子供が『それは～ですか？』と何が見えたかをあてっこをする。

⁴⁸ (チャボトケイソウなど) トケイソウの食用果実。

保健・医薬

報告書

カンピリ収容所報告書

医療業務報告

医師 A. マルセイユ

当収容所のこれらの期間に於ける健康状態を、さらに詳細に熟視するならば、まず死亡率は、1,651名の住人につき33名で、全体の2パーセントであることが目立つ。健康状態を判断するためには、この人数より更に死亡8名を除外することができる。つまり爆撃により5名、そして狂犬病により3名が亡くなった。これら両方の死亡原因は、戦争による直接的影響によるものであり、収容所が置かれた衛生状況によるものではない。従って病気で亡くなった方々は25名となる。この数は医師たちが極めて有能であったためである、と考えられなければならない。

この収容所にとって最も懸念される疾病としては、赤痢、チフス、コレラ、ビタミン欠乏症、マラリアである。これらのうちチフスとコレラは発生しなかった。赤痢では1,021件の発生中わずか8名が死去。脚気は10件ほど、夜盲症は数10件。様々な病状の訴えは、しかし、人々がビタミン欠乏状態の瀬戸際にあったことを示している。腕、脚、そして顔の無感覚及び硬直は、恐らくそこに起因するものと言明されるべきである。最近の赤痢による死亡例は1945年8月9日で、やや重い症状の赤痢の複雑化による脚気が原因するものであった。

我々医師もそのため、致命的な結果を伴う赤痢、または他の伝染性疾患が、ある時期に急激に発生し得る、と絶え間ない恐怖のうちに過ごした。そしてこの心配は、殊に1944年11月に赤痢の発生件数が、著しく増加をたどり始めたときであった。腸チフスと赤痢は殆ど同様の感染原因を有していたため、チフス菌は収容所において、赤痢菌と完全に同じ発病の可能性を持っていた訳であるが、チフスはこの疾患に対する予防接種のおかげで、発生しないことが明白である。

そのうえ治療薬の供給も良好である、と考慮されなければならない。エメチン⁴⁹の入手が不可能であったことが原因して、死亡例が1回のみ発生した。医薬品の在庫量及び種類は、実際のところ非常に制限されていた。しかし、それでもなおかつ医療業務は進行するように、維持できなければならなかった。

収容所住人の精神状態は、益々大きな心配をもたらした。日々の収容所の決まりきった生活、つまり頻発する重労働、そして殊にすべての情報から閉鎖されることは、不平を言う

⁴⁹ 特にアメーバ赤痢の治療に用いられる。

こと、直ぐに苛立つこと、ほんの些細なことを大袈裟にすること、といった形で現われ、人々に間違いなく強い影響を与ていた。諸々の娯楽、たとえばスポーツ、ピクニック、クラブ、ピアノや芝居などを始めることにより改善が得られた。すべてのことを総合すると、収容所の健康状態はかなり良好であった、と結論されるべきである。

カンピリ収容所報告書の解説と補足

ファルダーポルトゥ

医療業務に関する報告。別の赤痢病棟用バラックの設置に際し、ヤマジはそこに塹壕さんごうを設けることを望まなかった。周辺での空襲がさらに激しく、かつ頻繁になったとき、既に負荷がかかり過ぎていた看護婦、歩行可能な患者、そして医師は、やはりバラックの傍に塹壕を造らなければならなかった。医師たちは所長にあらゆる方法で苦しめられた。彼らの仕事に絶えず干渉し、自分は医師たちよりも遥かに良くできる、といったように威張った。看護業務と同様、治療方法についても、所長から何度も無遠慮かつ侮辱的なやり方で批判された。とにかく既にたいへん厳しかった医師たちの仕事は、それによって、しばしば非常に妨害された。

カンピリ収容所報告書

一般概要と在庫調査

A. H. ヤウストゥラ

井戸は42あった。その内の一つは共同炊事場用のもので、現在、収容所に沿って流れる水路からの給水がある。その他の井戸は洗濯場として使われ、その内の31は浴場としても利用された。20の井戸は手押しポンプが備えられていた。床は煉瓦またはセメントで、浴場は竹のものであった。

カンピリ収容所報告書の解説と補足

ファルダーポルトゥ

ポンプが故障することにより、手押しポンプは非常に頻繁に使用不可であった。水はそのためポンプがまだ故障していない、遠くに離れている井戸から、何度も汲まなければならなかった。時間の経過が長くなればなる程、益々修理用の材料が少なくなった。殊に朝7時から夕方6時まで、班が交替で稼働し続ける必要があった炊事場のポンプは、かなりのポンプ係に肉体的に大きな損害を与えた。

日記からの抜粋

コートウン

1943年5月5日

もう一つ不愉快な問題はトイレに行くことでした。「お手洗い」は仕切られた狭い場所が隣り合わせに50ほど並んでいるものでした。それらはバラックの棟そのものと同じ位がっしりした頑丈な造りでした。1棟当たり8つありました。各々の場所は二つに分けられ、半分は砂で、もう半分はセメントでした。このセメントの部分には穴があり、その上でしゃがまなければなりませんでした。お年寄りの婦人たちにとっては、ぞっとするほどでした！ 流し込むために、水の入った桶を持参する必要がありました。

コートウン

1943年5月6日

洗濯はひどいものでした。井戸の水は、本当に泥水らしかったのです。そして干し物用ロープには黄ばんだ洗濯物がぶら下がっていました。この水を飲料水としてももらっていたのです。そんな訳で、時々ただの水なのに薄い紅茶だと思ったほどでした。

シャボットウー コートウマン

1943年5月25日

..、しかし、給水の話は収容所に着いた最初の瞬間から、会話の主題でした。炊事場の傍にある幾つかの井戸は、水を供給することは全然ありませんでした。トイレの傍の井戸はおよそ5日間、そして浴場脇の井戸は10日間水が出ました。それからは、収容所の最も中心に位置していたいわゆる「病院の井戸」に、炊事、おなべ洗い、水浴、洗濯用の水のために、1,200名の人たちが殺到したのです。指導管理者のこの問題への介入が遅すぎ、この「病院の井戸」も2週間後の夕方6時には既に水が出ませんでした。

現在、「病院の井戸」では炊事用の水だけは汲むことが許される、という規則です。そして私たちは洗濯するために、バラックの棟から歩いて10分の「アンボンの敷地」⁵⁰へ行きます。さらに水浴用の水も、そこから汲んで私たちの浴場まで運びます。これら2ヶ所の井戸の傍では、残念ながら水浴することは道徳上の観点から認められません。それらの井戸は露

⁵⁰ アンボンから来た人たちに割り当てられた収容所内の敷地。

天にあるため、また結局は私がお皿を洗い、粗末な便所（インドネシアの旧式のもの）で流すため等に使うどのバケツの水も、そこから汲まなければならないためです。飛脚のように小走りで、私は徒歩で一往復25分かかる所まで毎日3往復して、最低バケツ3杯の水を運びます。そして汗びっしょりになって、「見事な」泥の足で家に帰ってくるのです。

炊事班として他の人と一緒に、大きな桶に入った100人分のお米を、そこへ洗いにいくのです。ニッポンはこの問題に着手し、水を検査しました。そして水には細菌が溢れていることを証明しました。すべての飲料水は、従って10分間煮沸されるのです。バウドゥヴァインはじめ他の多くの子供たちは、[カンピリに到着してから]8日後に細菌性赤痢に罹りました。幸いなことに、それ程ひどい症状ではありませんでした。今、その2つの「アンボンの井戸」ではセメントの床を、そしてその周りにセメントの壁を造り始めました。水はその後、泥が少なくなりました。しかし、乾燥期を見通して、この問題をどのように解決するつもりなのでしょうか、私は気になります。

シャボットウー コートウマン

1943年6月11日

澄んだ水を供給する2つの、大きな新しい井戸が掘られました。そしてそれらの1つは、私たちの棟から3分離の所にあるのです。浴場にある井戸は掘り下げられ、当分の間また水を供給してくれます。私は3つないし4つのバケツの水を12分離れた所まで、これからは汲みに行かなくて済みますので、毎日確実に1時間の違いはあります。

シャボットウー コートウマン

1943年6月12日

この日記をもって健康状態の本題に入ります。私たちが収容所に来てから10日ほど経った頃、バウドゥヴァインは細菌性赤痢に罹りました。病院のこの赤痢病棟は規則により、3歳以下の子供たちのためのもので、そのとき既に満員でした。彼のためには[従って]そのとき場所は全くありませんでした（私はそのことを、たいへん嬉しく思いました）。ジフテリアを、私たちはマリノから持ち込んでいたのです。感染した家の人たちは別の車で運ばれ、ここ収容所のバラックに来ました。しかし、直ぐに新しい感染者が出てしまったのです。私たちの棟からも、幼い子供がうつりました。猩紅熱しょうこうねつでさえも4件発生しました。眼病の伝染が恐れられていましたが、食い止められました。

毎日マラリアの発生を報告する棟々があります。確実に半数の人たちは蚊帳かやをもっていません。これらの人たちの多くは、現在既に（私たちは収容所へ5月に到着しました）2回

目で、40度以上の熱を出して寝ています。1日当たり100名の人々にキニーネ⁵¹（5錠）が配られています。

これら1,500名の抑留者の内、平均して200名は病気のようにです。この数以外に下痢を慢性的に患^{わずら}っている人たちの、非常に大きなグループがあります。これは水と動物性脂肪の欠乏（しかし、ヤップが私たちにベーコンを食べるように与えたとき、もはや誰もこれを食べることができませんでした）、そして野菜不足などに起因するのです。実際にヤップンは、それらのことに恐れをなしたようです。今週、ジフテリアのワクチンが殆どすべての子供たちのために、そしてクレゾール石鹼液の大きな瓶（消毒薬は既に全然なかったのです）とマラリア調剤用色素⁵²も到着しました。

「アンボンキャンプ」には2名の医師がいました。1人はアンボン出身で、パレパレへ転任させられました。その方はアンボンでの爆撃の際、人々を助けるためにたいへん積極的に活動し、自分はブランダス（オランダ人たち）側に属すると考慮していたため、自発的に抑留したのです。私たちにも2名の医師がいます。男性と女性の抑留者です。彼らは従って現在は3人で活動し、腎結石の手術からトイレの点検に至るまで、かなり手がいっぱい状態です。

シャボットウー コートウマン

1943年8月2日

何もかもが過剰で、すべてのことを忘れるために、ちょっと泣きたいと思うような瞬間があります。以前「戦前」は殆ど考えることはありませんでしたが、私の体力も制限された感じがあります。収容所の人々の全般的な抵抗力は、この3ヶ月間にそのように減退し、かつてなかった程に病気が蔓延しているのです。

私たちの棟から今日、3名の大人が病院に運ばれました。そしてここには依然として15名がマラリア、赤痢、黄疸などで寝ています。私はそれ程多くの女性たちが、人目に付かない病気を持っているということ、いまだかつて知りませんでした。心臓や腎臓、脚の傷に徴候がはっきりと現われる軽度の肺結核などを患っている人たちです。私自身は116名（70名の子供たち）から成る棟の中で、最も丈夫な少数グループに属しているということが、しばしば厳しい義務づけられた作業をもたらすのです。

私たちの医師4名のうち、2名の女医のみが（肉体的には全然頑丈ではないにもかかわらず）この仕事に適任しています。私たちの棟は、生命のあるものに関心があるというよりも、むしろ哲学者であるような、そんな男性の医師の監督下にあります。40度以上もの熱がある子供をちょっと診た後、『まあ、まあ』と言って次のベッドへ巡回していくのです。その

⁵¹ 鋭い苦みのあるマラリア熱の特効薬。キニン。

⁵² 血液に色素を加え、その反応によってマラリアかどうかを判定する。

ような子供たちのために、毎日繰り返し血液用調剤を作ってください、たいへん活動的な棟専任の看護婦さんのおかげで、しばしばそれがマラリアであると判明し、そのような子供はキニーネをもらいます。

この薬の不足により、マラリアのあらゆる症状が示されても、マラリアが顕微鏡検査で発見されたときだけ、これは与えられます。トロピカ⁵³ は常に致命的であり得るということ を考慮に入れて、多くの母親たちは恐怖のうちに日々を生活しているのです。

ルッキキにも同じことがありました。彼女は3ヶ月以上もお腹が不調でした。私たちがもらうわずかな食べ物、その中のあらゆる物を食べてはならなかったのです。グラ ジャワ (赤シュロ糖)、果物、肉類と脂肪などは取れませんでした。精神的に、これは彼女にとって致命的に作用しました。私は繰り返し検査をさせ、今になって漸く^{ようや}アメーバ赤痢が突き止められました。彼女はエメチン注射⁵⁴ を5本打たれ、別の子供のように変わってしまいました。

シャボットウー コートウマン

1943年8月11日

病気発生件数は増加し、私たちの隣の棟では細菌性赤痢が15件発生しました。私たちの棟の大人8名は病院に収容されています。医師のうち1名(その妻はこの収容所に住んでいます)がある日の午後、所長のところへ出向き、これ以上責任を負うことを希望しないこと、そして女性たちの抵抗力が、この重労働により過度に衰えたことを告げました。

私たちのバラック主任は呼ばれ、所長は次のように聞き始めました。「イニ ハリスダ ベラパ カリ ブアン アイル？」(今日お前は既に何回トイレに行ったか)。こんな質問に対しても、ヤップに返事をしなければならないとは、一体何たる考えでしょう！ 彼女の返事は(マレーシア語を知らない彼女に、医師が説明した後で)『14カリ(回)』でした。所長は私たちの棟から、毎日4名ではなく2名のみが畑仕事に送られることを聞き入れました。この埋め合わせとして、今後はバラック周辺の敷地を清潔に保ち、毎朝すべての活動可能な大人を、15分間の体操へ送らなければなりません。

医師の一団が今週、この病気の原因をつきとめにくるまでには、すべてが平穏に見えました。医師たちはバラックの棟々を巡回し、不在になった赤痢患者の場所を自分たちに示させました。最終結論は、限られたバラックの棟々は汚染しており、そこからこれらすべての病気が発生している、というものでした。明日これらのバラックにある物すべてを、外に運び出さなければなりません。私たちのバレ バレ(寝台)が支えられている、地面の中から立っている竹の足場でさえも、そうするのです。

⁵³ 熱帯性赤痢(アメーバ赤痢)。

⁵⁴ 塩酸エメチン注射液(特にアメーバ赤痢の治療に用いられる)。

ヴェイヤース氏は幸運なことに、この最後にあげた足場のことは不可能であることを納得させました。しかし、それ以外は最上段の寝台に至るまで、すべて取り外さなければなりませんでした。私たちは、すべての物を消毒するためにリゾール⁵⁵を、そして寝台の下に撒き散らすための消石灰⁵⁶をもらいました。誰もがまず幾つかのトランクを外に出すことから始めました。その先はすべて容易に進むだろう、と皆は思いました。10時にヤマジが見にきました。彼はまだ全部の物が運び出されていない、と穏やかに言いました。そして直ぐに本気なのだと判りました。写真が壁に掛かったまま残ってはいならないのです。そしてようやく2時半にヤマジは戻ってきました。それから、荷物を再び中に運び込むことができました。いずれにしても私たちは今、すべての病気の原因を知っています。そして私たちが賢明であるならば、これ以上不平を言うことはないのです。

コートウン

1943年8月23日

明日、お母さんは退院していいのです。ところが、今度はカーラが今日の午後ちょうど、赤痢病棟のバラックに運ばれたところです。一人はまだ出てきていないというのに、また他の一人がもう入院です。

シャボットウー コートウマン

1943年10月16日

明日、私は回復後はじめて、再び仕事に行きます。抑留期間で初めて、ちょうど3週間病気をしていました。最初それは4年前に罹ったマラリアの再発のように思われましたが、直に黄疸になりました。この病気はここ収容所の特に年長の子供たち10歳から15歳、そして若い女性たちの間に伝染し始めました。医師によると、この病気は前回の戦争⁵⁷の時にも、他の戦争症候である無月経と同じように、ひどく蔓延したのだそうです。生理が一年以上もなかった人たちもいます。殊に蘭印の人たちは、「ダラ コトール(不純な血液)は出さなければならない、さもなければ、それは普通の血液に入ってきてしまう！」とこのことを本当に心配しています！ 私たちは、これが抑留生活で今まさに唯一、好都合なことであると思うのです。黄疸は思ったよりひどく、私の体重は5キログラム減り、今は48キログラムに至っています。

そんな風に病気で寝ていると、将来のことを空想し始め、もどかしくなります。仕事

⁵⁵ クレゾール石鹼溶液。外科用消毒液、殺菌液として使われる。

⁵⁶ 水酸化カルシウム(白色の粉末)で、ここでは消毒に用いた。

⁵⁷ 第一次世界大戦(1914年 - 1918年)。

をしていると、そのことを思い巡らす時間はありませんので、その方が余程良いのです。それに私は奥歯が痛み抜歯されなければなりません。ここには道具と麻酔薬もわずかばかりある、アンボンから来ている女性歯科医がいます。彼女は自分がする治療も抜歯すること、またはセメントを詰めて塞ぐことのみで制限しています。診療室と待合室が同じ一つの場所にあり、そのことで神経質になるところ、実際には私たちのそのようなことに対する繊細さも、失われてしまうのです。

今度は急に今晚、バウドゥヴァインが高熱を出しました。周知の収容所の病気になったらしいのです。口はひどい炎症を起こし、舌は腫れています。多分アンギーナ⁵⁸の形態と思われ、このためのオバットゥ（薬）は殆ど無いのです。しかし、この棟のメナド人の女性は最近それに罹り、薬草の混合物により極めて早く治ったのです。

コートウン

1943年10月22日

みんなはカーラ・ファン・ハッセルトゥちゃんのことで、心配していました。そして更に今朝早く、2歳の男の子ヴィムピュ・ケイトゥル君が亡くなりました。全く同じ症状でした。カーラちゃんの方はわずかにましなのです。人々は近辺に死体の山があり、それが原因しているに違いない、と言います。この男の子は午後、埋葬されました。

コートウン

1943年10月24日

今朝私が畑で仕事をしていると、突然、所長が私を呼びにきました。私は非常に驚きました。ユール・ヴェアルンスさんも一緒に行かなければなりません。私たちは何が起こったのか分かりませんでした。ファン・ホーアさんが安全のために同行しました。どうなるものか知る余地は、決してありませんでした。所長は私たちを直接、バラック第2棟へ連れていきました。その棟の住人は皆、既にそこに居ることは明らかでした。私たちはその棟の中に、缶詰にされてしまいました。オクハウスンさんの幼いお子さんが急死したのです。それにこの子には奇妙な症状があったのです。人々はその棟の周辺に立ち入ることは、許されませんでした。また私たちはどのような理由があろうとも、棟から出てはなりません。バラック全体は網で封鎖されました。

今日の午後5時少し前に、突然、一団のヤップンが棟に入ってきました。ヤップの医

⁵⁸ 急性扁桃炎（口腔や咽頭に炎症が起こる病気）。口峽炎。

師たちと判りました。医師たちはその子供を診なければなりません。棟内の子供たちを左右へ検査しました。ところが、それから医師たちは、それが伝染性の病気ではなかったこと、を証明しました。そして私たちは、本当に収容所内を歩くことを許されました。夕方、点呼の後で扉は私たちのために再び開かれました。そして私たちは希望する所へまた行くことができました。とにかくひと安心しました。

コートウン

1943年11月23日

今朝、豪華な大型乗用車でヤップの外科医たちが到着しました。診療所は全く新規に白く塗られ、内側も外側もごしごし^{こす}擦って洗われました。窓には消毒したガーゼが掛けられ、既に彼らを待っていました。収容所全体は静粛にし、物音一つ立てないように、との命令を受けていました。さらに診療所より半径50メートル以内の所には、ほこりが舞い上がることを防ぐため、誰も来ることは許されませんでした。6名が手術を受けるのです。私たちの棟のヘアダ・コーニングさんも。

彼女たちのために、荷物を引きずり出して空にした別の小さな家へ、彼女たちは既に昨日の晩、運ばれました。所長はひどく不安になり、何をすべきか分からなかったのです。2時に医師たちは開始しました。犠牲になった人々の悲鳴を聞くことは、恐ろしいことでした。彼女たちは殆ど麻酔をされていなかったのです。フットゥブルトゥ医師は見るに耐えず、立ち去らなければなりません。そうなのです。その医師たちも、それ程までの抵抗力はもう持ち合わせていないのです。10分以内の時間に、ヤップンは見事にやっけてのけました。フェインストゥラ医師とマルセイユ医師は、このように有能、冷静、かつ自信のある外科医たちに立ち会うことは、たいへん稀なことである、と言っていました。今、幸いにも手術は終了し、これからどのようになるか、今はただ待つだけです。今までのところ、彼女たち全員が順調です。

シャボットウー コートウマン

1944年5月7日

そして、やはり私たちの担当医師によると、これらの少年少女のグループ（12歳から20歳まで）が、収容所では最も病気に罹らない唯一のグループなのだそうです。それに反し、殊に20歳から40歳までの女性たちは、現在あらゆる症状に悩まされているのです。^{じんましん}蕁麻疹、月経過多、視力の衰え、目まい、背痛などですが、これらに対するオバットウ（薬）は殆ど備わっていません。

これらの肉体的な病に伴って、いわゆる「参る」症状が表れます。神経痛、動悸、疲労、『わたしは出来ません』という弱音などです。従ってすべてが精神的な性質のものばかりです。これらの人々は殆どが入院し、そこでいくらか良い食事を受け、最終的には再び努力することを希望する、という結論に達するのです。

シャボットウー コートウマン

1944年6月3日

ビタミンの欠乏を示すスプルー⁵⁹の形態である口腔の炎症は、一年前の徴候でした。たぶん重要ではないかもしれませんが、私が収容所で罹った最も厄介なものでした。これはその結果として、脚のむくみ、恐怖をかき立たせる体重の増量などをもたらす、水泡感染というようものを引き起こしました。これらの患者は無塩の特別食をもらい、毎朝、体重が測定されました。これには私は幸いにも参加しなくてすみました。私はどのような状況下でも、51キログラムを変わらずに維持しました。さらに、この症状がいつの間にか再び少なくなると、それは脚気の初期症状にとって代わりました。脚、指先、そして体さえ半身が無感覚となり、更に悪化した状態ではもはや歩くこともできない程に進みます。

2週間前からデドゥッ^{ぬか}（糠）（玄米精白の際、果皮、種皮、外胚乳などが粉となったもので、ここでは既に久しく豚の餌として使われています。この土地の人たちの間では『ピルデドゥッ』として知られているもの）が補給されています。これは今、これらの病気に対処するためパプ（お粥^{かゆ}）の中と、パンの中にも含まれています。そして医師たちは望みを高くしています。私たちにとって更に喜ばしいことは、既に1週間にわたり、毎日2本または4本、あるいは8本にも及ぶバナナをもらえることです（以前は5センチメートルもないものが、1週間に1回か2回でした）。未熟のものを買い占め、ここ収容所の地下の穴蔵で成熟させるのです。

病院には現在3名の重症患者がいます。その内の2名ほどの瞬間にも息を引き取るほどですが、これらは非常に特殊な例です。ごく最近、ヤップの医師数人が患者たちを往診しました！

⁵⁹ 口腔カンジダ症（かびの一種である ^カカンジダ^ダ）（真菌）が、口腔粘膜の表面で増殖する、体を衰弱させる病気。栄養失調症が原因の一つ。驚口瘡。

フォスカールー リムボーフ

1944年7月13日

今夜、再び精神錯乱状態に陥った。つまりアメリカ伝道会の一人Jさんである。彼女が奇妙なことをしたのは、実際には既に三晩目であった。しかし、今回は更に悪化した。彼女は朝5時半に、第12棟の方へ向かって散歩をしていた。そして完全に理性を失った。彼女はちょうどそのときランプを手にして、トイレから出てきたスレウさんに襲い掛かったのである。それからバラックの中に入っていき、マイヤーさんの具合はどうか、と尋ねた。彼女の発音の仕方が、みんなの耳には『マダー（殺人）』というように聞こえた。そして彼女の興奮した様子をこの場に見た誰もが、恐れをなした。第12棟を歩きながら、彼女は着ていたものを脱ぎたかったのだが、これは食い止められた。それから彼女はドウ・クルウさんに付き添われ、自分が所属する第6棟へ連れ戻された。

彼女は現在Sさんの監督下に置かれ、いわゆる外国人小家屋の独立した小部屋に彼女と一緒に配置された。Jさんがカンピリ収容所内を休みなく歩きまわるため、Sさんは全く落ち着けない。そしてSさんは一緒に引きずられていき、彼女はマーグレットウ・Jさんの腕をしっかりと掴む。マーグレットウさんの速い、大股の歩調に追いつこうと根気と意気込みで努力する、体格の小さいSさんの哀れな表情。マーグレットウさんが苦しんでいるのは、神懸かりになったためのように見える。

ヤウストウラさんは昨日、マーグレットウさんと話しをした。彼女に、それでは既に神を信じないのか？と尋ねた。ええ。彼女は信じていた。しかし、それならば何に対しても恐れることはなかったのでは？？ 彼女はまた自分自身のためには恐れなかった。しかし、収容所の人々のためにであった。それではなぜなのか？？ 今、Jさんは今夜、収容所全体に火がつき、すべての女性と子供たちは火傷やけどをするに違いない、ということを知っていた。しかし、それでは既に三晩にわたり、そのことを言い続けているけれど、まだ起こってはいない、とヤウストウラさんは言った。「それならば今夜起こるに違いない。おお、とにかく人々に祈らせなさい。とにかく人々に祈らせなさい」と極限に達した絶望から彼女はうめいた。「みんなは既に祈っていますよ」とJ（ヤウストウラ）さんは彼女を宥なだめながら言った。「貴女はそれでも、私が気違いであるとは思いませんか」と唐突に、彼女はJ（ヤウストウラ）さんをじっと見詰めながら尋ねた。J（ヤウストウラ）さんは「もちろん思いません。貴女は本当にたいへん理解があると私は思います。祈りは人々がひどい時代を乗り切るように助けることができる、唯一のことなのです」と答えた。マーグレットウさんはこの話し合いの後、かなり穏やかになりそこに残った。

フォスカウルー リムボーフ

1944年7月19日

マーグレットゥさんの女性看護係Sさんが今朝、奇妙なことをし始めた。そしてマーグレットゥさんの方は回復しているところであった。Sさんはバラック第5棟を通り抜け、さらに第6棟を通って戻り始めた。手を叩き、お尻を揺らし、手を振って挨拶しながら、絶えず微笑んで「神の勝利はそこにある」を歌った。彼女は皆から驚きのまなざしで見られ、誰もが呆然としてしまった。しかし、彼女はそれぞれの人に優しく挨拶と軽いお辞儀をした。そして相変わらず同じことを歌いながら、今、彼女がマーグレットゥさんと一緒に住んでいる自分の家へ帰っていった。その後、ヤウストゥラさんが彼女と話しをしたかったため、連れられていった。

彼女は伝達係と一緒にいった。しっかりと腕を組み、左手には聖書を持っていた。そして歩いている間、彼女は調子がいい、と言った。彼女は神の腕の中にあつたのである。彼女は何事についても心配する必要はなかった。『神』は既に25年間、彼女のためにすべてを準備し、今後もそれを引き続き行うに違いないのである。彼女は何も思い巡らす必要はなかった。「人々は『神様』は何とのんびりしているのか、もっと迅速であつたならば、と時にはきっと考えたものです。しかし、『神様』はご自身を急がせることはなさらないのです」。彼女がこのことを言っている最中に、もし人が否定することを望んでいたとしても、それは賢明なことにはならなかったのだ、ということを経験者の目から読み取った。しかし、賛成の心を見出すことが会話を楽にした。

フォスカウルー リムボーフ

1944年7月21日

今夜、Sさんは気が狂った人のように騒ぎたてた。彼女は自分が住んでいる小家屋のよろい戸めがけてぶつかり、半狂人のように荒れ狂い悲鳴を上げた。そして今朝は普通に、キャッサバ菜園へ出かけていき、出会った人の誰に対しても「もうすべて大丈夫。私はクレイジー・ハウスへ行くところです。神の勝利はそこにあります」と言った。彼女を今、キャッサバ菜園にある小さな石造りの家、つまりトゥロンク（トゥルンクのなまり。牢屋）へ連れていくことに決める。彼女の狂気は非常に激しく、自制できないためである。これは収容所全体に憂鬱な雰囲気をもたらす。

アメリカ人の婦人3名がゲシュタポ⁶⁰から帰ってくると、Sさんは体調が良かった。Kさんは直ちに入院しなければならなかった。D（ダイブラー・ローズ）さんは気が抜けたように歩き回っていた。Sさんではなく、彼女が狂人のように働いていて、朝の薄明かりの中で

⁶⁰ ここでは特警隊（海軍特別警察隊）を意味する。

彼女独自の「体操」をしていたのである。ティヌ・Kさんと一緒に彼女は耕作班の食事時間にやってくる、独房での体験を話した。祈祷、讃美歌、そして体操の練習。さらに彼女の『神』への信頼が、どれほど大きいものであったかを話した。彼女はこれを話す間、非常に狂信的な振る舞いをしていた。彼女は歌っていたときに、手足を激しく止むことなく動かしていた。ところが残念なことに、その時点では誰もそのことに気が付かなかったため、マーグレットさんの看護人として指名されてしまった。これについては最後の瞬間で、わずかに失敗があった訳である。

シャボットウー コートウマン

1944年8月11日

それから [マカッサルで] 9週間、監禁されていたその3名のアメリカの婦人が来ました。3番目の人が最も健康そうに見えました。50歳くらいの目立って筋骨たくましい未婚の伝道師で、たいへん信仰心の厚い人でした。みんなは、彼女が挫折しないのは信仰心によるものである、と考えました。彼女は毎日2時間、宗教の詩を歌いました。讃美歌集と、それに加えて聖書も取り上げられてしまったその後でさえも、そうしたのです。彼女は収容所内を歌いながら巡回し、彼女の信仰を証明しました。これは尋常ではない程までに進展し、2週間後には完全に気が狂ってしまいました。彼女の悲鳴は皆には耐え難いものであったため、夜はキャッサバ菜園の石造りの小さな建物トゥルンク（牢屋）に、入らなければなりません。所長は大変かわいそうに思い、日中は彼女を外に出し、収容所の中心に位置する小さな病院（以前はジフテリア患者のために使われていました）の一つへ連れていきました。彼女は絶えず『神』について話し、歌い、悲鳴を上げ、また足を蹴ったりしました。彼女は今のところ少し落ち着いています、全然良くはありません。

そして、精神異常も伝染的に作用しているように思われます。22歳の少女は以前からずっと奇妙ではあったのですが、他の人の手を無理に掴むという症状となりました。彼女は周りの人々から、立ち去らなければなりません。そしてさらに2人、18歳が1人、35歳が1人（またアメリカ人）で、2人とも未婚、そして悩みの種となる母親と共に生活をしているのです。現在、かなり重症の神経症患者4人が入っている隔離された小家屋があります！ 収容所内の雰囲気にとっては破滅的です。

コートウン

1944年10月25日

今この時点で、かなり多くの赤痢患者がいます。そして今、ハエを50匹ではなく100匹捕

らなければなりません。要するに、それは3人の幼い子供たちの簡単な役目ではあるのですが、私は子供たちが反則していると思うのです。私が間違っていなければ、彼らは時々ハチを捕まえては細切れにし、集められた『山』の中に混ぜるのです。そうすることで、もっと多くの足が数えられるからなのだ、と私は思うのです！

シャボットウー コートウマン

1944年10月26日

短期間のうちに2回目とし現在、腹性インフルエンザのようなものが蔓延しています。嘔吐、激しい下痢、発熱、頭痛などを伴うものです。パウディはそれに罹って今すでに6日になりますが、私は子供のお腹の具合を良くしてあげることができません。彼はこれで既に1週間水っぽいお粥で生きています。この状況では再び脚気をもたらす危険があるのです。彼と同じように、ほかにもまだ15名がこの棟に、それに加えて特に大人も8名が入院中です。この状況は、非常に多くの余分な仕事をもたらしています。

細菌性赤痢の重症患者も発生しており、血清なしではこのような同僚たちが再び回復するまでに、果てしない時間がかかるのです。オバットウ（薬）は既に殆どありません。緩下剤でさえも、最早殆ど無いのです。抑留の一年目に決して病気にならなかった人たちは、現在あらゆる伝染病に罹り、抵抗力は著しく減退しています。

フォスカウルー リムボーフ

1944年10月29日

午後、幼い2歳のヘンキィ・ドゥ・ブレイ君の埋葬が行われた。戦時中に生まれた子供たちの一人であった。これらの子供たちは現在、殆ど例外なく容態が悪い。この幼児は、赤痢のために病院に運ばれたのではあるが、現在これらすべての子供たちが苦しんでいる栄養障害が原因で、亡くなったのである。子供たちは何も食べられないか、または戻さないようにすることができないのである。お葬式は午後4時に終了した。

コートウン

1944年11月6日

今まで長い間そのことが起こらないように、お祈りしていたというのに、やはりそれが起こりました。ヨーヤン・クルゥズ君が亡くなったのです。そして、まるでこれでもまだ十分ではな

いと言うかのように、その日遅くなってヤンチュ・パプウ君が息を引き取りました。パプア人の幼い男の子で、アンボンの人たちのグループと一緒にここへ来たのです。その子が本当は何という名前なのか、私は知りません。これらの子供たちは皆、およそ3歳ぐらいなのです。その子供たちを人々は驚きのまなざしで見るとのことです。そして今、ハーマンさんが呼ばれました。私たちは今となっては、それが何を意味するのか、本当に分かるのです。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月11日

夕方、彼（所長）はG（フットゥブルトゥ）医師を呼び、彼女をひどく叱りつけた。歩行が可能であった患者たちは病院から出て、その後はバラックの棟で養生しなければならない、ということで彼女が患者のためにどれほど弁護しても、彼女にはそれを阻止することはできなかった。そこから出なければならなかった患者は10名であった。最初は、即刻ということであったが、その後、今朝まで待つことが許された。

G（フットゥブルトゥ）医師は目に涙を浮かべて立ち去った。そして診療所でそのことを話していたとき、わっと泣き出してしまった。少し経ってヤマジは再び彼女を呼ばせた。所長は直ぐ彼女の涙ぐんだ目を見て、啞然として口を横に開いてにやにや笑い「お前、泣いているのか??」と聞いた。所長はそれから彼女を再び帰らせ、G（フットゥブルトゥ）医師への次に続く指示をノーアさんに与えた。これは有り難くない指示のようであるが、どのようなものであるかまだ判らない。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月13日

昨日亡くなったイエルチュ・B君は今朝、埋葬された。伝達係は、昨日の午後イエルチュの母親とおばさん⁶¹がキャッサバ菜園から出てくるのを見たとき、最期を遂げたのだ、と理解した。彼女たちは、そのことを所長に報告するように、伝達係に頼んだ。所長は前側の事務所に座っていた。伝達係は所長に対して「お母さんは子供が亡くなったことを、貴方に知らせたいのです」と言った。「フン」というのが彼からの唯一の返事であった。そして伝達係は立ち去った。

埋葬を午後まで待つことはできなかったため、また小さなお棺を午前中に作らなければならなかったこともあり、お葬式は12時にしか行ることができなかった。母親はお棺もお墓も、出来上がっていないことを完全に見落として、朝の点呼の直後に埋葬することを望んで

⁶¹ 伯母さんまたは叔母さんのいずれであるかは不明。

いた。

幼いイエルチュは死に至るまで、意識がはっきりしていた。母親が本当に美しい所である天国について話をしたとき、その子供は「そう。でも、そこにもお母さんたちがいるんだ！」と言った。まるで、天国でも母親たちはすべてのことを禁じている！と言いたかったかのようにであった。その子供は「もし、ふつうのうんちになったら、僕はまたバラックに帰るのだ！」と意気揚々として皆に知らせた。その子供は、つまり赤痢に冒されていた。その幼児は伝道師の子供たちの一人である。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月15日

ビリィの一人っ子で1歳を過ぎたくらいのハンス・クリスティアーン君が埋葬された。神父様はいくつか感情のこもった言葉を述べられた。母親の慰め、無上の幸福、そして子供をかつて見たことがなかった父親の希望、は今や天国で天使となった、と神父様はおっしゃった。私たちの間で次に死別するであろう犠牲者のために、お祈りをいたしましょう。人間は永遠に生きられないことを考えなさい、と神父様は述べられた。

朝、私たちバラック第11棟の第6ブロックは、バレス(寝台)を新規にするために、棟から出された。そしてその間にヤマジは病院に入っていく、怒鳴る騒ぎがあった。歩行可能な患者は全員そこから出なければならない、ということであった。

これに反対したG(フットゥブルトゥ)医師とR修道女は、がみがみ言われた。G(フットゥブルトゥ)医師の代わりにM(マルセイユ)医師が医療業務の責任者に指名された。そして修道院長が呼ばれ叱責しっせきを受けた。R修道女を適切に教育していなかった、というものであった。R修道女は引き続き、通常どおり看護に当たらなければならなかったが、病院管理の担当責任者としての勤めはこれ以上してはならなかった。

それから所長は患者たちに向かって、歩行可能な者はベッドから出て自分の棟に行け、ともう一度怒鳴った。そして彼はこれを叫んでいる間、竹竿を空中で激しく打ち付けた!!!多くの患者はこれに驚愕し、直ちに立ち上がり慌てて病院から去った。本当に衰弱していた患者たちのみが、心臓をどきどきさせながら横たわってその場に残った。これらは4名であった。従って11日の日曜日にあった最初の痛手の後、これは再び非常に目的にかなった方策であった。ところが、M(マルセイユ)医師は午後再び数人の患者を連れ戻してもよい、と知らされた。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月18日

今朝ヤマジは見事な軍服姿で、マカッサルに向けて姿を消し、1時に医療業務2名のヤップン、それに加えて医薬品の大量供給と共に帰宅する。すなわち赤痢対抗ワクチンである。「2時半より棟ごとに、全員予防接種される！！」とすべての棟々への通知。

コートウン

1944年11月25日

既に注射を受けた人々は、そのために重病なのです。ある人は、くずだ、と言ひ、他の人はもう注射には我慢ができない、と言ひます。私たちは一日中ずっと、あくせく働いています。どこでも他の人の代わりなのです。さもなければ、バラック内で、残された子供たちの世話をします。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月28日

10日前に受けた赤痢の予防注射では、私たち全員のうち誰もまだ良くなってない。最もわずかしかが気が付かない人でさえ、腕に固く、赤い、熱く感じる部分が今もなおある。更にひどい人は膿^{うみ}が出る腫れものがある。G（フットゥブルトゥ）医師自身、完全に腫れ上がった腕と手をしていた。一方、M（マルセイユ）医師は彼女よりはわずかながら軽症ではあるが、それでもやはりひどいため、「医師たちは自分たちに2倍の分量の処方をしたのだ」とからかわれた。しかし、「番号」にされた哀れな私たちは、どのような代物を注射されたのだろうか？

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月2日

波乱に富んだ数日が過ぎ去った。木曜日の6時にはすべてがまだ平和で、全体が静かであった。そして、それから始まったのである。マルセイユ医師は呼ばれた。表ベランダで所長としばらく話をした後、『青ぞめて』ヤウストウラさんの所に入ってきた。「さあ、始まった。赤痢患者はキャッサバ菜園の警察官舎へ、移らなければならない。そして官舎は直ちに清掃されなければならない。今晚すべてが完了し、明日、彼女たちは移動しなければならない」と告げた。

ヤウストゥラさんは立ち上がり、医師と共に所長のところへ向かう。彼らは心配そうな顔つきで戻ってくる。伝達係は直ちにヤウストゥラさんの部屋へ一緒に入り、良く聴かなければならない。各棟は即時2名の有志をキャッサバ菜園の警察官舎へ送る必要がある。これらの人たちはバケツ2つ、箒2本、そして井戸用のバケツを1つ持参し、これらの家々を清掃しなければならない。それは完了『しなければならぬ』。そして点呼時にも、作業は続行せざるを得ない。作業班の人々から食事のことを聞かれたならば、何と答えたらよいか（つまり殆ど食事の時間である）という伝達係の質問に対し、ヤウストゥラさんは「気に掛けることはないのです。問題にすることではありません」と尊大に答える。迅速かつ快活に有志は指示された棟の順番に現われる。ひと組は小家屋を、別の組はトイレをゴシゴシ擦り始め、残りの班は水を汲み出す。マルセイユ医師が指導に当たり、厳しくはあったが陽気に作業が行われる。7時15分前に完了し、私たちは家へ帰ることができる。所長はまだ、すこぶる上機嫌で、マンゴを持っている人は叩かれるために、戻ってこなければならぬ、と叫んだ。趣味と実益を兼ねるといふことで、殆ど誰もが鈴なりにになった木から、マンゴをむしり取っていたので、息が止まるほどの思いで数人が戻っていく。すると所長は、スタ（もう終わったのだ）自分たちのバラックへ帰りなさい、と言う！ 所長はそれから自転車に乗って先へ進んでいき、私たちは点呼が確実に『無い』であろう、という考えで収容所に戻っていく。ところが、私たちが事務所に殆ど着くや点呼の鐘が鳴り始め、私たちは再びヤマジのことを良く理解していないことが判る。そして、少しすると所長はヤウストゥラさんの方へ向かって歩いてくる。ヤウストゥラさんは大慌てで、彼女の大きな雨除け帽子を伝達係に渡し、点呼では所長の前に行く。マルセイユ医師と伝達係は、とっさに脇へそらせた弾みで一步溝の中に入れ、深くお辞儀をする。彼らは所長の姿が視界から消え去るまで、そこに立ち尽くし、それからようやく先へ進んでいく。

そして引越しの日が来た。最も重症の患者たちは収容所に留まった。残り全員はキャッサバ菜園の小家屋へ移っていった。1軒につき5名であった。竹製のバレス（寝台）を1軒あたり5台運び込むには、その幅が広すぎたため、それらは再び取り出された。そして患者たちは従って今、風が吹き込む隙間だらけの床の上に、自分たちの小さなマットを敷いて横になっている。彼らの荷物は運搬作業班と用地班の残員によって移動された。患者たち4名を同時に乗せた、アーダ・ドウ・ブラウンさんが運転するヤマジの車が、キャッサバ菜園へ向けて走った。ヤマジは、往復しなければならぬことが頻繁すぎると思うや、怒り狂ってキャッサバ菜園より自転車で走ってきて怒鳴った。歩くには十分元気な人 [は歩かなければならず]、従って8名の人たちが徒歩でいった。

フォスカール — リムボーフ

1944年12月3日

所長は赤痢病棟の周辺に近寄った者は誰をも叩いて脅し、ののしり続ける。それでG（フット

アップルトゥ) 医師もまた、そのように所長に罵倒^{ばとう}され、彼女は心を深く揺さぶられ戻らざるを得なかった。M (マルセイユ) 医師は現在かなりの数、およそ40名の患者たちが、戸外キヤッサバ菜園内にいることを、極端に心配している。彼は一生懸命運び、なおも彼女たちがそこで必要となり得るすべての物を運び、所長ヤマジの棒による脅迫を背後に感じながら、不安のうちに彼の任務を担っている。所長は今、M (マルセイユ) 医師が自分を恐れていることを知り、そのことにつけ込んでいるのである。

フォスカールー リムボーフ

1944年12月17日

ヨー・Kさんは昨夜、永眠された。間もなく5時には埋葬される。彼女は既に一年前から正気ではなかった。何も食べたがらず、看護人から逃げるようにしていた。そのため既に数ヶ月の間、病院の近くにあるグダン (倉庫) に閉じ込められていた。今や命が尽きてしまったのだ。まだ38歳であったというのに、完全に老いて弱り切っていた。

長年にわたり彼女の友人であったZさんは、このことをKさんの夫に手紙で知らせることの承諾を、所長から得ていた。そしてその手紙をさらに小包に添えて送ることができる。人知の限りでは、彼女が生存していたよりも、その方がずっと良いのである。今や、夫はその間に落ちぶれてしまった妻を引き取るのではなく、昔と同じ妻の思い出を持ち続けるのである。

10歳になる男の子が後に残された。彼女は私たちの最初の避難場所であったマリノでは、政情について常に素晴らしく楽観的であった。日本との戦争は1943年2月1日の時点で終了するに違いない、と100ギルダーの賭けをしたのが彼女であった。この楽観視によって、かなりの数の人たちが励まされた！！

暫くして、お葬式が熱帯地方の豪雨の中で取り行われた。そのためお墓の中にはかなりの水が溜まり、初めに少年たちはそれをかき出さなければならなかった。穴を埋めることに1時間ほど費やした。柩がちょうどぴったり入る大きさであった。今後は穴のために、すべての方向へお棺の寸法より30センチメートル、余分に計算することを考慮しなければならない。なぜならばクーリーたちは穴を真っ直ぐ下に向かって掘らないため、底になる部分は幅が狭いからなのである。さらに、次回このようなことがある場合のために、それは必要がないことを祈るのではあるが、成人の場合、神父様が聖水の付いた小枝を撒き散らすときは、いつもお墓の周囲を歩くのだが、今は細い滑り易い通路の上で体のバランスをとらなければならなかった、ということも私たちは知る。

シャボットウー コートウマン

1944年12月20日

雨季は12月の初めに猛烈な勢いで始まり、至る所で意気消沈させられた様子がつきまっています。長期に亘る戦いからというよりも、現在ははっきりと判る私たちの身体的状態の衰退からなのです。昔も多くの疾病や伝染病が短期間にはありましたが、これはいつでも再び消滅したのです。1年以上もの間これら1,700名弱の抑留者の中に、亡くなった例がありませんでした。この乾燥期の終了までの3週間のうちに、3歳以下の子供6名が伝染性の腹性インフルエンザ（腸炎）の一種である病気のために命が奪われました。これら6名のうち4名は私たちの棟からでした。その子供たちは最後の一瞬まで、知力は完全に冴えていました。しかし、それ以上作用しなくなった腸のために、実にひどい苦痛のうちに亡くなったのです。

バウディは現在3歳半ですが、恐らくこれと同じものに罹りました。丈夫な男の子であるおかげで、それを容易に切り抜けたのです。6人目が発生したとき、ヤップの医師たちが往診しました。しかし、彼らも何も完遂できませんでした。特徴的であるのは、ここの墓地に眠っている10人の子供たちは、10人ともみな男の子であるということなのです。5年間も待った末に、ようやく恵まれた唯一の子供を失おうとする母親を身近に見るならば、恐らく毎日、死没する数百の男性たちを見るよりも、さらに心にしみるものです。これらの死亡を除いて、数週間前から細菌性赤痢がはなはだしく蔓延し、100名以上の患者がいます。所長はこのことで、とりわけ腹を立てています。これらの人々（平均15名の患者）が常時、看護されていた石造りの小家屋は収容所の中央に位置し、所長はそこから人々を（最初の雨降りの日に）退去させました。そして、いわゆるキャッサバ菜園（私たちの棟から徒歩15分ほど）に、竹製の長いバラックを建てさせました。関係のない人は誰も、ここへ立ち入ることは許されません。

バウディやルックがうんちをやる度に、この遠く離れたキャッサバ菜園に、恐らく自分の子供を連れていくのではないだろうか、と考えないようにすることは難しいのです。そこでの状況は更にひどいものです。そこでは警官が、支柱の上に建てられた木造の小家屋に住んでいます。現在100名の赤痢患者に使われている彼らのトイレは、覆いがされていないのです。患者たちが既に到着したとき、その棟（セメントの床ではありません）の半分は未完成でした。夜は敵機を考慮して明かりは一切つけてはなりません。この雨の降る暗い夜に、看護婦さんたちは、おまるをこれらのトイレまで運ばなければなりません。それらは徒歩で3分離れている所にあるのです。さらに食事の運搬は非常に骨の折れる仕事です。このすべての原因は、数百匹の子豚のせいで養豚場に発生するハエにある、と私たちは思うのです。

毎週土曜日と日曜日に10歳以上の人は全員、200匹のハエを捕らなければなりません。本当に週末を楽しむために、所長はしばしばこれを個人的に受け取るのです！土曜日、所長は1,000匹のハエにはマグカップのお砂糖を与える、と約束しました。最年少の子供たちは、難なくやり終えました。バウディはサプリディ（ヤシの葉で作ったほうき）を驚くほど

上手に使うのです！

フォスカウルー リムボーフ

1945年1月7日

マライク・ファン・Vちゃんの埋葬。まだ4歳にもならないかわいい子供。皆、同じ症状で亡くなった。子供たちは食べ物を何も吸収できず、ひどい痙攣^{けいれん}があり、その痛みから小さなベッドで這う。これらの子供たちの何人が、一体さらに戦没者墓地に行かなければならないのだろうか？

フォスカウルー リムボーフ

1945年1月17日

医師たちは、所長が予告したよりも数時間遅れて到着したため、所長を不安な気持ちにさせた。彼らは4時15分過ぎに到着した。外科医1名を含む3名の医師と2名のヤップの看護婦である。どちらの看護婦も、すべての物を車から診療所まで引きずって運ばなければならなかった。そこではスティン・Lさんの手術が行われる予定になっていた。彼らは6時に完了し、さらに数人の修道女の診察をした。そして彼女たちを手術する日曜日に戻ってくるはずである、と言った。7時に彼らは出発した。完璧に準備をしていたフィン・P（パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル）さんは順番が来なかった。日曜日でも彼女の順番ではなく、恐らく後日になるであろう。彼女はそれで胆汁による苦痛を、さらに辛抱しなければならないことになる。

フォスカウルー リムボーフ

1945年2月1日

数日前から、ヤマジは再びハエ捕りに熱狂的である。殊に、午後、看護業務をもつ赤痢病棟の看護婦たちは、午前中はハエ捕りをさせられる。そして雲母係の子供たちも現在雲母がないため、ハエを捕まえなければならない。さらに所長は自分で、ヤップの雑誌「OKE」の頁に糊を塗り、ハエ捕り紙を作る。そして彼は今朝、その作業のために4名の婦人の手伝いが必要であった。

フォスカウルー リムボーフ

1945年2月4日

間もなくミス・Vさん、Kさんそして一人の少女がG（フットゥブルトゥ）医師による手術を受ける。そして火曜日の高官訪問を除き、本日または明日にもさらに別の高官訪問が予期されている。そのため日曜日にもかかわらず、誰もがはき掃除や運搬作業をしている。午後、手術はミスさんから始められた。彼女が1時間半後に診療所から出てきたとき、子宮、筋腫^{きんしゅ}、虫垂を失っていた。それで彼女は「さっぱりとして」夫の元に戻っていく！！！！

彼女は事一瞬』生命の危険にさらされた。医師や看護婦たちが行ったり来たり駆けずり回ったが、幸いなことに止血された。そして彼女はじめ他の患者も今は加減が良い。ミス・Vさんが、まさに『ヤップン』のこの徹底した手術を受けなければならなかったことは、実に宿命の悪戯^{いたづら}である。なぜならば、ヤップンによる占領というこの状況に、完全に順応できなかった『一人』のひとがいたならば、『彼女』こそ務所の隣の小家屋へ既に運ばれてきた後、『が正にその人であるからなのだ。

フォスカウルー リムボーフ

1945年2月7日

昨夜、「所長が私たち全員、食堂で食事をしているかどうか、点検に来ますよー」とバラック全体に叫ばれた。そして本当に所長は棟々に入ってきて、食べ物が無いかどうかを見るために、仕切られた場所一つ一つに入っていった。食べ物とタペ（もち米またはクテラ芋で作ったイースト入りのお菓子）を見つけると、これは事務所に持っていかなければならなかった。

数日前から、タペを作ることは禁止されている。所長は、私たちがそれによって赤痢に罹ること、そして赤痢を減らすためにあらゆる対策が講じられた、と言う。食べ物が発見された棟々のバラック主任とバラック担当看護婦たちは、事務所の前に立たされた。そしてその棟で見つかったタペについて、また食べ物をよそう間、規定された口に当てる布を使用しないことについて、またカクス（トイレ）に行った後の義務づけられた手洗いのことについて、弁明しなければならなかった。所長は集まったバラック主任とバラック担当看護婦たちに向かって、クパラバトゥ（文字どおりでは石頭。頑固）、つまり彼女たちの頭の中には脳の代わりに石があり、それゆえ冷静になるために数時間、事務所の前に立たなければならない、と言った。M（マルセイユ）医師もそこに立たされた。

コートウン

1945年2月21日

あの汚いネズミども！ 私のミサ典書を、すっかり台無しにしてしまったのです！ 今夜、それらは私の灯油の芯をひっくり返し、油全部が私のミサ典書と他の物の上に流れたのです。脂で汚れたがらくたもの。本当に泣けてしまう！

コートウン

1945年3月3日

親愛なる皆さん。また何か『愉快的』ことがありました。既に2日間、私たちの場所で『ものすごい』いやな臭いがしました。すべての物を点検しました。お母さんは最初、それが私の居る方から臭うことは確かだ、と言いました。それで私は自分の持ち物をすべて、下に降ろさなければなりませんでした。それから私たちはドウ・クルウさんの所だと考えました。しかし、そこでも何も見つかりませんでした。昨日の夜、私は何となく眠れないうえ、その悪臭でむかむかしました。今朝、私たちの所へ来た人たちは誰でも、その臭いを嗅ぎつけました。直ぐに皆は這って嗅ぎ回りました。見られる格好ではありません！ その臭いは私のベッドの下にある隙間、つまりバレッ^{はり}（梁）が一本抜けていたその場所に集中していました。結局、みんなはちょっと臭いを嗅ぎに外へ出ました。そこにシィンは、がらんどうの竹からぶら下がっている「細いひも」を見つけ、それを引っ張りました。外に出てきた物は、極端に腐ったネズミ！ 次の瞬間、私は吐き気がして、あちこちにつばを吐きました。何もかもが汚らしい！ 不潔な動物なのです！

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月4日

今日の午後、2つの手術が行われた。それから犬の劇的な事件が起こった。1匹の痩せた黄色がかった白い小犬が、3人の子供たちに噛みついた。ヤーピュ・W君と、W君、それにB君であった。所長は、最初の2人はヨードだけで手当てされ、病院に担ぎ込まれたことを聞くと怒り狂った。それは焼灼^{しょうしゃく}、またはむしろ切除されなければならないのだ、と怒鳴った。そして所長はG（フットゥブルトゥ）医師を、そのことを知らなかったことは愚かである、と罵^{ののし}った。そこでヤーピュ・W君の腕は燃えているタバコで焼かれた。小さなW君はお尻の左上、まだ神経がある部分の皮膚が切り取られた。注射をされた後ではあったが、それは耐えられない痛さで、その子は絶叫した。幼いB君はわずかなかすり傷のみであった。

それから第6棟の塹壕に、犬がいたことが認知された。そして伝達係はM（マルセイユ）医師を、キャッサバ菜園から呼び寄せなければならなかった。医師は毒入りの肉を配置する必要があったためである。伝達係がM（マルセイユ）医師と共に到着すると、その犬は既に撲殺され柵の外側に運ばれていた。そこではV（ファルダーポルトゥ）さんとKさんは彼に、問題の噛みついた犬であることを確認しなければならず、彼女たちはそのようにした。

G（フットゥブルトゥ）医師はM（マルセイユ）医師に、何か不愉快なことが起こるのではないかと警告した。なぜならば所長は、収容所内に狂犬がいることは『彼』の責任であった、と言ったためである！！！！！！ 所長はそれでもM（マルセイユ）医師にすべての犬を殺すために十分な毒物を提供した！！ ともかく、殺された犬について原住民が言ったことを重んじるならば、その犬は既に5ヶ月ギラ（狂犬）であった。そしてその犬はさらにカリ（水路）を泳いで（従って、水に対する嫌悪感がなかったことは明白である）渡ったのである。そして家にいる3人の噛まれた男の子たちは順調である。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月23日

トゥシャが奇妙なことをし始める。彼女は時々すべての自制心を失い、歌うか、笑うか、または泣けば極端なのである。別な時には、全く空のお皿^{から}、いかにもおいしそうに食べる様子を見せる。暫くすると彼女は再び正常になり、「全くどうして私はそんな愚かなことができたのかしら？」と独り言を言う。しかし、彼女が異様になる時間は益々おびただしくなる。彼女はロシア人であるが、収容所にいる唯一の他のロシア人と、うまくやっていけないのである。彼女の夫がヨーロッパのどこかに居ることは、『神』のみが知るところである。彼女はパレにある男性収容所にボーイフレンドがいた。彼は彼女に定期的に手紙を書き、木靴を送った。しかし、彼の最後の郵便では、収容所の他の女性にあてて書いたのであった。

たとえば医師が彼女の悩みについて、話をさせようと試みる時など、礼儀正しい態度ながらもきっぱりと「私はロシア人です。あなた方には私の心的状態を察知することはできないのです」と言った。「私は元気です。さようなら、さようなら」と言って立ち去ってしまう。ところが、バラック第9棟のD家族が、まず彼女を快く受け入れない限り、今や彼女は精神的な障害を持つ人たちの居る小家屋1番に、入れられる時となった。不憫な上流社会の優雅なトゥシャ。彼女にとっては、上流社会での気晴らしが何一つない、仕事のみから成るここのこの生活はうんざりなのだ。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月1日

7時20分にヤーピュ・W君は狂犬病による、あらゆる症状を伴い亡くなった。口には泡、荒々しい動きと目、水への恐怖、そして抑制されない動きで自分をなめたがった。彼は2回注射を打たれた。母親は子供の埋葬を自分自身で準備することを望み、4月2日、月曜日に行われる予定のお葬式には、誰も参列しないことを願っている。小さなお棺を彼女自身、女姓の友人と2人の女医と共に墓地まで担ぎ、穴を自分で埋めることを希望する。誰も手助けしてはならない。所長が彼女の目つきをたいへん異様に思ったことは、正しいと認められるのか？

既に数ヶ月の間アメーバ赤痢で、バラックに寝ているフランス・デン・H君は、医薬品欠乏のため既に2回も死に瀕する状態にあった。しかし、薬が毎回、間一髪のところまで到着したため、その度に再び持ち直した。彼は安楽椅子に座り、彼の仲間に担がれて幼児病院へ運ばれた。15歳の少年フランスが、愛情に満ちあふれて仲間たちに担がれていた様子を見ることは、感動的であった。

フランスは生きている喜びで輝いていた。彼は、他の同僚と同じように青い作業服を着ていた。彼らは、皆が恐れていた墓地へ他の人を運ぶのではなく、安楽椅子の彼を幼児病院へ運んでいけることを嬉しく思った！！

6歳になる少年W君は3週間前に腕を犬に噛まれ、F（フェインストウラ）医師により7ヶ所の傷穴それぞれが、タバコで焼かれた。その部分を切り取ることは、かなりの筋肉組織に触れる可能性があったためである。その少年の容態は悪い。彼はある瞬間には無感情となり、また次の瞬間には非常に荒々しい。空腹のうえ喉が渴くが、食べることも飲むこともできない。人々は、最悪なことだと心配する。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月16日

医師たちは今後、自分たちでこれ以上、患者を病院に割り当ててはならない。特別食についても同様に認められない。最初に所長がすべて検査をする。必要と思う人々については、彼自身で病院に押し込める。それで例えばPさんである。この人のことについて医師たちは全く何も知らず、驚くことに、病院のベッドに横たわっている彼女を突然見た！

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月18日

所長は事務所に座っていた。そして再び決断をした。まず初めに M (マルセイユ) 医師が来なければならない。あと3名の赤痢患者しかいないため、そこで働く人たちが19名では多過ぎる。そこで M (マルセイユ) 医師はその内の5名を除外しなければならない。医師は初めそれを強く反対したが、結局のところ譲歩した。

それから、G (フットゥブルトゥ) 医師が来なければならなかった。彼女に向かって所長は再び愚か者であった、と怒鳴りつけた！！ なぜか？ なぜならば、Hさんは既に3日間、神経性頭痛で寝ていたというのに、彼、所長にはまだ話をしていなかったためである。所長は即刻、新しい規則を通知した。つまり、F (フェインストラ) 医師と G (フットゥブルトゥ) 医師は今後、共に収容所の医療業務全般を担い、すべての医師及び看護婦たちの検査官となる。M (マルセイユ) 医師は、従って所長がそう呼ぶように、ドクター クルタス (書類上のみの医師)⁶² となり、入院と特別食に関する承諾を与えることができる。しかし、監督は所長が維持するため、M (マルセイユ) 医師は従ってあらゆる不愉快なことを受け止める。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月25日

昨日からテニスコートが作業にかかっている。それが完成するとコートは以前、市場用のバラックが建っていた所に来る。入り口のすぐ近くにあるため、カンピリに車で入場する訪問客は、これを少なくとも外見上の観察としては、贅沢な場所として見るのである！ その背景にある実態をさらに詳しく見るならば、私たちがここで、家畜小屋同然のバラックの中で生活し、そして痩せ細り、短期間の特別食も既に中止され、十分な食事も貰えずにいること、を見るに違いない。しかし、私たちには現に芝居小屋があり、来る4月30日に娯楽クラブが開設される。ところが、女性たちは疲れており、なりふり構わず、熱帯性気候での厳し過ぎる労働のために痩せている。やや太っている者はベリベリ (脚気) の症状によるものである。

コートウン

1945年5月6日

お母さんは再び入院しています！ エディと私はロフ [宗教上の集会] へ行きました。いつも

⁶² 患者を直接診断するのではなく、書類上のみの管理を担当。

のように、私はどこか前の方に座り、後ろの方で何かが起こっていたことに、全然気が付きませんでした。つまりお母さんが、また衰弱して倒れてしまったのです。そして意識を取り戻すことができなかつたため、病院に運ばれたのです。ロフが終わった後、ヤコビィン修道女とベァティリア修道女がそのことと、また私はお母さんを見舞ってもいい、と話してくださったのです。病院では皆、既に眠っていました。しかし、修道女のマーカリアさんが中へ通してくださいました。お母さんは今、確かに気を取り戻しました。けれども、とても細い声で話しをし、非常に疲れていました。わずかな時間いっしょに話しをしてから、私は家へ帰りました。

コートウン

1945年5月7日

お母さんは再び家に戻っています！ 彼女はまた元気になり、それ以上何も見つけることはできませんでした。ただ、ただ疲れているだけなのです。

コートウン

1945年5月12日

お母さんは、また入院です！ とても悪いことは確かでした。お母さんはお布巾のようにぐったりと衰弱しきって、今朝再び、ただ突然気絶してしまったのです。正式な聖体拝領が行われる前には、家に戻れることを祈るのです。

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月5日

砂糖のためのハエ捕り！ 第15棟では、大人も子供も、朝から晩まで捕る。全部合わせると大量となり、他の棟はその公明正大を疑う。そしてV（ファルダーポルトゥ）さんの所には、おそらくハエの間にコーヒーのかすと紅茶の葉が詰められ、M（マルセイユ）医師が第15棟と結託していたのである、という苦情が入ってきた。それはすべて中傷である。どれほど信じられないように見えても、すべてハエなのである！！ 幾つかの棟のバラック主任たちは昨日、所長の代理を務めるV（ファルダーポルトゥ）さんの所に、所見を受け取りにこなければならなかった。彼女たちは皆、「マラス（怠慢）」であった。バラック主任たちは、自分たちの棟には一匹のハエもいないし、多くのハエを捕えられる養豚場で働く少年たちもいない、と抗議した！

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月7日

ハエ捕り競技の結果が今、知らされた。第15棟はミルク缶に15杯のハエに対し袋半分の砂糖を貰う。第8棟は袋の三分の一の砂糖、第3棟は袋四分の一の砂糖、第2棟は袋五分の一の砂糖。アンボン^①は六分の一。第13棟は袋七分の一。一袋にオートミールの缶で、140杯分の砂糖が入る！

コートウン

1945年6月22日

新しい恐怖が収容所内にあります！ 狂犬です！ 何ヶ月も前に第7棟の若い少年が狂犬病により亡くなりました。それからはすべてが好調で、私たちはそのことでは安心していました。ところが今朝、一匹の犬が収容所に侵入してきて、幾人もの人たちに噛みつきました。まず第10棟のティルマンさんでした。私たちは『狂犬、狂犬！』という悲鳴を聞きました。そして皆は上段ベッドへ飛び移りました。扉や窓は閉められました。私は小窓（私の小さなもの）を通して女性と子供たちが、四方八方に飛び去るのを見ました。犬は更に歩いていき、何人かの名前をあげますと、ネリィ・フィレットウさん、ポップ・ダーラーさん、そしてホーフフェインさんを噛みました。

総督令嬢ホーフフェインさんは、さらに多くの人たちが噛まれてしまう前に、その犬を無害にするために、向かっていきました。何と勇気があったことでしょう！ 所長の塹壕^いの中で、犬に噛まれた部分を可能な限り切り取りました。それは忌まわしいことであつたに違いありません。それらの人々の身になって、その状態を想像するならば！ ぞっとします！ フレイティさんはすっかり取り乱しています。とにかく非常に同情してしまうのです。彼女の代わりに、所長がライフル銃を持って向かっていく！ ええ。そんなことをするものですか。所長は危険にさらされず、中にいるのですから！

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月26日

夕方、伝達係は第9棟のモリィさんのところで腰掛けている。子供たちが「モリィ^{おぼ}小母さーん、犬があなたのベッドの下にいますよー！！」と叫ぶ。私たちは冗談だと思う。ところが、子供たちは「いいえ。本当です。モリィ^{おぼ}小母さん、そうなのです！！」と言うのである。私たちがベッドの下を見ると、本当である。そこには犬が座っている！ 私たちは足をベッドの縁

から中へ、つまりバレ（寝台）の上に引っ込める。子供たちは犬を近づけたいのだ。しかし、伝達係は「してはいけません！」と言う。

子供たちの一人が「コーア小母さんは犬が恐いのだ！！」と冷やかす。そうではないけれど、この犬のことを私たちは知らないのですから、注意深くした方がよいのです」と伝達係が言う。伝達係がちょっと犬を呼び寄せる音を口元で立てると、犬はバレ（寝台）の下から少し外側へ頭を出す。茶色で首のあたりが白ぶちになっている。「座らせておきなさい」とモリィさんは優しく言った。ところが、少し経つと子供たちが「モリィ小母さあーん。犬が逃げましたよおー！！」と叫ぶ。3分もしないうちに、バラック内で「狂犬」と悲鳴が上がる。その犬がトイレに行きたかったネリィ・フィレットウさんに飛び掛かった。彼女の顔と、そして犬を避けようとして振った腕に噛みついた！ 傷口から血が流れ出る！！ ちょうどその瞬間、予備警報5連打5回が鳴り響く！！

伝達係は先に進んで第9棟へ入っていき、バラック主任の場所に沿ってくると、バラック主任が息子のディッキ君に、心配そうな声で「犬がベッドの下にいないかどうか、十分気をつけなさい」と言っているのが聞こえる。第11棟に行く途中、伝達係は誰一人見かけない。第10棟では扉は閉まっている。自分の棟に帰りたい第12棟のバラック主任の、「歩いてもいいでしょうか??」という心配そうな声。「ええ。私は自分の棟に行きます」と伝達係は答えた。第11棟は、扉が閉まっている。伝達係は怯えた声^{おび}を背後に、苦労して隙間から中に入る！！ それから伝達係は、第10棟のTさんもトイレの傍で襲われたことを聞く。

バラック内を歩いていくと、どの声も上方から聞こえてくる。犬への恐怖から、誰もが上段ベッドへ移動しているのである。伝達係は「警報が鳴り、誰も防空壕へ行く準備をしない場合、あなたたちは外に行かないのですか？」と尋ねた。「いいえ。私たちは犬を恐れているのです！！」との返事である。次にヤンスが所長に状況を報告したとき、彼は「それでは皆を中に留めさせろ。しかし、『わしは』全く責任を負わぬ」と言った、と知らせる。私たちは中に留まる。飛行機がやって来て、近隣に爆弾を投下する。緊張感が激しく『なり過ぎる』人は、前側の扉の隙間から防空壕へ行く！ 伝達係は裏手の扉の脇で警備に当たる。

そこへ牧師が来る。「外に出てくださあーい」と彼は叫ぶ。「彼女たちは外に出る勇気がありません」と伝達係は答える。「そうしなければ『ならない』。私がこれからバラックで会う人は所長のところへ行き、叩かれなければならない」と牧師は答える。しばらくすると警報解除！ 私たちは、棒、サプリディス（ヤシの葉で作ったほうき）、パチョルス（鋏）、そして薪で装備して外へ出る。さらに毛布なども持ち、一晩中警備に当たることを決心する！ 私たちが座るか座らないうちに、すべてのバラック主任たちが所長のところに呼ばれた。そして所長は、第7棟のバラック主任ファン・Aさんを見ると激怒した。この第7棟を所長は彼のポストから眺め、警報時に彼はその棟から誰も外に出てこなかったことを見たのである。

「なぜだ??」とだけ、所長は怒りで歪んだ表情をして彼女に尋ねる！ 「人々は怯えていたためです」というのが彼女の返事である。彼女は前回（ヤーピユ・W君）のことを考えたからである。所長が『全く』不意に彼女を殴った^{なぐ}ので、彼女は地面に倒れる。所長に呼ば

れたバラック主任の、最後に残っていた一人は、第11棟のヴィク・Oさんである。所長は彼女の方へ来て、『第11棟はたった今外へ出たか?』と質問する。「いいえ、所長様」とヴィクさんは答える。「なぜしなかったのだ??」。「彼女たちは犬を恐れていたのです!!!」。その間、所長はいくらか落ち着きを取り戻し、「飛行機が収容所の上空にいても、お前は爆弾を恐れないのか?」と聞いた。「私たちは爆弾よりも犬の方がもっと恐ろしいのです、トゥアン」とヴィクさんは言う。「しかし、今、第11棟からは全員が外に出ています、トゥアン」と彼女は素っ気なく言葉を足す。「今となってはその必要はもうない。今、警報は解除された!!」と所長は言う。そこで所長から命令が出される。今しがた外へ出なかったバラックの棟々は、罰として今後は警報時に、中に留まらなくてはならない。外に出ては『ならない』。そして彼がその命令を撤回するまでそれは継続する。

「ああ、有り難い」と伝達係は思った。やっとのことでベッドの中で寝られる。本当に夢のようである。彼女はぐっすりと眠った!!! 昨夜さらに3名の婦人が噛まれたことが今朝判った。その中にHさん、V r. さんがいた。養豚場で犬と戦ったHさんは、腕と手を噛まれた。Hさんが犬の喉をしっかりと掴まえている間に、Dさんが犬を包丁で刺し殺した。ダウンチュは血清のためにマカッサルへ送られ、2時に戻ってきた。噛まれた婦人たちは注射を受けた。ネリイ・フィレットウさんは唇と頬から小片が切り取られた。Hさんは麻酔薬で処置された。そしてV r. さんは耳を少し切られた。彼女が塹壕で横になっていたとき、犬に飛びつかれたのである。

シャボットウー コートウマン

1945年7月9日

この驚愕から殆どまだ回復していない内に、もっと深刻なことが起こったのです。2名の大人が、恐らくは狂犬に襲われました。ちょうどそのとき、警報が鳴り、明かりをつけることは許されなかったため、防空壕の下で手当てされました。つまり、傷は切り取られたのです。そして第二の男が命令に従ってマカッサルへ出発し、深夜2時に血清を持って帰ってきました。

その間、さらに3人が噛まれました。2人は多かれ少なかれ自分たちの責任によるものでした。なぜならば、彼女たちはその生き物の首を掴まえて、殺してしまう勇気があったからです。勇敢な行為として、疑いなく称えられることであるにもかかわらず、私自身はそれをするとは決してなかったでしょう。奇妙なことに、所長はこの振る舞いを単に「カサール(野蠻な)」ことであると特徴づけただけで、これらの人々を治療させることでさえ拒んだのです。幸いにも、血清は確かにもらいました。これら5名の人たちは今もなお注射をされ、悲惨な不安のうちに生きています。

フォスカウルー リムボーフ

1945年7月30日

狂犬病により亡くなったネリィ・フィレットゥさんと、爆撃の結果として命を落とされたSさんは7月18日に埋葬された。それからトース・Hさん（その日、彼女はその狂犬を殺した際に、いくらかの噛み傷を負った）は病気になる。それは最初、マラリアのように思われたが、誰もがぞっとすることに、やはり狂犬病であると判明する。彼女は7月30日の月曜日に亡くなり、翌日埋葬される。その穴が掘られるのを見ると、それは、あたかもまだ生きている人のためのよう^に思える。彼女は本当に私たちの身近な人であった。

彼女の死は彼女の人生のように頑強で、自信のあるものであった！！ 彼女は夫にあてた^{せきべつ}惜別手紙を書き残していた。小さなおもちゃのフライパンは、彼女が母親から貰ったもので、しかるべき時に、それを母親に戻して上げなければならない！ 彼女はその木曜日、爆撃による災禍の後、ヤップンの高官から面会を受けた。そしてそのインタビューで彼女は、ヤップンが是非とも聞きたかったに違いない、連合軍に関する憎悪は何も言わなかった。

ファルダーポートゥ

1945年7月30日

再び一名の死者。ホーフフェインー ドゥ・ハーズ・ヴィンクルマンさんが犬に噛まれたことが原因して、^い逝ってしまいました。彼女は完全に意識がある中で、非常にひどい行程を体験し、絶命しなければならないことを悟っていたのです。彼女は死を勇敢に受け入れたのです。残念なことに血清は効きませんでした。今晚7時に彼女は自覚して、しかし、静かに息を引き取りました。

ネリィ・フィレットゥさんに続き今度は彼女です。ダーラーさんは負傷から（爆撃が原因して）亡くなりました。しかし、彼女はそれでもこの病気に罹り得たのでした。現在、ティルマンさんとフレイドゥさんの2人がまだ残っています。これらの人たちは現在に至るまで、まだ完全に健康であるように見えます。薬が効いている時間が長く続くほど、この恐ろしい病気に罹らないチャンスが増えるのです。神様がそれをお与えになることを願うのです。この悲惨さは、収容所の人々を更に苦しめるのです。どの犬も恐れられています。

フォスカウルー リムボーフ

1945年8月10日

昨日、ボスカンプですべての物が消毒されました。引き続き赤痢患者が後をたたないためです。

一日に新規患者19名は、珍しいことではありません！！ すべての所持品は太陽の下に置く必要がありました。石灰が撒き散らされ、また食卓用食器類は養豚場のドラム缶の中で煮詰められなければなりません！！

抑留所外部とのコンタクト

報告書

カンピリ収容所報告書

一般概要

A. H. ヤウストウラ

手紙での通信は規則的に許可されました。その為に、添付された見本の用紙が使用され、手紙は年間3回ないし4回発送され、郵便は非常に不規則に受領されました。パレパレとだけは通信ができ、マカッサルからは受信のみでした。英国からは1回、英国領インドも1回。日本からは2回。ジャワからは数回、ビルマからは1回、他の場所からは、時々郵便を受け取りました。抑留者は回数がとても少なかったにもかかわらず、手紙を書くことを許され、そして受信できる事をたいへん喜んでいました。

カンピリ収容所報告書の解説と補足

ファルダーポートウ

パレパレとの通信はある程度決められ、マカッサルの戦争捕虜との手紙通信はたいへん^{まれ}稀でした。アンボンから来た女性たちは、夫たちと一度も連絡を取った事はありませんでした。なぜなら、日本軍当局は、アンボン軍人捕虜の収容場所を断じて公表したくなかったからで、多くのチモール戦争捕虜との連絡も決してありませんでした。

日記からの抜粋

シャボットウー コートウマン

1943年6月11日

毎日、マカッサルからクーリーたちがここに来て、井戸で働いています。日本人所長は私たちに、クーリーたちが働いている間、井戸へ行く事を厳しく禁止しました。又、私たちの食糧を運送するトラックの運転手で、とても感じのよい人との接触も同様でした。この人たちの一人が、自らの経験に基づいて知っていることを、何かうっかりと漏らす事は当然あり得ることですが、最終的には何もかもが不確かなのです。マカッサルにある300名の戦争捕虜のいるタ

ンクシィ（兵舎）が、一昨日米軍に爆撃されたという情報は、一体、本当なのでしょうか。アンボンにいる女性や子供たちが爆弾用倉庫を守るために使われて以来、全てが起り得ると言えるでしょう。

シャボットウー コートウマン

1943年6月13日

パレパレから牧師様がいらしたので、夫たちが民間収容所にいる妻たちは、口頭で彼らの生活について尋ねました。食事は私たちより良く、電気の明かりは夜の11時までとまり、図書館があり、毎月2.50ギルダの小遣いが貰えるのです。雑役が終わると、男性たちは読書ができ、私たちには子供の世話と洗い物が待っているのです。

シャボットウー コートウマン

1943年9月5日

ここ数週間、いろいろな変化がありました。楽観的な雰囲気収容所に漂っています。そして今回のことに関しては、おそらく完全に根拠がないとは言えません。どのようなことがあっても、私たちが収容所外部との接触を持たないようにと、絶えず注意が払われていますが、それは[アンボンキャンプ]のリーダーが、突然、日本の新聞を「家」に持ち帰った時までのことでした。これは一度だけにとどまらず、彼女は定期的に各号の新聞を受け取ったのです。抑留者として、敵軍の新聞を正確に読み、そして解釈することは特別困難なものです。楽観的でない人ですら、ニッポンにとって少しの有利もないことがこの記事で判断できました。今朝、公式に6棟全体のブロックリーダーにより、先週の日本新聞からのニュースが、各棟に通知されました。これに関しての所長のねらいは何なのでしょう？ 彼は、私たちに政治的急変に対する準備をさせたいのでしょうか、それとも 私たちの受けた待遇を改善し、後でこの点を指摘することができるようにする為なのでしょう？

シャボットウー コートウマン

1943年9月15日

もう新聞を手に入れる事はできません。私たちは新聞を読むと興奮しすぎてしまったからです！

コートウン

1943年10月1日

今日、戦争捕虜の奥さんたちは、夫たちより便りをもらった。マレー語であつたけれども、そんなことは構わない。たいていの人たちは一年ほど何の消息も聞いていなかった。私たちの棟にいる或る女の人は、彼女の夫は行方不明で、その後死亡したと、マリノではいつも言われていたのに、夫より手紙を受け取った。今や、夫の自筆の手紙を手にしたのだ。この人は、有頂天だった！

コートウン

1943年10月7日

パレ収容所が爆撃されたのではないか、という噂が流れた。もちろんのこと狼狽した。病院でもそのことが話され、ここに入院していた患者の夫がそのパレ収容所にいた。その女の人はこの噂のために、心臓マヒを起こした。所長はその知らせに怒り、病院でそれを話した女性を彼の所に呼び寄せた。誰からそれを聞いたのだ？ 彼女に話したという人が連れて来られた。このように、噂を広めた張本人が見つかるまで調べが続いた。その張本人は派出所の前で数時間も片足で立っていなくてはならなかった。いい気味だわ！

シャボットウー コートウマン

1943年10月16日

先週、全員が突然、配偶者たちよりマレー語の短い便りを受け取りました。それらはパレパレの民間抑留者からも同様、マカッサルにいる戦争捕虜（昨年の10月に連行された1000名を除く）からのものでした。これは初めてのことで、私の考えでは、これは私たちにとって、有利な状況であることを示していると思います。後日、ニッポンはこれに関し、国際法を守ったと言える訳です。この便りから、死亡通知が出されていなかった事は明らかでした。というのは、ある男性は、復活祭には既に亡くなられていた妻宛に、手紙を書いたからです。その上、便りがここまで着くのに3ヶ月もかかりました。所長は全部の手紙を読み上げさせました！ 私たちは単語数50語で、返事をする事が許されましたが、病気であるとか、私たちが居る場所について書いてはいけませんでした。

コートウン

1943年10月31日

昨日、所長の名で、全オランダ東インドにおける『敵性住民』と、手紙でのやり取りを許可することが言い伝えられた。うーん、私たちはいつ始めてよいのかまだ知らない。分かっているのは、二ヶ月に一度手紙を書いて良いこと、そして、手紙はブロック体のマレー語5行で書かれていること。そうでないとヤップには、完全に判読するのが厄介だからである。

コートウン

1943年11月18日

私たちは、今ではジャワ宛にも手紙を書いて良い。何を書いて良いのか否かについての決まりの一覧表が回覧された。16歳以上の人だけが手紙を書くことを許される。だから私も書いて良いのだ。マレー語でも、英語でも構わないが、単語数は20語だけである。もちろん収容所について書くことは厳しく禁止された。三種類の模範の手紙が貼り付けられ、その一つを選んで良かった。なんてくだらないことだろう！ ともかく、私たちも当然の事、手紙を書いた。私たちはお父さんがジャワのどこにいるのか、全然知らないけれど、もしかしたら届くかもしれない。

コートウン

1944年2月6日

『バンザーイ！！！！』信じられない事が起きた。私たちは『お父さん、お父さん！！』からの便りを受け取る。とても短いが、そんな事はかまわない。お父さん自身の署名が下の方にある。それが最も重要な事なのだ。それは、夕方の点呼の直前だった。その時、リリィ・スヒップホーストさんとイネケ・ター・フリャラーさんが『コートウンさん、あなたにお手紙ですよ』と言って、お母さんに手紙を渡した。

お母さんは、それが他の人のものではないかと思い、手紙を受け取り、宛名を読みながら中に入って来た。『さて、誰宛かしら？』とさえ言っ、葉書をいろいろなふうに見た。『コートウン様と書いてあるわ』そして、その時やっと、それが自分たち宛であろうという事に気づいた。確かに私たち宛だ！ びっくりした事には、何が書かれてあるのか分かるまで、私たちは2度も読まなくてはならなかった。それはマレー語で書かれてあった。

アントゥー-アナック ヤン トラチンタ

サヤ スカラン アダ ディ バンジュビル、トゥルス サハットゥ。モガ トウワン
アラ トゥルス ベルリンドウン キタ ダン ベアクンプル キタ スムア ラギ。

バンヤック タベィ、フォネエ

愛する子供たちへ

お父さんは、現在バンジュビルにいて、今もなお元気です。

神が私たちを守り続けられ、家族が再会できます事を祈ります。

さようなら フォネエ⁶³、

アンバラワ郡 セマラン県 セマラン州

バンジュビル T 3 5 5

差出人 M. H. J. H. コートウン

クパダ ニヨンニャ A. コートウン ー ドルハイン

テンパット ペルリンドウンガンー、マリノ、マカッサル。

マカッサル、マリノ、民間収容所、A. コートウン ー ドルハイン様宛

点呼の後、私は重要なニュースを知らせる為に、もちろんの事、最初にミアの所に走って行った。そして、直に大勢の修道女たちが私のまわりに集まった。私たちが行く至る所で、お祝いを言われた。それに、これは何か特別で、ジャワから来た便りなのだ！！その上、これは戦争捕虜から抑留者宛に送られてきたのだ！

フォスカウル ー リムボーフ

1944年5月1日

パレ行きの贈り物が事務所に提出された。所長は、明日そこへ出かけるので、贈り物を持っていくのだ。布で作られた物、従ってハンカチは適当ではなく、更に詳しい連絡事項によると、雨がっぱ用の布で作られたものもいけない。一日中、収容所リーダーは手紙が入っていないか、又他の禁制品がないかと、小包の検閲をした。

⁶³ フォネエはコートウンの父親の名前アルフォンスの（オランダ南東部にある）リンブルグ州のなまり。

フォスカウルー リムボーフ

1944年5月11日

5月11日、ホートマンス中佐が銃殺された事が所長より収容所リーダーに知らされた。さらにバラックが追加建築されるので、それに関連し、多くのクーリーたちが収容所に来るであろうと通知された。クーリーたちと話をしたり、または少しでも連絡を取る事は、厳しく禁止される。

フォスカウルー リムボーフ

1944年7月6日

5月29日付けのジャワからの葉書が21通届き、ここから送ったもののうち20通の手紙が配達不能として戻ってきた。それには、ティダ クナル（住所不明）、KPM事務所 スダ トゥトゥップ（王立郵便輸送会社事務所閉鎖）そして、スダ ピンダ ダン ティダ カシ アラマツト（移転、新住所不明）と書かれてあった。

フォスカウルー リムボーフ

1944年8月3日

今朝、私たちはぞっとする様な、殴るや蹴るやの暴力沙汰を再度目撃した。それは本当にひどいものだった。今回は牛乳配達人が犠牲者だった。月始めの為、彼は勘定書をいつものようにトーさんに渡し、彼女はヤマジに支払って良いかどうか尋ねた。どのようにしてその勘定書を手に入れたのかとヤマジがきくと、トーさんは牛乳配達人より受け取りましたと答えた。ヤマジは激怒し、牛乳配達人は勘定書を『**彼に**』直接渡し、他の者に渡してはならなかったと怒鳴った。それから、その牛乳配達人は、中に入るように呼ばれ、罵^{ののし}られた。すると、ヤマジは牛乳配達人の足に、新しくきれいな包帯が巻かれているのを発見した。ヤマジは、お前はそれをどうやって手に入れた？と怒鳴る。医者からもらいましたと牛乳配達人は答えた。それではお前は欧州人と話をしたんだな、と言うのがヤマジの結論だった。ちがいます。私は話せませんでした！！と牛乳配達人。それなら、どうやって包帯を手に入れたのだ???? この問詰めは頭をナイフの柄で叩き、足を蹴りながら行われ、牛乳配達人は地面に倒れる。それから彼は起き上がらなくてはならず、悲鳴を上げるまで、細いむちのような棒で警官に打たれた。それから医者G（フットゥブルトゥ）先生が呼ばれ、どのようにこの者が包帯を手に入れたのかを、彼女は答えなければならなかった。「私たちは彼が傷ついているのを見て、包帯をしました」とGさんは言った。「その時、言葉を交わしたか??」と所長。「いいえ、一言も話し

ませんでした」とGさん。「こういう場合には、警官が同行し、診療所に行かなければならぬことをお前は知らなかったのか??」と所長が聞く。「しかし、私たちは警官を見なかったので、応急処置を取りました」とGさんは答える。「このような事はもう決して起きてはならない。それから罰として、今後、病人は外部より牛乳を一切手に入られない。牛乳配達人は、スングミナサにある刑務所に送られなければならない」とヤマジは言う。

フォスカウルー リムボーフ

1944年8月5日

現在のところ、情報に関しては皆無、なにも、何もない。Fさんは所長に何か伝えたいことが無いのかどうか尋ねた。ヨーロッパ人は何も知らせがない事には耐えられず、気が狂ってしまうのだと言った。それから彼は自分も何も知らないし、ラジオでは嘘ばかり聞かされるが、彼自身なりのピッケランス（見解）があるので、それが本当になるかどうか興味津々であると言っていた。

シャボットウー コートウマン

1944年8月11日

今週の最終日に、600人の子供たちと参加希望した大人200人が遠出をしました。それは素晴らしい日曜日の朝でした。私たちは野菜が植えられたサワ（水田）を沿って、1時間半かけて、カンボン（小村落）を通り、水門まで歩き、そこで泳いだのです。歩けなかった人たちを乗せる為に、そしてピーナッツバターをぬったサンドイッチが一杯のドラムかんを運ぶ為に、トラックも同行したのです。午後1時には、全員自由を満喫し、非常に満足して収容所の柵へと入りました。再び、長距離を歩けることは気分の良いものでした。カンボン（小村落）の人たちは、私たちに対し殆ど何の反応も見せませんでした。

フォスカウルー リムボーフ

1944年8月27日

日記をつけなかったこの2週間、騒乱なしで時が過ぎ去ることはなかった。男性収容所から多くの語句が抹消された葉書が届いた。そして、この葉書を光に当てて見ると、全ての抹消箇所を読む事ができ、全部の誕生日の日付が消されているのが判った。つまりヤップたちはいつ葉書が書かれたのかについて、受取人がこの日付から判断できる事に気づいたのだ。パレではま

た外で労働するのがはっきりしている。どうやら、もう木ぐつを婦女子収容所に送ってはいけないらしい。

フォスカウルー リムボーフ

1944年9月2日

ヤウストゥラさんは全バラック主任たちを呼び寄せ、臨時会合を開き、次の事を報告した。昨晚、所長がマカッサルから戻って来たすぐ後で、彼女は彼の所へ来るように呼ばれた。そして所長が終業時間少し前である郵便局へ行き、そこでセレベスの全抑留者のために、オランダから郵便為替が届いた事を聞いたとヤウストゥラさんに話した。どのくらいの金額であるかについて、彼は今はまだ言えなかった！

国民からだ、所長は言い、ヤウストゥラさんは、私たちの国の状況はいかがですか。トゥアン？（所長様？）と尋ねた。彼は、ドイツ人だって人間だ！！と返事をした。そして、周囲の国々の情勢はどうですかとヤウストゥラさんは、更に質問した。どうして俺が知っているのだ。俺だって収容所にいるんだぞと、彼は言い返した。しかし、新聞を読まれているではありませんかとヤウストゥラさんは言い張った。新聞などは信じないと所長は素早く答えた。ここ数ヶ月は日本語の新聞だけで、マレー語の新聞はもう絶対に来ない。たぶん私たちが『うそ』を読むという危険を冒させたくないのだろう。

シャボットゥー コートゥマン

1944年9月24日

私はヘンクさんから手紙を受け取りました。前回手紙をもらったのは、一年ほど前のことでした。彼は今もなおマカッサルにいらして、私たちの収容所に関してかなり正確に想像しているらしいのです。

フォスカウルー リムボーフ

1944年9月28日

パレ男性収容所から340通、そしてボスさん宛てにマカッサルから4通の手紙が届いた。パレからの手紙はかなり陽気で、オランダにいる家族との早期再会について、マリアンヌは元気でやっているが、ミヒルの調子が悪いと書かれてある。他の人はドイツ人の妻宛てに、自分の（オランダの）家族は元気でやっているが、妻の（ドイツの）家族はそうではないと書く。別

の人は、クリスマスにはガチョウなどを一緒に食べよう等と書いている。

フォスカウルー リムボーフ

1944年10月18日

将校の妻たち、そして、KPM（王立郵便輸送会社）の妻たち宛てに、ジャワから手紙が着いた。そのうち後者の一人は、三年ぶりに夫からの手紙を受け取った。彼女は、夫はもうだいぶ前に海底に沈んでしまったと思っていた。なぜなら、夫はバンジェルマシンの近辺で、水雷に攻撃された貨物船に乗っていたからだ。そして、現在ジャカルタと呼ばれるバタビアにあるストラウスヴァイクの旧刑務所から、今度、彼女は夫より知らせを受け取ったのだ。夫は、なぜ妻が一度も手紙を書かなかったのか、そして、彼女自身の金銭を長持ちさせる為、無駄使いしてはならないが、3.5セントのはがき代ぐらい、夫の為に使えるのではないだろうか??と尋ねている。

フォスカウルー リムボーフ

1944年10月21日

再度、書いてよかった短い手紙には、いろいろなトリックが使われたのは明かである。大人はみんな葉書を書くことを許可された。この場合、16才以上が大人と見なされた。しかしある人たちはとても悪賢く、新しい規則では、小さな子供たちも手紙を書いて良いのだと思ったという事を口実にして、落ち着いて2通書いた。他の人たちは、何人もの修道女たちが彼女たちの名前を、手紙の為に貸していたという事実を悪用した。例えばコネーリアという名前の場合、差出人が1通はコアという名にして、もう1通は修道女コネーリアとして書いた。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月17日

昨日の午後、発送される小包が検査された時、ヤマジはそのそばにいた。例えば、彼は書き添えられた詩が信用できなかった場合など、かなりの数の小包の送付をやめさせたが、非常に一貫性がなかった。疑わしく思われたのは、[アンボンキャンプ]のMさんの小包から、たくさんのメモが書き留められた手帳が出てきた時だった。彼女は、仕事をしている裁縫作業所から呼び寄せられた。ヤマジはぶっきらぼうな口調で、これはどういう意味なのだと聞いた。あら、それが中に入っていたのを知りませんでした！何かの間違いだと思いますと彼女は答えた。

お前はもう、何も送ってはならない。これを持って行けとヤマジは言った。「あー、トゥアン（所長様）」と大きなそら涙を流し、泣き始めた。そして彼女の振舞は、現行犯で押さえられた料理人やバブ（使用人）を思い出させた。彼は小包からシャツを取り出し、これは何処から手に入れたのだと問詰めた。交換したのですと彼女は返事をした。持って行け。お前の夫に、これは必要ではないとヤマジは言った。彼女の目が光り始めた。それでは、他のものはここで良いのですかと素早く尋ねた。トゥング（ちょっと待て）と彼は言った。

後で、P（パイファー・ルロック・ダーマンヴィル）さんとヘアミィさんがMさんの為に口添えをしたので、結局全部送る事ができた。本当の事を言って、これは彼女が当然受けるべき以上の扱いだった。なぜなら、彼女の弁解では、急いで小包を詰めなくてはならなかったもので、その時手帳を見ず、晩に小包を用意したということだ。それ自体が矛盾している訳で、つまり全てが故意に行なわれたことを示している。所長が説得されたのは、彼女の涙のおかげなのだった。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月23日

ヤマジは今朝早くパレに出発した。昨晚、P（パイファー・ルロック・ダーマンヴィル）さんはもう一通の手紙を作成しなければならず、そこには必ず「私たちは全員元気でやっております！」と書かれていなければならなかった。手紙はオランダ語で、写しはマレー語だった。『私たちは全員元気でやっております』という文章を聞いた人たちはだれも、激しく憤慨した。

私たちは元気に『やっ**て**はいない』。私たちのうち、100人以上の人たちが赤痢病棟にいて、既に9人の小さな子供たちが栄養障害のため、数週間のうちに死亡した。病気から回復しなくてはならない人たちは、元気を取り戻せない。なぜなら、食べ物には栄養など入っていないからである。パレに夫たちがいる妻たちは、彼らから返信があり、それに全て順調にいつていると書かれていても、今ではもうそれを信用することはできなく、^{だま}騙されたような気がした。しかし、私たちには何ができるのであろう？ ニッポンが、私たちは皆ここで元気にやっていると**言う**のであれば、『**それなら**』私たちは元気でやっていると**いう**事になる訳だ。

コートウン

1945年1月9日

私たちは、日本、ジャワ、マカッサル、パレパレへ手紙を送ってもよい。素晴らしい！もちろん『間違った事』は書いてはいけ**ない**。衣類の入った小包をパレに送ってもかま**わ**ない。『パレから来た女の人たち』は狂ってしまうほど喜んで、あらゆる物をあちらこちらで交換した。

大部分の人たちは『万一の場合の為』として、既に何か持っていた。所長が『言ったであろう』という噂が広がった。それは女の人たちを少し気分転換させるために、毎週映画が上映されるだろうとのことだった。ワッハッハ！！

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月11日

土曜日の晩、Sさんの出来事をまだ何も知らなかったノーアさんは、男性たちが水雷で攻撃されたという話について、何が本当なのかを所長に尋ねた。「そうではない。それを聞いた時、俺は戦争捕虜収容所へ行ったが、男たちはまだそこにいた。それから、パレへ電話をしたら、そこでも同様、従ってこれらの話は本当ではないのだ」と彼は言った。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月17日

今日、午前中、収容所リーダーは所長に呼ばれた。彼は自分の部屋で、スミッツ先生とジユドネイさん⁶⁴により署名された四通の手紙を彼女に渡した。それらは続いて死亡された四名の男性について、悲哀を込めて通知されたものであり、彼らの妻たちは私たちの収容所にいる。彼らはマカッサルの戦争捕虜収容所にて、赤痢で亡くなられた。午後になって、連絡簿にこの通知の事、そしてカンピリにおいても赤痢はまだまだ克服されていない事を考慮し、可能であるあらゆる衛生上手段を取るようと、重大な忠告が書かれてあった。

午後、伝達係はこれら四名の婦人たちの一人の所にちょっと訪ねた。この人も午後ずっと、自分の夫が当時、伝達係の夫の隊に入りたかったこと、そして中佐が夫の依頼を認めなかったため、『彼女の』夫が今まで生き延びていたこと、そして今や何もかも、彼にとって終わりが来てしまったことを考えた。ヤニイーさんはがんばったが、彼女は急に、後に残されたというぞっとするような孤独を感じた。いつか夫に読んでもらう為に彼女がつけていた日記は、今その全ての意味を失ってしまった。所長はこの事を既に1月から知っていた、と言う人がいる。しかしそうではないと言えないし、確かにそうであるとも言えない。

⁶⁴ パレパレ男性収容所の医師とリーダー。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月24日

所長は神父に「貴方は、神にたくさんの祈りをしている。トゥアン アラ（神）のたいへん近くにいるのだから、いつ戦争が終結するのか知っているはずだ」と言った。しかし神父は「そうですね。貴方の方が良くご存知ではないかと思いますが。なぜなら、ラジオのすぐ近くにいるからです」とたいへん要領を得た返事をした。

フォスカウルー リムボーフ

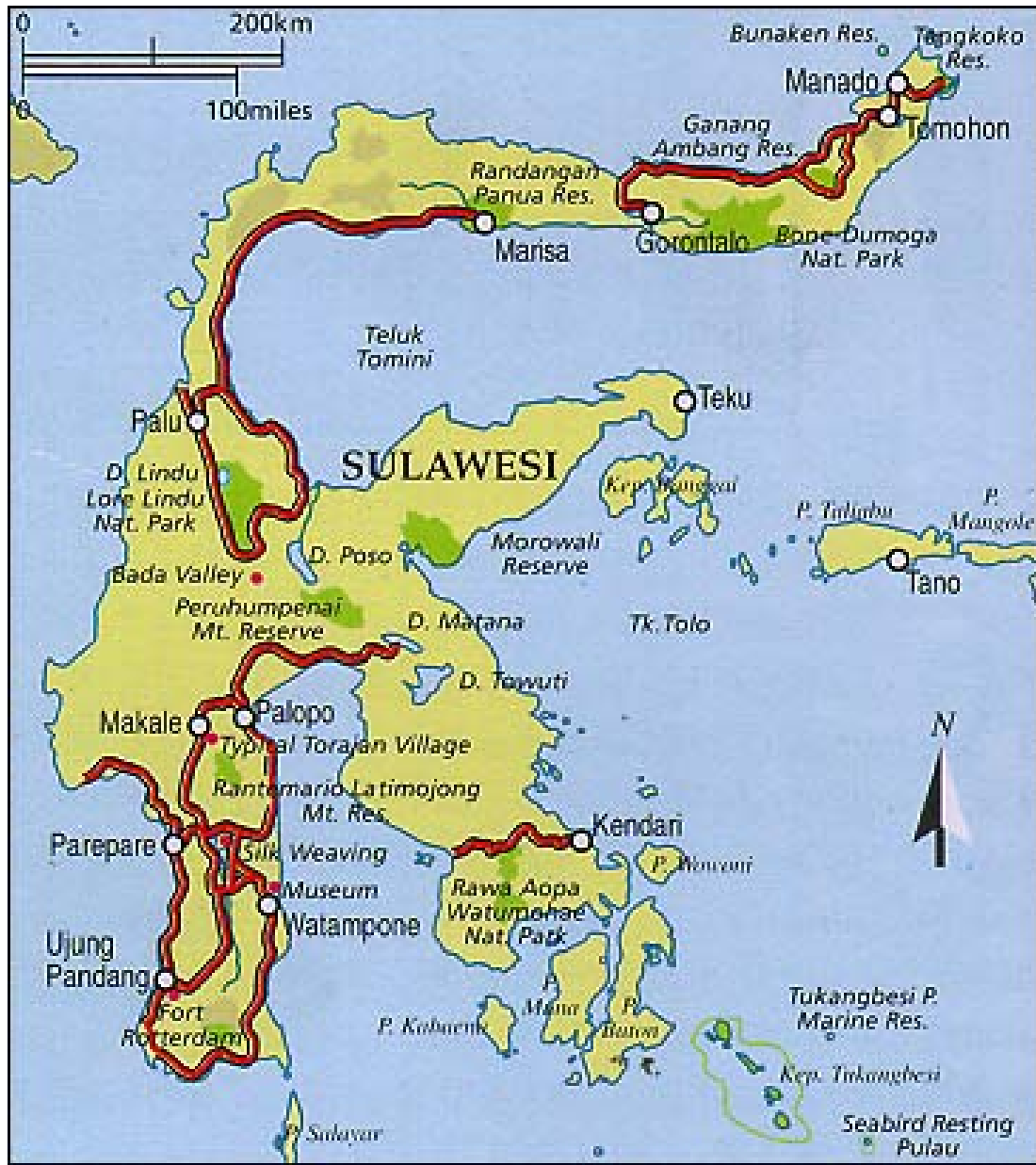
1945年5月28日

Dさんは、同じヤップの将校を通し、彼女の夫から長い『オランダ語』の手紙、歯ブラシ、歯磨きと子供たち用にキャンデーを受け取った。彼はB先生と一緒に部屋に住んでおり、F（フェインストラ）先生とステイニィさんの夫と同じバラックに居る。更に驚く事には、赤十字の手紙が五通届いた。三通はオランダから、一通はスイス、そしてもう一通は、ポーランドの国境にあるスタニスラウ！！ からで、オランダの軍人から来たものであった。手紙の日付は1943年2月と1944年1月で、1944年にオランダ東インドに到着し、1945年にカンピリに届き、全てオランダ東インドからのニュースについて尋ねている。

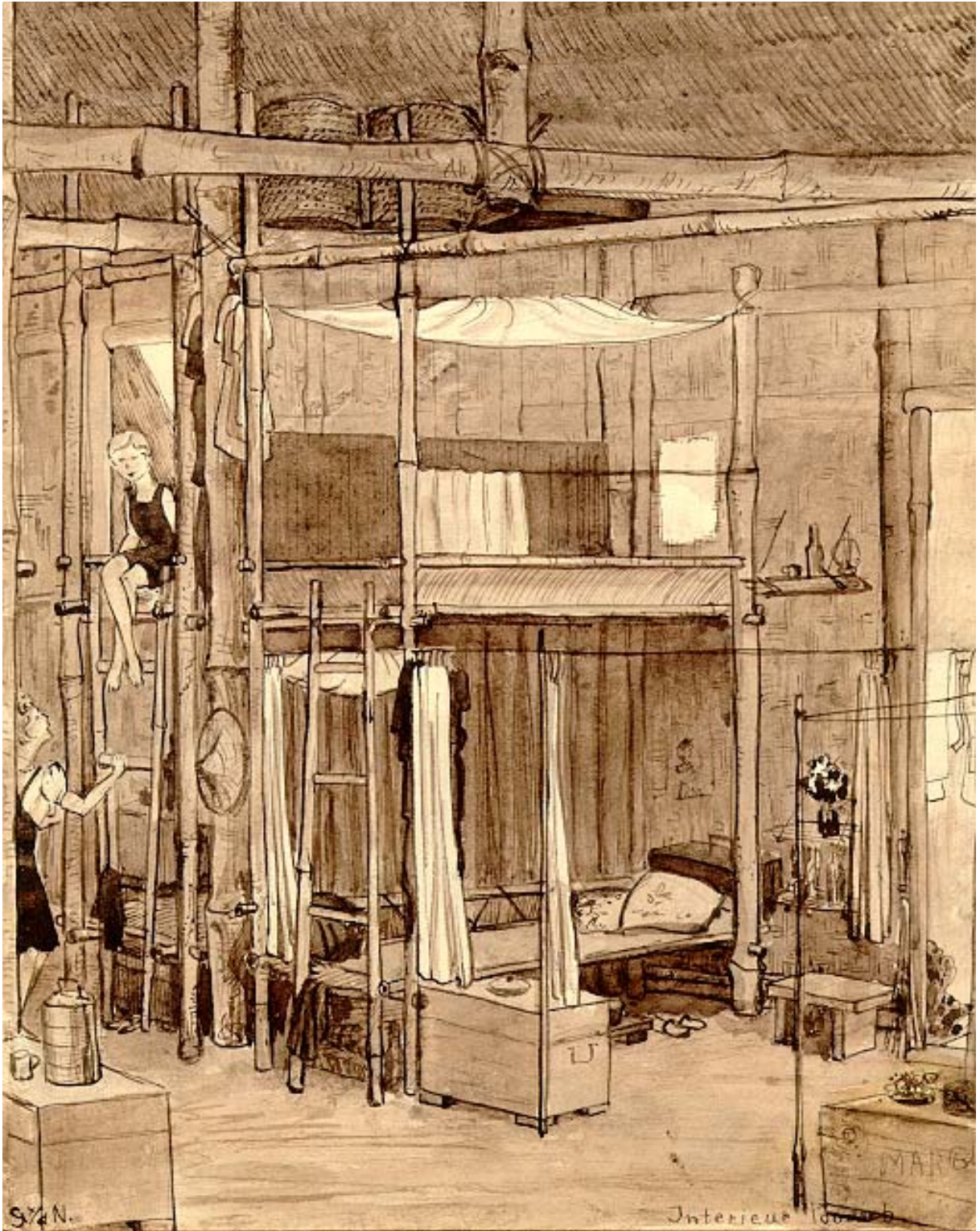
ヤウストウラ

1945年8月

残念ながら、収容所の多くの女性たちにとってつらい一日でした。彼女たちはマカッサルにある戦争捕虜収容所にいた夫たちの死亡通知を受け取りました。これらの死亡は1月の下旬から7月の下旬の期間の日付となっていました。 コーイストウラさん、ディアクスさん・ベアレンスンさん、フラワーヴェロットウさん、ファン・ローンさん、ノルさん、テン・ハーブさん、ファン・ドウ・フェルドウさん、レンヴォイさん、ファン・ロームさん、フレイブさん そして エイフェンラートさんたちは未亡人になりました。トゥティ・スムルダースさんは父親を失われ、ターフェナでの後任でしたファーバーさんも亡くなられました。戦争捕虜たちは未亡人たちの為に募金を行い、3000ギルダー集めました。一方、1500ギルダーが収容所にいる他の方々に送られました。彼らは、私たちの収容所が不幸に見舞われたことについて知っていたようです。



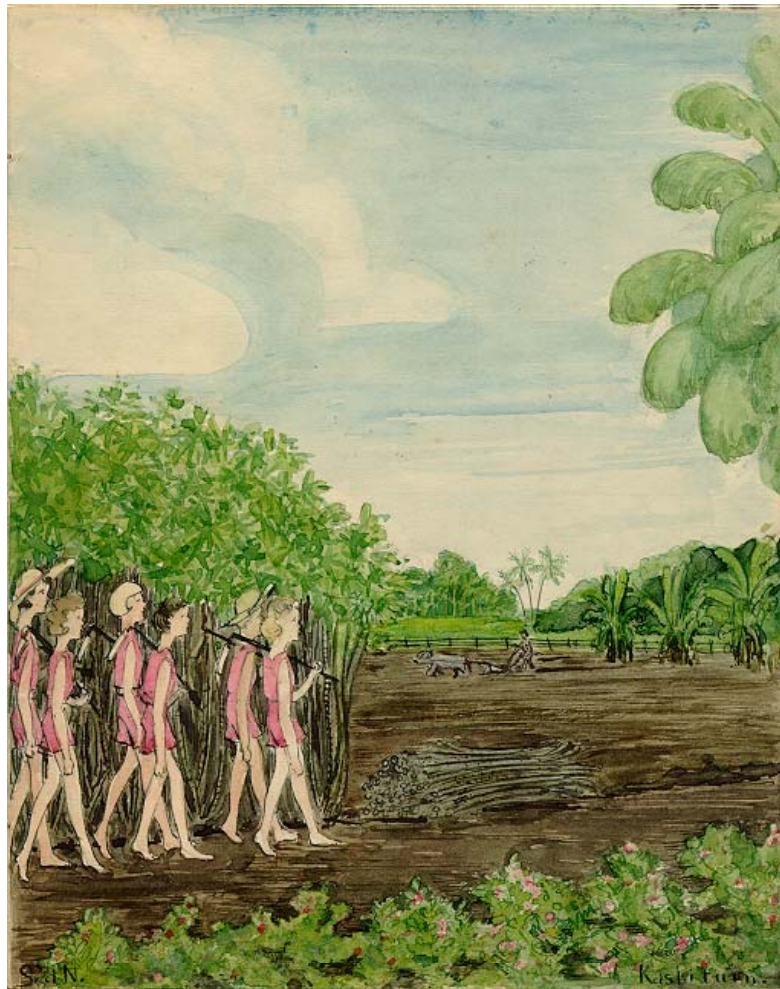
セレベス、(スラウェシ)



バラック第6棟の内部.NIOD, Tekeningen- en prentencollectie, IN 001.



フォレスト収容所 1945年7月17日カンパリ爆撃後の仮収容所。NIOD, Tekeningen- en prentencollectie, IN 001.



野外作業。 . NIOD, Tekeningen- en prentencollectie, IN 001.



共同炊事場の近くにできたの二つの弾孔（爆弾の破裂により地面に空いた穴）のそばを通り、所持品を安全な場所に移す二人の女性 Fotocollectie NIOD.

養育・娯楽・宗教

報告書

教育

カンピリ収容所報告書

一般概要

A. H. ヤウストウラ

教育をすることは、文字通りすべての物が欠乏することにより、当初は非常に困難であった。しかし、教科書などから書き移すこと、後にはタイプで打つことにより、教材を徐々に備えられるようになった。最終的にはすべてが適切に手配され、そして補充された。

カンピリ収容所報告書

教育の構成概要

P. C. サイクンス及びK. モバツハ・ファン・ダー・カウウ

カンピリにおける教育状況は、大いに感謝されるものである。収容所長は敵対国に属していたにもかかわらず、この戦時中にわずかでも可能であったことは実際にすべて行なった。彼は知識を伝えることに気を配るだけでなく、青少年の^{しつけ} 躾にも最大限の関心を寄せていた。

収容所内での生活により、非常に多くのことを見逃さなければならなかった年少の子供たちには、善良な愛国者として特徴づけなければならない長所と資質を育てることに、絶えず従事していなければならなかった。祖国愛を若者の心に育てるために、所長は生徒全員が毎朝、始業前に女王に対して敬意を表明する挨拶をすることを望んでいた。

躾において重要な役割を演じたのは、各種クラブでもあった。これらは所長の完全な関心を得ていた。ここでは「来賓の夕べ」に学校と家庭との接触が得られた。知性の発達と性格形成について、母親と女性教師の間で話し合われた。こうすることにより、しばしば子供についてのより良い理解に達した。所長はまた、教育担当の職員を集め、業務多忙にもかかわらず、この会議の議長を自ら務めるとにより、何回にもわたり彼の躾に対する関心を明らかにさせた。ここでも再び彼が教育と躾に関して、いかに良い見解を持っていたかが明白となった。

所長は教師たちに、自分たちが全てにおいて模範とならない限り、子供たちの心を形成することは不可能である、と指摘した。若者たちの教育にあたる者には、かなり多くのことが求められなければならなかった。学校は新しい社会を構成し、これは戦前よりも、さらに優

れたものでなければならない。カンピリの学校は、これらの人々が将来この時代を感謝の気持ちで顧みられるように、人格を形成しなければならない。それは、彼らがその頃になって漸く、これらの歳月が彼らにとって何を成したか、十分に理解するはずだからである。

カンピリ収容所報告書の解説と補足

ファルダーポートゥ

当初、学校は木陰、井戸の差し掛け屋根の下、または小さなグダン（倉庫）など収容所のあらゆる場所で内密に営まれた。1943年7月に、日本人の所長は散在する食堂や倉庫に学校を開くことを許可した。1944年になって漸く竹製の学校用の棟が建てられた。これには必需品が部分的に備わっていた。そして1945年に平和が突然訪れたとき、不足していた場所を補充するため、3教室からなるバラック1棟の建築が進められていた。

教育に対する所長の関心は、私たちが収容所に抑留していた最後の年に始まった。教育では、彼にとっては知識を伝えることではなく、服従と規律において若者を躾ることが重要であった。状況を考慮するならば、収容所の教育分野において、なおかつこのように良い結果が達成されたことは、所長の協力も確実に高い評価に値するにもかかわらず、第一義的にはそれに負うものではなかった。私たちはこの素晴らしい成果をもたらした小学校と中学校の女性教師たちに、何倍も多くの感謝をしたのである。これらの婦人たちは困難な時期でさえも、収容所の青少年のために、たいへんな熱意と献身により自分たちの任務を遂行した。所長の婦人たちに向けられた「賢明な」忠告と助言は、実際には完全に余計なことであった。所長よりも更に多く、そしてより良くこれらの婦人たちは、自分たちの任務が何であるか、またそれをどのように成就すべきであるかを知っていた。

娯楽

カンピリ収容所報告書

娯楽に関する報告

N. M. ファン・マストゥリフトゥー パンテクック

カンピリでの共同生活の初期には、娯楽の必要性はそれほど大きくはなかった。これは就中、生活様式における変化、そして新しい面識を結ぶことにより生じた。徐々に多様性の必要が大きくなった。これはとりわけ、かなりの婦人たちが率先して、限られた範囲で講演や詩の朗読などを行なったことから、明らかであった。その催しものをより良く管理するために、そして更に多くの人たちにもこれを同時に楽しませるために、これらの集会は所長の特別許可を得

た後で、ようやく収容所全体を対象として開催できた。こういった集会は、初めの頃は殆ど行われなかった。

人々は、夜をしばしば読書やトランプなどで過ごした。精神的な倦怠が顕著に感じられ始めたとき、この分野での変化をもたらすために、ある婦人が特別に指名された。その時点から毎週土曜日の晩には、特別な呼び物（ダンス、芝居、寸劇、通俗科学の講演など）が提供された。

残りの自由時間をつぶすために、コーフボールクラブ⁶⁵が設けられた。そしてテニスコート1面とバトミントン用コート2面が敷かれ、それらは規則的かつ頻繁に利用された。クラブの開設は殆どすべての人々に満足を与えた。

女性及び子供たちに限られた収容所での、2年余りにわたる異常な生活様式を考慮するならば、定められた労働のかたわら、徐々に娯楽の可能性を高めることにより、全ての点で精神的な均衡を求めた多くの人々は、この時間を上手に耐え抜くことが容易にできたと、と考えてもよい。年長の青少年には、顕著な退屈感が成人よりも遅い時期に表れた。それらのクラブの創設は、このような状況のもとで大いに歓迎された。年少の子供たちにとって、収容所との関係における人生は、自由時間に連続的に遊ぶことの可能性を意味するものであった。クラブを構成することは子供たちにとって、むしろ有益であることが重要であった。つまり、子供たちの思考を課外時間に目的をもって育て上げる指導をするためである。

カンピリ収容所報告書の解説と補足

ファルダーポルトゥ

この報告書に記された図書館及びコーラスクラブ両方の娯楽施設の可能性は、既に1943年に溯^{さかのぼ}る。これらを除き、記述されている他のすべてについては、1945年になってようやくこの機会が生じた。1945年以前にも、テニス、コーフボール、サッカー、そして水泳などをするのは確かに認められていた。しかし、これらのスポーツを定期的に行うことは全然なかった。

1945年以前は非常に長い期間にわたり、比較的大きいグループになった人たちが集まることは禁止されていた。誕生日でさえも、その晩数人の知り合いの訪問を受けることについて、所長の承諾を求めなければならなかった。朗読に天賦の才能をもつある婦人に対しては、その息子が所長の好みに合わなかったということで、上演することが禁止された。

⁶⁵ バスケットボールに似たオランダ起源の球技で、戸外のみで行なわれる。

宗教

カンピリ収容所報告書

プロテスタント・グループの信仰生活についての報告

H. スプレウエンベアフ及びJ. J. ホスリンハ ー ヘアリッツン

1943年6月1日に、スプレウエンベアフ牧師は、カンピリにある収容所におけるプロテスタントのグループ（約800名）の人たちの宗教面での世話をするために任命された。その結果、福音書の伝導、そして私たちの信条に従い sacrament⁶⁶ を授ける機会があった。

礼拝については数回の中断を除き、スプレウエンベアフ牧師により毎週日曜日に実施された。そして14日毎に、青少年のための礼拝が行われた。牧師が病気の場合はクレイさん、またはホスリンハさんが代理を務めた。集会する場所は教会用バラックの棟で、ローマカトリック（旧教徒）及びプロテスタント（新教徒）のいずれにも共通して利用された。通常の礼拝の回数はおおよそ130回で、教会訪問者の平均数は150名ないし200名に達した。青少年の礼拝は幾つかある食堂の一つで行われ、平均訪問者数は75名であった。

カンピリ収容所報告書

ローマカトリックの礼拝実施に関する構成概要

P. L. H. ベルチュンス及びA. H. ヤウストウラ

1943年3月5日宗教指導。神父C. ファン・エフモントウO. F. M.⁶⁷（フランシスコ会修道士）は入院中の患者の身で、宗教上の任務を担うことができた。聖ミサは5回読み上げられた。16名に対し洗礼が施され、告解が聴かれた。

1943年5月31日から1943年11月26日までは司祭は不在。認められる範囲で、可能な場合は修道女が代理を務める。

1943年11月26日から1945年8月16日まではP. ベルチュンス神父、S. V. D.⁶⁸（神の御言葉の一団、伝導団）が具体的な活動（畜殺作業、ブリキ作業、ポンプ修理）のためにここに赴任した。彼は限られた余暇と日曜日に、彼の関心を司牧⁶⁹ に注ぐことができた。

抑留の期間中、カトリックの信仰分野では、たいへん多くの成果があった。カトリッ

⁶⁶ キリストによって定められた恩恵を信者に与える儀式。ローマカトリックでは秘跡（洗礼、堅信、聖体、告解、終油、叙階、婚姻の7つ）と称し、またプロテスタントでは聖礼典（洗礼と正餐の二つ）と称する。

⁶⁷ O. F. M. は Ordo Fratrum Minorumの短縮形。

⁶⁸ S. V. D. は Societas Verbi Diviniの短縮形。

⁶⁹ キリスト教で、司祭が信者を統率指導すること。

クではない所長側の誤解または知識の欠如、そして強制収容所での避けられない生活環境による結果として、拘束を受けたにもかかわらず、カトリックの生活はおおむね発展し没頭することができた。プロテスタントとカトリックとの関係は、グループとして常に素晴らしかった。神父と牧師の協調は極めて快いものであった。

カンピリ収容所報告書の解説と補足

ファルダーポルトウ

ヤマジの判断によって、もし収容所の住人が何か悪いことを犯していた、ということになったならば、礼拝と宗教学習が禁止された。1945年までは各々の礼拝式を実施する前に、まず所長の承諾を求めなければならなかった。1945年からは毎月、月間予定表が提出され、その中にも礼拝式と宗教学習が記載されていた。そしてJ（ヤウストゥラ）さんが自分の意向でそれを変更することができた。

二人の婦人が初めの頃、時々プロテスタントの礼拝式を行い、その内のいずれかがJ（ヤウストゥラ）さんに、聖書と数冊の宗教本を取り上げられるという罰則を受けた。その一方では両方の婦人たちは説教することを禁止された。比較的大きなグループで集会することの禁止により、収容所での一日を締めくくる、たいへん貴重な礼拝日課を維持することが妨げられ、また時には完全に不可能にさせられた。

日記からの抜粋

コートウン

1943年5月15日

ここカンピリには何かとても素晴らしいことがあります。つまり神父さまがいらっしゃるのです！ ですから聖ミサにまた出席できます。この神父さまもアンボンからみえられ、この病院で看護を受けているのです。神父さまがひどく負傷されたことは一目で分かります。私たちは、グダン（倉庫）の中ではあったのですが、初めにたくさんのお話を告解しました。神父さま自身は病人用の椅子に横になっておられました。日曜日は、再び初めての聖ミサがありました。「アンボンキャンプ」の5人の少女は、初めての聖体拝領⁷⁰に臨みました。2、3日たって、まだ洗礼されていなかった全てのカトリックの赤ちゃんは洗礼を受けました。みんな同時に！

⁷⁰ プロテスタントでは聖餐式。

コートウン

1943年5月26日

今日は、祝日と言われる日でした。各々の棟はレモネードを籠4つと、ひと塊の氷をもらいました！ それを久々に試飲してみたら、すてきな味でした。寸劇はとても愉快で、本当に成功！ いろいろ楽しい物が上演されました。大きい原っぱでは、お芝居をするために小さな地面一区画が竹で囲まれていました。

各棟はその晩のためにバラックの常備燈を2つ、一時的に貸し出さなければなりませんでした。そうすることで十分明るくなり、全体が良く見えて楽しめました。アプルマンさんがヒドー・ヘゼル⁷¹の「おお、ほっそりとした^{ヨシ}葦のそよぐ音」と朗読しました。アンボンからの児童コーラス隊は、愉快なメドレー⁷²を披露しました。ある農夫とその妻の対話等々。お別れの出し物として、カンピリの詩がナニングさんの朗読に合わせ歌われました。ここにその詩が続きます。メロディーは「砂の道を小さな荷車が走っていた」⁷³のものです。

車はカンピリに向かって走っていた、
乗っている人たちは汗びっしょり、
大勢の女性たちは山のように重なり合 —— った！
ガタガタ揺れてお互いにぶつかり、
脚はしっかりと結ばれて——いた！
友よ、友よ、無事到着を祈ります。無事到着を祈ります。友よ！

ヤウストウラ

1943年6月

人々が私に、なぜもう収容所リーダーの役割をしないのかと尋ねたとき、私は教師としての自分の役職を再び引き受けた、と言いました。それは真実でした。私たちは、いくつかの小グループの子供たちに、戸外で授業をしました。ヤマジはそのことを黙認していました。私は自分の専攻科目フランス語、それに加えてほかに誰も担当する人がいませんでしたので物理学を、そして私が師範学校時代に気に入っていた宇宙論（天文学）等これらの科目について授業をしました。

教材などは殆どありませんでした。収容所にはフランス語の本が一冊ありました。もし私の記憶が正しければ、それは「サンフォニー・セクロネーズ（セイロン交響曲）」という

⁷¹ Guido Gezelleベルギーの詩人（1830年 — 1899年）。

⁷² 詩を連続して朗読すること。

⁷³ オランダでは誰でも知っているメロディーによる替え歌。

題名でした。それはヨーロッパからセイロンに向けての船の旅と、著者のその島での滞在について描かれたものでした。

例えば夕方、戸外で座っているような機会があったときには、関心を示していた人たちに、私は自己流で物理学と天文学を教えました。物理学については、高等市民学校の第4と第5学年の女生徒4名のために「光」を課題に選びました。私は何年も前に学んだことから思い出せることを話し、砂の上にあれこれ絵を描いて説明をしました。宇宙論または天文学も同様に、私の記憶をたどって授業をし、それに熱帯地方の回転式星図から見つけた資料と名前が補足されました。この星図はルゥス・ヴァイフェンバッハさんが私のために衣料品や靴と一緒に青いボール紙で出来た小さなトランクで、マリノへ内緒で持ち込ませていたものです。私の星図は大勢の人たちによって描き移され、私たちは収容所時代を通して、素晴らしい星空を楽しみました。私のそのような講義にたいへん関心が寄せられたため、私は幾夕にもわたり星について話をしました。光年数その他についてのデータは、正確な資料が不足のため、私の想像によるものでした。

コートウン

1943年6月3日

馬鹿げていて大笑いです！ 心霊術が再びたけなわなのです。バラックの棟と棟の間にグダンス（倉庫）2つと浴室1つがあります。そして私は自分たちの棟と第8棟の間にあるグダンス（倉庫）の中に、ある晩ローソクの煌めきを見ました。かなりの人たちが椅子や小さなベンチを引きずってきました。それから、すべてが固く閉ざされました。誰かがささやくのを止め、それから物音一つしない静けさ。私はもっと知りたいと思いました。でも、そんなことが起こってしようとは、全然考えが及びませんでした。

注意深く、私は隙間を通してゲデック（竹で編まれた仕切り）の中を覗き見しました。ちょうど心霊に何か尋ねられたところでした。テーブルの上にあったガラスのコップには、すべての人の指が置かれ、それがテーブルの縁に並べられた様々な文字の方向へ、正にずれ始めました。その答えは「その質問から3時間後に、大きな襲撃があるに違いない」というものでした。その人たちの顔つきといたら！！ 私はできる限り我慢し、かろうじて笑いを押さえることができました！ 扉が勢いよく開け放たれ、人々の群れが外に飛び出してきました。

お母さんと私（お母さんも聞きにきて、私が立っているのを見ました）は自分たちの棟に駆け込み、そこで思う存分笑いました。少し経ってから、これらの婦人たちの一人フラヴロットさんが、私たちの所を通り過ぎていきました。彼女は非常に意気消沈して見つめ、お母さんからの「何か起ったのですか」という質問に、「良いニュースなどありませんでした」と言いました。それに係わった婦人たちはその夜、洋服を着たまま寝てしまったのです！

シャボットウー コートウマン

1943年6月12日

子供たちのためにも、ここでは多分より良く配慮されることでしょう。早速、2歳から6歳までの子供たちのために、幼稚園が始められました。そして現在は6歳から13歳までの子供たちを対象とする、勉強会（学校という言葉はニッポンは聞きたくないのです）といったようなものが開始されるところです。この年齢の子供たちは約300名いますが、その大部分は完全に放任されているのです。過去一年半の間、何も学んでおらず、どの大人からも使い走り少年として使われ、そして利用し尽くされたのです。そして何かすることがある正にその時には、常にどこにも見つからないというように、諸々のずる賢いことを覚えたのです。

現在12名の女性教師が求められています。彼女たちはこれらの子供たちに毎日、短時間、学校で得られる知識を与えなければなりません。教材のない状態でこのことを行うのは、全く容易なことではないでしょう。そして彼女たちは、その上これらの子供たちに定められた雑役、例えば薪割り、ごみ箱を空けること、市場用バラックから食料品を取ってくることを、指導のもとにやらせなければなりません。

私たちの教育指導者は、この学習会を義務づけることを希望していますが、子供たちを送らない母親たちに対して、どのような罰を考えているのでしょうか？ この一年半個人教授を受けた小グループの子供たちにとっては、これを継続するための十分な時間の余裕があります。なぜならば、それらの子供たちが学習会で学ぶことは易し過ぎるでしょう、と思われるためです。問題はいくらかでもあります。

さらに13歳以上の子供たちのためにも、ある計画が準備されているようです。そのことで私は先生として、援助を求められるでしょう。しばらくの間、私は自分の担当している数学の授業を維持します。これも子供たちからの依頼により継続してきたものです。私は9月に25名の生徒たちに教え始め、現在まだ14名が残っています。5人の少年は15歳になったとき、パレパレの男性収容所に送られてしまった訳ですので、人々が想像するほど悪い結果ではありません。

所長の好意は2週間前、日本の祝日に祝祭を『命令した』事実からも明らかでした。少数の人たちは（ある人たちは、昨年スンバでのこの祝祭の折りにあった、何人かのオランダ人女性に対する暴行への抗議として）、そこへ行くことを拒みました。しかし、大部分の人たちは、そのことでふさぎ込むことは殆ど意味がなく、一晩笑うことは自分たちにとって、きつと良いことに違いないと理解していました。

「アンボンキャンプ」はオリボルン⁷⁴と暖かいコーヒーを用意しました。最後の一瞬、所長は私たちを「アイスコーヒー」で驚かせるため棒状の氷を2本、熱いコーヒーの中に入れ

⁷⁴ りんごのみじん切りや小粒のレーズンが入った、ボール状のドーナツに粉砂糖をまぶしたもの。これを大晦日に食べるのがオランダでの習慣の一つ。

たのです。これは直ぐには成功しませんでした！ 全体がオランダ領東インドのスタンブール⁷⁵ のように見えました。そうして戸外では周囲に乏しい燈油をわずか使って明りが灯され、私たちはその前でござの上に座りました。とにかく笑いました。そしてみんなは、また素敵に着飾ったりお化粧することに労を惜しみませんでした。結局、私はこの準備が、どの祝賀会においても最も楽しい部分である、と以前にも既に思っていました。

2日ほどすると、所長は午後私たちと一緒に、ここから3キロメートル離れているダムへ、泳ぎに行くことを考えつきました。子供たちは大喜びでした。閉鎖感に悩まされていた少数の年長の子供たちは、想像上の自由を楽しみました。そして、より現実的な子供たちにとっては、これは水浴用の水の莫大な節約を意味したのでした。

現在、もはや毎日午後という訳ではありませんが、それでも1週間に3回行われ、相変わらず100名を超える水泳愛好者に利用されています。明日、私自身も初めて同行したいと思います。多分、今でも私は懐かしい村の知人たちに会うでしょう。

コートウン

1943年6月12日

収容所にはもう一人、男の方がいらっしゃるのです！ すべてのプロテスタントの人たちにとって一致して喜ばしいことに、今日パレから牧師さまがお見えになったのです。その男の方に、すべての女性たちが文字どおり殺到しました。彼女たちは夫の近況を聞きたかったのです。実際には、その方は大工として来られたのです。私たちの所長は、そのことについてそれ以上の理解はなく、そうすることでも構わないのだ、と考えるのです。

シャボットウー コートウマン

1943年6月13日

最近の所長が示した好意は、パレパレから男性抑留者の一人であるプロテスタントの牧師さまを、派遣することでした。その方は何年もニューギニアで活動しておられた伝道師です。この方のお子さん三人のうち、最後の一人はアンボンでの爆撃の際に（二人目のお子さんは抑留中に赤痢のため、そして最初のお子さんは以前既に）亡くされたのです。そして奥様は一生、身体障害者なのです。

牧師さまがここで最初にするように指示されたことは、50名の子供たちを洗礼することでした。これはこの方にとって非常に厳しいことが明白でした。その選択がこの方に当っ

⁷⁵ 20世紀前半に見られた民族芝居。

たのは、恐らく彼が以前、大工であったためのようです。そして牧師さまは今ここで月曜日から土曜日まで、ヤップンのために、あらゆる雑用を処理させられるのです。彼は毎週日曜日だけは牧師となることが許される、とはっきりと言われました。

コートウン

1943年7月3日

所長は学校が開かれることを許可しました。でも、高官訪問があるときは、子供たちはできる限り目立たないように、直ちに自分たちの棟に帰り、仕事を見つけなければなりません。高等市民学校も開始していいのです！

シャボットウー コートウマン

1943年7月18日

とても喜ばしい出来事は学校のことです。所長は、およそ400名の子供たちが、小学校や高等市民学校へ通うことを許可したのです。つまり、グダン（倉庫）の中ではしばしば地面に敷いた小さなござの上で、時には鉛筆も紙も無しに、子供たちはアルファベットの基礎を教わっています。高等市民学校は食堂にあり、殆ど教科書無しで勉強しています。いくつかの科目は教育指針がないため、授業をすることができません。

資格のある教師が大勢います。残念ながら、私自身はそうではありません。「アンボンキャンプ」のある修道女と私は一緒に数学を教えています。それに私は1時間、民族学を第4学年で教科書無しに、4名の少女たち（18歳から20歳まで！）に教えています。第5学年は該当する生徒がいないため存在しません。

学校が開始されることになっていた前の晩に、禁止の通達が出され学校はありません。誰かが、原住民と言葉を交わしたため、というものです。そしてこのことは厳しく禁止されていたのです。幸いに、それは事実と反することであると、所長を納得させることができましたので、学校は今までのところ2週間運営されています。ぐらつくものが何かあります。所長は私たちがこの学校の問題で、大変傷つき易いことを知っています。そして私たちは、これは所長の上司が確かに承知した上で進行しているのでしょうか、と考えるのです。明日は高官訪問のため休校です！！ 収容所の自分たちの中でも、かなり多くの抵抗があったのです。それは、子供たちは義務づけられた雑役から離れなければならず、従って大人たちは再び、さらに骨を折って仕事に取りかかる必要があったからなのです。しかし、すべての抵抗に打ち勝ったのです。私たちが今ここで少しの間、頑張りとおすことができ、そしてヤップが筆記用紙を援助したいと思うことを願うのです。

コートウン

1943年7月28日

今朝、日本人たちは図書館を開設するために、すべての書物を集めにきました。それで誰でもいつか順番に、何か読むものがあるのです。みんなは今お母さんのところに、書物5冊の題名を記した小さなリストを出していいのです。そして、それらの本がまだそこにあれば、その内の1冊を受け取ります。

シャボットウー コートウマン

1943年8月2日

私が前回の日記を書き終えて、ちょうどベッドに横になったとき、遠くの方にドシンという音を聞きました。マカッサルに落ちた爆弾でした。それは冴えた月夜で、空襲は2時間半続きました。この爆撃の直後、恐らくこれとは関係がなかったようですが、学校は当分禁止されました。ある協議で、マカッサルの上司たちが学校について完全に反対であり、所長自身は実際にはそうではない、ということが明白となりました。最終的には、「自分たちで解決策を見つけよ」というのが所長の言葉でした。小学校は現在も今まで通り、点在する場所で続行しています。中学校はまず初めに45分間、畑仕事をしなければなりません。そしてその後で、授業を部分的には戸外で受けます。食堂での第4学年の合同は、もはや許されません。砂の上に座って戸外で授業をすることは、集中力にとって致命的です。これらの子供たちが、何か学ぶことを許されるその状況は非常に厳しいのです。

シャボットウー コートウマン

1943年9月5日

すべてのことで最も不可解なことは、女王さまのお誕生日、8月31日のことでした。その少し以前に夕方戸外で、数人の女性たちが、もし機会があるならば私たちは再び祝賀会を開催することを許されると所長が言った、と話をしていました。その時8月31日の日付を出したのはこの女性たちであったのか、あるいは正に所長であったのかは明瞭ではありません。しかし、いずれにしても8月31日に祝賀会がきつとある、と決定されたのでした。大多数の人たちは、この親切な意向は一日パチョレン（鋤作業）を強制されるよりもなお一層悪い、と思いました。責任者（ヴェイヤース氏は、その間にヤウストウラさんと交代し、ヴェイヤース氏は現在、年長の少年たちと一緒に耕作をしなければなりません！）は私たちの反対について話し合いました。その結果、8月31日は正式にお祝いすることが許されました。それは休日とされ、へ

ット ヴィルヘルムス（オランダ国歌）を斉唱することが認められました！

楽しい祝賀会は、満月と共に次の土曜日にやって来るのです。実際に8月31日になるまでは、誰もこの約束されたことを取って信じていませんでした。午前中と夕方に正式な集会、つまりカトリックとプロテスタント合同（オランダでは考えられないことです）による初めての礼拝がありました。ある修道女が女王様を祝福し、修道女の聖歌隊があたかも天国から聞こえてくるかのように歌い、牧師さまがお説教をなさいました。すべて決して忘れられません。日本の奢り^{おご}で、私たちはそのうえ特別配給を貰いました！すべてが夢のようでした。ヤップは誰も姿を見せず、ほんのわずか自由なオランダでした！これらすべての恵みの背景にある意図は、今のところ不可解のままです。

コートウン

1943年10月20日

今朝、命令が出されました。高等市民学校の少年少女全員、畑へ行かなければなりません。そしてもう学校へは行ってはならないのです。本当にうんざり！

コートウン

1943年11月2日

私たちは今また午後、学校を開いても良いのです。それで、再び禁止されてしまわないうちに、大急ぎでまた始めます。

コートウン

1943年11月28日

バンザーイ！！ 訳もなく神父さまが数ひきの豚と共に今朝、収容所に車で到着しました。神父さまはパレからお見えになり、ここでは屠畜^{とちく}担当に任命されました。もちろん、女性たちが押し寄せてきました。誰もが夫や息子たちのことについて、何かしら聞きたかったのです。かわいそうなこの男の方は、それほど多くの女の人たちに取り囲まれて、どうして良いのか分からないのだ、と私は思います。

コートウン

1943年11月30日

今日は再開後、第一回目の聖ミサがありました。ミサの前に神父さまは全般にわたる罪の許しを与えました。それから私たち一同は、聖体拝領を受けることができました。

シャボットウー コートウマン

1943年12月12日

この暗澹^{あんたん}る時期のさなか、楽しい出来事はこの12月6日の聖ニコラース祭でした。私は指導担当となり4週間もの間、私たちと他の大勢の人たちも、828名の子供たち（0歳から16歳まで）に気の利いたプレゼントを贈るために働きました。

紙は堅い白の木綿に変わりました。これは毎月ニッポンのために、裁縫作業場で縫われている1,000本の長ズボンから残った布です。この木綿から帳面、色見本、絵本、刺繍の本、がちょうゲーム⁷⁶のような玩具、その他が作られました。竹からは人形の揺りかご、自動車、船、ベンチ、人形用家具一式、そして更に多くの物を作りました。

12月5日⁷⁷にすべてが展示されましたが、私たちの生活を将来、証明することに役立てるために、これを記録できなかったことは残念でした。わずかな自由時間にこの材料で作上げたものは、絶妙の出来栄でした。最近パレパレから到着したばかりの神父さま（同時にサピ（乳牛）と豚の屠畜^{とちく}担当）は聖ニコラースを演じました。祝賀会が最高潮となったとき、『教会用の棟』には私たち1,000人以上がいました。私たちは数キロメートル先に、爆弾が落とされたのを聞きました。しかし、全員が落ちていて、飛行士も私たちも同様に、誰もが戦争の役割を果たしました！

コートウン

1943年12月25日

クリスマスの祝祭は、今年もまた私たちにとって素晴らしいお祝いでした。朝5時に深夜ミサが始まりました。バラック第1棟の最近部分的に建てられた食堂（椅子やテーブルはまだ配置されていませんでした）で、教会でのように式が行われました。修道女たちは見事な祭壇を作り、その後ろ全体にはヤシが並べられていました。角には奇麗に出来たキリストが降誕したう

⁷⁶ すごろくに似たゲーム。

⁷⁷ 聖ニコラース祭。

まやの模型があり、それはアンボンから見たクロティルドゥ修道院長が用意してあったものです。

とても素晴らしかったのですが、場所のことで大混乱があったのです。場所を獲得するために、誰もがティカールチュ（小さなマット）またはクッションを持参しなければなりません。そして全員がもちろん良い場所を欲しいと思いました。背の高いベンチを持っていた人たちは、ティカールチュを持っている人々の後ろ側に座りにきましたので、誰でも良く見ることができました。ヤコビイン修道女は私が前の方に良い場所をもらえるように気を配り、特別に確保しておいてくださったのです。

修道女たちも自分たちでローソク⁷⁸を作りました。また他の数人は、既に聖体拝領台を竹で作ってありました。そして実際に芸術の法則に従って組み合わせました。本当に正真正銘の教会のように見えました。修道女の聖歌隊は美しい限りを尽くして歌い、待者⁷⁹でさえ今回は赤いガウンを着ていたのです！

神父さまは3回の聖ミサを行なう許可を得ていました。ところが、それを行う前日、2頭の水牛を畜殺させられました。しかもその2、3日前には、多くの人たちが洗礼されました。それは心安らかな楽しい本当の祝日でした。その晩のために神父さまは、実に素晴らしい心に響くお説教をなさいました。そこには信仰を異にする人たちも大勢集まってきました。なぜならば、神父さまのお説教は、その間に既に有名になっていたからなのです。

シャボットウー コートウマン

1944年1月7日

クリスマスと新年は過ぎ去ってしまいました。ヘンクのいない3回目のクリスマスでした！マリノとは対照的に、カンピリは全体が一つにまとまっています。最近あった祝祭の数日間に、このことは再びはっきりと表れました。12月24日クリスマスイブに、数ヶ所の棟では合同のお祝いをしました。他の棟ではしませんでした。そのようなことは、殆ど何人かの個人の考えによって決まるものです。

いわゆる外国人の棟、第8棟では、バラック主任でもある若いアメリカ人女性ダイブラーさんが、神の恵みと信仰を明白に示しました。これは、たいへん印象的でした。それは、ダイブラーさんは12月の初めに、神父さまから、夫（飛行機で旅をした良く知られた伝道師でした）が3ヶ月前にパレパレの収容所で亡くなっていたこと、を聞いたからなのです。12月25日には半分建てられた食堂に、即席に作った祭壇とキリスト降誕の場面を表した模型が置かれ、カトリックの人たちの深夜ミサがありました。大勢のカトリックでない人たちが出席

⁷⁸ 短くなったローソクを溶かして筒に流し、芯となる厚紙を入れて固めたものと思われる。

⁷⁹ 聖ミサで神父（司祭）を助ける役割をもつ人。

していました。

特徴的なことは、比較的大勢の人たちがパレパレ同様ここでも、ある信仰へ改宗することです。夜明け近くに、グループになった人々は敷地のいろいろな場所で、快い目覚ましとなるクリスマスキャロルを歌っていました。午前中遅くなってプロテスタントの礼拝がありました。また午後は、両親がカトリックまたはプロテスタントである子供たちのために合同でクリスマスの祝祭がありました。神父さま（カトリック）は祈祷で始められ、牧師さま（プロテスタント）はクリスマスの物語などを話されました。おそらく子供たちには、それが同一のものと考えられましたが、私たちは両側の対抗意識を感じました。

夕方私たち6人は、自分たちのやり方でクリスマスをお祝いしました。その内の一人が「クリスマスツリー」（緑色の枝に綿をつけたもの）の傍で、いくつかの詩を朗読しました。そして私たちは美味しいものを食べました。クリスマス第二日目の晩には、ファン・ホーアさんによって作られたキリスト降誕劇がありました。彼女はこのようなことを見事にする人なのです。修道女の大聖歌隊が小さなオルガンの傍で、ラテン語の讃美歌を歌いました。すべて合わせてクリスマスの祝祭の思い出になるでしょう。

^{おおみそか}大晦日の晩には私たちは礼拝の後、バラックの棟の人たちとお祝いをしました。私たちの棟に居る女性の一人はプロテスタントの牧師さまで、1943年から1944年への越年をしました。夕方は大きなバラック（教会用バラック）で祝賀の夕が催されました。そこでは風変わりで機知に富む、過ぎ去った年の回顧（トーマスファーとピーターネル）⁸⁰が見られました。これもまたファン・ホーアさんによって作られたものです。あるロシア人女性の指揮による少人数の聖歌隊が、ロシアの歌を披露しました。

コートウン

1944年3月17日

お母さんのお誕生日。バラックの棟でお祝い。棟の住人たちからお母さんはお祝いにクッションを頂きました。とても素晴らしいものです。彼女たちは表面にお母さんの姿をアップリケにしたのです。気をつけて見てください。本当にお母さんの洋服を着ているものなのです。お母さんは、つまりいつも黄色い花模様のスカートをはいていました。そして彼女たちはシィンに、その布の小切れを頼んであったのです。

アップリケのお母さんの口元からは、お母さんがいつも伝達しなければならなかった諸々の命令、例えば、『ベッドの前で皆さん点呼！』そして『皆さんピレン』⁸¹。『7時です。皆さん起床！』などが発せられています。クッションの周りのリボンには、棟の人たち全員

⁸⁰ 年末に行なわれる恒例の芝居で、過ぎ去った一年の出来事が喜劇風に演じられる。

⁸¹ ピルの複数形。現在使われているピルの意味ではなく、伝染病などの予防のための錠剤と思われる。

の名前が刺繍されていました。本当に素敵な思い出です。更にお母さんはテーブル付きの竹製長椅子を頂きました。それはバラック脇の地面に固定されました。もちろん外側にですから、水田全体の景色が見渡せるのです。ハイヌマンさんがそれを作ったのです。本当にたいへん芸術的です。

シンからお母さんは、残り布でこしらえたテーブルクロスをもらいました。その布地はエディのシャツを作るために使われたものです。つなぎ目に美しい花々の刺繍をしましたので、それは全然目に付きません。私からはお母さんへ、壁に掛けられる小さな花瓶を贈りました。周りは完全に^{かぎぼり}鉤針で編んだものです。⁸² エディとルウロフからは小さな腰掛けを、カーラからは飴の入った箱、そしてフリィダからは病院で彼女が自分で作ったブローチでした。

コートウン

1944年3月20日

今日の午後、私たちのクラス全体の会議を開きました。シャボットウさんのお誕生日に何を贈ったらよいか？についてでした。シャボットウさんはマリノでは私たちのために大変骨を折って下さいましたし、実際に今でもそうなので何か差し上げたいのです。あれこれ悩んだ結果、箱を自分たちで作って贈ることに決定しました。その箱は垂線や二等分線など、すべてが刺繍された三角形のものです。更にもの上には、いろいろな代数学の方程式も付けられ、蓋の内側には私たちの名前が添えられます。今は、それがうまく出来上がることを、ただ願うばかりです。

コートウン

1944年4月13日

さらに詳しい通知があるまで、学校は禁止されました。そして私たちはもっと厳しくされた開墾作業をさせられ、今は午後5時半までです。所長はまた不機嫌なのです！

コートウン

1944年4月15日

私たちは再び学校へ行かれるのです。

⁸² 花瓶はレース編み風の袋に入っている。

シャボットウー コートウマン

1944年5月7日

.... みんなの誕生日。これはここ収容所で、徐々に大切な行事となっています。平均すると1回におよそ30ないし40の贈り物を頂きます。すべてカンピリの流儀によるものです。最も愉快的、そして最も素晴らしいものは、廃物利用によるものです。古いシャワーキャップから取った花でこしらえた花飾り、古い袋から探し出したあらゆる品々、そしてティカール（小さなマット）、ココナッツの皮を切って作ったボタン等々。

誕生日には、個人的な知り合いのほかに、バラックの棟の全員（100名余り）をコーヒーとお砂糖、そして蒸し菓子などでもてなします。この最後にあげた蒸し菓子は正にカンピリ製法によるものです。ラギ（イースト）入りのお米、少量の米粉、ジュルーク⁸³の皮、それから生姜^{しょうが}またはシナモン。この生地^{きじ}は炊飯用ドラムで蒸されます。それほど大量に作るためには、それが唯一可能な方法なのです。必要なお砂糖のために、人々は配給の中から少しずつ、何ヶ月にもわたって蓄えるのです！ その日が過ぎ去ると、本当にほっとさせられます。この日がそのように祝われることは、やはり良いことなのです。また贈り物のことを考えなければならない、ということで時には非常に苦勞することも確ではありますが、誕生日は少なくとも、生存していることの唯一のしるしを与えるのです。

ところが団結を保つためには、しばしば奇妙な譲歩をしなければなりません。復活祭の休日の後、突然、例えば小学校の全学年で、授業時間の前後にお祈りをする事になりました。修道女（カトリック）たちは常に祈禱をしていました。そしてプロテスタントの人たちは、このままにたくはありませんでした。⁸⁴ そして「中立」祈禱^{たくい}といった類のものを承諾しました。クリスチャンではないグループは、驚きを示しました。しかし、そのようは少数派では、異論を持ち出すことはできません。それほど大勢の人たちが、キリスト教に改宗したことは不思議なことです！

コートウン

1944年5月25日

昨日の晩、私がミアのところに行ったとき、ポップがバラック第5棟の井戸の所に座って私を待っていました。より良い言い方をすれば、私たちのどちらか一人をとということです。ポップは私たちがお互いに、夕方いつも会うことを知っていて、誰が来るだろうかと待っていたのです。彼女は私たちと話しをしたかったのです。最初の頃、彼女はけっこう隠れてやっていた、

⁸³ 熱帯地方の果物。

⁸⁴ カトリックの修道女たち同様、プロテスタントの人々も祈禱することを望み、そのことで彼女たちから遅れをとりたくなかった。

私たちは強い好奇心に駆られていました。それから遂にはっきりしました！ 彼女はカトリックになりたいのです！ 実際には彼女はカトリックとして洗礼されたのですが、ただそれだけのことだったのです。彼女は既に随分長い間シャーヌ修道女から授業を受けています。今すべてが決定的となり、彼女はそのことを是非とも私たちに話したかったのです。私たちは驚きの余り啞然としてしまいました。様々なことを予想していましたが、これは意外でした。私たちは誰にも何も話さない、ということ約束しなければなりません。彼女はそれで初めての聖体拝領を受けに行きます。新しいことがあれば、私たちは必ず聞きます。そのように毎日お互いに会っていても、人が存在に関わるような大切な問題を心に抱えていることには、気が付かないものです。

コートウン

1944年6月3日

今晚、点呼の直ぐ後でポップが来ました。彼女は私が彼女の知らせにそれほど熱狂的ではなかった、と思ったのです。そして、私がそのことを実際にはどう考えていたのか知りたかったのです。私はポップに「収容所の気まぐれ」ではないかと心配しているのだと、ざっくばらんに言いました。私たちはミアが走ってくるまで、深刻に話し合いをしました。そしてミアは、何も質問してはならないのだとも分かったのです。

コートウン

1944年6月7日

今晚、高等市民学校の女生徒全員は、バラック第3棟のグダン（倉庫）に集合させられました。何か朗読するように頼まれました。それでミアと私は次のような詩を作り、パケ（使い古し）の銅のカーテンリングの耳飾りと腕輪をしたジプシーたちのように仮装してそれを歌いました。もちろん作り声で、そしてある部分はそれぞれが別々に。残りの少女たちは何も作らなかったのです！ うすのろなのです！ 今度、はっきり構成されたクラブが設立されます。そして私たちは次回までに、名前を考えなければなりません。それは6月の末になるでしょう。

ここにジプシーの夫婦がいる

もう何年も結ばれている

はっきり分かるように彼は夫

それならば私は彼の愛妻

身震いするほど時には嫉妬し口喧嘩もする

けれどお互い無しでは生きていけないもの
私たちは愛情で結びついた夫婦
私は彼のもの.. そして僕は彼女のもの！

4人の子供たちは寝台にねている
わずかな藁の小さなマットレス
^{いたずら}
悪戯な子供たちであることは請け合い
みんな確かに完全な愚鈍ではない
彼らみんなが元気とはありがたい
子供たちのことを感謝している
一番目は確かにひどい斜視である
けれど誰でも何かしらある。

二番目はみつ口
そして鶏のようにとぼけたまなざし
その上ひどい鼻たれ
みんな合わせればかわいい子供だ
三番目は内股
ああ、皆さん、本当に私は悲しかった
四番目はひどく生意気な娘
ちょっと黙れと夫が口を叩いた。

私たちの荷車の前をやせ馬が歩いている
そしてある時は駆け出すこともある
確かに欠陥のある駄馬
完全なめくらでしっぽもない
うちの痩せ衰えた小犬はミィシィ
いつも警官を追いかける
そんなふうには荷車は三輪で走る
決して引っ繰り返らないとはおかしい。

コートウン

1944年6月29日

今晚、少女クラブが正式に発足されます。私たち全員が名前を考えなければなりません。

私は考えたものが何もありません。消燈までにはまだ少し時間があります。とても愉快でした。クラブは約60名の少女たちから成り、殆どは高等市民学校の連中です。独特な名前もあった全ての中から、ティヌク・ストルクさんのS. O. S. が選ばれました。それはSave Our Spirits（私たちの勇気を救おう）という意味です。人気のある少女で、ここ収容所では完全に独りぼっち、そしてとても自立心が強いのです。それを選ぶのに、長い時間話し合う必要はありませんでした。彼女は常にちょっとクバラ（責任者）ふうなのです。クラブの創設を記した公の証明書のようなものが作成されました。私たちの極上無比の『泡立ちコーヒー』⁸⁵ を飲みました。消燈！

コートウン

1944年7月8日

私は留年！ 落第です！ リリィ、ミア、ポップそして私は今晚、食堂でブリッジをするため、気持ちよく横になって（足を上げ！）ヘアダ・バードウンさんが突然現れるまでトランプに熱中していました。彼女は教師会議を盗み聴きにいったのです！ リリィによると『厚かましいピナタン』（愛しい人）！ 彼女は何も言いたくなかったので、私はもう悲観的に見はじめました。そして繰り返し無理やり聞きただしたところ、やっと彼女は、私が不合格であったことを言ってくれたのです。一生懸命に我慢したのですが涙が頬を転がり落ち、本当に止めることができませんでした。ミアも一緒になって同じように激しく泣いていました。反射的にポップもすすり泣きを始めました。そしてミアは、私たちが正に聖書の中の涙ぐむ女性たちだ⁸⁶、と言いました。それから私たちは、また笑わざるを得ませんでした。私一人だけが落第したのだ、と考えてはなりません。とにかく、何もかもがしゃくに障ることばかりなのです。

コートウン

1944年7月15日

初めてテニスをしました。ヤマジもちょっと見にきていました。本当のテニスという訳ではありませんが、ボールを打つことはそれでも楽しいことで、それはまたちょっと違う気分のものです。

⁸⁵ ミルクセイキ風に泡立ったコーヒー。収容所の特別製法。コーヒーエキス（エッセンス）を泡が立つまでかき混ぜ徐々に砂糖を加える。全体に張りが出てクリーム状になるまで更にかき混ぜる。

⁸⁶ キリストの死を悲しんだ女性たち。

フォスカウルー リムボーフ

1944年7月31日

私たちは750名の多人数から成るグループを引率して、翌日ダムへ向けて散歩した。そしてこの散歩は、かなりの成果を収めた。ヤマジは足が悪かった人たちをダムの傍まで連れていくため、数台のトラックを往復運転させた。子供たちには十分なサンドイッチが、大人たちには塩を入れて炊いたクタンライスト（もち米）が用意された。そしてヤマジは、楽しかったその日を感謝されたとき、喜びで輝いていた。

フォスカウルー リムボーフ

1944年8月7日

牧師はミシンの箱板から黒板を作るため、大工仕事に専念していた。ヤウストウラさんからの指示であり、従って牧師は一生懸命仕事に励んだ。それからヤマジが午後5時に帰宅し、彼と共に3名の訪問客が車から降り立つ。そして車のトランクが開かれ、一体何が続いて出てくるものか？ 12枚の見事な黒い黒板が現れる。ところが、同じように見事に黒くつくので、運転手は運び終わると手を洗うことが許されるか、とちょっと尋ねる。なぜならば、これらは煤で真っ黒なのだ。これから黒板を12枚だけ作ればよい牧師と、これから黒板12枚だけに墨を塗ればよい伝達係の肩の荷がおりる。

シャボットウー コートウマン

1944年8月11日

それから本当の校舎（今まではずっとグダン（倉庫）と食堂）で新学期が始まりました。代数学と幾何学のほかに私は現在、測角法と国家組織を教えています。私たちは黒板を貰いました。そして今日は、小学校用の教科書100冊が到着しました。

高等市民学校では引き続き数冊で勉強しています。これらは子供たちが避難の際に偶然、携行していたものです。国家組織（法律）に関して、私は完全に自分の記憶力に頼るしかありませんでした。所長の意図するところは、このためにも教科書を入手させる、というものらしいのです。さらに悪いことは、紙の不足です。生徒全員は一度4枚の小さな紙を貰いました。それ以外は相変わらず、けしゴムで消した古い帳面や、裁縫作業場の包装紙などのようなものを書いていきます。この状況下での結果は、とりわけ小学校に関しては本当に素晴らしいものです。

コートウン

1944年8月25日

ベルチュンス神父さまのお誕生日です。ミア、ポップ、リリィそして私はお祝いを言うために行きました。年長の少年たちには神父さまが、特に映画などの話をしてくださる一タがあります。女王さまのお誕生日には、再び祝賀会が予定されています。今回は活人画⁸⁷、そしていつも何か詩が朗読されます。ファン・ホーアさんはある本の中にある肖像画の挿し絵をもとに、様々な人物を探し出しました。リイトウ・ビッカーさんはカーレル5世。スーズ・ルウルさんとティヌク・ストルクさんはバルタザー・ヒーラーツの場面で、ヴィルム・ファン・オランユを撃つのです。ミアはヴィルヘルミナ女王さま。そして私、わたしはヨハン・ファン・オルデンバーヌフェルトウ。ファン・ホーアさんによると、私の顔上半分は彼の顔と同じなのだそうです。きっとそうでしょう。残りの部分は髭なのです。ハッ、ハッ！ ともかく、また隈なく衣服を探し回るかなりの仕事になります。だんだんに各人のトランクの中味を知るようになり、上演のためであれば、幸いに誰でもいつでも直ぐに喜んで貸してくれます。靴が無いことは、ひだを付けた飾り布か、何かそのようなものを張った後ろ側にめいめいが来て⁸⁸ 立つことで解決されます。

フォスカウルー リムボーフ

1944年8月28日

それから所長は嘆願するかのように話し始めた。以前は日本とヨーロッパはそれぞれ遠く離れていたが、現在ではお互いに近づき合い共に一つの国民である。私たちはここ収容所に抑留され、労働しなければならない。しかし、この状態はもっと悪くなることも有り得るのである、と所長は言った。鉄条網はバラックの棟々の周囲に接近し、すべての食物は外部より供給される。私たちは、その方をむしろ好ましいと思ったのだろうか？ 私たちはそれでは実際に何を望んでいたのか、なぜ自分たちは満足しなかったのか？ 一体私たちは更に何を望んでいたのか？

些細なこと、例えば夫から、または夫への手紙、あるいは特配の砂糖またはグラジャワ（赤シュロ糖）、そしてちょっとした祝祭、それに教会へ行くことなどで、女性たちを満足させ得るはずである、とヤウストウラさんは言った。「ああ」しかし、所長は礼拝のことは良いとは思わず反論した。なぜならば、婦人たちは最早、気が狂ってしまい『神』と信仰のこ

⁸⁷ ある背景の前で扮装した人が、画中の人物のように動かずにいるもの。歴史上の有名な人物を題材とすることが多い。

⁸⁸ 裸足であることが観客から見えないように、舞台前面に床から足が隠れる高さまで横断幕を張るといふ工夫。

としか話さないからである。従ってヤマジは、礼拝は少なくとも1ヶ月間は停止しなければならない、と結論を出した。そしてヤウストゥラさんは、この点での変更を得ることはできなかった。カトリック同様プロテスタントも1ヶ月間は礼拝無し。ラタ ラタ（みんな平等）、とヤップは言う。

フォスカウルー リムボーフ

1944年8月31日

儀式ばった、正しい方法で祝われた女王様のお誕生日。ベルチュンス神父はお説教と記念演説をし、ヘット ヴィルヘルムス（オランダ国歌）から話題として詩節を取り上げた。御身を信じ加護にお頼りします。御身は、おお、神よ。主なるキリスト。御身におすがりしましょう。私をもう決してお見捨てにならないでください。神父は情熱を込めて唱えた。そして精神及び道徳再武装運動が重要であることを説いた。さらに小さな子供たちのために操り人形劇芝居を、そして夕方にはズス・ファン・G（ホーア）さんによる歴史の回顧があり、すべてが大変な成果を上げた。

シャボットウー コートウマン

1944年9月24日

8月31日の女王陛下のお誕生日は、昨年とは異なっていました。昨年はできる限り良い方法でこの日を祝福させようとする、所長の意向が感じられたのです。今年はもうそれがありません。食料の特配などといったようなこともなく、ただ軽率に認めたのでした。また私たちの側からも自発性が薄れ、朝、神父さまと牧師さまは合同集会で訓話をなさいました。これは夕方、歴史担当教師と高等市民学校の女生徒たちによって演じられた活人画と詩の朗読に比較すると、陳腐なものでした。彼女たちはオランユ家⁸⁹の歴史を明瞭にしました。

コートウン

1944年10月11日

私の誕生日！ 17歳！ 家族を代表してお母さんから、新しい洋服を頂きました！ なんと

⁸⁹ 16世紀ドイツのナッソウ家が南仏のオランユ公爵領を継承、ヴィレム一世（沈黙公、在位1579-1584）以降同家はオランダの総監職となり、1815年オランダ王国成立後は王家となった。

贅沢ぜいたくなことでしょうか？ 特に、私たちの貯蔵箱には今、カイン（布）があと一反だけしか残っていない、ということを考えるときに。そして私はこれから大切にしなければなりません。なぜならば、平和または解放が訪れるならば、私はその時にこの洋服を、まだ着られるようにしておかなければならないからです。

コートウン

1944年10月21日

新聞が出来上がりました。編集部員は、T. ストルク、S. ルウル、M. ファン・ディッフルン、T. コートウン、そして O. ファン・ドゥリイストゥ。ティヌクは既に見出しを組み合わせてみました。収容所での格好をした2人の少女。左側の少女は学帽をかぶり、右側はパチョル（鍬）を担ぎ帽子をかぶっています。その2人の間に「S. O. S. 新聞」と書かれています。

紙が二つ折りにされると、縦35センチ横27センチとなります。今回は更にもう1頁追加されますので、6頁ものとなります。各号にニュース、パズル、広告、固定欄『人はアタップ (nipah (ニッパ) というヤシの葉でふかれた屋根) の下でひそひそ話しをしている..』。そして (ファン・ホーアさんの) 連載記事があるでしょう。

今回は第一面に、まず序文、行進曲の歌、S. O. S. の記事を期日通りに完成させるための指示、それから「外国」と「町」⁹⁰からのニュース。さらに『試作品の週』という題名の短い詩 (パロディー) ⁹¹ から成る雑録、そして短編小説、ジョーク、パズルと広告。広告はもっと工夫しなければなりません、それ以外は既に書くことができます。すべて鉛筆の手書きです。

フォスカウルー リムボーフ

1944年10月28日

さらにカトリックの人たちは夕方、10月最後の日曜日ということ considering して自発的に説教をした。これは慎重に用意する必要があった。ルモルダ修道女は洗濯物を中へ運ぶ機会に、日曜日に「説教のタベ」を開くことが認められるかどうか尋ねたところ、所長はそのことを検討した上、ヤウストゥラさんに返事をする、と答えた。そしてR (ルモルダ) 修道女は既に神父に向かって、すべて手はずが整ったと言った。ところが、それとは違って進行した。

⁹⁰ 外国は収容所の外界、町は収容所内の最も中心となる地区とも考えられる。

⁹¹ 有名は文学作品の文体や韻律を模し、全く反する内容を読み込んで滑稽かつ風刺化したもの。

ヤマジはヤウストウラさんと呼ばせ、彼女に尋ねた。説教の夕べのことを依頼した修道女R（ルモルダ）が常時いたのは、一体どうしたことだったのか??? なぜ私たちは差し迫って祝賀の夕を持ちたかったのか、最初は土曜日に、そして今、日曜日に? それは私たちがお祝いをしたかった特定の日付であったのか? そして実際には何のための記念であったのか。所長はこの全てのことを、非常に苛々^{いら}して質問した。そしてヤウストウラさんは、やっとの思いで彼を落ち着かせ、結局、通常の礼拝となった。つまり午前中はプロテスタントの牧師、そして夕方カトリックの神父が行なうことを認められた。他のすべてのことは徹底的に中止された。

コートウン

1944年12月5日

S. O. S. の聖ニコラース祭。とてもすてきな晩! 声を限りに私たちは幾つもの歌を合唱しました。それからプレゼントの包が配られました。私は壁に掛ける愉快的ズワルテ・ピートのカップを⁹²を頂きました。耳には2つ銅製のカーテン用リングが掛っています。紐^{ひも}に吊^つるのです。面白い詩⁹³も添えてありました。その筆跡から、私はそれがフレイティ・ティルマンさんから来たものだと分かりました。直前になってようやく、プレゼントを届けた怠け者が大勢いたことで、2名の人は何ももらえなかったことが判りました。本当に残念。

フォスカールー リムボーフ

1944年12月17日

神父は「タムー ティンギ、オルマツト ブザール（高官訪問、最大の敬意）」と知らせた伝達係について説教をした。そして神父はそのことを『神』と関連づけた。また「ボンカル ブザール（大掃除）」を私たちの心とつなげ、大きな洗濯物を持っていた人々、また小さな洗濯物を持っていた人々と^{たと}に喩えた。しかし、私たちすべての人々は心に何かしら清めるものを持っていた。それは、また神父こそができる心を打つ説教であった!!

⁹² 子供の守護聖人とされる聖ニコラース司祭（シントまたはシントクラスとも呼ばれる）が12月5日（命日は推定12月6日）に色の黒いお供ズワルテ・ピートを連れて家々を回り子供たちにプレゼントを贈る、というオランダの行事。そのお供をする少年の黒い顔をかたどったカップ。

⁹³ プレゼントには必ず詩が添えられ、その内容は聖ニコラースから届いたように、それぞれの子供たちを反映する愉快的楽しいものである。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月23日

所長はパレへ向けて出発する前、神父にひょっとしてパレから何か持ち帰る必要があるか、「 balanカリ ブアット スンバヤン（多分析祷するための物を？） 」とたいへん親切に尋ねた。「ミサ用のブドー酒だけです」と神父は答えた。それから所長は、かなり大勢が外に立っているのを見て「それらの人たちは何を待っているのだ？」と聞いた。

「人々はどんなことで過ちをしたかが分かり、懺悔したいのです」と神父は答えた。「それでは、もしも、わしが他の女性と関係を持ったならば、わしはそのことを白状しなければならぬのか？」と所長は尋ねた。「はい。ムンガク（懺悔する）のです」と神父は返事をした。『うわぁー』、スサ（厄介なこと）だと所長は言った。「それではこの収容所のすべての者は2人の男性のみ、つまり神父と牧師のところへ告解に行くのか」と所長は熱烈に関心を引かれて更に聞いた。

「いいえ。カトリックのみが神父のもとで懺悔するのです」と神父は答えた！！「それでは神父はきっと忙しいに違いない」と所長は言った。それは素晴らしい情報源だと思った所長は「わしは是非手伝いたい」と言った。「はい。しかし、それは容易なことではありません。なぜならば、彼女たちが語ったことについて、決して話してはならないのですから」と神父は答えた。「『うわぁー？』スサ（難しいことだ）と所長は言った。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月25日

昨日の午後4時半に、子供さんティヌク・Sちゃんが亡くなった。2歳5ヶ月であった。12時半にティヌクちゃんは埋葬された。神父様は『クリスマスイブ』に子供が召されたことは、大きな幸であると考えている、と母親に代わり言わなければならなかった。母親は、つまり子供の容態が悪くなり『過ぎ』たとき、『マリア様』にその子供を委ねた。そして彼女は今『マリア様』が自分の子供を『神』に捧げたのだ、と理解するのである。

フォスカウルー リムボーフ

1945年1月1日

今朝6時半にバラック主任及び勤務班長全員が集まり、所長に新年の祝辞を述べた。所長は新しい年の収容所全体の幸福と繁栄を祈り、私たちの女王と日本の天皇におかれては順調であり、新年をお健やかに始められるでしょう、と伝える。

原住民の人たちは、彼らが昔私たちヨーロッパ人にしたように、所長にピサン（バナナ）、鶏などを贈呈した。そして所長は彼らにタバコを与えた。その後、警官が事務所の前に来て整列し、所長に新年の祝辞を述べる。所長は敬礼し彼らにタバコを与えた。所長は神父と牧師にもタバコを勧めた。彼らに酔ってしまうまで飲んで宜しい！！と言った。神父にはその習慣がなく、神父はこれを断った。しかし、今はそれが許されるのだ、と所長は言った。「ティダ サンパイ マーボッ、 テタピィ サンパイ スナン（酔ってしまうまでではなく、楽しい気分になる位までなら）」と神父は答えた。

その後、男性たちは2日前に到着したピアノを、合唱するため赤痢病棟用バラックへ運ぶことを許された。すべての物が所長自ら運転するトラックで運ばれた。神父も同行が許された。所長は歩いて帰った。車は現地の運転手に走らせ、神父はその隣に座った。赤痢病棟のすべての人々は、所長のこの友好的な行為を大いに感謝した。

午後3時半に全員、原っぱに行くように呼び集められた。そこではズスさんが祝賀会の開会の辞を述べることになっていた。高官訪問があり、私たちは祖国の方角に向かってお辞儀をしなければならなかった。そのうえ私たちは「タベ トゥアン（こんにちは、旦那様）」と言うのではなく、「スラムット タタウン バール トゥアン（新年おめでとうございます！！旦那様）」と言わなければならなかった。

それは「パサール マラム（定期市）」ふうの楽しい祝賀会であった。そして私たちは、引換券でたくさんの食べ物を貰った。夕方は教会用バラックで歌とダンスがあった。トーマスファーとピーターネルのために、事務所にある連絡簿⁹⁴を依頼してあったが、準備時間の不足により上演されなかった。

フォスカウルー リムボーフ

1945年1月28日

日曜日に神父は説教をした。それを「半田づけ説教」と言うことができたであろう。神父は、どの仕事をしているときでも『あなたがた皆さん』のことを考える、と彼が半田づけしなければならなかった壺や小さな水差しと、人々の心とを比較した。人々の心にも同様に善と悪の部分があり、その上は磨かれ、更にそれは赤熱の上で『オバットウ（薬）』によってつながれなければならない！

⁹⁴ 中世紀に行われた年末恒例の余興的な芝居。過ぎ去った一年の出来事を喜劇風そして風刺的にまとめたもの。連絡簿から収容所の行事を回顧することができた。

コートウン

1945年2月25日

昨日、少年クラブABCが設立されました。トゥティによるとエディは航海について、とても面白い話をしたに違いないのです。エディはそのことを何も言いませんでした。さもないならば、私はきっとゲデック（竹で編まれた仕切り）の所へ聴きに行ったのです。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月12日

ズス・ファン・G（ホーア）さんは、雲母ハウス（雲母剥離場）に『カマールボーラ』つまり『娯楽室』を設けるように、所長から指示を受けた。そこにはピンポン台、腰掛けて読書ができる長椅子とテーブル、簡易食堂を設ける必要がある。そこを利用するために、今年の元旦の祝賀会でのように引換券を貰うであろう。この祝賀会について、所長はいまだにしばしば話をし、満足しては「バグス、ヤア？（素晴らしかった、なあ？）」と聞く。教会用バラックは「スンバヤン（祈祷）」と高度芸術⁹⁵のため、雲母ハウスは軽い寛^{くつろ}ぎのため、と所長は語る。30名の人たちが申し込みをし、編成中の演劇クラブの会議が今晚開かれるであろう。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月28日

所長は午後5時半に、教師全員による会合を開いた。習慣に反し、彼は時間きっかりであった。殊に教師のための道徳再武装運動⁹⁶についてであった。なぜならば、教師は影響を及ぼす必要があったからである。そして学校の『内部』のみならず『外部』にあっても、模範となるべきであったからである。

学校の授業は既に終了したので、母親は『彼女の』子供なのであるから、今こそ面倒を見るべきであると考えてはならぬ、と所長は言った。所長はさらに話を進めた。放課後、子供たちから学校精神を見ることができなければならないが、彼はそれをここ収容所の子供たちからは、まだ見出していない。所長は単にカンピリの学校を見ただけであって、その魂つまり彼が「モットー」と称するものはまだであった。所長は、子供たちは、教師が与えることができた以上の注意を必要としていた、との印象を持っていた。それとも彼女たちは疲労していた

⁹⁵ 女性たちが企画して披露する演劇など。

⁹⁶ 20世紀初頭オックスフォードで始まった宗教運動。

のか。彼女たちはそうであってはならなかった。教師は、^{たと}諭えるならば、若い枝が芽を出す樹木のようなものである。教師が子供たちに与える精神的な栄養は、恐らく平時であれば十分なのであろう。しかし、戦時中にあっては、昔ならば30年かけて学んだことを、言わば精神的には3年のうちに学ばなければならない！！もしそれを怠ったならば、やがて27年間の遅れを取ったことになる。もし人々が苦情を言ったならば、一緒になって不平を言ったり、嘆息したりするのではなく、潜在力により手本を示さなければならなかったのだ。「トゥアン アラ（アラーの神）」は我々にこの時代を罰として与えるのだ。しかし、彼はそれから自分の言葉を遮り、「罰としてではなく試練として、また純化としてなのである」と言った。また教師は両親たちと、もっと話をしなければならぬ！お母さんやお父さんと一緒に！と言った。その時、所長は自分が失言したことに気が付いた。なぜならば、ここには母親しかいないからだ。そして彼は恥ずかしそうに、自分の^{あご}顎をなでながら「ヒィ、ヒィ、パパ ティダ アダ ディスニ！！（あっ、ここにはお父さんたちはいないのだ）」と言った。いずれにしても所長は、いわゆる父兄の夕を目指していた。彼はかなり内気に「わしは、あまりうまく話せない。しかし、ここに出席しているニョニヤス（ご婦人方）皆さんは、たいへん聡明なので、わしの意味するところをきっと理解できるでしょう」と言って話を終えた。彼女たちはそれから退出することができた。帰るため一同が立ち上がったとき、所長は軽い礼儀正しいお辞儀をした。

教会用バラックの棟は概^{おおむ}ね完成し、第1回目の上演は復活祭第2日目にある。竹の壁で囲まれた場所に、すてきな芝居小屋を造るため誰もが忙しく働き、素晴らしく見え始める。袋が作られる布地⁹⁷の表面には、我々（オランダ）の紋章「ジュ マンチャンドレイ（我は持続するであろう）」⁹⁸が描かれている。色彩はクンニェトゥ（黄色い色素）と淡青色の混合でたいへん満足な出来上がり。紋章の背景となる部分は濃紺の作業着の布地で、その上の方にお城の胸壁⁹⁹の形に切られたブリキ板が付く。

最終リハーサルは明日行われ、難聴者と視力の弱い人たちは入場できることになっている、と伝達簿で通知された。しかし、オルハさんはこのことで激しい怒りを示した。彼女はこの通知が取り消され、現にその取り消しが実行されたことを望んでいた！彼女はつまり、人々はそれを悪用するかもしれない、また本番の行われる晩にも再び見にくるのではないかと懸念していたのだ。彼女はその伝達事項はアンス・Hさんによって早まって出された、と言った。アンス・Hさんは取り消しのことを読んだとき、一瞬、不愉快な表情を見せた。

⁹⁷ ジャガイモなどの穀物を入れる袋に使われるもの。出来上がったものは装飾として、竹の壁面に掛ける。

⁹⁸ 図案の最も中心となる部分には、王冠の下に剣をかざしたライオンが描かれ、その裾にこのフランス語のモットーが記されている。

⁹⁹ 弾丸などを防ぐため土や石で築いた胸の高さまである壁。

コートウン

1945年4月5日

私たちは正式な聖体拝領に出席します。より良い言い方をすれば、洗礼誓約の更新ということです。年長の少女、年少の少女、そしてすべての少年が一緒になった3つのグループに分かれています。日曜日に行われるカトリック教理問答¹⁰⁰の授業は、それで今そのための準備で他の子供たちも参加しています。ごく最近から教会関係のことで、さらに変更がありました。私たちは、これからは診療所では懺悔することはできませんが、教会用の棟のすぐ傍にある小家屋では許されます。そこでは私たちは、たいへん心地よくテーブルに向かって座らなければなりません。特に罪の許しを授かるときには変に見えます。¹⁰¹

教会用バラックの開設！ とびきり素晴らしい晩！神父さまとダウヴネイ・ドゥ・ヴィットウさんのお世話によるものでした。神父さまは詩を朗読し、オルハ・ファン・ドゥ・ヴォルハさんが伴奏を付けました。もちろん音が強すぎないように。神父さまは、アーダマ・ファン・スケルテマ¹⁰²の『平和』で始めました。『ほっそりした^{ヨシ}葦のそよぐ音』の詩¹⁰³の場面では、そのうえ裁縫作業場にあった黄色い布地にくるまったトゥティ、オリィ、ミアが舞台にいました。トゥティはどこか高い台の上に、ミアはその斜め前の床の上に立ち、オリィは膝まずいていました。音楽に合わせ、詩の節にも気を配り、葦がそよぐように行ったり来たり揺れたり、なびかせたりしました。とても奇麗。でも本当は「ザ・ベルズ」¹⁰⁴が素晴らしいと思いました。そんなにふさわしい音楽をどのように見つけ出したのか、私には分かりません。とても快いベルと『警報時の鐘』の音色に聞こえたのです。神父さまはそれを見事になさるのです！とても印象的！

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月9日

夕方、所長は第1棟内に修道女全員、そして牧師と神父をも呼び集めた。一同が第1棟の食堂に集まったとき、所長は第1棟の女性たちから気力が発散されていることが彼の注意を引いた、と語った。彼女たちは『**疲れず**』、『**常に**』陽気に見えた。そして所長は、それは彼女たちの信仰から来るものである、と理解していた。第1棟からは、「もう耐えられません」というような不平がいまだかつて出たこともない。また修道女たちは自分たちの信仰心が極めて篤いので、

¹⁰⁰ 信仰に関する質問とその答えを暗記し、念仏のように唱える。

¹⁰¹ 罪の許しは本来ひざまずいて行われるため。

¹⁰² オランダの詩人 (C. S. Adama van Scheltema 1877-1924年)

¹⁰³ ベルギーの詩人ヒドー・ヘゼル (Guido Gezelle 1830-1899年) の作。

¹⁰⁴ アメリカの詩人、作家、文学評論家エドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe 1809-1849年) の作品。

この信仰心の多くを、収容所の他の女性たちに伝播しなければならなかった。そうすることで彼女たちもまた、信仰によって気力を引き出せるはずである！ 所長は最近、信仰についてかなりのことを考えた。それでティヌ・Kさんは今週、所長から「ニョニヤ（婦人）は多くを祈らなければならない」という言葉が添えられた聖書を返してもらった。

フォスカールー リムボーフ

1945年4月13日

その日遅くなって所長は愉快になり、バリカンで何人もの少年を坊主頭に刈った。伝達係はアーリィ・デン・Hを呼ばなければならなかった。ところが、所長に対して礼儀正しくし、絶対に抵抗し続けるならば、髪を残しておくことができるに違いない、と道すがら少年に心の準備をさせた。ヤマジは既に戸口の踏み段に立って、その少年が来るのを待っていた。「中に入るのだ、アーリィ」と所長はその少年に向かって叫んだ。「わしがお前の散髪をしてやろう！！」。「いやです、トゥアン」とアーリィは抵抗した。「そうするのだ。さあ、中に入るのだ」。「わしがお前の散髪をする」。「したくありません、トゥアン」。「お前はしたくない。そうしなければならぬのだ！！」と所長は言った。「いやです、所長さま。僕のお母さんも、そうしたくないのです！！」「お前の母親がどう望んでも、わしには関係ないのだ」。「中に入るのだ。わしが散髪をする」。「いやです、所長さま」。とアーリィは相変わらず笑いながら言った。アーリィは自分の髪を掴み、「僕はこの方がずっと格好がいいと思う」と言って向きを変え、笑いながら「僕もう帰ります、所長さま！ さようなら、所長さま」と言い足した！そして口を横に大きく広げ苦笑した所長をそこに残し、小走りで行ってしまった。その後、M（マルセイユ）医師が来なければならなかった。所長が言うには、模範として医師も散髪したかったのだ。M（マルセイユ）医師は「私はまだ引換券を書き終えていませんのでまた別の機会に、所長様！！」と言うことで免れるすべを心得ていた。そして所長は「明日だ！！！」と叫んだ。

コートウン

1945年4月30日

ユリアナ王女さまのお誕生日。そして『娯楽クラブ』の正式な開設。雲母ハウス全体に、木製のテーブルと椅子がそのために備えられました。その目的は個別の作業班が集会の夕べを催すためです。ところで先週、女性教師たちが既に会議を持ちました。残念なことに盗聴はもうできません！ やっと、それから開演となりました。すべてが申し分なく進みました。バレエはとても素敵でした。チャイコフスキーとショパンの音楽によるものでした。

小さな子供たちで始まりました。子供たちは錫すずでできた小さな兵隊の行進に合わせて、

それらのお供の人形たちと一緒に短い踊りを披露しました。人形の踊り。次にアイルランドの踊り。素敵に着飾っていました。農婦の衣装のようなもの。スコットランドの踊り。フレイティから私は、ひだスカートを借りていました。その裾にはたいへん幅の広い折り返しがありました。飾り帯を作るため、ティルマンさんの了解を得てその部分を裁断できました。これはエディの濃紺の短い上着の肩から、掛けなければなりませんでした。それから私たちは、内緒で他の部分の糸をほぐし細い一片を裁断し、そこを再び閉じました。この小さな細長い布は小舟形帽子の上と、後ろ側から2本のリボンとして下げなければなりませんでした。その上着の下には、毛のふさふさした小さな手提げ袋のようなものを、上着の裾から見えるように下げなければなりませんでした。それにはファン・オールデンバーヌフェルトの髭¹⁰⁵を利用しました。フレイティは私がミアリィから借りたスカートと、全く同じものをはいていました。それで私たちはリトゥ・ビッカーさんを間に挟んで外側に立ちました。マズルカ。楽しい。色とりどりのスカート、白いブラウス、そして頭の脇と腰に色のついた細長い布をぶら下げて、快活なダンス。更に種々雑多な色のついた小切れが縫い合わされた、鎖状のものが付いていました。バレエ。ごく普通の『オーガンディ』（薄手の綿織物）で作ったスーツ、腰までの長い胴着、そして更にスカートからは何重にもなった布の層。また全体にひだ飾りのある半ズボン。胴着のバンドの上と腰のところに花束に似せた小さな房。かわいらしい。オキーフさんとダウヴェネイ・ドゥ・ヴィットゥさんにとっては、大成功の一夜でした！！

コートウン

1945年5月5日

今晚、私たちはサーカス遊びをしました。本当に面白くなりました。グダン（倉庫）の一角にゲデック（竹で編まれた仕切り）を背にしてテントのような物を張りました。そこで私たちは着替えたり、お化粧したり、そのようなことができました。

全体はクラブの会員一同による合唱で始まりました。私たちは長い髪をした4名の若い人たちを探してありました。そしてこれらの人たちは、帽子をかぶり鞭^{むち}をもったリス・ハーさんが操る小馬のように歩きました。足首の周りに小さな鈴を、そして髪には赤いリボンをつけて、次々にかわいらしく小走りし、横に並び、また撫ぜ合ったりしました。すべて私の吹くハーモニカの曲に合わせて。

ミアと私は演技種目を、練習で上手にできるようになりました。一つは床の上で橋¹⁰⁶、トンボ返り、逆立ち、そして脚を大きく広げて座る等々。それから、まだその後にも他の演目として、竹竿の一番高い所にぶら下がったり、鳥の巣¹⁰⁷をしたり、竹竿に片足だけ掛けてぶ

¹⁰⁵ 活人画を演じたときに使ったもの。

¹⁰⁶ 床の上で体を仰向けにし、両手両足を床から離さず体を持ち上げ、おなかを弓形にする。

¹⁰⁷ 上向きで竹竿に両手両足を掛け、背中を湾曲にする。「スワン」とも言われる。

ら下がったり、そのようなことをしました。私たちは年少の子供たちの一人にサーカスのお話を朗読させ、他の人たちも何かしなければなりません。一人は見事でした！ 彼女は竹竿を手、肘、鼻、額と足の上で上手に均整をとり、毎回いろいろな格好をして見せました。最後にトリポリが道化師ものを一つしました。みんな大笑いしました！ 突然、巻かれた我が家のエジプト絨毯じゅうたんから、赤ん坊の格好をしたポップが現れました。白い手拭いのおむつ、ベビー帽、ピンクのベビースリッパ（裁縫作業場の布で作ったもの）、それに大きなおしゃぶり！ ミアと私は始まる前に彼女を見てはなりませんので、可笑おかしくて私たちは殆ど床の上に転がりそうでした。楽しくて狂わんばかりに、私たちはお互いに考えが浮かぶままに、次から次へといろいろ即興で実演しました。面白いことに演技が終わった後、何人もの少女たちがまた次回も一緒にやらせてもらえるか、と尋ねたことでした。一緒にする代わりに、今度は彼女たち自身で何か創作すればいいのです。

シャボットウー コートウマン

1945年5月16日

昨日は、所長がこの収容所の指揮を命令されてから（私たちはその時ここに到着して10日目でした）2年になりました。そしてこのことはおよそ100名の人たちのために、祝宴のご馳走で祝われました。各業務班長、バラック主任、そして60歳以上の人たち全員でした。神父さまは髭をつけて、牧師さまはその息子として、そして医師は娘として、ですから女性の格好をして（しばしば真に男性的には振る舞っていないことを、確かに知っていたご本人にとっては、全然面白くありませんでした）出席しなければなりません。

所長は収容所リーダーに演説を取り行うように、指示をしてありました。リーダーはそのスピーチの中で、所長は私たちが将来、カンピリの良い思い出を持つことを望んでいること、そして、益々多くの人たちが所長を友人として考慮している、ということに所長は気がつき、それを快いと思っていること、を述べなければなりません！ 神父さまによって（所長は現在、神父さまと修道女たちの指導に厚い信頼を寄せており、医師にもとにかく、教会へ行くように勧めました！）ここ収容所内で亡くなった方々（先月7歳の少年が狂犬病の犬により亡くなりました。犬に噛まれた他の子供たちのために、その数日後ジャワから飛行機で血清が到着しました！）のために、祈祷をしなければなりません。このことでは所長はいずれにしても、自分には責任はなかったのです。ヘット ヴィルヘルムス（オランダ国歌）を歌い、女王様がイギリスまたはオランダのいずれの地にいらっしゃろうとも、数分間の黙祷をしなければなりません。この食事の後、ダンスとコーヒーがみんなに用意され、神父さまは医師と踊ったのです！

フォスカールー リムボーフ

1945年6月12日

W. さんとファン・D. M. さん二人のご婦人は、それぞれ以前はホテル・ペンションと娯楽クラブ支配人であったため、その職業では老練家であり、娯楽クラブを見事に運営し、人々は毎週開かれる娯楽の夕で、安楽椅子に腰掛けて何か飲んでいるとき、あの戦前の楽しい気分浸るのである。

抑留者の精神状態、社会的、政治的意識

日記からの抜粋

シャボットウー コートウマン

1943年6月15日

海上で轟く砲声は今日という日に光彩を添え、まるで雷雨のような激しい轟音が2回鳴るのを私たちは耳にしました。この様なありのままの事実は、ここでは直ぐに、最も空想的な話として作り上げられるのです。神経は非常に高ぶり、人々は即座の自由や昔の裕福な生活への帰還を思い描き、数人の人たちは、18ヶ月の未払い給料の支払いのことを想像するのです。

誰かがどこかに訪問した時には、既に一年もの間『そして、ニュースは』???と行って、ここではお互いに挨拶を交わします。最近は特に、大部分の会話は「食べ物」に関してです。かつて味わったおいしい御馳走が思い出され、反芻^{はんすう}されました！『ニョニヤ アンボンー カシハン（かわいそうなアンボン婦人たち）とは対照的に、私たちはヤップンに『ニョニヤ マリノー バンヤック ティンカ（厄介なマリノ婦人たち）』という名前で知られているだけのことはあります。

先日、所長の監視下での畑仕事の際、私たちの菜園班が陽気に歌を歌って以来、日曜日以外に、歌うことは禁止されました。（これに関して、ヤップンは自分たちが馬鹿にされるという考えを持っているのです）。

ここでは、日曜の安息と歓喜がまだ維持されています。私たちはここで、何回の日曜日を体験するのでしょうか。今の所、あと2回か3回の日曜日、または52回掛ける2回の日曜日を想像することができます。そして何が私たちにとって、一番良いのかについては未だに疑問なのです。

シャボットウー コートウマン

1943年9月5日

ここ数週間、いろいろな変化がありました。楽観的な雰囲気収容所に漂っています。恐らく、今回のことに関しては、完全に根拠がないとは言えません。どのようなことがあっても、私たちが収容所外部との接触を持たないようにと、絶えず注意が払われていますが、それは[アンボンキャンプ]のリーダーが、突然、日本の新聞を「家」に持ち帰った時までのことでした。これは一度だけにとどまらず、彼女は各号の新聞を定期的に受け取ったのです。抑留者として、敵軍の新聞を正確に読み、解釈することは特別困難なものです。楽観的でない人ですら、ニ

ッポンにとっての有利が少しもないことが、この記事で判断できました。

今朝、公式に6棟全体のブロックリーダーにより、先週の日本新聞からのニュースが、各棟に通知されました。これに関しての所長のねらいは何なのでしょう？ 彼は、私たちに政治的急変に対する準備をさせたいのでしょうか、それとも 私たちの受けた待遇を改善し、後で、この点を指摘することができるようにする為なのでしょう？ この後者については、より多くの事柄で示すことができます。昨日、家具および後に残されたトランクが数台のトラックでマリノから到着しました。これらは私たちの間で分配されることでしょう。全てが私たちの生活を快適にするためなのです！

シャボットウー コートウマン

1943年9月15日

私たちの支配者たちの運営組織について、私は友達の一部から、もう少し詳細な見解を手に入れました。彼女はチモールから来た約100名の人たちと共に、9月10日にロティからここに到着しました。彼女によると、軍務には5つの部門があり、それらは海軍、陸軍、警察、ミンセイブ（民政部）、オトリ〔？、たぶん特警隊〕（ゲシュタポ）です。この後者は独立しており、全部門の上部に位置します。これら部門の責任者には、できる限りお互いに個人的な敵である人が任命されます。

クーバン¹⁰⁸の上部にある収容所は、長期間海軍の指揮下にあり、はるかに最も文明化した部門です。例えば、そこの抑留者たちは常に日本の新聞を読むことが許され、男性たちと一緒に、一日3回食事をとりました。従って、ここと比べ大変異なるやり方なのです！

私たちの所長のような人には、度々、数人の上官たちがいるらしく、誰が本当の上官であるのかはっきりしせず、従ってその所長がある週、HBS（高等市民学校）に関し承諾を与えますと、翌週にはHBSを禁止するのです。決定が出されるには、頻繁にたいへん時間がかかります。しかし決定が下されるやいなや、他の人がそれを実行するであろうと恐れ、大騒ぎに、慌ただしくそれが執行されます。

ロティ人はその大部分がたいへん忠実でした。マカッサル人についてはその様には言えませんが、本当は私にはもう評価することなどできないのです。多分、私の女友達は、日本の教育により、現地の青年たちに対する私たちの影響がなくなっていくことを感じたのでした。デサスホールン（村の学校）では、道徳が教えられ、それは子供たちの両親などについて、聞き出すことから成っています。

¹⁰⁸ 東ヌサトンガラ州の州都。

シsヤボットウー コートウマン

1943年12月12日

そちらの様子はいかがでしょうか。人々が普通に生活し、欲しいと思うものを食べる事ができ、ラジオを持っていて、何が起きているのか知ることができる場所が、まだこの世にあるということ、私にはもう想像できません。

シヤボットウー コートウマン

1944年1月7日

1月2日、いつも誰にでも喜んで母国語を教えてあげたいという英国女性（シンガポール出身）が持つ全生徒のミーティングがありました。残念ながら、このミーティングはうまく運びませんでした。出席者の一人が政治面を多く含む、年間報告を行ない、所長は外で聞いて、その書類を渡すように尋ねました。幸いにも、所長はそれをマカッサルにまだ送りませんでした。全てのミーティング、それにコーラスに至るまで禁止されました。そして私たちは夜10時の代わりに、9時には中に入らなくてはなりません。これによって、英語の授業は取り消され、土曜日の講義、或いは朗読もなくなります。これは全収容所にとって、大いに不運なことなのです！

このような夜を好まない人たちも数人います。というのは、戦前の雰囲気の中に余りにも深く連れ戻されてしまうからで、その人たちはできれば、何も考えずに、ただ一生懸命働いて時間を費やそうとするのです。このようなタイプには、例えば医者が代表されます。唯一の男性（神父様と牧師様と共に）としての彼に関して、これは理解できることです。大部分の女性たちはこの抑留に対し、異なった反応をします。後で恐らく、余り堅ばらない見方で、自由を受け入れることでしょう。第一に、彼女たちには子供たちがいますし、子どもがいない人たちは、多くの小さな居心地良さのおかげで、日常生活を耐え忍ぶことができるのです。

フォスカウルー リムボーフ

1944年3月28日

大袋に、濡れた生地を積んだトラックが入って来る。「水曜日の朝8時半に、各棟より一名、そして [アンボンキャンプ] からは3名がヤンスさん指導の下で、生地を干す為に集合せよ」という連絡がまわる。翌朝、カンピリの草地に、色のついた長い生地が横たわっていて、それらは赤オレンジ・白・青の順で、かなり多くの場所に敷かれ、所長が住んでいる司令所の近くで、Vの形になって置かれている。

シャボットウー コートウマン

1944年5月7日

未だに社会的変化に順応できない人たちがいて、その人たちは疲れると、横になり、仕事をそのままにして他の人にやらせるのが、相変わらず当り前のことだと思っているのです。この大部分は子供のいない人たちで、私たちに比べ、この人たちはここで果てのない、より多くの苦勞を抱えているのです。仕事が終わりと、家に戻ると、自分たちの疲れについて考える時間があり、持ってもいないお砂糖を欲しがらる暇があるのです。立ち去ろうという絶えず繰返される噂は徐々に害となるものです。変化を必要とする要望は、時には、大部分の人たちにとって、たいへん力強いものとなり、実際に抑留者の90%の人たちをジャワまたはオーストラリアへ素早く出発することを確信させることができるほどなのです。

フォスカウルー リムボーフ

1944年6月9日

私たちは、心配事もなく、申し分のない生活を過ごし、年金、将来の小さな邸宅、社会における地位と階級に関し、非常に確信を持っていたが、現在では冒険家の生活を送っている。私たちはかつて最も貧しかった現地人より、もっと貧困なバラック暮らしをしている。ご飯、クテラ芋（キャッサバ）、赤草を食べ、それでも空腹である。私たちは収容所の扶助で衣服を物乞いする。なぜなら、ひどく汗をかく為、衣服が大層すり切れるからだ。夫たちについては何も知らない。分っていることは、夫たちがビルマにいるか、それとも日本にいるかであるが、再会できるかどうかは、『神さま』のみが知っている。

飢えによる浮腫、めまい、脚気と他の症状がでる。私たちは他人のお皿にある肉が自分たちの肉より大きいのを見る時は、ハイエナのようなものである。誰かが食べ物いっぱいのお皿を持って、棟を通り抜けるのを見ると、私たちは疑い深く、最初にいったい何がお皿に盛られているのかを見て、その後、そのお皿をしっかりと持っている本人を見つめる。それなのに、いつか平和になったら、私たちは新しい良き社会への準備ができているのだと考える。

シャボットウー コートウマン

1944年9月24日

9月の初め、オランダからの郵便為替はセレベスにいる抑留者全員のためですと私たちのリーダーに通知されました。このことから、種々雑多な結論が出されました。最も奇妙なことは、これが私たちに報告されたという事実でした。これに続いて、終戦が接近しているに違いない

ことを指摘する、色々な小さな暗示がありました。それらは夜間爆撃を伴う巨大な空中活動、ハビス プラン（戦争が終結する）についての「パー（ヤマジのあだ名）」の絶え間ない話でした。彼の願いは、パカイアン バグス（素敵な洋服）のための素晴らしい生地で表現される時のように、私たちが満足を感じることです。今日、大人たち全員は巻きタバコをいただきました。くり抜かれた幹で作られた水道管の配置は9メートル深く、カリ（水路）から共同炊事場まであります。この巨大作業は、多分、炊事場や病院への水運びを決定的に終了させることでしょう。これらの事実以外に、まだ数えられないほどの噂があり、生活を容易にはさせません。いつでも私は、本当に終戦の事を考えています。

私は10月の初めに手に入れましたビラについて、ますます有り難く思います。ビラがなかったならば、現在、私たちが確信を持って分ることなど何もありませんでした。これは私たちにとって唯一の^よ拠り所なのです。オランダは恐らく解放されて、クリスマスを祝うことでしょう。

フォスカウル — リムボーフ

1944年10月7日

ここ収容所にいる年少の子供たちは社会についておかしなイメージを受けている。子供たちは、社会は主に女性たちと4人の男性たち、すなわち1人の医者、1人の神父、1人の牧師、それに1人のヤップから成っていると考える。今週、パイプ作業の際、神父は小さな男の子たち数人に手伝ってもらった。その時、1人の男の子が彼を「牧師さま」と呼んだが、直ぐに他の少年に直された。その少年は、どういう事だよ？ 牧師さまはめがねをかけてないだろう????? と叫んだ。子供たちは、大きくなったら、神父に成るんだ。そうして畜殺をするんだと言う。そして子供たちは既に、神父さんごっこをして遊び、その後、互いに畜殺しようと試るのだ。

シャボットウ — コートウマン

1944年10月26日

おそらく楽観的になる理由などは、もう決してありませんでしたが、雰囲気は非常に意気消沈しています。日常の些細なことがまた決定的になるのです。雨が未だに降りませんし、午後の暑さは、時には耐えがたいほどなのです。水不足もまた大変なものです。私たちは徒歩で10分の所にある井戸で洗濯物を濯ぎます。と言うのは、他の井戸は乾ききっているか、汚れた黄色い水が出てくるだけだからです。しかし一番ひどいことは病人が沢山いることです。

けれども、半年経てば終戦になるでしょうと仮定する理由も十分あります。10月1

6日の月曜日に、収容所近辺で戦闘機の短時間の空中戦があり、その後、ビラが落ち、私たちは素晴らしいニュースが載っている7種類のビラを読みました。 やっと、何か確実であるということを知ることは素晴らしいものです。

今もなお、時々米軍機が飛んで来て、夜中を通し、数晩に渡り、飛行機やとぎれなく走る車の音が聞こえます。サワ（水田）に野菜を植え、自分たちで耕し、最もきつい重労働をすると知られていたキャッサバ班、菜園班は、中止されたも同然なのです。また大勢の人たちが裁縫作業場へと送られ、裁縫用バラックが増築され、60台のミシンが到着しました。ニッポン人は明らかにまだスーツを着るつもりなのではないでしょうか！

コートウン

1944年12月25日

1944年のクリスマス。3回のミサ聖祭のある深夜ミサ¹⁰⁹！ これは本当に自分自身でいられ、ゆっくりできる唯一の瞬間だ。神父様はまた素晴らしい説教をなさった。彼は本当にいつもどこからあのような快活さを手に入れるのかしら！ ところで、雰囲気は打ち沈んでいた。ティヌケ・スプンホフさんが亡くなり、全棟々の雰囲気は散々に打ちのめかされたかのようであった。

シャボットウー コートウマン

1945年3月22日

点呼が終わった後の晩に、子供たちが床に就くと、私はいつも強いコーヒーを一杯飲み、煙草を一服します。私は数ヶ月前より、一週間に煙草2箱をもらう111人の人たちに属しています。今晚、私自身にとってのこの静かな30分間に、私は、自分のまわりで絶え間なく、ひそひそと話す声のする薄暗いバラック生活のカンピリに別れを告げました。私はここから出たいのです。女性たちに囲まれるこの生活はもうたくさんです。私は誰一人とも知り合いになりたいと思いません。私は一人でいたいのです。誰に対しても親切である必要のない、自分自身の方法でやっていきたいのです。

2週間、日夜連続して雨が降り、3月の南セレベスでは前例のないことです。若い女性たちの一人で、また外国人が、今日もまた精神的不安定者用の家に移動されました。それでも、こういう事が余り頻繁に起こらないのは驚くべき事です。

人々は食べ物、昔作ったメニューについて無限に話すことで、心の重荷を下ろすので

¹⁰⁹ 御降誕の大祝日に行われる3回の第一ミサで、夜半に始まる。

す。お料理の本は最も読まれるものです。その他には、一般的に聖書も読まれました。カンピリではキリスト教徒でない人に出会うことは殆どないでしょう。そして、庭にあるピサン（バナナ）やパパイヤのような果物、特にクテラ芋を盗難するという一般的な解決案が探されます。他の人たちは仕事に自分たちの慰めを見つけます。裁縫作業場で毎日、4名からなるグループは5着の制服の上着を、3名のグループはズボン5本を縫います！

私は数学にますます深い熱意を入れました。一般のHBS（高等市民学校）にいた4学年の女の子たち2人と一緒に、より難しい代数学極限概念、微分や積分もやります。夕方、これに取り込んでいると、他の事はすっかり忘れてしまいます。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月1日

昨日の朝、事務所でV（ファルダーポルトゥ）さんが彼に怠惰なしぐさで、話を始めた時、彼は自分の白い（縁なし）帽子を少し脇に押した。頭をかいて、また帽子を真っ直ぐにかぶり、ナンティ、ナンティ（後で、あとで）と言って、いなくなった。それからV（ファルダーポルトゥ）さんは3時半に、やっと再び彼女の試みを繰返す機会を得たが、3つの質問をする為に、彼女は司令所から教会バラックまで、彼の後を追わなければならなかった。それから、もっと質問をしようとしたが、諦めた。伝達係はV（ファルダーポルトゥ）さんが疲れて、暑く見えると本当に思ったことは殆どなかった。V（ファルダーポルトゥ）さんは『考えてみますと、他人の為に全てのことを行い、ヤップの店に行った時、以前、私たちにジャックナイフのようにぺこぺこしたヤップに対して、親切でなければならないのです。そして、今は白髪のヨーロッパ人の女性がそのような男の後を歩き、言いなりになっているのです！！』と言った。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月10日

彼（所長）は6時に戻って来て、第10と第11棟の間にあるグダン（倉庫）に来ることを約束した。そこでは紅茶とクッキーで、少女クラブの開会の夕べが行われ、彼は8時に5つのクラブの代表者5名により迎えられるのだ。

所長はグダン（倉庫）に着いた時、リボンに注意も払わず、そのまま歩き続けるつもりだ。リボンは初めに、儀式的に象徴として、DITTO（努力によるくつろぎ）と刺繍されたクッションの上に置かれた鋏で切られなくてはならない。収容所リーダーはそれを指差し、所長はリボンを切るが、最初の中へ入る勇氣はもうない。V（ファルダーポルトゥ）さんが前の方へ行くように合図をする。いいえ、所長が先に入らなくてはなりませんとV（ファルダーポ

ートゥ)さんが答える。それから、所長は特別席に座り、彼の為にマレー語に訳されたD I T Oクラブの歌に囲まれ、満足そうに眺める。その後、彼はいくつかのスピーチに耳を傾け、収容所リーダーに向かって、彼の代わりにスピーチを述べ、特に、それには平和概念および神への信頼感が明らかにされてなくてはならないと言い、収容所リーダーに要点を述べる。そして彼女はその通りに話す。所長が言ったことは、これらの若者たちの中には、平和への強い概念がなくてはならない。なぜならば、彼らは将来の世代にいるからだ。そうして将来、常に平和であるか、再び戦争になるか否かはこの世代により左右されるであろう。ここカンピリには60人の若者がいるだけだが、カンピリの子供たちから広まっていくであろう考えは、その後、600人、6000人、そして全世界の考えになるかもしれない。もし平和が人間関係の間にあり、人々自身の中にあれば、全世界には平和だけが存在できるであろう、ということだ。所長はここカンピリに道徳武装運動の中心地が作り上げられるのを見たいのだ。更に、彼は暴君としてではなく、この収容所の父親として、見なされたいのだ。彼は子供たちのように、V (ファルダーポートゥ)さんが道を通って行く時、こんにちは、V (ファルダーポートゥ)さんと呼び、彼女が同じように親しく彼に向かって、こんにちは、所長さん！！と呼ぶことを願望している。

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月5日

私たち全員にとって、緊張の時期であることは、空中活動により顕著なものであった。私たちはどの瞬間にでも防空壕の中に隠れる用意をして、その一方、私たちは僅かな脂肪のない食事をして熱心に働く。その間に、テニスコートが手早く仕上げられる。もし米軍がここに一度来たならば、彼らは贅沢を見出し、バラック内での私たちの疲労や空腹を見ることはないであろう。バラックは内側から修理され、補強されるが、一年前のように再建されないだろう！！ 再建費用はもう価値のあることではないとヤップンが考えることを示しているのだろうか??。

シャボットゥー コートウマン

1945年5月16日

接近する終戦について夢中にならない方が良いでしょう。なぜならば、そうすると時間が経つのが遅くなるからです。その一方、何も考えずに、ひたすら働けば、月日は飛ぶように過ぎて行きます。

シャボットウー コートウマン

1945年7月9日

今週の結論を言えば、私たちは日曜日の夜と日曜日の朝に通報により喚起されました。それは、オランダにて飛行機から降りられる女王様の写真の載ったオレンジ色のビラでした。オランダ解放。ついに絶対に確かなのです。ビラのテキストはマレー語で（残念ながら、日付が記されていませんでした）、事務所にある以前に落ちた3枚のビラと共に訳され、タイプされました。これを読んでいる間、それらがマカッサルの人たちに向けられたものだと、絶えず考えずにはられませんでしたが。私たち向きとしては、少々、プロパガンダ過ぎますし、オラン チュボル（小人たち）としてニッポン人を暗示することは余り快いものではありませんでした。不思議な時期です。あとどのくらい続くのでしょうか？

抑留者相互の人間関係 / 性の問題

日記からの抜粋

シャボットウー コートウマン

1943年6月1日

アンボンキャンプの人たちは感謝の気持ちを持っているばかりだけではなく、しばしば私たちの所持する衣類や他の所有物に嫉妬を抱き、特に私たちの持つ誇りとくじけずに進んで行く精神に対して羨望するのです。最初の日、この女性たちが大きなドラム缶で料理をするのを見た時、私はびっくりしました。女性があのように働くことができるとは知りませんでした。彼女たちが似合わない仕事着を着て、畑仕事をしているのを見ると、ぎょっとします。彼女たちの顔には生存するための戦いだけが読み取られます。これと共に、これらの女性たちは辺境の植民地における長年に渡る生活により（テルナーテ 及びニューギニアの人たちもアンボンに連れて来られました）、恐らく、もう精神的抵抗力を余り持っていなかったのでしょう。

シャボットウー コートウマン

1943年6月13日

あらゆる種類の人たち、特に混血の人たちは警察官たちと関係を結び、密輸に忙しくしていました。この警察の監視にもかかわらず、数人の人たちはある日曜日の午後、ヤップに現行犯で逮捕されるまで、密輸を続けました。食料品以外に、その現地人は、彼の恋人 — 私たちの隣の棟に住むそれほど若くない混血の婦人 — 宛ての短い手紙を持っていたようでした。（私たちの隣のバラック第12棟では、数人の女性たちはマリノで、毎週やって来る市場の青年たちや現地人たちと不品行な行為を振り舞い、それにより、今では様々な人たちが妊娠であるという噂があります）。

鉄条網の外側に立っていた現地人は中に連れて来られ、衛兵所の前に立ち、彼の恋人の目の前でひどく叩かれました。翌日、彼はマカッサルに行かなければならず、そこで更に罰を受けることでしょう。ここでの彼に対する尋問の際、彼はその手紙が誰に宛てられたのか、その相手の名前を挙げませんでした。運悪く彼は写真を持っていたのでした。その女の人と密輸をした他の女性たちは叩かれずに済み、ただ少々がみがみ言われ、数日間バラック拘禁を受けただけでした。これをきっかけに、新しい規則、誰一人として鉄条網の近くに行つてはならないことが発表されました。つまり、日暮れや月夜に、気持ち良く外を散歩することは、今ではお終いとなったのです。

シャボットウー コートウマン

1943年8月2日

その他に、しばしば人々がとても無力に感じることは、外部の敵、お互いの中で盗みを行なうことです。私たちの棟には混血の家族が住んでいて、彼らのところで、何度も他人の持ち物が見つけれられました。その上、この人たちは日本人に対して、私たちとは大変異なった間柄にあるのです。この家族は初めにマカッサルに住み、後になって抑留され、少し日本語の知識があるので、ここでも常に所長や他のヤップンと連絡がまだあることがわかります。多かれ少なかれ、実際には、誰もがこの人たちを恐れているのです。なぜならば、この人たちがどの程度のスパイ仕事をしているか誰も知らないからです。

コートウン

1943年8月27日

私たちの棟にはリリィ・フラージェロットウさんという婦人が一人いる。すてきな人で、時々少し厄介だけれども、やっぱり親切な人だ。彼女はバラック作業班に配属され、従って、指定された日々にお湯を沸かさなければならない。この作業は朝とても早く始まる。この仕事で苛立つことは、収容所には燃やす為の木が何にもないのと同じ状態にいることだ。皆は本当に必要でないものを既に全て燃やして、もう何も残っていない。バラック作業班は、湯沸かし当番の時のために、たいへん注意深く保存している木を、仲間同士でベッドの下から盗むのだ。その上、私たちがもらう木はとてもひどく湿っている。

一時間前に、フラージェロットウさんが報告を持って通り過ぎだ。「探索に出かけなくてはなりません。明朝用の木がないのです」。お母さんは彼女に警告し、所長が歩き回っているので、用心しなくてははいけませんと言った。フラージェロットウさんはこの機会に、特別、全身黒い服を着た。15分後、彼女は両手に沢山の木を抱えて、全速力でドアの中に入って来た。大急ぎで、彼女はそれらをお母さんのベッドの下に押し込んだ。『早く、追い駆られています。何にも言わないで！』お母さんは、私はバラック主任ですし、その上、それを私のベッドの下に置くとは、と反論した。『時間がないの』と言って、彼女は去った。丁度良かったのは、次の瞬間、ドアが開き、エリィお婆さんが私たちの前に立っていたからだ。全収容所を通して、こう呼ばれている婦人で、チェコ人である。片言のオランダ語で、彼女は『ああ、コートウンさん。誰か棟の中に入って来ませんでしたか？ 私たちの棟で、誰かが小さな橋を取り去ったのです。私は丁度それを見たのです。その人はこの棟の中に入って行ったと思います。』『いいえ、私はずっとここにいましたし、この30分間、ここには誰も出入りしませんでした』とお母さんは答えた。呆れたことに、お母さんは沢山の木の上に座っていたのだ！『さて、誰かが私たちの棟の橋を盗んだのです。私はそれを見たのです。そして、それは、貴女、

リリィさんと私はきっぱりと言えます』。『いいえ。そんなことをするほど私はおかしくはありません。所長が私を捕まえるのを想像しているのですね！』その間、リリィさんはエリオおばさんの後ろで、お母さんと私に向かって、色々とおかしな手振りをし、私たちは笑わないように頑張った。ともかく、エリオおばさんは憤慨して、自分の棟に引き返り、G（フラワーヴェロットウ）さんは彼女の木片を持って自分の小屋に戻った。

コートウン

1943年10月15日

授業が終り、私が12時に家へ戻って来た時、5時に私たちのバラックから立ち退かなければならないと聞いた。もちろんのこと、大騒動。私たちはどこへ行かなければならないのだろうか？ どこもかしこも満員だった。所長はただ退去させるだけで、棟々は実際につぶれそうだった。しかしどこへ行けばいいのだろうか？ 数名の人たちは未だ食堂に居られ、10名ほどの人たちも、まだ教会用バラックに留まることができた。けれども、残りの人たちは？ ぐたぐたした後、私たちはバラック第2棟へ行く指示を得た。それは新しいバラックで、実際にこの棟に入るはずであった人たちは、私たちがまた出て行くまで、数日間、食堂に留まらなくてはならなかった。バラック第2棟の人たちは、私たちが彼女たちの棟に移り住んだこと、そしてヤップが移るように言った時、私たちがまるでそれに対し、どうにかすることができたのではないかのように、ひどく腹を立てた。しかし、私たちは今では彼女たちの浴場、トイレなどを使ってはならなかった。私は毎回、水の入った缶を持ち、バラック第9棟までずっと走らなければならず、他の人も同じだった。それは余りにも気違いじみたことになり、お母さんは修道女さんたちがいた隣へ、ちょっと行った。彼女たちは第2棟に関しても、多少指導的な立場にあった。というのは、第2棟の人たちはマリノで、これらの修道女さんたちと同居したことがあったからだった。当然のこと、それは成功した！

コートウン

1944年6月6日

私は朝、葉っぱを引く抜くことについて、イスラエルさんと喧嘩をした。様々な口実を作り、又は病気を理由に欠席をする人たちがよくいるもので、その代わりの人を見つけるのは決して容易なことではない。お母さんはバラック主任だった時、自分で模範を示さなければならなかったと思い、お母さんが自分自身で行くか、時にはシン又は私が、お母さんの仕事を再度引き受けた。今では、イスラエルさんはずっと私の所に来たが、私は今朝、断ったのだ。今度は、彼女は他の人に頼めば良い。私は彼女に、いつも母を手伝う為に代理を務めました。も

う今ではそのつもりはなりません。誰だって当番があるのです！ と言った。彼女はもう少しでかっとなり、いきり立つほどだった。お母さんは、イスラエルさんには必要であれば手伝ってくれる子供たちがいないことを私は考えなくてはなりませんと言うだけだった。ほんとに、朝ご飯もまだ食べていないというのに！

フォスカールー リムボーフ

1944年7月17日

ヤマジは自転車で出かけた。私たちはちょうど後になって、彼がどこへ行ったのかが分かった。彼はリス・Cr. さんの家に行き、医者とリス・R さんの恋愛関係について聞き、それによりリス・Cr. さんとリス・R さんの間に起きたと彼が考える口論について尋ねた。晩には、点呼がなく、所長はこの晩を使って、最初に医者呼び寄せ、少し待たせた。そして、所長が彼をやっと中に入らせた時に、リス・R さんの関係について聞き出した。

別に特別なことはありませんと医者は答えた。そうか。しかし情報では違うことが言われており、火のない所に煙は立たないのだ！ と所長は言った。必ずしもそうだとはいりません。ここカンピリは、特にそうですと医者は反対した。それから医者はヤウストゥラさんの真っ暗な事務所で待たなくてはならず、リス・R さんが呼び出された。話の初めの間、彼女はずっと立ち続けなくてははいけなかった。後になって、彼女は座ることを許された。これは、医者の場合とは対照的で、彼はふんぞり返って椅子に座っているヤップの前で、ずうっと起立の姿勢のままでいなくてはならなかった。

ヤマジはリス・R さんに、医者と恋愛関係にいることを、いま直ちに認めなくてはならない。なぜなら、医者は既に告白したと言った。認めることはできません。なぜなら何もないからですとリス・R さんは答えた。しかし、いつも医者と立ち話をし、笑っていたではないか？ はい、そうです。だからと言って、何の意味もありません。どのくらい彼を知っているのだ？ カンピリに来てからです。しかし、その後、9月には他のことが始まった。それはどういうことですかとリス・R さんは言った。そうなんだ。丁度、それをリスさんから聞きたいのだとヤマジは言った。しかし何もありませんとリスさんは確信を持って答えた。もし彼女が正直に認めれば、もう畜殺へ行く必要はなかった。何もなかったので、彼女は何も認めることはなかった。「医者はリスさんは彼を好きであったと既に話したぞ」と所長は言った。彼がそう言ったとしても、彼女は決してそのように話したことはなかった。それでは、どのようにしてこんな噂がたつのだ、とヤマジは言い張った。それはリスさんには分らず、彼女は急に泣き始め、座ることが許された。この結末は、ヤマジがリス・R さんともう一人のリスさんとの間の口論についてちょっと話した後、— 勿論これについても彼女は否定したが — 彼女は立ち去ることが許された。日本語の供述の下に署名をした後、やっとうち出て行くことができた。

その後、ノーアさんが呼び出され、リス・Rさんと医者との関係について彼女の意見を述べなければならなかった。何の関係もありませんとノーアさんは語気を強めて言った。けれども、二人はいつも一緒に立ち話をし、笑ったりしたことが目に留まらなかったか？ 知っています。しかし、所長が良く理解しなくてはならないことは、医者は私のような者とは、器量が悪すぎるから、それほど長く話しをしないでしょ。けれどもリス・Rさんのようなきれいな人となら話しをするのですとノーアさんは答えた。なるほどヤマジは同意した。しかし、終戦後、もし妻たちが夫からその様なことを聞いたならば、その妻たちは後でどう思うだろうかに関して、どう考えるか？とノーアさんに聞く。私には理解できますとノーアさんは答えた。

それからリス・Cr.さんが呼ばれた。彼女は医者のごとでリス・Rさんと口論したことを認めなければならなかった。リス・Rさんは既に白状したと所長は言った。喧嘩などしていませんとリス・Cr.さんは答えた。この話し合いも、とどのつまり無意味に終わった。彼女が戻らなければならなかった時、医者がまた現われた。彼はその間ずっと一人で暗い奥の部屋にいた。二人の女性は口論、恋愛関係について、全てを白状し、二人とも書類に署名をした。今度は医者も認めなければならぬとヤマジは言った。しかし、医者は認めることなど何もありませんと強く主張した。よし、もういいとヤマジはついに自分の誤りを認め、彼らを信じた。しかしながら、医者は数人の女性たちともう話をしたり、笑ったりしないことについて考えなければならなかった。というのは、他の女性たちが悲痛な思いをし、それに厄介なことが起きただけだからだ。翌日、伝達係は医者と話をした。彼は3人の男性たちにとって、女性ばかりの収容所にいることは本当に、如何に難しいものであるかを話した。

フォスカールー リムボーフ

1944年9月12日

偶然、今朝、伝達係はレニィ・ファン・Dさんがトイレのドア89番のピットゥ・ハイネン（収容所用語で、盗み）を目撃した。それはつぶれたトイレのドアの一つだった。伝達係はレニィさんが89番と書かれたドアを持って、彼女の部屋のそばを通るのを見たが、伝達係はちょうど後になってから、そのことを考えた。それは、バラック主任が「誰がトイレのドア89番を持ち去ったのか知りたいのです。それは急に跡も残さず消えてしまいました」と言うのを耳にした時だった。それから、そのドアがレニィさんの肩に担がれ、窓のそばを歩いて行くのを見たことが伝達係の頭に浮かんだ。伝達係はレニィさんの母親の所に行き、レニィさんがちょっと持って来たドアを、バラック主任が探していますと言った。その母親は、はい、レニィはドアをここに持ってきましたが、89番と書かれてありましたか?? と言った。そうです。書かれてありました。私は自分のこの目でそれを見たのですと伝達係は答えた。それをちょっと戻して頂けますか。必要なのですと言い終えた。

もし母親の視線で命を奪えることできたならば、伝達係は即座に死んだであろう。その母親は後でバラック主任に、それがトイレのドアであったことを知りませんでした。なぜならレニイはそれを下水溝で見つけたからですと叫んだ。それからバラック主任は、そんなことはないはずです。少し前までドアはトイレの前にあったのですと返事をした。すると、母親は下水溝で見つけたのだと言い張った。まあ、もういいです。もしドアが戻されるならば、そんなことは問題ではありません。なぜならば、私たちはドアが必要なのですとバラック主任は言った。はい、もちろんのことバラック主任はドアを受け取るでしょう。ところが、ドアは午後になっても戻って来なかった。バラック主任は結局、一人でドアを取りに行き、トイレに戻さなければならなかった。そういう訳で、その日、ドア89番は、2回目にはバラック主任の肩に担がれ、今度は伝達係の窓の反対方向へと通過した。

フォスカウルー リムボーフ

1944年10月30日

ルーシイ・Hさんはもうだいぶ前から、ベップ・Pさんに非常に愛情を抱き、ベップさんの小屋の中に入り、彼女の蚊帳を広げる。ベップさんは目を覚まし、自分のすぐそばのルーシイさんの顔を見て叫ぶ。わっ、また、あなたなの。ここで何をしているの。早く出て行きなさい。そしてルーシイさんはまるでぶたれたかのように、振り向いて、はいはい、ベップさん。分りました。出て行きますと答える。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月18日

ベップさんはルーシイさんの件を完全に間違っただけで解釈したことがはっきりした。爆撃後、どっちみち皆はまだ起きているし、夜中だということ時間もそれほど重要ではないので、ルーシイさんはいつもの静かな夜のように、ベップさんの所で少しおしゃべりをしたかったのだ。しかし、ベップさんは全く違う意味にとり、これを他の人たちに伝え、その結果、ルーシイさんは受けるべきでない評判を得ることとなった。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月3日

ベップ・Pさんは今日、バラック第5棟に移り、そこでは他の人の場所を取ることになる為、

彼女はあまり歓迎されなかった。しかし、彼女の本心によれば、ルーシィさんとの出来事の後、彼女の棟から出なければいけないと考えたのだ。ベップさんはまだルーシィさんが自分に恋をしていると考え、さらに再び起こることがないように、彼女の近くにはもう長くいたくないのだ。しかしながら、私たち全員は、これはベップさんの何か少し思い上がった考えの産物だと思っている。彼女は自分自身がカンピリ全収容所で一番重要な人物、いいえ、というより、全世界で一番重要な人物であると考えている。

不思議にも、ベップさんとルーシィさんの関係について、聞いていなかった他の棟の人たちは、この急な引越しに啞然とした。よくあるように、事実とはかなり懸け離れた一番馬鹿げた、ひどい仮説がつくられるのだ。

フォスカウルー リムボーフ

1944年12月4日

バラック第9棟のドゥ・Vさんはバラック主任と米について言い争った。彼女は空腹なのは、十分に米をもらっていないことで、目に入れても痛くないほどかわいいマックスも同様であると言った。それなのに、棟にはタペ（もち米またはクテラ芋で作った菓子類）を作るために、米を持っている人たちがまだいる。ドゥ・Vさんはこのことに関して主任とものすごい喧嘩をし、主任は彼女を無礼者と呼んだ。それから、ドゥ・Vさんは、私を無礼者としておきましょう。でも私は少なくとも気の狂った娘を産みませんでしたと言った。このことがバラック主任に伝えられ、彼女は激怒の涙を流した。ドゥ・Vさんはこの件を収容所リーダーの所に伝え、リーダーは情報を得るためにバラック主任と数人の証人・目撃者を呼び出し、全てがはっきりすると、所長とこのことについて話し合った。所長はドゥ・Vさんとバラック主任を呼び寄せ、ドゥ・Vさんとマックスは移転し、ファルダーポートゥさんの家に住なければならないと決定した。

フォスカウルー リムボーフ

1945年1月11日

これが通知された後、彼はアンスさんと一緒に彼の部屋へ話しに行った。後で、この話し合いが何に関してだったのか明らかになった。それらは、「現在、マカッサルには、大勢の将校や兵隊たちが居り、その結果、女性の不足が生じたのだ！！」とヤマジが言ったことだった。

以前のマリノ収容所では、かつて確かに女性たちは覚悟をしていたことがマカッサルでは知られていた。どの女性たちであったのだろうか？ アンスさんは所長に、そのことは自分で混血の女の人たちに尋ねなければいけませんと言った。しかし、それをやりたかった純血

のオランダ人もいたのだろうか？と所長は尋ねた。いいえ、そんな人たちは『いませんでした』とアンスさんはきっぱりと答え、所長がその様なことを尋ねたことに驚き、当惑しましたと彼女は付け加えて言った。しかし、彼は、マカッサルにいる俺の最高長官がそれを指示したのだと弁護した。けれども、もし、それが実行される場合には、どちらかと言えば彼は兵舎に戻るだろう。アンスさんは最悪の場合は、自発的に申し出た人たちのみを行かせる！という彼の約束を更に得ることができた。

フォスカウルー リムボーフ

1945年1月26日

砂糖問題。Hさんはクラッパー（ココナッツ）の殻いっぱいのお砂糖がないのに気がついた。彼女はヴァン・Gさんがやったのだと信じ切って、それを所長に通報した。彼はその時、一体どうしてHさんがそれほど沢山の砂糖を持っていたのか？と彼女に尋ねた。交換したのですというのが答えであった。Hさんは罪がなかったことを証明するために、交換相手の名前と何をしなくてはならなかったかを述べた。今、彼女たちは一緒に‘盗人の家’にいる。所長は砂糖をまだ交換できる女性たちは、砂糖を多すぎるほどもらった訳だから、もうこれ以上もらう必要はないのだという結論を出した。

Gさんに関しては、あまり良い結果sに終わらなかった。彼女自身は否定したが、彼女の子供たちは、Gさんがやったのだ！と言った。それから所長は、子供たちは修道女たちに面倒をみてもらわなくてはならない。なぜならば、子供たちがうそをついているならば、他の人の指導下にいなければならないからだ。また、子供たちが真実を言っているのならば、盗みをする母親の所にとどまることはできない。母親は自宅監禁され、編み物を習い、かなり多くの靴下を提出しなければならなかった。

コートウン

1945年2月17日

バラックの棟々は不穏で満ちている！ 様々な場所で、既に数回に渡り、お砂糖が盗まれ、今度は、誰かが、晩のために残しておいたパップさえ盗まれた。既に厳しく注意が払われている。一体誰がこんなひどいことをすることができるのかしら？

フォスカウルー リムボーフ

1945年2月21日

HBS（高等市民学校）の女生徒たちの一人が、HBSの一人の男生徒の子を身籠^{みごも}っているという噂が広がる。全敷地に広がった防空壕には、有り余るほどの場所と機会がある。もしこれが実際に真実であるとしたら、所長はこれを聞いたら、青少年全員をバレーに在る男性収容所へ送り出すことだろう。事件は進行していく。その少女の母親は、彼女の娘が医師の検査を受ける承諾を与えるために、収容所リーダーに呼び出された。その少女はまだ処女なのか、さて、そうではないのか？

フォスカウルー リムボーフ

1945年2月22日

HBSの女生徒に関しては、何事もない様であるが、その子はやはり男友達と遊戯したらしい。彼女はG（フットゥブルトゥ）先生に検査された。まだ『処女』であった。母親は色々な噂に、ひどく取り乱した。

フォスカウルー リムボーフ

1945年2月27日

連絡簿を持ってヘアミィさんの所へ行った時、伝達係は、所長自身がヘアミィさんのベッドの上において、ヘアミィさんは反対側の籐の椅子に座っているのを見た。V（ファルダーポルトゥ）さんの事務所に伝達係が戻って来た時、少なくとも20人の女性たちが、配給券に所長の捺印をしてもらうために彼を待っているのを見た！ V（ファルダーポルトゥ）さんは、所長をどこかで見ませんでしたか？と直ぐに尋ねた。伝達係はV（ファルダーポルトゥ）さんに、どこで所長を見つけたかを小声で言った。所長とヘアミィさんについての噂を考慮して、これについて大声で言わないほうが良いと伝達係には思われる。V（ファルダーポルトゥ）さんは所長を待っている女性たちに大声を出して言う。「皆さん、私が聞いたことによりますと、期待するのはあきらめましょうと申し上げます。所長は今朝はもう来られません」。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月21日

伝達係は彼女（ファルダーポートゥさん）に、人々は貴女の表情を見て、何を思っているのか分りませんと言った。ファルダーポートゥさんは、そうです。私は自分の感情を隠すことができ、だんだん口数が少なくなることは、この時代の収益でもあると思いませんか？と答えた。そして彼女は続け、それは、私の住んでいる家には様々な種類の人たちがいて、ただ一人として同等な人がいないことから来るのではないのでしょうか？と言った。それから、彼女は同居人の一人について話した。その女性は彼女の世話を全て行い、食べ物を彼女のお皿に盛ることさえした。しかし、この同居人が入院した時、自分はほっとし、もう自立できない子供のような感じはなくなりました！と言った。更に、たいへん質素な家庭の出であるこの同居人が、自分の社会的地位よりはるかに上に立ち、精神的な雰囲気をつ握った。彼女はV（ファルダーポートゥ）さんと少し頻りに話しをする知り合いに対し、ひどく嫉妬した。これに関し、伝達係は同等な感情を持った。なぜなら、伝達係とルームメイトも同じような関係にあるからだ。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月23日

次に続いた騒動は、休みの日に起きた多数の盗難が原因であった。教会バラックから棚板が、あきれたことに監視の立場にいる教師たちの一人により盗まれた。大きな病院の後ろにある、まだ熟していないマンゴーが盗まれ、リス・ファン・WさんとLさんは修道女Mさんに現場犯で捕まり、彼女は今、病院で勤務していたファン・Lさんの解雇を要求する。竹はアーダさんとSさんにより盗まれた。アーダさんは所長の所で釈明を要求され、そんなことをしたのは始めてであると誓った。彼女は嘘をついている。その後、未熟なバナナの房の盗難についての報告書が来た。これは11時から4時の間に起きたにちがいない。それからV（ファルダーポートゥ）さんはもう沢山だと思い、伝達係は風のように素早く、四人の収容所リーダーたちを集めなければならなかった。彼女たちは探偵のように探索し、バラック、小屋、防空壕そしてクリピ（炒めたキャッサバのスライス）も探さなくてはならなかったが、何の成果もなかった。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月24日

一方、マヌク・Sさんとジャーヌ・Gさんは叱責しっせきを受けるのを待つために、収容所リーダーの

事務所の外で立っていた。ジャーヌさんは学校から鉛筆一本と石筆^{せきひつ}を盗み、マネケさんは立って眺め、見張りをした！！その後、ジャーヌさんはしかられに修道女ヴィルミンさんの所へ行かなければならなかった。その間、ジャーヌさんの家族全員は座ったり、立ったり、歩いたりして腹を立てていた。姉のフィッチュさんはV（ファルダーポルトウ）さんの方へ駆けて、ジャーヌは地図帳やノート、石筆や鉛筆は持っていませんと叫んだ。さて、ジャーヌさんは石筆や鉛筆は持っていますとたった今、認め、明朝それらをV（ファルダーポルトウ）さんに戻しに来るでしょうと伝達係は返事をした。

フォスカウルー リムボーフ

1945年3月25日

Eさんは信頼のおける友人に彼女の心の中をうち明けた。彼女は所長に夢中で、もし彼がしばらく自分の所に来ないと、彼を求め、気が狂ってしまうと話した。そして、所長は自分が手に入れられる女性たちをひどく扱い、少しも敬意を表すことはない。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月1日

キティ・Bさんは昨日5日間ほどマカッサルへ連れて行かれた。というのは、そこにいる2歳4ヶ月になる彼女の子供が病気だからだ。こういうことはキティさんのようにヤップと暮らしたことがある人だけにしか起こらず、そのヤップとの間に子供ができたが、死産であった。今、病気の子供は他の男性との間の子だが、ヤップとの以前の関係により彼女は例外の立場にいる。

コートウン

1945年4月5日

男の子たちは女性の泥棒を捕まえた！誰が捕まえられたのか？アンキィ・ヘアデスさんだった！彼女はものすごく泣き、確かにいつも泥棒をしていたことを認めた。かわいそうなアンキィさん、なんて馬鹿なのだろう。なぜ尋ねなかったのだろうか。フラワーヴェロットウさんは晩になってよく「ひどくお腹の空いている人の為に誰かパップをお持ちですか？」と大声で呼んでいたのに。修道女ヴィルムスさん、コリノさん又はムールニッケルさんは、時々何か食べ物を持っている。ムールニッケルさんは時々、私たちにまだ何か一口食べたいかどうかと聞く。おかしいことには、皆はアンキィさんが私たちの棟の人なので、本当に怒っているこ

とだ。ある人たちは、彼女は事実上、集合バラックAから来ているのだと言っている。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月10日

朝の9時に、所長は素敵な服を着て、書類かばんを腕にし、マカッサルへ向かう車に乗る用意をして立っている。しかし、トーさんが彼の方に来て、今日、捺印が行なわれますか、それとも行われませんか？と尋ねる。今日はないという彼の返事。トーさんにとっては残念である。なぜならば、もし、所長がやりますと答えたのなら、『彼女』が判を押したであろうに。なんてもったいぶっているのだろう。彼女は愛情あふれた眼差しで彼を見て、Verh.さんにスーツは彼に似合っているでしょ？と聞く。伝達係は所長の背の低い、アザラシのような体形、巻きゲートル¹¹⁰をした短く、太い『脚』をちょっと見て、視線をそらす。いいえ、この種の敬愛は伝達係には合っていない！

コートウン

1945年5月28日

ここではどうしてよいのか分からないことが時々ある。午後、エディはパラン（なた）を持って棟の中に入り、私にそれを見せた。私たちのパランだ！私はそれが直に分った。私たちはそれをバラック第12棟に移ってから無くしたのだ。エディはシャボットウさんの女の子から取り上げたのだ。しばらくすると、シャボットウさんが中に入って来た。腹を立てていた！それはどういう意味ですか？そして『彼女の』パランを戻すように要求した。私はそれが私たちのものであり、どこでそれが分るかを説明した。ファン・ディップレンのものと区別するために、ロンバッサンのエイトさんが太い部分に数個の小さな印を打ったのだ。その上、取っ手がもうついていなかった。

シャボットウさんにとって、それは少しも重要ではなく、全てがたわ言、私たちは泥棒なのだ！私はその間、彼女が取れない所にパランを隠した。突然、ドウ・ライクさんが入って来た。彼女がパランを借りた時、最終的にそれを無くしたのだ。彼女は喧嘩を聞いて、やって来た。どのようなパロンであるか正確に説明して、私はパロンを彼女に見せた。彼女もそれは私たちのものだと言った。シャボットウさんは見てなさいと言う以外、何も言うことがないのが分り、出て行った。私たちはパロンを^{もやげた}母屋桁の竹端の穴の中に隠した。少ししてから、バラック第11棟のバラック主任が来て、パランを戻すようにと請求した。彼女はこの件を

¹¹⁰ 兵士がかかとかから膝にかけて螺旋状に巻いた細長い布製の巻きゲートル。

調査するのであろう。ドウ・ライクさんも又現われた。私はこれを手渡すことを受けつけなかった。ローフマンさんは、トン、お母さんに話に行きなさい。どうすれば良いか教えてくれるでしょう、と私に叫んだ。幸いなことにはバラック主任はここで待っていてくれた。お母さんは何とおっしゃいましたか？「パランを戻しなさい。私たちは既に長い間それなしでやってきました。もう十分に喧嘩をしました。パロンは喧嘩するほどの価値はありません。シャボットウさんがそれで幸せならばいいでしょう」私は母に、この考え方をこれ以上話さない方が良いです。なぜなら、そのうち私たちのものは全て無くなってしまうからですと言った。そして、私はパランを手にし、母の意見の持って、バラック主任の所へ行った。彼女はもっと調べてみましょうと言ったが、うそをついているのだ。ああー、時々、悲鳴を上げて、何もかも吐き出してしまいたくることがある。

フォスカウルー リムボーフ

1945年8月9日

数回に渡り、夜中、寝ている人たちの間に置かれた旅行カバンから物が盗まれたので、今から、夜間、歩哨が歩くことになる。一時間おきに女性4名が、泥棒に対し、そして犬に対しても同様に、棒とランタンをもって武装して来る。これは、私たちが体験した劇的な事件が起きた後、今では皆が、犬に対してすっかり恐がっているためである。

戦争の経過についての報知と流言

報告書

カンピリ収容所報告

空襲警報時の規則

A. H. ヤウストウラ

- (1) 収容所の位置 — 収容所はマカッサルより南方24キロメートル、飛行場より北方10キロメートルに位置していた。
- (2) 警戒警報
 - a. 予備警報 — 鐘、5連打5回。
 - b. 警報 — 鐘、約20回急連打。所長の警報終了合図、鐘、5連打5回。
- (3) 警防団(LBD)の組織 — 人数27名、司令部より所長からのみ出された命令を伝達する役目を持つ。
- (4) 防空壕掘削作業 — 有蓋防空壕21ヶ所、無蓋塹壕25ヶ所。特に小さな子供たちが暗闇に入るのを怖がるため、抑留者たちの依頼により、一部の防空壕は無蓋のままであった。
- (5) 監視所 — 所長用監視所は、女性病棟の屋根の上に設けられた。
- (6) 司令部の隣にあるコンクリート製防空壕には、救急手当用の必需品箱が置かれた。

日記からの抜粋

コートウン

1943年5月29日

既に何日も、飛行機が絶えまなく上空を飛んでいる。今朝は、もう5時から飛んでいて、午前中遠くでブーン、ブーンと音を立てていた。すると急に、ボンボン、バンバンという爆音がして、皆は飛び上がった！「あれは何だろう？聞こえますか？」バラックはあっという間に空^{から}になってしまった。

今度は、7機の飛行機が見えだした。バン、バンと連発15回の爆撃。すぐに自動高射砲が爆音をたて始めた。高射砲によりそれがマカッサルの上空だと判った。再度、爆弾の雨。一瞬、もうもうとした白い煙が空中に見えた。これらは高射砲によるものだが、何人もの女性

たちが「落下傘兵だ！」と叫び始めた。これにより新たな動揺が生じた。それから飛行機が私たちの収容所の上に飛んで来た。皆で、手を振り、歓声を上げた。そして、飛行機は南方へと消えていった。「ボック」（これはインドネシア語で豚と言う意味、私たちの「お気に入りの??」所長のあだ名）と他に2人のヤップン（日本兵たち）は隠れ、相当びくびくしていた。集合バラックAで、「ボック」は皆をバラックへと急き立てた。[アンボンキャンプ]では、誰もが神経を高ぶらせ、恐怖の為どうしたらよいのか全く分らなかった！けれども、この人達は既にアンボンでかなりの体験をしたから、こうなるのも不思議なことではない。

コートウン

1943年6月15日

また忘れられない一日であった！ 11時を少し過ぎていた。私は畑仕事から「家」に帰ってきたばかりで、汚れを落としていた。その時、遠くで爆弾が落ちる音が聞えた。すると、そのあと直ぐに、高射砲が続いた。皆は、もう一度歩いて見回した。しかし今度は、飛行機がずっと近くに飛んで来て、爆弾の雨はバロンボンの近くの上空に投下された。そこは、ここから約20キロメートル離れている。地面が揺れ、バラックが軋みだした。きっと大型（重量）爆弾であったにちがいない。空いっぱい飛行機が見え、3、4機が幾つかの群となって飛行していた。飛行機がもっと近づいて来ると、多くの人たちはバラックに入り、ありとあらゆる物を、リュックサックに慌てて詰め込んだ。私たちも同じようにした。爆弾はますます近くに落ちてきた。

誰かが全員避難するようにと伝えた。絶好の避難場所はトイレの後ろにある藪^{やぶ}だった。私たちはそこに行ったが、もう満員だった。それならマンゴ畑へ行こう。ブルンブルンと音をたてて、飛行機3機が飛んで来た。私たちはまるで死を軽視するかのように畑を大急ぎで走った。「ボック」と「ストッキー」は、まるで狂ったように歩き回った。隠れ場所を見つけなかった者や地面に伏せなかった者は、木のこん棒で叩かれた。すると、飛行機が飛んで来た。それはものすごく巨大な、空の要塞¹¹¹であった。私たちは灌木^{かんぼく}の下をもっと奥の方へと腹ばいになって進んだ。ここに女性収容所があるのを知っていたのかしら、それとも日本軍野営地と思っただのかしら？ これら全ての出来事にもかかわらず、やっと何かが起こり始め、物事が進歩しつつあるという満足感が湧いて来た。

そのうちに1時になった。食事は私たちのバラックにもう用意されていたが、まだ取りに行ってはならなかった。ものすごくお腹が空いていた。少しすると、ストッキーが出て行き、何にも知らせがなかったので、私たちと大勢の人達は食事をする為にまたバラックへ行った。何人かはもう食べ物をお皿に盛っていた。するとその時、突然ストッキーが私たちの前に

¹¹¹ 重爆撃機B17。

立っていた。パチャン、バタン、ドン、ドタンと彼は棒でさわれる物なら何でもたたいた。すぐに、また飛行機の音が聞こえた。平なベをつかむことが出来た人は、それを持って、猛スピードでマンゴの木へと走り、残りの人はお皿やおわんを抱えて、その後を走って行った。後から考えてみると、本当に馬鹿げていたが、まさにその瞬間は真剣だった。猛烈な爆音をたてながら飛行機が飛び去って行った。私たちはストッキーから、どのようにうつ伏せになるかの訓練を受けた。平らに伏せ、肩を地面から離し、樹脂ゴム¹¹²を口に入れる事。さらに一時間うつ伏せになっていなければならなかった。それから、バラックにまた戻ってよかった。ところが直に点呼があった。彼らはきっと誰かが逃げてしまったのではないかと恐れたのだ。

シャボットウー コートウマン

1943年6月27日

私たちは、最終救助の組には入らない様です。既に、何回にも渡り、鈍い音を朝方聞きました。世界大戦の海上での砲声を思い出しました。私たちは、23日に違った種類の音を聞きました。それは遠くに飛ぶ飛行機と関係があり、そのエンジンの音は、あの有名な日本機のうなりとは違っていました。直ぐに遠くの方で、高射砲の黒煙が見えました。これは、明らかに空中戦です。何故か私には、未だに理解できないのですが、数人の人達が必需品を一つにまとめ、バラックから出て行き、畑にある樹木の下に隠れ場を探したのでした。このような事は、恐ろしいほどに伝染しやすいものです。しばらくしてから、女性や子供たちに、外へ出て来いという命令が出されました。私たちの周辺には爆弾貯蔵用バラックが見えませんが、ここで何かが起るとは思いませんが、例えば、墜落した飛行機、砲弾の破片又は、爆風により起る火事（この竹林は非常に燃えやすい）などはもちろん可能な事です。この空中戦は2時間ほど続き、クーリーや運転手により運ばれた噂では、マカッサルはひどく破壊されたという事でした。連合軍はしっかりと情報を得ていた様です。クーリーは私たちのグダン（倉庫）の班長に、日本の貨幣をオランダのものと交換したくないか！と尋ねました。何処か、遠くではない所に、連合軍の基地があるにちがいない、という確信を持つ事はすばらしいものです。これから先、一体どうなるのでしょうか。いつ連合軍は戻って来るのでしょうか？既に、数週間前から、何かが起るとしたら、29日になるであろうと言われていています。I hope so.（私はそう願っています。）

¹¹² 爆音により鼓膜が破れない為に使用。

シャボットウー コートウマン

1943年9月15日

私たちは11日から12日にかけての夜、申し分のない爆音を再び聞かせていただきました。それは、お祭りの催し物のようでした。「突然の警報」で、誰もバラックに留まってはなりませんでした。下水溝は見事な避難所でした。(多分、これがこの下水溝の本当の目的だったにちがいありません!) それは素晴らしい月夜で、前回と同様に、最後の飛行機がちょうど私たちの頭上を飛んで行ったのです。これは別れの挨拶であり、私たちがここにいることを知っているから、恐れる必要はありませんという証拠であると、今になって分かりました。ロティ¹¹³の友人は米軍のピラを3回見ました。それによると、米軍のスパイ活動は非常に順調に行っているとの事でした。

フォスカウルー リムボーフ

1944年6月13日

素晴らしい情報である。平和は今まで以上に接近しているようだ。この現在の私たちの生活は、いつか、私たち誰もが役を演じた劇のように思われ、やがて平和が来ると、あからさまな事実が目の前に現れるかのような感じを持つのでしょうか?別に、良いのです。『神』が救って下さるならば、私たちは前進できるのです。

フォスカウルー リムボーフ

1944年9月8日

様々な情報が広まっている。第一には、サワ(水田)で紙が見つけれられたに違いない。たぶん初めに、鉄条網に刺さり、風でそこへ吹き飛ばされたらしい。そこには「アンボン解放される」と書かれてあったに違いない。第二には、日本兵の「第二番」が、昨日あわててマカッサルから戻り、米軍機が来ました。バン、バン、そして市場が閉鎖されましたと報告したに違いない。更に彼は、ヤマジもまた直ちに帰るでしょうと言った。しかしながら、そうではなく、ヤマジは9時半にやっと帰って来たのだ。彼はかなり不機嫌であった。「第二番」は、米軍機がその日3度も現れたと報告したに違いない。ここでも爆音が聞えたのだ。第三には、現地人が日本の貨幣を受け入れることに反対したことである。これが、その事を伝えた警官が殴られた理由であった。他の人たちは、その警官は熱がある振りをしたので打たれたのだと言っている。

¹¹³ チモール島の近くにある島。

フォスカウルー リムボーフ

1944年9月10日

サワ（水田）にあった手紙についての情報は、誇張と想像に基づいているらしい。つまり、サウイ（白菜）が毛虫だらけになったので、サワ（水田）を水浸しにさせた。そして水田が再び乾燥した時、白菜を収穫しようとする、手の中でガサガサと音をたて、班長は「紙の音のようだ」と言った。「そのとおり、セロハン紙のようだ」と別の人たちが答えた。班長は「大声を出さないように、誰かが後で、私たちがビラのような紙をここで見つけたと言うかもしれない」と言った。そのビラという言葉が、また噂の種となったのだった。

フォスカウルー リムボーフ

1944年9月18日

新しいバラックの一棟に転居希望の人たちは、本日、各自のバラック主任に申し出るよう要請される。これにより、前回の申告は無効になる。トイレが完成次第、新しいバラックへ引越し可能である。この通知は大きな動揺の原因となった。これらバラックは、来る予定であった新来者を考慮して、約3ヶ月前に建てられ、初めは、速いテンポで建築作業が行われた。その後停滞し、クーリー（日雇い人夫）が来なくなり、トイレを仕上げる為のセメントもなくなった。あとまわしになったが、新抑留者は来ないことがわかった。そして、今やこの知らせは皆の感情をたいへん動揺させた。それに種々雑多な楽観的通報、例えば、しばらく広まっている噂、アンボン解放！！とも関わっていた。もしかしたら、その為に、誰も送り出す事ができないのではないのか？ 毎晩に渡り、空襲警報があった。実際には、全てが終わりに近づいているのではないのか？ クーリーには石鹸や衣類などの物品で支払われた。金銭（日本の貨幣）では、クーリーは雇えない。なぜなら、彼らはそれで何も買えることができず、全て「配給券」が必要だからだ。噂では、米軍はサレイヤーにいるという事だ！！

フォスカウルー リムボーフ

1944年10月16日

一番重要な日である！！ 12時に日本機が聞こえ、その後『ダダー、ダダー』という音。私たちは、ヤップが米軍に追跡され、またたく間に向きを変え、消え去ったのを眺め見る。暫くして、遠方から再び接近するエンジンのうなる音が聞こえ、あちら側では所長が通路で『怒鳴り』始める！！ 彼は緊張していた。ヤウストウラさんは、所長の方へ駆けて行った。彼は正面口に立ち、激しく手を振りながら叫んだ。「オラン ミスティ マスク ディ スロカン、

オラン ティダボレ ベルディリ、オラン ミスティ テドゥール」(全員下水溝に入れ、立つてはいかん、うつ伏せになっておれ、文字どおりでは「眠る」という意味) ヤウストゥラさんは、伝達係に「ちょっと伝え廻って下さい。」と頼んだ。しかし伝達係は手っ取り早い方法を取り、鐘のところへ突進し、それを全力で打ち鳴らした。その時、信じられないほどの群れが寄り集まった。皆、全員畑へと駆け出し、一瞬、大部分の人達は完全に困惑した。そして私たちは空を飛ぶ味方を敬意と感激で見つめた。それらは、美しい銀色をした鳥で、落ち着いて空路を続行し、ねらわれている高射砲などには乱されもしなかった。15分後、再び全てが静まり返り、伝達係がまた事務所へ戻った時、まだかなり青白い顔をしていた所長が「ヤウストゥラを呼んで来い」と叫んだ。ヤウストゥラさんが見つかり、彼女は所長のところへ行った。彼は「命令を伝達せよ。直ちに食事をし、全員、各自の棟の近辺にいななくてはならぬ」と言った。

少したって起きた事は、再び飛行機がやって来て、ビラをまいたのだ。最初のビラは、鉄条網の少し外側にヒラヒラと散った。近くに立っていた警官がそれをヤマジに持っていった。しかし次には、収容所内に落ちてきたので、何人もの人たちが、ビラを手渡す前に、それを少し読むことができた。午後、ヤウストゥラさんはリーダー会議を開いた。そして、会議がほとんど終了しようとした時、ヤマジが入って来て、かなり臆病な口調で、ヤウストゥラさんが既にリーダーたちへ報告したように、ビラはもちろん読んでもかまわないと言った。さらに、彼が語るには、もし数機の飛行機が収容所の上空に來たならば、それらは多分フィリピンに向かって行くのであろうが、米軍であるとは言い切れない。戦闘機は行ったり来たりしていた!!!

コートウン

1944年10月17日

本物のビラが落ちてきた！そして、いろいろなニュースで満載されていた。それには、私が今までに聞いた事がない地名が山ほど載っていた。まあ、いいわ、調べてみよう。本来はマレー語で書かれてあったにちががなく、これがその翻訳なのだ。ということは、ファン・ダー・ノーアダー・ペッドゥモースさんが訳されたのだろう。

シャボットウー コートウマン

1944年10月26日

同日に、雨が降り始め、それ以来、私たちは殆ど飛行機の音を聞きませんでした。一方、それ以前には、私たちは度々、日中であっても、下水溝の中に座りました。学童たちにさえ、広い避難所を探し、病院や裁縫作業場用にと、大急ぎで防空壕が掘られたのです。これは一体どう

いう事なのでしょうか???

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月7日

今朝、周辺に爆弾を投下した9機の飛行機を見た。ヤマジはちょうど、来客があり、パニック状態だった。その来客達は車道に行き、そこに避難しなければならず、私たちは教会用バラックの横にある藪に隠れなければならなかった。ヤマジはいらいらして、まだ歩いている人を見ると、怒り狂った。

警報が終了したと私たちが思った時、彼はさらに厳しく監視し、そうして2人の女性は、竹で頭をピシヤリと打たれた。彼はノーアさんに、今後、警報が鳴り、直ちにうつ伏せにならぬ者を殴るであろう言った。なぜなら、そのような者は、収容所全体にとって、大災難の原因となるからだ、と怒鳴った。彼はこのこと全てを大声で叫んだ時、汗びっしょりになり、かなり神経が高ぶっていた。それから、女性たちは「家」に戻る事が許され、警報は止んだ。

ヤマジは警報終了後すぐに、最近、空^{から}になった「家」第8及び第9棟を来客に案内した為、他の警報違反者は、処置されなかった。それは、Zさんとアンボンから来た女性たちであった。彼女たちは歩き続けたからだ。そして教師であるZさんは、ちょうど子供たちを立たせたのだ。というのは、蟻で悩まされ、溝の中にある他の場所を探すためであった。ちょうどヤマジが通りかかり、彼女は愚か者であり、事務所まで来るようにと言った。Zさんは言われたとおりに、事務所へ行くと、そこには他の女性たちも待っていた。来客がやっと立ち去った時には、彼女たちは、既に1時間半も立って待っていたのだが、ヤマジに、午後4時に戻って来いと、言い渡された。彼女たちはそのとおりにした。仕方がない事である。ヤマジが事務所に不在だった為、5時半まで座って待っていた。彼が戻って来た時、彼女たちに向かって話した。この説教中、女性たちの一人の態度が気に入らず、彼は「なぜ膨れっ面をしているのだ？」と怒って問い詰めた。「頭痛がするのです」と彼女は答えた。「ここに来い」と彼は言って、彼女の頭を竹で叩いた。彼は再び腕をあげたが、ノーアさんが中間に入ったので、ノーアさんの腕が打たれてしまった。これで彼はさらに激怒し、彼は「畜生のような能無し者だ。犬のような賢い動物でなく、水牛のように愚かで、ぶたれなくては、言う事をきかないのだ!! 何故リーダーは、俺がばか者たちを処罰したい時、いつも仲介に入るのだ? 脳みそのない愚か者の為に、思慮あるリーダーは、直に身代わりになるのだ。そういう事をしてはならぬ。ばか者たちはぶたれることによって、習わなくてはならぬのだ」と言った。医師のM(マルセイユ)先生も又呼び付けられた。なぜなら彼は、空襲警報の際、アンボン部キャンプを管轄していたからだ。ヤマジは彼にこれを説教している間、不愉快そうに立って、今しがたHさんの頭を叩くのに使った竹をいじっていた。そして、伝達係は監視所、つまり通路の後ろ側から、磁気力でその竹に引き寄せられるM(マルセイユ)先生の視線を見た。それは、あたかも叩かれることを

誘っているかの様であったが、幸いにも、そのようにはならなかった。M（マルセイユ）先生は、次回の警報の際に、話すだけでなく、よく注意を配る事について考えなければならなかった。それから彼は立ち去った。教師のZさんは裁縫係にならなければならず、裁縫係のHさんは、キャッサバ菜園で働き、野菜用荷車を引かなければならず、他の二人も同様、裁縫係にされた。罰を受ける者の一人であった修道女のみが、怒鳴られたただけだった。なぜなら、逃げ出した水牛を戻す為に歩き回っていたからだった。Hさんは、彼の怒りを高ぶらせるばかりで、一人で居残らなくてはならず、彼は12時まで事務所の前で立っているようにと脅かした。さて彼女は9時までそこに立つと、ノーアさんはヤマジに、「Hさんは過ちに気づきました。ですから、家に戻ってもよいでしょうか」と聞いた。「あいつは自分でそれを言えないのか」とヤマジは不機嫌に聞いた。「彼女は立っている場所から離れたら、所長様が怒るだろうと恐れているからです」というのがノーアさんの説明であった。「中に入って来させる」とヤマジが言った。少したってから、彼はHさんの許しを請うのをにやにやと笑って聞き、彼女を戻らせた。こうして、この処罰の修行もまた閉幕したのだ。

午前中、警報の間、ヤマジはノーアさんに「ここに落ちるだろう全てのビラは、即刻事務所に届けられなければならない。そしてビラを突き刺すために、先の尖った竹を持つ現地人2名を連れてくる警官を行かせるだろう」と言った。残念ながら、何も落ちていなかった。私たちが考えたところでは、それらはつむじ風で舞い上がった竹の葉であったようである。偶然にも、それは、米軍機の飛来とまさに一致して起きたのであった。

コートウン

1944年11月8日

空襲警報の訓練！ また新しいきまりだ！ 鐘が連続して鳴る時は、空襲警報で、皆スロッカ
ン（下水溝）又は溝に避難所を見つけなければならない。誰もバラックにとどまってはならない。それが、夜中であっても同様。ヤマジは厳しく監視し、この命令に従わない者は罰を受けるであろう。そんなことは、私たちはもうとっくに知っているのである。どのようにすべきかを一度に習うための訓練があった。すると、ある瞬間、ベレミィが激しく鐘を鳴らした。たぶん聞こえないのであろうと、バラックの後ろ側にいる人たちの為に、「警報」と大声が上げられ、私たちはみんな、素早くスロッカンス（下水溝）に入った。場所があまりにも狭すぎたので、ひどく苦勞をした。それは本当にばかばかしいことだ。何故かと言うと、もし爆弾が落ちたとしたら、私たち全員の首は切り取られたかもしれないからだ。身をかがめたり、横になったりすることはできないため、首だけ出した形で座っている。後でまた、逆立ちして中に入れというプリンタ（命令）が出るだろうと話し、みんなで笑った。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月19日

今週、伝達係は、昔から知り合いで、ペトロリと言う名のBOW（公共事業局）のマンドール（人夫頭）に、ヤマジが日本円札を支払い、彼がそれをためらいながら受け取ったのを目撃した。ヤマジは、誰かが見たかどうか、急いで見まわした。そして伝達係は、素早く数歩、脇へと動いた。ヤマジがこの光景の目撃者がいないことを望むのは、理解できる事である。後で日本兵の「第二番」が裁縫作業場にかけて込んで行き、緑のシャツを持って出て来た。ヤマジは、それをペトロリにあげたのだ。伝達係は、ペトロリがまた彼のズボンを指差すのを見たが、ヤマジは『その』要求を断った。その後、ペトロリは緑色のシャツを持って、自転車で戻って行った。

フォスカウルー リムボーフ

1944年11月25日

11日の日曜日に、ヤウストウラさん、4人の集合バラックリーダー、G（フットゥブルトゥ）先生そしてM（マルセイユ）先生は、鉄条網の外を歩きまわった。この目的は、秘密にしておかなければならない。「君たちは、これについて何も話してはならない」とヤマジは言い、「普通の散歩であるように言え」と彼は付け加えた。しかし秘密は漏れるものである。鉄条網の外で、バラック第1棟の方向に、原始的ではあるが、現にバラックが建っているのである。それに加え、病院もある。ブアット チラカ（事故用）であるとヤマジが言っていた。つまり、彼はノーアさんに信じさせるほど、この収容所の頑丈さについて自分で安心してはいないのだ。昨日彼は、事務所の隣と小児病棟の前に、塹壕を掘り始めた。彼は、クーリーを急き立てる為、絶えず傍にいて、時々自分自身で穴を掘った。

フォスカウルー リムボーフ

1945年1月16日

「マナド及びアンボン解放」という噂。ケンダリーの反対側にあるボボニは、連合軍の手にあり、パンガイ諸島は解放される。ニューギニア北部のパラノも同様である。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月9日

収容所の雰囲気は非常に陽気である。ベアナート公がラジオで演説なさったと書かれたビラを（どこかで）見つけたに違いない。さらに、そのビラには7ヶ国の国旗が描かれてあり、その下には米軍が日本軍に、4月8日に切れた最後通牒を突きつけたに違いない。そして和平条件を受諾しない場合は、日本は7ヶ国より敵対されると、あったに違いない。また4月2日に東京は、米国、中国そしてロシアにより爆弾攻撃を受けたはずである。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月17日

私たちは11時に米軍の飛行機を聞き、それらがマカッサルの方向に空高く、10分間も回転飛行するのを見る。それから、一機の大型機が飛び去り、他機が私たちの収容所の真上を飛ぶ。そうして警報が鳴り、私たち全員、最寄りの防空壕に入り、45分後、警報が止んだ。伝達係は、急いで司令所に行く。そこには、所長が鞆あしでできた椅子を、三角形に草が生えた所に置き、長い軍刀を膝の間に挟んで、座っている。そして彼の横には自転車がある。収容所リーダーは所長のそばに直立し、伝達係はうやうやしく命令を待つ。「どの少年がたった今、鐘の所で見張っていたのだ」と彼は伝達係に聞く。「誰だか知りません。伝達係はそれについて、問い合わせなければなりませんか??」と収容所リーダーが聞く。「少年ではありません」とベレミィは答え、怯えた顔をして歩きながら「それは私です」と言った。『あつ、貴様』！彼は、高まる怒りをこめて叫べ。「何たる監視だ??既に長い間、バンバンと爆音がしていたぞ」。ベレミィは「はい、所長様、しかし私は待ちました」ハンケカチをもみながら、びくびくして言う。「お前は何を待っていたのだ」と彼は怒鳴りつけた。後になって、ベレミィは、首を取られるか、お尻に青あざができるだろうと思ったと言った！しかし運が彼女についていた。また空中に、エンジンのうなる音がする。「鐘を打て」と所長が怒鳴り、ベレミィは、新たに警報を鳴らす為、走り去る。今度は飛行機はやって来ず、15分後、所長は警報をやめるようベレミィに叫べたため、コンクリート製の防空壕に行く。ベレミィに対して、彼が非常に怒ったのは、自分の苛立ちを晴らすためだった。というのは、彼自身が警報の合図を出さなければならぬからだ。

午後、所長により午前の空襲警報の点検が行なわれ、彼は集合バラックリーダーと第5棟のバラック主任を兼務するアンスさんに、「バラック第5棟の者は、常にひどく不従順である。特に、眼鏡をかけた背の高い奴だ」と言う。これは、イナ・Bさんである。「彼女はバラックの副主任なので、防空壕には、最後の一人として入るからです」とアンスさんは彼に説明する事ができる。すると、彼は命令に従うのに一番のろい者として、更に総督ナンヤ（総督

夫人)の名を挙げる。そして伝達係は、その人を呼び寄せなくてはならない。

フォスカウルー リムボーフ

1945年4月18日

その後、誤って発せられた警報があった。それは様々な種類の追加合図により、ひどく複雑になり混乱させられた。現時点では、5連打5回の際には、老人、病人と子供は、警報に続き防空壕へ行く。3連打5回の際は、全員が防空壕へ行く。その後、5連打5回の場合、丈夫な者は防空壕より出て、20回連打で、警報が終了し、残りの全員が出て来る。

シャボットウー コートウマン

1945年5月16日

4週間前から、私たちが防空壕にいない日はほとんどありません。これらは1メートルの幅で、2メートルの深さがある溝で、約50名入ることができ、黒い樹幹と土で覆われています。それらは、収容所全体に散在し、十分すぎるほどあります。毎日のように、時には、かなり近く、また夜中にも爆弾が落ちるのが聞こえます。ビラが収容所の周りに落ちますが、残念ながら、収容所内ではありません。しかしそれでも何かを読んだであろうと言う人たちがいて、あらゆる噂が広がるのです。

コートウン

1945年6月2日

LBD (警防団) が設立された。いろいろな空襲警報で、何がなんだか分からない。

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月8日

既に4晩にも渡り、夜10時から朝6時半まで警報が鳴っている。ノン・ストップ襲撃は作り話ではない。それは、消耗戦法であるらしい。なぜなら、30分ごとに飛行機が来て、爆弾を落とす。その度に場所が違い、爆撃は次第に近づいて来る。警察官が所長に「ボロングルに爆弾が投下されました。深くはありませんが、幅の広い穴ができました!!」と報告した。「そ

こは、カリ（水路）を越えたすぐ近くにあり、大森林という意味です。しかしここから3キロメートル足らずの所に位置するのです！！」と彼は言った。所長は、「飛行機が30分毎に来るのは、トゥルラル（ひどすぎる）！！！」と言った。しかし、私たちは「何度もこれ程近くに来て、何を探しているのだろうか??？」と考えた。今夜12時きっかりに、爆弾がたいへん近くに落ちた。またその直後に、多くの子供たちが、泣き叫びだしたので、私たちは一瞬、爆弾がバラックに落ちたのだと思った。それは、非常に激しい金属のような爆発だったので、呼吸が一瞬止まった。その戦法は一晩中、30分おきに続いた。

所長は、V（ファルダーポルトゥ）さん、トーさん、キャリィさんと一緒に深い防空壕に入り、彼は寝込んでしまった。彼は目をさました時、V（ファルダーポルトゥ）さんに、「ティドゥール サジャ（寝なさい）」と優しく言った。「爆音は、上よりも、この防空壕の中にいるほうが、よりはっきり聞こえます。たとえ『一機』が飛行したとしても、まるで数十機のように！！」とV（ファルダーポルトゥ）さんは言った。所長は、V（ファルダーポルトゥ）さんと話をして「とりわけ、近ごろは生命の危険が大きい、収容所が何の災難にあわないこともあり得る」と言った。（近辺に、弾薬貯蔵所でもあるのではないだろうか？）所長は、LBD（警防団）の人たちを心配し、夜警番が使用するよう、裁縫作業場にあるレインコートを貸してあげた！！

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月10日

昨日一日中、遠くで爆音を聞いた後、私たちには、驚くほどのことではなかったが、昨晚9時にまた警報が鳴らされた。畑仕事の子供たちの食事はこれを考慮して早くした。つまり7時にオランダのお手伝いさんの役をするV（ファルダーポルトゥ）さんから始まり、その後教会用バラックで、呼び物の上演があった。それはまさにすべて順調に進み、感じよく終わった。その時、警報の鐘が鳴った。これは5回目の夜間警報で、今朝5時半にすべてが終わった。30分おきに、再び飛行機が来たが、真夜中になってから、最初の爆弾が落ちた。今回はさらに遠くだったが、神経戦が明らかに今始まったようだ。ここに爆弾が投下されなくても、十分な効果がある！！！！ 30分おきに、爆撃機がやって来ると、私たちは、はらはらして座っていた。「爆弾は今度は、何処に落ちるのだろうか？」 結局、爆弾が落ちないとしても、私たちの神経の高まりは同じで、その緊張感は30分ごとに繰り返される。これは戦法であり、神経は消耗しきる！！完全に疲れ果て、空中の爆音にもかかわらず、最終的に多くの人たちは眠り込んでしまう。そして私たちは睡眠が食物と同様に人間にとって、生命の必需品であるという事に気がつく。

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月16日

LBD（警防団）の見張り番の仕事はきつく、所長が指示した命令を伝達する為に一睡もできない。『おい』と彼が呼ぶ。それから、口頭で合図5連打5回がある。その後、遠くにエンジンのような音がした。『おーい』と所長が叫ぶ。「警報」とV（ファルダーポルトゥ）さんは叫ぶ。LBD（警防団）は防空壕の中へ入りると、飛行機が飛んで来る。近くにも遠くにも爆撃し、飛行機が遠方へ消え去ると、緊張感がまたとれる！それから再び5連打5回の合図。これが今朝の6時まで続く。4時にヤマジは睡眠をとりに行った。V（ファルダーポルトゥ）さんは5連打5回を鳴らしてから、LBD（警防団）は「家」へ戻っても良いかどうかを彼に尋ねた。ヤマジは「あっ、貴様！」と罵った！！V（ファルダーポルトゥ）さんは、今夜巡回し、真夜中に伝達係は、彼女がそとやって来るのを聞いた。伝達係はV（ファルダーポルトゥ）さんを、椅子のそばまで近づけさせた。伝達係は静かに起立し、「LBD（警防団）の全員は起きていましたか??？」と聞いた。「いいえ、V r. さんは眠っていました」とV（ファルダーポルトゥ）さんは答えた。

今朝、運ばれてきた瓶を見た。赤い縁のある青いレットルの切れ端があり、その小さな切れ端には100%と書いてあった。さらに今朝、事務所には先の尖った鉄製の破片が落ちていた。たぶん焼夷弾しょういだんのかけらであろう！しかし本当にこのごろは、何でも空中を飛ぶものだ!!! 伝達係の代理が監視に当たっても良いことになった。それはアーリィ・デン・Hさんだった。LBD（警防団）の見張り番のために、伝達係は2時間寝ただけであった。そしてV（ファルダーポルトゥ）さんは彼女に日曜日の安息を認めたかった。既に3人のLBD（警防団）団員が入院している。過労が大きな理由であり、多分もっと多くの志願者が求められることであろう。

シャボットゥー コートウマン

1945年6月19日

以前はいつも、2時間ほどの攻撃の際、遠方にして爆弾が連続投下されるのを聞きました。それはだいたい明るい月夜の時でした。今は暗くなりましたので、近接地周辺では、頻繁に一回一弾の爆弾が落とされます。私たちは爆弾の閃光から爆音まで数える時、それが7つ以上までになる事はあまりありませんでした。つまり約2キロメートル離れている事になる訳です。前日の朝、この敷地で砲弾の破片も見つかりました。事務所や病院などの白いしっくい塗られた建物は、カモフラージュとして黄色の粘土だらけにしなくてはなりません。しかし私たちの連合軍は、間違いなどはしませんでした。収容所の中心部に正確に落ちた唯一のものは、ビールのから瓶が1本だけでした。それは、壊れもせずに、瓶の先が地面に突き刺さっていま

した！

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月22日

9時30分に警報が始まり、11時まで続いた！ 私たちは戦闘機の空中戦を目撃した。私たちは米軍2機を見た。日本軍1機が彼らをめがけて急降下した。私たちは衝突を予期したが、それは起こらなかった。日本機は策略を中止し、飛び去って行った。少し後で米軍機が上方で、日本機が下方になった。バンという爆音、ぞっとするような火柱。その火柱がうすくなり火玉となって終わる。空中では、黒い煙の柱が残っている。ヤップの戦闘機が撃墜された。飛行士が落下傘で飛び降りる。まるで白い雲が浮かんでいるように見える。米軍機はさらに数回、回転飛行する。私たちは、「米軍機も命中されたのか？」と心配する。そうではなかった。しばらくして飛び上がり、姿を消した。なんと堂々と落ち着きある飛行！！ 私たちは、戦闘機に付き添われた米軍機2機を見て、爆弾攻撃を聞いた。後ろの飛行場が再び標的であり、マカッサルの海岸も同様で、至るところに命中した！！ 厚い煙雲が戦闘の成果をあらわにした！

所長は、婦人病院に立っていた。新しい建物の上にいる「ヘットゥ スナイダーチュ（日本兵のあだ名）」は全てが最初に見えるので、彼の視線を追えばすぐに何だかわかる！ 所長は全員が横になれるには、あといくつかの防空壕が必要かと尋ねた。集合バラックBにはあと100人分必要であった。『家族墓地』造りに全力を尽くし、警報の最中さえも働き続けた。

フォスカウルー リムボーフ

1945年6月25日

ロッキード3機が低飛行でやって来たので、飛行士たちが座っているのが見え、私たちは思い切って手を振る。なぜならヤマジはマカッサルに出かけているからだ。それから飛行士たちは何か舟形のを投げ落とし、伝達係は駆け出すと、それは竹藪にある養豚場の外側の近くに落ちる。空^{から}のアルミニウムの燃料タンクで、長さは2メートル以上ある。それには第10戦闘隊、165ガロン、146リーブラ（ポンド）、香芳性ガソリンそして鉛筆でロッキードと書かれてある。牧師は近くにいた誰かの為に、蓋を取った。とてもよい思い出の品である！！ 日本兵の「ヘットゥ スナイダーチュ」は、死ぬほどびっくりした。彼はすぐに、ロッキードに気がつかなかったのだから、それを見たとき「新しい防空壕」¹¹⁴の上から飛び去り、鐘を鳴らした。しかし、完全に遅すぎたのだ！！ しばらくして、ガソリンタンクが落ちてきた後、彼は

¹¹⁴ ヤマジ用の防空壕で、その上は丘のため監視所の役目をした。

また「新しい防空壕」の上に座った。そして彼の頭はまるで首からはずれ、体は海岸の方へと向きが変わり、しかし彼の頭はゆるんでしまい、全ての方向に回るように見えたのだった。

今朝、養豚場に5ヶ国の旗が印刷されたビラを見つけた。炎の中にある日本がまん中にあり、日本軍が撤退しなくてはならない時、きびしく処罰されるであろうから、インドネシア人にはオランダ側に付き、ラムボック（略奪）を始めるなど警告してあった。日本軍がいる所はどこでも、日本人は追放されるであろう。彼らの艦隊は全滅されたのも同然だ。運搬はもう可能ではない。所長はやっと7時にマカッサルから戻り、2機のコンソリデイツ機が墜落したと言った。死亡者12名、生存者4名であった。

夜8時から12時まで警報があった。私たちは2弾の爆弾が落ちるのを聞いた後、11時30分に日本機は明かりをつけたまま、収容所の上を低飛行した。彼は合図が出された飛行場を探しているが、彼が着陸したい時にはいつも米軍機が現れる。ヤマジは、「全員を防空壕に入れろ。空中交戦の見込みがある」とLBD（警防団）を通して伝えた。しかし、良い結末に終わり、日本機は着陸する。私たちは既に3週間、毎晩外で横になっているので、バラック内での夜を異常に感じるだろう！！ビラが、V（ファルダーポルトゥ）さんに渡された。両方とも最初に書き移されてから、V（ファルダーポルトゥ）さんは所長に渡した。一つのビラは養豚場で、もう一つはキャッサバ菜園で見つけられた！ ちょっと前に、私たちはまたバラックから「ビラだ」と叫ぶ声にびっくりさせられ、伝達係はバナナ菜園を横切り、トイレの後ろを走った。それは木の葉っぱだった。昨日のビラには、裏側に地球儀があり、そこには日本を攻撃している飛行機が描かれてあり、地球儀の周りには、米国、英国、オランダ、オーストラリアと中国の5ヶ国の国旗が描かれていた！！

コートウン

1945年7月1日

バンザイ！ バンザイ！ バンザイ！ 早朝に、エディは、私に見事なビラを見せた。オレンジ色の縁でかこまれている写真は、女王様が飛行機から降りられるところだった。その下には、スリラトゥクンバリクタナアイル（女王陛下、祖国にご帰還）と書かれてあった。右側には、ベアナート公が立っておられた。なんと素晴らしいことではないですか？ エディはそれを私にちょっとだけ見せたが、また戻さなければならなかった。誰に返すのかは言いたくなかった。そして今日、エディとルウロフが聖体拝領をうけた教会に、私たちは意気揚々と向かった。ところで、エディはまだびっくりさせるものをもっていた。この祝いの席には、たくさんの野菜の入った特別大きな釜が用意されていた。とてもおいしかった！

シャボットウー コートウマン

1945年7月9日

平穏な二晩が過ぎ去った後、米軍は攻撃を一晩も逸かしませんでした。私たちは、今では、完全に外で寝るのに慣れてしまいました。抑留者自身がまだパチョル（鍬）で掘っていなかった防空壕は、クーリーにより掘られます。40才の女性達ですら、たいへん器用に鍬を扱います。時々、後方から飛行機の音が聞こえます。私たちは子供たちを水浴びさせたり、寝かせることもほとんどできず、バラックから出なければならぬ夜もありました。ここ数晩は、10時近く頃がとても快いのです。忙しさと騒がしさのカンピリの一日に、8時から10時までというこの静かな夜の2時間がなかったならば、長期間に渡って堪え忍ぶことはより困難であったことでしょう。

出来事

日記からの抜粋

収容所からの抑留者の連行

コートウン

1943年7月21日

今朝、急にメリスさんとモークスさんが私たちの棟から、マカッサルへ連れて行かれた。色々な事が推測されたが、どういう訳なのかはっきり知っている人は誰もいない。

コートウン

1943年7月23日

今日の午後、メリスさんはすっかり取り乱し、カンピリに戻って来た。彼女は何が起きたかに関して、口を滑らせてはならない。なぜなら、もし彼女がそれについて一言でも口に出せば、ヤップンは彼女を殺すと脅かしたからだ。

コートウン

1943年7月24日

今日、モークスさんも戻って来た。彼女もまた何事も話してはならなかった。彼女たちは両方も、もし誰かが彼女たちの住む小屋の所で立ち話をすると、ヤップンは、二人が何かを喋っているのだと考えるだろうと恐れ、びくびくしている。変なことだ。

シャボットウー コートウマン

1943年8月11日

先週、二人の女性が急にマカッサルへ連れて行かれました。一人はジフテリアのバラックで看護婦として勤務し、洋服を取りに自分の家に戻る事も許されず、直ぐに車に乗らなければなりませんでした。もう一人は、同日の晩に戻って来ましたが、何一つ話してはいけませんでした。

彼女はただ、これは誰にでも起こり得ることでしょうと言っただけでした。他の一人は約一週間後連れ戻され、彼女も黙っていませんでした。多分、彼女たちは野菜用車の運転手からマカッサルの政治状況の情報について聞き出すように努力したのでしょう。そして彼女たちはスパイたち（他の抑留者たち）により告発されたのです。

フォスカウルー リムボーフ

1944年4月13日

5時に見事な二人乗りの車が収容所の中に走って来た。そこには、二人のゲシュタポ（日本軍の憲兵隊）のほか、トゥラウダ・Lさんが乗っていた。彼女は7週間後にやっと戻って来たのだ。所長が訪問者たちと話している間、彼女は事務所に座って待っていなければならなかった。訪問者たちが立ち去った時、所長はまたトゥラウダ・Lさんにどなって話した。その後、彼女はやっと母親の所へ行くことが出来た。

コートウン

1944年4月20日

今日の午後、憲兵隊がイノと一緒に収容所にやって来た。これは良いしるしではなく、どういう意味があるのだろうかとは皆は考えた。少しすると、数人のアメリカ人が呼び出された。この人たちは司令所で全てを聞き出されたが、何についてなのか誰も知らない。この人たちが何もかも白状すれば、それほどひどいことにはならないだろうと所長はきっと何回か言ったにちがいない。白状することがあるのか、ないのかどうか分からないが、イノは非常に怒り、彼女たち全員をマカッサルに連れて行った。彼女たちは衣類などをトランクに入れるために、5分間の時間をもらい、立ち去った。

ネティお婆さんは非常に怖がっている。というのは、そのアメリカ人たちは、私たちがマリノにいた時（彼女たちはベンテン ティンギにいた）、まだラジオを持っていて、パウル・ヴェアラーさんはそれを知っていたバンクさんの為に、度々用事に行かなくてならなかった。どんな用事であったかのか、彼女は知らない。

フォスカウルー リムボーフ

1944年4月25日

米国人の宣教師である二人の女性ケムフさんとセイリィさんは、ゲシュタポによりマカッサル

へ連行された。前もって家宅捜索が行われ、彼女たちは3着の衣服を持参することが許され、休息時間に出発した。

フォスカウルー リムボーフ

1944年5月11日

ヤウストウラさんは、米国人の婦人たちはしばらくの間戻って来ないことを共同バラック主任たちに知らせた。彼女たちはカンピリに出発する前、米国布教団の現金を現地人にあげたという理由で捕らわれている。

フォスカウルー リムボーフ

1944年5月12日

1944年5月12日金曜日は恐怖の日である。ゲシュタポがツーリングカーでやって来て、ここから4人の女性たちを連れて行った。その人たちはダイブラーさん（米国宣教師）、サーチュ・セトゥ・パウルさん、ベア・ドゥ・フラーフさんとヨーピィ・バンクさんたちだった。二人のヤップンがいて、一人は痩せたモンゴル人タイプで、もう一人は背が低く、太っていて、普通の時には残酷な顔に見えるが、話したり、笑ったりすると彼の顔は思ったよりましで、縮れ毛だった。婦人たちが自分たちの粗末な荷物を取りに行っている間、このでぶと痩せは所長と日本兵の「第二番」のベッドで居眠りをした。ゲシュタポたちが来た時、所長はその場にいたが、その後、彼はカスピタウン（キャッサバ菜園）に行き、5時までそこにとどまった。それから、彼は自転車に戻って来た。二人のゲシュタポたちは居眠りをした後、所長が来るのを待ちかねていたのは明らかだ。なぜならば、彼らは所長が戻って来ると直ちに、その婦人たちを車に乗り込ませたからだ。マカッサル人の運転手はバンクさんとダイブラーさんと一緒に前に、後ろにはサーチュさんがベアさんを膝にのせて座り、二人のヤップンはその隣に腰掛けた。荷物は後ろのトランクに置かれた。ヤップンは、まるで婦人たちがどこかのしゃれたホテルにでも行くかのように、これは持って行く必要はない。そこには何でもあるんだと言いながら、彼女たちの荷物から色々なものを取り除き、脇に放り投げた。

フォスカウルー リムボーフ

1944年6月18日

ゲシュタポの二人乗り自動車はサーチュ・セトゥ・パウルさん、ベア・ドゥ・フラーフさん

とヨーブ・Bさんに乗せて到着する。デイジィさんはヤップンに取り調べられ、その後バーレンディンさんとグレイスさんが質問される。デイジィさんの取り調べ後、ゲシュタポの一人はJ（ヤウストゥラ）さんに、バーレンディンさんをお呼びするように言う。ヤウストゥラさんは直ぐに、彼女は病気で、来られませんと答える。もしかしたら、ちょっとだけ来られないか？ とヤップはもう一度尋ねる。彼は縮れ毛で、たいへん優しく笑う。後ほど、私たちは連行された婦人たちから、彼が一番ひどい人だったと聞く。バーレンディンさんは連れて来られ、グレイスさんも来るように警告された。炎症を起こした顔で熱っぽいバーレンディンさんは素早くパジャマの上にバスローブを着て、ゆっくりと前に歩くので精一杯である。特に、ヤマジが収容所にいなかったのも、それは嫌な状況だ。

私たちは事務所の中に入り、お辞儀をする。ヤップは呼び寄せた者のうち一人だけを見て、もう一人はどこにいる、と直ぐに尋ねる。私たちは彼に、もう一人は直ぐに来ますと知らせる。そして伝達係は司令所から一番後ろにあるJ（ヤウストゥラ）さんの事務所の方へ歩くと、バーレンディンさんが、私はニョニャ ファン・E（ファン・E 夫人）と申しますと言うのを耳にする。私たちはデイジィさんの尋問が終了した後、彼女に会わなかったが、まもなくヤップンが立ち去れば、私たちは会話の報告を得るだろうと考えた。ところが、急いで用意した荷物を手に持ち、目を赤くしたデイジィさんがそこに現われ、マカッサルに同行しなくてはならなかった。彼女は煙草に火をつけたが、2、3服吸っただけだった。なぜならば、「ヨーとデイジィはヤウストゥラと共に前に出て来い」という、あの典型的な日本人のわめき声が既に表ベランダから聞こえたからだ。

俺たちは彼女をマカッサルへ連行すると縮れ毛は笑い、デイジィさんを指差して言う。デイジィさんはここに残ったほうが良いのでは、とヤウストゥラさんは丁寧に、しかし強く言う。駄目だと彼はきっぱりと返事をするが、デイジィはすぐに戻って来るだろうと付け加える。どのくらいデイジィさんはそこに留まらなくてはならないのですか、とヤウストゥラさんはまた質問すると、それは我々にも分からないと彼は答える。そして私たちは他の婦人たちについて考える。その人たちも『ちょっとだけ』とマカッサルに行き、そのうち5人の婦人たちは7週間戻らず、一人は全然帰って来なかった。前には縮れ毛とデイジィさん、その後ろに他の二人が座り、車がもうもうとした煙を残して、彼らが消えて行くのを見た。バーレンディンさんとグレイスさんは再び自分たちの棟に戻った。彼女たちはデイジィさんがお金を隠したかどうかについて聞き出されたが、二人ともデイジィさんについて何も知らず、二人はまた戻る事が許しを得た。

フォスカール — リムボーフ

1944年6月30日

デイジィさんが帰って来た。彼女は13日間収容所を離れ、所長と共に車で戻って来た。

フォスカウルー リムボーフ

1944年7月8日

悪名高いゲシュタポの二人乗り自動車で、3名の米国の婦人たちがをよつとのことで連れ戻された。前に帰って来た婦人たちが説明した後なので、彼女たちの外観は予想したより良く見えた。例えばSさんはあらかじめ言われていたように筋のように痩せていたが、やはり未だに太い筋のようであった。三人のヤップスは、彼女たちと一緒に車で来て、約30分留まり、その後ほっとすることに、立ち去った。所長は未だマカッサルから戻って来なかった。

シャボットウー コートウマン

1944年8月11日

既に2ヶ月が過ぎ去りました。およそ6週間前、私たちにとって大変良い知らせがありました（どれほど信頼できるものかは疑問です）。楽観的な感情の波が収容所に広まりますが、二週間も経てば、その様なことは忘れられてしまい、私たちは更に普通の決まりきった生活を送るのです。その次に、新たな刺激が起こりました。初めに、マカッサルよりかなり体調の良い混血人が二人到着し、この人たちはビタミン剤の注射さえ受け、その問題については絶対に話してはいけませんでした。

それから、9週間禁固された3人の米国人が来ました。一人は肉体的に害され、入院させられました。他の人たちに対して、所長は特別食用炊事場（病人用に料理する小さな炊事場）にある最良の食事を与えるように命令しました。奇妙なことは、この人たちを連れ戻す為に、彼がたいへん苦勞をしたことです。

フォスカウルー リムボーフ

1945年5月11日

今朝、昨日お誕生日だったDさんの所に座っていると、一年前の明日、彼女はゲシュタポにマカッサルへ連れて行かれたと語った。彼女は今朝伝達係に、常に皆に黙り続けていた、マカッサルのゲシュタポ監獄8週間についての沈黙を破った。以前、マカッサルへ連れられたKさんは、Dさんが無線送信機を持っていたかどうか、誰がマリノでそれを持っていたか知らないかどうかの質問について連続調べを受けた。

Kさんは、Dさんは何も知りません。そしてそれを保証しますと言ったが、それについてゲシュタポは、Kさんが嘘をついたと考え、白状させるためにKさんは半死になるほど打たれた。それから、Dさん自身も出頭しなければならなかったが、Kさんは驚かなかった。

笑っている朗らかなゲシュタポは残酷であることがはっきりし、心から楽しんで、人々が半死半生になるまで打つのだ。Dさんはゲシュタポ将校に尋問された時、そのことに気がついたのだ。彼女は一度も送信機を所有したことがなく、それについて何も知らないと言って、彼の目をまっすぐに見た。私は貴女を信じましょう。だが、米国人の為にプロパガンダを作ったことがありますか？と将校は尋ねた。一度もございません。私は宣教師です。私がプロパガンダを作った時は、魂をイエス様へお持ちし、イエス様に改宗するためでした、とDさんは答えた。私は貴女を信じましょうと将校は再度言い、彼女が言う事には、彼はそれから何時も親切であったそうだ。彼女は再び監獄に戻され、そこでひどい食事により、脚気、赤痢とマラリアになった。ある日、彼女はとても暑かったが重病にかかり熱のために身震いしたので、小さなマントをまとって独房にいた時、ヤップンの声を耳にした。彼女はそこのヤップンの為に見世物として務めることに慣れていたので、別に見上げようとはしなかった。特に一人の若いヤップはいつも楽しみに、彼女を見通すように見つめていた。

話は続いた。そしてドアが開けられ、彼女は馴染みの声を耳にし、見上げると、喜び、驚いたことにはヤマジ！が見えたのだ。あー、トゥアン ヤマジ（ヤマジ所長様）。まるで、昔の知り合い、旧友に出会ったようです。！！と彼女は喜んで言った。それから彼女は立ち上がり、彼の両手を掴んだ。看守とゲシュタポは冷笑して見ていたが、後ほど、この訪問の後から、彼らは非常に親切になった。ヤマジは微笑みながら持参したピサン（バナナ）を配った。彼も心を動かされたのだ。

その米国人は、あの日から、私はヤマジに対し、好感を持ち始めたのですと言う。その後彼は再び去り、彼女たちはあと数週間留置される。そして、ある日彼女たちはゲシュタポの司令部に呼び出され、壁の前に立たされ、彼女たちは打ち首に処されるであろう、とゲシュタポの長官より通知される。

Dさんは、突然『たいへん巨大な』孤独感を感じました！！ 無罪なのに、有罪の判決を下されたのです！！！！と叫んだ。しかし彼女は、私たちのために自らの命を与えたイエス様のことを考え、再び如何なる事にも耐え抜ける力を十分に持っていると感じましたと言った。その時、ゲシュタポの長官は、しかしながらニッポンは恩赦を与えることができ、それを『今』、行なうと優しく言った。それから、彼女は突然気を失い、殆ど何も聞こえなかった。更に、彼が言ったことは、「君たちは今日、カンピリに戻っても構わないが、少々待たなければならぬ。というのは、君たちを連れて行くはずの車が故障しているからだ」であった。そして、車を待っている間、彼女たちはそこで食事を得た。監獄の中で食べなければならなかったパップやまずいお米の後に、とても美味しいご飯とじゃが芋の炒めもの、御馳走を食べたのだ。そうして車が来たが、彼女たちはカンピリの柵の中に入る時まで、自分たちは又あの刑務所に連れ戻されるのではないかと、ずっと恐れていた。Dさんは戻って来てから最初の二、三週間、まだ神経にひどく支障があったが、今ではすっかり回復した。

1945年7月17日、カンピリ収容所の爆撃

コートウン

1945年7月17日

11時45分。私は学校へ行くためにエル・ムールニッケルを待っていると、その時、爆音が聞こえ、様子を見るために外へ行く。6機、いいえ、12機！ エリィが私の傍に立つ。違うわよ、もっと来るわ！ 23機よ。それから、警報が鳴り、その後、太陽の光の中に、飛行機は堂々と輝かしく大きなカーブを描いて収容所の上空を飛んで、消え去る。警報解除の鐘が鳴り、私たちはまた学校へと歩く。授業が丁度始まった時に、再び爆音を耳にする。直ぐに、また警報が鳴る。

『生徒たちは牧場へ！』と呼ばれる。けれども、私はその気にならず、ミアとエリィと一緒に私たちの^{ざんごう}塹壕へ猛スピードで走った。アンキ・ヘアデスさんとドウ・コーニングスさんがいて、エディもタンモ、ケイス・ドウ・フドウルンさん、ヴィル・ファン・d・ポルさん、クラス・ファン・ダイクさん、その他、棟の住人たちとそこにいる。養豚場の方に、数機の飛行機が来るのが見え、飛行機から突然、沢山の銀色の細い線が舞い落ちて来る。『ビラだ！』と私たちは歓声を上げるが、その銀色の細い線はだんだん大きくなる。『缶詰だ』と誰かが叫ぶ。私の後ろで、フラージェロットゥさんは上下に飛び上がり、『すごい、すごい』と彼女は大喜びで叫んだ。飛行機が近くに来るので、私たちは兎に角、うつ伏せになる。(ヤマジに) 気を付けて、少ししてから私たちは縁^{ふち}から覗き見すると、大混乱にびっくりし、目を丸くして見つめた。

とても高い炎がアンボンの家々の上から出てくる。『あー、家が燃えている！』直ぐに、悲鳴を上げている女の人たちや子供たちがアンボンの家々の間にある道を駆け回る。牧場でも、動揺が起こり、子供たちは飛び上がり、逃げ出したがる。『直ぐに、ヤマジが来たら、彼は怒ることだろう』と私たちは思う。かなりの人たちは既に司令部の所にいる。牧場では、まだ状況を押さえている。すると、私はお母さんが真っ青になって、第11棟に走って来るのを見る。お母さんの気は転倒している。

『あら、貴女のお母さんはいったいどうしたの？』とフラージェロットゥさんが尋ねる。お母さんはその間、覆い付き防空壕の所に来て、中に向かって叫んだ。『出なさい、出なさい。収容所が焼け落ちます！』私は防空壕から飛び出し、少し忠告するように、『お母さん、ちょっと落ち着いて』と叫ぶと、お母さんは突然泣き出し、『皆が私をしっかりと押えたのよ。私は貴女たちの所に行きたかったのに。私たちの周りそこらじゅうに爆弾が落ちたのよ』と言う。爆弾？！ 私たちは驚きの余り、物も言えなかった。

『集合バラックAは全焼です』とお母さんは他の人たちに叫ぶ。『全員、収容所より立ち去って下さい！』私たちは最初の人たちが門から本当に駆け出すのを眺め見る。今度は、全員が防空壕から飛び出した。私はタンモが第10棟の方に走って行くのを見る。ルウロフと

カーラはシンの手を取り、門の方向へ走り始める。ミアは彼女のお母さんの所に行きたいのだ。『ミア、ミア、出ていっちゃい。聞きなさい！』と私はどなる。ミアはうなずき、木靴を手にし、原っぱを駆け出す。『もっと何かを取りに行けるわ』と私はエディに言って、棟の方へ一緒に走る。私はオバットウコファー（医者のカバン）を掴み、それを開き、右から左まで小屋全てを手探りし、その中に放り込み、逃げ出したかった。フリイダはリュックサックを持って既にドアから飛び出るが、お母さんはちょうど棟の中に入って来て、私を止め「違うわよ。リュックサックよ！」と言う。馬鹿な私。私の上部ベッドにある自分のリュックサックに飛び付き、お母さんのリュックサックも取り、私は医者のカバンを持って、外に走る。リュックサックを二つ持ったエディが私のすぐ前にいる。私たちはマリノ用井戸のそばの棟にいる人たちが外へ行くのを見て、私たちもその方向に走る。

カワットウ（鉄条網）は布切れで縛り付けられ、それで私たちは素早く通り過ぎることが出来る。私たちが振り返ると、お母さんが見えない。エディは二つのリュックサックを投げ降ろし、また戻る。私は彼に、エディ、日記帳！と叫ぶ。それから、私はシインが子供たちと一緒に土手を歩いているのを見て、彼女を呼びながら追い駆けた。『シイン、シイン！』シインはじっとしている。シインは私を見て、叫ぶ。『荷物はいいとして、それより逃げなさいよ』。しかし、私はシインの手の中に医者のカバン、そしてルウロフとカーラそれぞれにリュックサックを押し込む。『なくしちゃ駄目よ。』と私は命じる。『もしかしたら、後で私たちの唯一の所持品となるかもしれないわ』。今度はフリイダもいて、四人一緒になって、一目散に逃げる。私は土手をまた駆け下りる。お母さんもいない。エディも見えない。その後、また戻るが、私がカワットウ（鉄条網）を腹ばろうとする瞬間、（鉄条網を縛った）布切れが外れ、手で額を触ると血だらけだ。私は大声で呼ぶ。『お母さん、お母さん。エーディー！』背中の後ろにカワットウ（鉄条網）が引っ掛かっている。私は引っ張るが、取れない。

その時、誰かが私を外してくれる。収容所へ這って行くと、私はそれがヤップだと分かる。彼は手で頭の周りを包帯で巻く真似をする。包帯ですって、呆れてしまう！！私は怒って叫ぶ。『馬鹿、自分の国に居れば良いのに！！』。その間、血は私の髪の毛や首まで流れて来る。マリノ用井戸の所に、ハーマンさんが走って来る。手にいっぱい洗濯物。『あら、まあ、血だらけ』と彼女は言う。『こっち、こっち』。彼女はハンスのズボンを手探りし、それを私の頭に押しつける。『ズボンはきれいよ。物干しから取ったばかりだから』と尚また叫ぶ。私はズボンを頭に押さえて、もっと先へと歩くと、また爆音が聞こえ、『飛行機だ！』と私は悲鳴を上げる。バラック第11棟と12棟から、突然もっとたくさんの人々が外に飛び出して来る。私はもう一度叫ぶ。『お母さん！エディ！』

それから、急にお母さんが現われ、『どうしたの、何が起こったの』と嘆くと、今度は私が半分泣きながら言う。『何処にいたの？』その後、エディが来て、『出ようよ』と急き立てる。『飛行機が来るよ』。私たちはカワットウ（鉄条網）の方へ走る。あのヤップはまだそこに立っている。足と手を使い、彼は鉄条網を広げる。エディと私は各自そこにまだ置いてあったリュックサックを手にし、更に走る。ヤップは、私たちがサワ（水田）に行き、全員土手を

下だらなければならぬと怒鳴り始める。彼は手を振る。後ろを見ながら、私たちは飛行機が来るのに気づく。私たちは水田の土手にある低木の方へ走る。

収容所では機関銃がガンガンと音を立て始め、飛行機が撃ち返し、土手の反対側にいるヤップも射撃する。私たちは出来るだけ小さくなる。銃弾が落ちると土手からもうもうたる砂塵が巻く。私たちは間違った方に打ち伏せになっている！ 飛行機からは数百本の爆弾が落ちて来て、爆弾のフレームが外に出る。爆弾の雨は第12棟で止まらず、原っぱの方へ、カワトウ（鉄条網）の近くに、サワ（水田）を越えて、私たちの方へ来るのをぎょっとして見る。次に、飛行機は私たちの頭上に来る。爆弾が私を目掛けてピューと飛んで来るのが見えると、私はこれでお終いだと考える。私は頭を地面に伏せ、祈る。祈る。また祈る。ヤップとエディの叫び声で、私は再び意識を取り戻す。『立って、立って』と彼は叫ぶ。私の足のすぐ近くの地面の中に鉄の缶があり、たいまつのように燃えている。サワ（水田）全面が燃え上がり、破裂する竹が耳をつんざくようにバンという音をたてる。火の中を通り抜け、焼き払われた場所を越え、私たちは土手へ戻る。エディと私は水路を越えたいのだが、お母さんはそうしたくない。『私にはできませんよ。私の足が。それに貴女もそんな頭をして！』それから、私たちは水路に辿り着く。大きな泥のかたまりが燃えながら水の上に浮かんでいる。それでもエディは水の中に入って、リュックサックを頭の上のせ、火の間を泳ぎ抜ける。私は円を描いて自分のリュックサックを振り、向こう側に放り投げる。飛行機が多分また爆撃に来るかもしれない学校のそばに行かなければならないという事実にもかかわらず、お母さんは橋に戻りたいのだ。ちょこちょこ歩いて戻ると、学校のすぐ近くで、私たちは鉄条網と奮闘しているローフマンさんを見つける。私は先に土手を駆け下り、彼女を助けると、ローフマンさんは喜んだが、やはり私が先に行くことをすすめる。彼女も学校へ行くのを怖がっている。そのうち、お母さんも来て、私たちは一緒にローフマンさんを土手に引き上げると、彼女は『私たちの覆い付き防空壕の中で、私は何人かのヤップンと座りました。防空壕の出入り口も、全てが燃えていました！ ヤップンは飛び抜けるけれど、私にはそれができませんでした。それは焼け付くように暑く、というのは、直ぐ前の食堂がまるで地獄のように燃え上がっていたからです』と語った。それから私はまた爆音を耳にする！ あー、私は世界の果てまで走って行けるだろう！ ヤップは橋の上で大声で喚き始める！ 急がなくてははいけない！

私とお母さんの間にいるローフマンさんを支えながら苦勞して前に進む。私たちが橋を越える時、ヤップは収容所の向かい側にある森の中へ入るように指示する。驚いたことには、数十人の人たちがそこに座っていて、『横になりなさい。横になりなさい！』としっと叱る。私たちが伏せると、その後、飛行機が飛び去って行く。何も起こらない。飛行機が去った後、私たちが座ると、一人の女の人が私の方に来て、『後ろのどこかに救急手当部があるわよ。包帯をしてもらいなさい』と言う。私は余りその気にはならないが、お母さんもそれをしてほしいようだ。そこで私は「どこかあそこ」の方向へ腹ばいし始める。歩いてはならないのだ。それから、低木の後ろに座ると、目の前には小さな女の子がのっている担架がある。その子は目を閉じ、真っ青になって、全く動かずに横になっている。

看護婦さんが来る。『どうやって起こったの?』。彼女は知りたいのだ。『鉄条網です』と私は答える。切り傷は頭の真ん中までである事が分かり、お水で彼女は私の目と顔を洗う。そこらじゅうべとべとする。『たくさん出血したので、感染する可能性は少ないわ』と彼女は言う。『あの女の子のお母さんはどこにいるんですか?』と私は尋ねる。『ちょっと席を外したのよ。余りにも耐え切れなくなったからよ』と彼女は返事をし、私の頭を包帯で巻く。私は、じっとしているフレディ・パウル君が横になり、カウマンズさんがうめいて、頭をただ、あちらこちらに転がしているのを見る。まだ他の人たちがいるが、私には誰だか分からない。『その女の子のそばに居てあげましょうか?』と私は聞く。『母親は直ぐに戻って来るし、どっちにしても、その子は今何も分からないのよ。出来れば、どこかで静かに寝なさい。もしできたら、明日また傷を診せにいらっしやい』。私は腹ばいになって戻る。『怪我をしている人たちがいた?』とお母さんは尋ねる。私がうなずくと、有り難いことにお母さんはそれ以上質問しない。顔を道の方向に置き、腹ばいになって横になる。私の後ろからのひそひそ話の他には、物音一つしない。

道に沿って、三人のヤップンは低木の半分の下にしゃがみ、銃を膝の間に置く。門のそばと橋の上に、二人のヤップンが立っていて、右側には、数人のヤップンが道の真ん中で話している。ヤマジはどこだろう? そしてシンと子供たちはどこ? お父さんがこれを知ったら大変心配することだろう! 私の後ろののでは、お母さんがローフマンさんと話をしている。私は、お母さんがローフマンさんに『裁縫箱だけ』と彼女の裁縫箱を取りに行くように、押し付けるように頼まれ、戻って行ったことを今耳にする。お母さんは息を完全に切り、牧場からずっと戻って来たのだ。そのうちにエディが来て、大型トランクを開け、敷布を広げ、その上に全てを投げた。それから四つの端を一つにして、袋を外へ担いだ。エディとお母さんは一緒に、更にトランク二つとローフマンさんの身の回り品を外に持って行った。

私はわずかに救えた物と既に無くした物を調べる。他の人たちは私たちが今度はどこへ行かなければならないかについて話している。マカッサルかしら? 数人の人たちは、ただ、ここ野外にとどまると考えている。時間はただ永久に続く。どこかでブルカラス(問題を詳しく話し合う会合)が開かれることだろう。それから、突然、怒鳴り声がして、木の下からトラックが走って来る。ヤップンは怒鳴って命令し、トラックはカリ(水路)の方向へと去る。『牧場へ集合!』と呼ばれ、全員が動き始め、収容所に再び戻る。きつい火事のおいぎが漂っている。牧場で、エディはまた私たちの所へ来る。私たちは以前のバラックを見に行きたいが、お母さんはそれを許さない。しかし、人がどんどんとそこへ駆け出して行き、私たちが許しを得られ、そこへ走って行ったが、期待したほどではなかった! 暫くたった後でも、地面はまだ非常に熱く、歩くことなどは不可能だ。外にある物は大丈夫だった。端の方は少し焦げていて、日記もそこにある。

私たちは全てを二つのトランクに押し込めるが、それらは実際にはまだ半分空だ。私は二個のリュックサックのことを思い出す。エディはそれらを水路に沿った低木の下に置いた。私はリュックサックを取りに行こうと決心し、マリノ用井戸の所で、まず、乾いた血がまだつ

いている手と首を洗い、三度目、カワットゥ（鉄条網）をくぐり外に出る。殆ど全収容所の人たちが道路を歩いてカンボン（小部落）から戻って来る。誰か私のリュックサックを持って来てくれるように頼める人がいるかしら。あ、いる。一団の修道女たちの間に、ミアが歩いているので、私は『こっち、ミア、こっち！』と叫ぶ。ミアは止って、『トニィ』と呼ぶ。『そのリュックサック二個持って来てくれる？』ミアは聞きもしないで、水路の端の方に行く。ミアは奇妙だったので、私は色々な恐い予感を持ち『どうしたの？』と聞く。『皆はトニィは死んだって言ったのよ』。

修道女たちはミアの所に来て、うなずく。『トニィがカワットゥ（鉄条網）の近くで血だらけになり、横たわっているのを人々は見たのよ。』『神父様もそれを聞いて、私たちは貴女のためにお祈りさえたのだから！』私は少しびっくりして、冗談を言う。『神様は本当に必要な時のために、お祈りを預かっておいて下さるでしょう』修道女たちは笑って、質問をする『頭だったんでしょ？』『カワットゥ（鉄条網）のせいです』と私が言うと、ミアは『お馬鹿さんね』と言う。ミアは彼女の母親を見たかどうか尋ね、リュックサックを取り、歩き続ける。私はミアを見送ると、彼女は急に向きを変える。私たちは元気よく手を振る。そのうちに、シィンもフリィダと一緒に棟に来る。エディの小さな菜園から取った数本の木で、私たちはお皿、マグカップ、スプーン、そしてローヤン（大きなフライパン）を自分たちの方に引っ張った。その間エディは、学校で今晚のご飯のおかずを用意した野菜入りの釜に手が届いた。とっても嬉しいことは、それが良く煮えていたことだ。

二つの大型トランクもまだそこにあり、真っ黒に焦げていた。私たちは慎重に近くに来るよう努力する。棒で蓋をいじくりまわし、やっとこのとで蓋が開くと、ガシャンと音を立て、突然火が飛びあがる。私たちはそれをまたドシンと閉じ投げる。私たちの隣では、ドゥ・クルーさんが胸を張り裂けるように泣いている。彼女のフィルムが全部焼けてしまったからだ。『私はこれを身近に置くため、避難の時には役立つ物を家に残したのです。それなのに、今はもう』。私たちはドゥ・クルーさんを元気づける事が出来なかった。

ファルダールポートゥ

1945年7月17日

私たちの収容所生活において、再び、惨事の日を記録することとなりました。私たちは今朝、全員穏やかに仕事に出かけ、私たちを待ち受けていることに何の推測さえもしていませんでした。事務所で、私は忙しく働きました。12時ごろ、私はフェアドゥニウスさんと彼女の新しい役目について説明していると、その時、警報が鳴りました。私たちは事務所の隣にあった有蓋塹壕に行きますと、間もなく、23機のロッキードが収容所の近くに飛んで来ました。暫くして、また全てが安全になり、もう一度仕事に戻ると、直ぐその後、再び警報が鳴りました。全員また塹壕に行くと、同じ飛行機が戻って来ました。今回は機数が増加し、56機だと人は言いま

す。私自身は何機であるかを確認できませんでした。私の防空壕からは直接見ることが出来ませんし、その後はもう注意を払えませんでした。飛行機は北西の方よりやって来て、収容所を越えました。飛行機はキャッサバ菜園の上空に来るや否や、焼夷弾の雨を落下しました。それらはそこらじゅうに落ち、カモや豚小屋は、それぞれおよそ200羽のカモと600匹の豚、新しい集合バラックC全て、アンボン小家屋2a, 2b, 3a, 3b, 6a, 6b, 11aそして11b全部が直ぐに激しく燃え始めました。それから、集合バラックA、竹製の裁縫作業場、何もかも全てが唸るような音を立てて燃え上がりました。

その間、集合バラックC及びアンボン家屋の無蓋塹壕に大量の焼夷弾が落とされ、そこでは残念ながら被害者が出ました。ダーラーさんは焼夷弾が大腿に入り込み、フレディ、パウル君は同様な運命に会い、腰に重傷を負いました。小さなマフダ・ティッスンちゃんとその子の上に横になったファン・サンディックさんは顔、腕や足に燃え上がる炎を受けたのでした。カウマンスさんは足を剥ぎ取られました。アンボンの爆撃にて既に母親をなくした幼いベアトゥ・ブルウハーちゃんは両腕と両足を粉々にされました。そのうちに、火の海から逃れるために防空壕から収容所の出口へと巨大な逃走が生じました。

人々を引き止めることなどはできませんでした。ヤマジが怒鳴って、柵以上行つてはならないと言うプリンタ（命令）を指示した時も同様でした。柵以外に出ることを許したのはヤウストウラさんでしたのに、所長はだいぶ遅れて来て、それについて何の関係もない私を怒鳴りつけました。大惨事を目にした後、私はまだチャンスがあると思い、素早く自分の事務所の中に走り、収容所の登録簿やその他の記録書類を救出しました。既に数百人がそこから逃げ出した時、私は自然に出口の所に着きました。ともかく、ああいう非常時には一切何も気にせず、あのような怒鳴り騒ぎなど何とも思わないのです。突然、飛行機から雷のような騒音が再び近くに起こり、柵の中に立っている人たちは水路の向こう側の溪谷に出来る限り早く避難するように、即座にプリンタ（命令）が出されました。私たちはそこへ飛ぶように走り、丁度その中に入った途端、再び、今度は収容所のまだ被害をうけていない部分、つまり集合バラックBの6棟を目掛けて同様な破滅をもたらす急襲が開始されたのです。これが始まる前に、数百人の日本兵たちが私たちの敷地に突進してきました。

私はそれほど沢山の日本兵たちが近くに居るとは思いもしませんでした。一番ひどかったことは、日本兵たちが私たちの塹壕に入り、あちらこちらと、女性や子供たちの隣でさえ、機関銃を向けたことでした。それに対し当然のこと、女性や子供たちは素早く逃げました。溪谷のふちにも日本兵たちは銃を構えて立っていました。それから二回目の急襲が始まった時、彼らは飛行機を目掛けて、四方八方から射撃し、その結果、攻撃は上空から機関銃射撃で撃ち返されました。これは私たちにとって予想していた焼夷弾よりももっと恐ろしい物でした。数人が浅い弾傷を負いましたが、実際に負傷者はせず、集合バラックB棟の上に数多く落とされた焼夷弾は、誰にも被害を起こしませんでした。幾人かの人たちは軽い火傷をただけでした。このようにして、更に死者はでませんでした。全財産は燃え上がり、私たちが既にアンボンで経験しなくてはならなかったことと同様なことを人々は体験したのでした。5bなど数件の家

屋は火災から逃れました。そういう訳で私自身そして他の同居人たちも、今回は自分たちのバラ（荷物）を取り出せたのです。一弾の焼夷弾は私たちの屋根に飛び抜け、私のベッドの横の近くに落ちましたが、爆発しませんでした。屋根の隅に落ちた他の一弾は燃え上がり始め、ヘアトゥさんによりぬぐい消されました。1 a, 1 b, 4 a, 4 b, 5 a, 5 b, 7 a, 7 b, 8 番の家屋や9 番（娯楽クラブ）は全てが幾分ひどい損害を受けましたが、火は点きませんでした。それで様々なアンボン出の人たちは今度は自分たちの所持品を取り出すことが出来ました。残念なことには、被害者たちは二人を除いて、全てアンボン出の人たちでしたので、私たちは又も重い犠牲を課された訳です。負傷者たちはその間、日本兵たちと警防団の婦人たちにより溪谷に運ばれました。なぜなら、そこでは診療所と地下の避難所はそのままだったからです。幸いにも、救急手当の際に治療ができるだけのオバットウ（薬）もまだありました。子供のティッスンちゃん、ベアトゥ・ブルウハーちゃん、フレディ パウル君、ダーラーさん、ファン・サンディックさんとカウマンスさん全員は重傷です。特に、ファン・サンディックさんとマフダ・ティッスンちゃんたちはひどい火腫れと傷を負いました。全てが再び安全になった後、集合バラック B が完全に焼けてしまったことが分かりました。負傷者、重病者及び軽病者全員はキャッサバ菜園へ運ばれました。ヤマジは今でも残っている病院や診療所は早かれ遅かれ破壊されるだろうと考えているからです。

爆撃機がやっと去り、もう戻って来る様子がない時に、全員が至る所の避難場から現われ、水路の向こう側にある原っぱに集まりました。水路から泳いできた大勢の人たちはずぶぬれになりました。その間に、救出されたが所有者の未だ見つからないトランクが運ばれて来て、その中から乾いた衣服がヤマジの指示により供給されました。また裁縫作業場からかなりの量の縫製済み衣服が使用できました。ヤマジは私に、衣服をちゃんと割り当てるように言いましたが、駆け回っている人たちや、衣類をもらえと思っている数百人の人たちで混乱し、それは非常に不可能な作業でした。一方で、私は分配に手を貸していますと、他方では放置されたトランクや包みから、人々は次々と衣類をひったくりました。そのような強欲な数百人の女性や子供たちに対して、抵抗することなど出来ません。そして、私がどんなに援助してくれるように叫んでも、皆はただ自分自身のことのみ考え、私の頼みを聞いてくれる人などいませんでした。

その間、人々は原っぱに詰めかけ、そこは時間が経てば経つほど一杯になり、乱を増加させました。ヤマジは負傷者を探させ、その人たちは小さな差し掛け屋根の下に置かれました。惨事が始まった時、殆ど用意できていた食事も運ばれました。その炊事場は壊されていませんでした。それから隔々から来る人たちをバラック構成に従って、整理しなければなりません。その為にヤマジはヤウストウラさんを指名し、その間彼は、沢山の衣類が盗まれたので、私に対する彼の不機嫌さを見せる為にやかましい口調を使いました。一方、私が手伝いと呼びました二人の婦人たちは彼に怒鳴られ、追い出されました。という訳で私はまた一人で集団の中に立っていました。そうこうしているうちに私は負傷者の所へ来るように更に何度も呼び出されました。私に不可能なことを要求しながら、彼自身ですら急き立たされ、動揺し

ている群集を自分の思うようにさせ、秩序を回復することができませんでした、と私はヤマジに言いました。私は彼のしつという怒りの声やほらをもうこれ以上気かけず、私が最も必要であると思うことを行ないました。暗くなる前に、全員ついに準備ができ、ヤマジは進めというプリンタ（命令）を出すことができました。殆どぼうっとし、ぐったり疲れきった女性や子供たちの流れが焼け落ちた集合バラックAのそばを通り、収容所から南西に位置する森に向かって行きました。私はその人たちと一緒に行けというプリンタ（命令）を受け、私も含め、最後の人たちがそこに着いた時は既に暗くなっていました。

フォスカウルー リムボーフ

1945年7月17日

12時15分前までの午前中は静かに時間が過ぎた。それから警報が鳴り、23機のロッキードとリベレーター¹¹⁵が飛行して来た。しばらくして、警報解除になる！！！！その後、再び警報。私たちは又もや23機の飛行機を見た！！何をしているのだろうか？あー、うれしい。ビラだ。私たちは大喜びするが、何が空を急に暗くするのだろうか？何て全てがぐすんで、不快なのだろう！！何、炎？バラック第6棟が燃えている？伝達係は集合バラックAの方へ駆け出し、集合バラック全部と養豚場を見た。『一面、火の海！！』養豚場は既に第一回の空襲で命中されたに違いない！そこに歩いている所長は伝達係を見て、ニョニャ ジャラン、クンバリ（戻りなさい！）と叫ぶ。

伝達係は自分の集合バラックへ走ると、そこでは、今飛行機が去って行ったので、誰もができるだけ多く、各々の所持品を外へ引きずり出すのに精を出している！しかし又突然、爆撃機が戻って来るのが聞こえる！伝達係は、私たちの集合バラックに火が燃え移らないだろうと皆に保証した。教会用バラックは未だ建っていた。風が反対方向に吹いていたから、防空壕の屋根には火が移らないだろう！つまり全ては、私たちの集合バラックが火災から免れるだろうという兆しなのだ。この焼夷弾投下は間違いに違いないと伝達係は確信した。彼女は連合軍に確個たる信頼を持っていたのだ。3機が戻って来て、非常に低く、ゆっくりと飛行し、絶え間なく焼夷弾を投下し、そこらじゅう火事が起こる。トイレ、付属家屋、バラックはパチパチと火の音を立て、燃えている竹は空中を飛び回る！そして伝達係自身が地面に横になった方に爆撃機がゆっくりと近づいて来る。その時、下の方に射撃の音が聞こえ、その答えでもあるかのように、第9棟の高さの所で、空中から機関銃の弾丸の雨が落ちて来る。四方八方に弾丸が落下し、その合間に、蛍光弾丸（夜間にて射撃方向を示す為に使う）が空中を横切り、それは物凄くやかましい音をたてる！。

伝達係はまるで人生の終わりであるかのように考え、弾丸の雨から逃れようという望

¹¹⁵ 米国陸軍の四発重爆撃機B-24。

みさえ一瞬も持たなかった！！　そして爆撃機が飛び過ぎると、彼女は撃たれなかったことが分る。無傷である。周りを見渡すと、全てが燃え上がっている。それから彼女は少し前に外に出しておいた所持品を引きずって、大急ぎでつぶれそうな竹の建物から逃げ走る。彼女は学校の後ろにある鉄条網の所に行って、そこに彼女の所持品を置き、もっと何かを取り出す為に、もう一度燃えているアラン アラン（茅）や竹の中を走り回る。そして煙りで窒息しないように注意し、どこに裸足の足を置くかをしっかり見なければなければならない！　彼女が二度目に鉄条網に来た時、そこで馬に乗っている所長に出会い、カリの向こう側には銃に銃剣を付けている多くの日本兵を見る！　所長は彼女に、持っている物を全て置いて行け！！と怒号する。ああ、トゥアン（所長様）。私の衣類なのです！と彼女は嘆願し、所持品をしっかりと持つ。そんなものは要らないと彼は怒鳴る。伝達係は、衣類は常に必要であると思いました。トゥアン！と言う。彼は馬の向きを変える。伝達係は歩き続けると、所長はまた馬で橋の所に走って来て、伝達係に、橋を渡り全収容所員たちが集まった溪谷に行くように駆り立てる。彼はヤウストゥラさんを怒鳴り、アンビル イニ オラン（こいつを連れて行け）と言う。それは伝達係のことだった。その後伝達係はヤウストゥラさんと修道女アントニノさんに付き添われ、雑木林の中へ行く。

後で、全所持品が沢山投げ捨てられ、ヤマジは、濡れた洋服を着ているものはここから取っても構わないと言う。乾いている洋服を着ている多く人たちも又そこから取り出す。V（ファルダーポトウ）さんはそれを止めさせることができず、この事実が後でV（ファルダーポトウ）さんがヤマジの不興を買うこととなる。今度、休みなく所長に呼ばれるのはヤウストゥラさんの番だ。全てを用意しなければならないのはヤウストゥラさん。共同炊事場に既に準備された食べ物を持って来させなくてはならないのもヤウストゥラさんだ。そういう訳で、私たちは火事の3時間後、溪谷で食事と飲料水をもらえた！　伝達係が少々後で所長と出くわすと、彼は咎めるように、ニョンニャ フォスカウル サラ（フォスカウルさんは間違っていた）！！　と言う。そして伝達係は謙虚に、はい、トゥアン。私は間違っていました！　所長様が正しいのです！！と答える。そして所長は微笑むのをじっとこらえる！！　後で彼はノーアさんに、俺は伝達係に腹を立てた。自分が悪かったと伝達係は認めたが、自分の所持品は持っているんだ！！と話す。絶えず呼び出され、溪谷から新収容所に移動することを準備しなくてはならないのはヤウストゥラさんだ！　神父は森にある応急収容所へ行く道を最初に警防団員に教えなければならない。それから、かなりの人々の群れが、各棟ごと一緒になってボスキャンプへと続く。応急収容所のバラックの棟々が焼け落ちたであろうという噂は、幸いにも本当ではないことがはっきりした！　原始的とはいえ、私たちはそこで新しい住居を見つけた。伝達係は自動的にヤウストゥラさんの下に付き、ヤウストゥラさんは一緒に前収容所に残る人を50人募集したが35人しか集められなかった。恐怖を体験した後、人々はここ（カンピリ）に残る勇気が全くなかったのだ！　患者たちはカンポン（小村落）にあるバラックに移ったので、私たちはこの病院や娯楽クラブに寝た。

シャボットウー コートウマン

1945年8月5日

7月17日に起こった私たちの収容所の全焼により変動が起きました。私たちはおよそ11時半、普通時間（ジャワ時間）に飛行機の音を聞きました。所長は警報を打ちました（常に彼が打つわけではありませんが、それは飛行機がどの方向から来るかに依りました。大体、収容所の裏側から数キロメートルにある飛行場が標的地でした）。米軍の飛行機は収容所の上空に線を引き、それを度々行ないましたが、誰もその意味を知りません。10分後、警報が解除されました。私はちょうど棟に戻ったばかりで、警報。所長の鐘の打ち方が余りに激しく、私は一瞬も待たず、直ぐに防空壕へ入りました。それは閉鎖した通路で、地面より1メートル半深く、重い幹と土で覆われていました。外ではあたかも穏やかな風が吹くように聞こえました。歩哨に立っていた誰かが、黒い物がたくさん落ちるのを見たと言すと、その後静かなバンという音（竹の破裂音）が続きました。飛行機が飛び去った時、私は頭を外に出し、門やサワ（水田）のほうへ逃げ走る人たちと収容所の周辺の煙の柱を見ました。私たちは最近ヤップンが収容所の近辺に至る所にいるのを知っていました。私の考えでは、米軍はヤップンを命中させたかったのですが、火が燃え移ったのだと思います。

私たちの集合バラック（6棟）は未だ燃えていませんでした。私は子供たちを防空壕の所に立たせ、バラン（荷物）を外に出す為に棟に走って戻りました。私の小屋の近くにある裏の原っぱのアラン アラン（茅）に火がつくだろうと気がつき、その為、寝具を覆い付き防空壕にいる子供たちの所へ持って行きました。私は数学の本（収容所には数冊のしかありませんでした）を手にして立っていたのを未だ覚えています。そして私は本を又下に置き、その代わりにお砂糖入りの缶、ロールオートなどを取り、収容所が全焼すること、子供たちの食事のことや戦争はもう長くは続かないことを考えました。私は4回行ったり来たりした後、再び防空壕に行った時、神父様は皆に、敷地より離れて、門を出るように急ぎ立てました。何故なのかはその時私には分かりませんでした。灌漑水路は水路を沿って走っていて、橋を渡り、向こう側の森に行きました。というのは暫くして再び数機の飛行機が戻って来て、集合バラックBを撃ち、燃え上げさせたからでした。陸では高射砲が始まり、飛行機は私たちの上空の近くで機銃掃射をしました。

かなり速く、全てが終了し、バレ（寝台）の上には7名の負傷者たちが森に連れて行かれました（今の時点ではその内の5人は既に死亡しました）。そして非常に驚いたのは、その後ご飯の入った籠と他の食事があったことでした。石製の全建物や炊事場はそのまま、皆は食事をする為に葉っぱを探し、その後私たちは敷地内で瓦礫の山から焦げたお皿やバケツ探し集めることを許されました。私が防空壕の中に置いたものは全て未だ残っていました。他の防空壕ではしばしば焼夷弾が地面を通してではなく、階段に沿って転がり落とされたのでした。まだ何かを所有しているということは快い感じがしました。その後はすべて本当にニッポン式でいき、整列、高官訪問、映画撮影、再び整列、そしてやっと15分離れている応急収容所

へ行くプリンタ（命令）が出ました。

所長によるファルダーポートゥさんの死刑宣告

フォスカウルー リムボーフ

1945年8月3日

彼は馬に乗って、ボスキャンプを走り、境界監視人としてV（ファルダーポートゥ）さんがヨー・Dさんと一緒に座っているのを見た。彼はボスキャンプの事務所へ走り、その二人が前収容所（カンピリ収容所）の司令所にいる彼の所に来なくてはならないと言う。彼女たちは20メートル許可地域外にいたのだ。二人が彼の所に十分早くやって来ないので、彼は彼女たちがどこにいるのかを警防団連絡網¹¹⁶に二回尋ねた！二人が来た時、ヤウストゥラさんも付いて来て、ヤマジは彼女たちに向かって気が狂ったように怒り始める。V（ファルダーポートゥ）さんに、いつも自分のやりたいようにやり、常に自分で取り決め、『オモン マニス（口達者）』だが『ハティ ブスック（悪い心の持ち主）』であると言い、彼はできる限り強く、軍刀でV（ファルダーポートゥ）さんの臀部を叩く。その時ヤウストゥラさんはいつものように二人の間に入り込むと所長は叩くのを止めたが、怒鳴り続けた。『V（ファルダーポートゥ）を射殺させる。なぜならば彼女は汚れた魂を持っており、収容所員に悪い影響を与えるからだ！収容所の外で彼女を射殺させ、彼女の魂は収容所外に残り、彼女の身体は収容所内で埋葬されるのだ！』そして彼はクーリー4人に墓穴を掘るように命令し、マンドール（人夫頭）に彼の車を持って来るように命じる。その車で彼女は収容所の外へ連れて行かれるのだ。ヤウストゥラさんは、大きな過ちでしょうと言うが、彼の答えは、その過ちに対し、その後自殺をして罪を償うだろう！！ということである。ヤウストゥラさんは彼に収容所を混乱状態にさせないで下さいと嘆願するが、彼は一步も譲らず、V（ファルダーポートゥ）は、サヤ ミンタ アンプトゥアン（お許し願います。所長様）！！と涙を流し哀願する。彼はV（ファルダーポートゥ）さんに座ることを許し、ヤウストゥラさんは最後の数分間を彼女の傍にいても良い！！との許可を与える。その間、所長は黙って、顔を青ざめ表ベランダに座る。

V（ファルダーポートゥ）さんの同居人であるGさんが呼ばれ、神父はV（ファルダーポートゥ）さんの遺言を聞かなければならない！マンドール（人夫頭）が戻って来たが、有り難く車なしだった。それからヤウストゥラさんが所長の所に来るように呼ばれ、彼女にV（ファルダーポートゥ）さんの考えは既に『清められたか』どうか？と尋ねる。はい、と彼女はきっぱりとした答えで返事をした。その後ヤウストゥラさんは更にV（ファルダーポートゥ）さんに、これからはただ精神を高めることのみに関して言うほうが好ましく、今までのように、

¹¹⁶ 様々な警防団を通じて、口頭にて知らせが伝えられる。

厄介なことは言わないほうが良い、と話さなくてはならなかった。そして彼女は立ち去るが許しを得た！ 晩になって、V（ファルダーポートゥ）さんは修道院長に、自分にとって良い教訓となり、『色々と考えさせられたからです！！』と言った。墓は掘られていたが、それは亡くなったキリスト教徒の警官の為であったと分った。

ウッカーマン — テムプラーズ

1945年8月3日

ファルダーポートゥさんは境界監視をしていたのです。これは彼女にとって恐ろしい日となりました。彼女は棺桶に片足を突っ込んだのでした。つまり彼女は20メートル境界¹¹⁷の少し外にあるカンピリの泉の見張りをし、ダウンさんと一緒にそこでおしゃべりをしていました。

ヤマジが馬に乗ってやって来て、両方の婦人たちを怒鳴りつけました。ダウンさんは罪に問われませんでした。ファルダーポートゥさんは彼の家の前で、燃えるような太陽の下に3時間立っていませんでした。彼はファルダーポートゥさんを殴り、彼女を殺したいほどまでの折檻に駆られました。彼は軍刀を抜き、それを研ぎ始めました。その間、彼は大工仕事もしたことのある牧師様に、ファルダーポートゥさんの棺を作る為に彼女の寸法を測り、直ぐに持って来るように指示しました。彼女の墓は墓地に掘られなくてはなりません。暫くすると、彼の考えでは余りにも棺に時間がかかり過ぎると怒鳴りました。劇的事件は今起こるのでした。彼の軍刀は再び研がれ、ファルダーポートゥさんは『私の頭を一打で切れるほど、彼が軍刀を鋭くすることを願います』と思いました。ファルダーポートゥさんは最後の望みを願うことが許されましたが、彼女には何も望むことなどはありませんでした。ただ彼女が最後の瞬間まで義務を果たしたことを子供たちが知ることを願うだけでした。この事件に立ち会ったヤウストウラさんはファルダーポートゥさんを弁護しましたが、少しも役に立ちませんでした。ナニングさんも弁護しましたが、所長はそれに対しても反応を示しませんでした。デン・ホントゥさんも他の方法で弁護しました。切り札として、彼女は『トゥアン、もしこれを続行されたら、収容所全員から反対を受けるでしょう。皆は貴方を憎むことでしょう。そして（強調して）ファルダーポートゥさんが亡くなられた後、彼女は毎晩、貴方が生きてる限り、幽霊になって現われるでしょう』と言いました。『俺は血を見たいのだ』と所長は答えた。『それならば牛でも畜殺すれば良いでしょう』とデン・ホントゥさんは言いました。その間牧師様はファルダーポートゥさんに『ああ、これは喜劇であるように望みますが、念のため、貴方のためにお祈りを続けます』と呟きました。神父様もそこに居られ、ファルダーポートゥさんは彼に最後の望みを述べなくてはなりませんでした。

実際に所長を笑い者にしたデン・ホントゥさんの弁護の後、彼は落ち着きを取り戻し

¹¹⁷ 誰もバラックより20メートル以上遠くへ行つてはいけない、とボスキャンプにて決められた規則。

ました。その上、東洋人は幽霊をひどく恐れているのです。彼は多分『ムタ グラップ (逆上)』し、そうなる東洋人は恐ろしいことをするものです。もし彼が即座に実行できたならば、何が起きたか私には分かりません。なぜならば彼は収容所外で彼女を殺害する為に、車を取りに行かせたからでした。しかし車は来ませんでした。疲れきり、ぐったりした様子で、彼は自分の家の中へと歩き、ファルダーポートゥさんを棺の所に立たせておきました。彼は誰かに、収容所時代を通し、ずっとファルダーポートゥさんと同居していたヘアトゥさんと呼びに行かせました。ヘアトゥさんが来た時、彼は『ファルダーポートゥの所へ行き、彼女を家に（彼女のバラックの棟）に連れて行きなさい』と言いました。ヤマジはきれいなパジャマを外に持って来させ、それを外で着ました。彼の部屋は完全に片付けられ、清掃されました。ヤマジは嫌な思いを捨て去り、新しい人生を開始するのです。遅すぎますよ、お前さん。このことに対し、そのうち勿論罰されることでしょう。ファルダーポートゥさんは後で「自分の墓」を見に行きました。それは本当に掘られたのでした。これは彼女にとって長生きと健康を意味することだと願いましょう。共に苦勞を耐え忍ぶ時期に、アンボンの人たちにとって、まさに非常に大きな支えであった相互の友情関係と援助の堅い絆は、今カンピリにも存在し続き、それは私たち女性ががんばり抜き、弱気にならない為に必要な力を与えたのでした。

コートウン

1945年8月3日

8月3日、私たちは特別な感謝を込め、疲れた頭をまたティカールチェ（小さな寝台用むしろ）の上に横たわす事ができた。全てが順調に済んだことを有り難く思う。『ヤマジは誰かをタンカップした（捕まえた）』、それは接近する災難について私が一番始めに耳にしたことだった。二人の少年たちもそれ以上何も知らなかったが、カンピリ組は直ぐにもっと気がかりな知らせを持って来た。ヤマジは本当に怒り狂い、彼のニックネームで言われているように、聞いたり見たりできないほどのものすごく怒鳴った。

罪を犯したのはファルダーポートゥさんだったが、誰も彼女が何をしたのか知らなかった。少ししてから、ヤウストゥラさんがそこに居るので、全てがうまく行くことでしょう、と伝えられた。それでミアと私は元気よくカンピリへ出かけた。アンボン小家屋の廃虚の所で私たちは未だにマンデーエン（水浴）ができる。しかし修道女用井戸¹¹⁸ 辺りでは興奮した雰囲気は漂っていた。ファルダーポートゥさんに関し全くうまく事が運んでいないことが分かった。ヤウストゥラさんの懇願にもかかわらず、皆がぞっとしたことには、所長はファルダーポートゥさんを打ち首に処するつもりだった。彼の刀は血のにおいがすると彼はどなり、怒って外に座り、刀を研いた。ファルダーポートゥさんは司令所の前で、外見上落ち着いて太陽の下に立

¹¹⁸ 修道女が使用するための収容所敷地内にある井戸。

っていた。ミアと私はやはり水浴することに決めたが、大急ぎでした。私たちは急いで、その後、覗き見をする為に司令所への道を通らずにはいかなかった。そしてファルダーポルトゥさんが本当に、太陽の下で静かに立っているのを見た。司令所からは何も聞こえなかった。私たちは数分間眺め続け、今彼女は何を考えているのだろうかと思った。井戸に戻った時、牧師様が頭なしの寸法で棺をつくる命令を受けたことを聞いた。牧師様はファルダーポルトゥさんの所に話しに行き、棺がどのくらいの大きさでなくてはならないかを気づかれないように測った。彼はファルダーポルトゥさんには何も言わなかった。ヤウストゥラさんはまだ司令所にいて、ただ話し続け、所長の前でひざまずきさえた。今では誰もがファルダーポルトゥさんはどこかで見張り番をしていて、そこから彼女はキャッサバ菜園を見ることができ、そこは禁止地域であったことを知っていた。全員たいへん悲観的で、それは特にファルダーポルトゥさんが本当にヤマジのお気に入りのタイプではなかったからだ。全ての望みは更にヤウストゥラさんへと集中され、彼女は適切な言葉を見つける為に、沢山のお祈りが天国に送り出されるに違いないと私は思った。ボスカンプではただ緊張感が感じられた。声を押さえて話し、何をする訳でもなくぶらぶらと歩き回り、ただカンピリからの通知を待つだけだった。ついに救いの知らせが来た。所長は説得され、それは中止された。

ファルダーポルトゥ

1945年8月3日

私がかつて境界警備に任命しましたヘムシングさんは、今朝早く私を泉の近くに連れて行きました。その泉には誰も来てはならず、常に違反を防ぐ為に、実際に監視されなくてはなりません。この泉を公開しないことはヤマジのサディスト的な苛め^{いじ}でもあるのです。私たちは入浴や洗濯のために気持ち良く水を使用することができることでしょう。しかし彼の考えでは、お水を取りに行く為に、女性たちがバラックから約40メートル離れた近い所に行くより、燃えつくような太陽の下で10分間かけて、水を汲みに行く方が良いというのです。人々がそこへ行くとするのは不思議ではありません。それに対し、わたしはちょっとやりたい事があり、ただじっと座っていたくはなかったのです。責任者から本当にできる限り離れる為にこの仕事を頼みました。私は泉の近くの自分の持ち場に来ました。その時、その近くで見張り番であったダウンさんが私を探しに来ました。それは数日前に私の所に届けられた彼女に対する非難に関し、自己弁護を私に聞かせる為でしたが、その非難には根拠が無いことを私は既に知っていました。彼女が丁度私の所に立ったその時、ヤマジが馬に乗って走って来ました。私たちは挨拶をすると、彼は馬を止め、私たちが何をしているのか聞きました。私は泉を監視する為にこの場所を割り当てられましたと答えました。彼は腹を立てて、私がバラックより余りにも遠くにいると言って、立ち去りました。その後直ぐに、私はダウンさんと一緒に下に（カンピリ収容所）行かなければならないと言う命令が出ました。彼は小家屋Aでひどく怒っていたので、

皆は私たちが下に行かなければならないことを聞いた時、私たち両方の事をたいへん心配しました。私たちがそこに着いた時、その次に起こったことは余りにも恐ろしかったので、今それについて書く気分にはなりません。それは私の記憶に刻み込まれ、ただ私が言えることは、今日、私にとって神は困難の際の力強い援助であったということです。これを切り抜ける為に、神は私に心の安らぎと力を下さったのでした。

1945年7月17日の爆撃後の収容所生活 ― カンピリ、ボスカンプ

日記からの抜粋

コートウン

1945年7月17日

ベルが鳴る。「点呼、点呼」と呼び寄せられ、あらゆるものを持って、牛の牧草地へと急ぐ。そこで私たち7人は、まずお釜が空になるまで食べる。こげ臭い味がするけれど、喉の渇きをいやす。本当に、もう誰も飲みものを持っていない。お母さんに手助けされたファン・ダイクさんは、バラック第12棟を点呼する。収容所全部が検査されるまでには、まだかなり時間がかかる。それから私は初めてヤマジを見る。号令がかけられ、(バラック第1棟の)修道女たちがヤマジの後について行き、そうして足を引きずり、のろのろと歩く人たちの長い長い列が、その後続く。どこに行くのかしら？

私たちは自分たちの荷物を分けた。フリイダ、ルウロフそしてカーラは、各自リュックサック2つ。お母さんとシインは大小のたらいを一緒に持ち、その中にさらにリュックサック、皿、カップ、スプーン、ローヤン(銅のフライパン)、釜、そしてやかんを入れた。全てが黒っぽくなり、さび止めのエナメルが剥がれ、汚れていた。エディと私は、それぞれ旅行かばんを持った。修道女たちのそばには、カワットゥ(鉄条網)が開かれ、私たちは収容所から出る。一種類の苗のある水田を超えて、森林へと目がけた。時々、人々の群れは動かず立っている。森林の外れでは、地面が1メートル以上も盛り上がっている。左側には、8人の人たちが両手を広げて、囲められるほど、非常に大きな木がそびえている。本当に森の巨大植物で、右側には、杭の上に建てられた小さなバラックがある。ドアはなく、出入り口があるだけ。小さなバラックはとても低く、狭く、私たちの全焼したバラックのだいたい半分の大きさである。そこらじゅうに修道女が寄り集まる。明らかに、バラック第1棟だ。後側にはヴィスおばさんが立っていて、私は「ヴィスおばさん、大丈夫ですか？」と叫ぶ。「大丈夫ですよ。おかげさまで」とおばさんはうなずく。「私たちはここに入らなければならないの？」ミアの頭が入り口に見えて、「そうよ。だけどベッドがないわ。全員、地面に隣合わせで、横になるのよ」と言う。全部のバラック？それは考えられない。あまりにも狭すぎると私は思う。ヴィスおばさんは「もう、私にもわかりません」と顔をしかめる。そうしている間にも、行列は歩き続け、私はまた自分のグループに戻るために急ぐ。バラック第1棟の後ろ側から数メートルの所に、バラック第2棟がある。このようにして、バラックが続いていく。しかしバラック12棟はもう存在しない。バラックの左側には数軒の小家屋しょうかおくがあり、そのうちの2つはバラック第12棟用である。それらは、バラックよりもずうっと狭いので、皆は文句を言っている。小さな家々は、2つの部分からできている。正方形の部分は杭の上に建てられ、約1.20メ

ートルの低い^{さく}柵のある表ベランダがあり、その上には、全て屋根が付いている。ファン・ダイクさんはバラックの後半部にいる人たちとバラックに入って、お母さんはファン・ダイクさんの家族の代わりに、前半部にいる人たち、それに2、3人の人たちと一緒にバラックに行く。バラックの中では、場所についての喧嘩が起る。すると突然、年上の男の子たちについての口論が始まる。そこでお母さんは彼らが土間に寝るようにと決める。ペッドウモースさんは、狂犬が出たり入ったりできるのが理由で拒否し、最終的にはこのように決定される。夜、入り口の前には、旅行かばんを2つ重ねて置き、入り口には、エディを隣にしてお母さんの寝る場所をつくる。他の男の子たちは何処に寝てもかまわない。土間へと続く^{ねどこ}寝床部分の下にある出入り口には、当分、たらい、バケツ、そしてそのようなものでバリケードをつくる。そのうちケムプお婆さんは寝床部分の下にあるトゥンパット（場所）を整理し、そこで寝るのだと言う。私には理想的に見えるが、お母さんは許してくれない。たぶん私の頭が治ったら良いのだろう。ファン・ダイクさんのところでも同様な問題があり、そこでも私たちと同じように決められる。中では、身動きなどできない。皆は、物を直接手元に置きたく、それ以外のものはそこらじゅうに吊るされたり、^{もやげた}母屋桁¹¹⁹に置かれた。シン、エディ、そしてフリィダと一緒に、私は水を汲みに行き、直にお皿、カップやスプーンを少しきれいに磨く。なぜなら、食べ物があるであろうと噂されているからだ。そしてそれがまた本当らしいのだ。うれしい。私たちはものすごくおなかが空いている。あの密生した森の中では、ランプがないので早く真っ暗になり、もう7時には、皆、自分たちの床にぎゅう詰めになって横になる。私は外の暗闇でちょっと着替えをし、やっと汚れて血のついた服を脱ぐ。夜は、永遠に続く。眠る事など私にはできない。たくさんの人たちが周りにいて、私の頭はかゆくなる。それからまた誰かがガタガタと騒がしい音を立て、痛いと呼び声をだして、外に出なくてはならない。私はケムプお婆さんがうらやましい。突然、うなる音がして、全員、素早くまっすぐに座る。しかしエディの声がして、「自動車だよ」と静かに彼は言うと、皆は横になる。私は大人も子供も、すぐさまそれが自動車であると認めたことにびっくりする。エディ自身はおだやかそのもので、本当に多くのパニック状態を救ったのだ。ついに、私はもう辛抱できなくなり、ゲデック（竹で編まれた仕切り）に寄りかかって座る。こうすれば、私は時々、少しだけでも眠ることができる。

ファルダーポートゥ

1945年7月17日

それは、応急収容所で、パレでの惨事後、既に〔1944年11月〕ヤマジによって建てられたものでした。秘密であったこれらの設備は（事情に通じた数人以外、あとは誰も知りませんでした）、ついに今は、感謝すべきものとなったのです。そこには、10棟の大きなバラック

¹¹⁹ 棟および軒桁に平行して垂木をうける横木、家の屋根を支えうける為、組み立てた骨組み。

と36棟の小さなバラックが杭の上に建っていました。床は地面から約60cmの所にあり、竹の^{こま}舞^{まい}¹²⁰で造られ、そこには広い隙間がありました。屋根はアタップ（ヤシの葉の屋根ぶき）できていて、床は同時に寝る場所でもありました。最も大きなバラックには96名、半バラックには48名、小家屋には35名が収容されました。つまり、一人につき平均0.72平方メートル（1.80m x 0.40m）の広さであるということでした。最初の晩、眠りにつけなかったのは不思議な事ではありません。恐ろしさ。そして堅い、寒い寝場所。しかし一番ひどかったのは、真夜中、どしゃ降りになり、屋根の隙間から雨が流れ込み、誰一人として乾いた場所がなかったことでした。食事は暗闇の中で配られました。私が手伝ったことは、身をかがめながら食べ物を分配する事で、その後私の背中、まるで骨が折れたようになりました。しかし食べるものがあるのですから、非常に有り難いという気持ちにはなりました。

そのうち、グダン（倉庫）から、かなり大量のバラン（品物）が出てきて、それらは、焼けていなかったのを外に持ち出しました。まだ物を運ぶことのできる人たち全員で、一部は夕方に、そして大部分は翌日、全て上に（ボスカンプ）持って行きました。非常に不便だったのは、トイレが全然なかった事で、人々は全てバラックのすぐ近くで用を足なければなりません。最近あった狂犬病事件後、誰も特に晩には適した場所を探すために、遠くへ行くブラニ（勇気のある）者はいませんでした。その結果は、もちろんの事、耐えられない臭いが漂い、不潔な汚物を踏んだり、又は警報の際、その上に横になるという『驚き』が至る所に起こりました。

フォスカウルー リムボーフ

1945年7月18日

所長は、ヤウストウラさんとV（ファルダーポトウ）さん呼び、ヤウストウラさんは総括リーダーに、V（ファルダーポトウ）さんはボスカンプのリーダーに任命され、伝達係はやはりヤウストウラさんの下に残った！ 廃虚にもかかわらず、できる限り、全て、特に食事は規則的に進行されなくてはならず、そしてそれは順調に進んだ。午後にはマカッサルから、サロン¹²¹、ランプ、ろうそく、下着、クッキーがトラックに積まれて来た。少し後に高官が訪れ、彼らも子供たちにクッキーを持って来た。カメラマンはお偉方の後について、私たちの悲惨さを映画化した！！

¹²⁰ 屋根や壁の下地に組みわたす竹や木。

¹²¹ 腰に巻くスカートのような衣類。

ファルダールポルトウ

1945年7月18日

今日は、多くの人たちが色々な場所で、同じような『驚き』に出会いました。すなわち排出物を踏んでしまう事でした。私はその報告をする為に、ヤマジのところに行きましたが、たいした反応はありませんでした。彼はこの事をあまり重要でないと考えているようでした。第一に、また最も重要であると彼が考慮することは、食料と衣類で、これに関しては、幸いにも力が尽くされています。平地のまん中では、女性たちは様々なバラックの炊事場で、あらゆる物を燃やし、セメントの釜戸の上で料理をし、その食べ物をたらいやバケツに入れて、ここに引きずって来ます。それらのたらいやバケツは衣服を洗ったり、子供たちを水浴びさせたりという、他の用途にも使用しなくてはなりません。ところで、色々な種類のバラン（品物）の貯えは、素晴らしいもので、衣服用の大量の綿、ティカール（寝台用むしろ）、毛布用の袋、さらにビスケツや飴も手に入ります。この最後の品物に関しては、今日の午後、「高官」がカメラと映画、他撮影用カメラを持参したレポーターを連れて来た時に、宣伝しなくてはなりません。突然ヤマジと私は、これらの飴を、切に欲しがる子供たちの間に立って配らなければなりません。そういうことは私は全く嫌いなのです。私はカメラマンに何度も背を向けて、ヤマジからできる限り遠くに離れていました。私はあの男と一緒に写真に載るのは、いやだからでした。多くの女性たちがインタビューされ、あの連中は、絶えず同じ質問を繰り返すのです。「こういう出来事をどう思いますか？ この結果を引き起こしたのは、あなた方の味方でしょう？」幸いにも、たいていの人たちは、既に長い間監禁されていて、把握できませんと賢明に答えました。多くの人たちはこの数日に関し、本当に心から失望し、皆は何故これが起らなくてはならなかったのかと何度も自問します。惨事のあった日に私たちは、世界の出来事の状況に関して、さらに確実性を持ち、様々なビラにより、オランダは既に解放され、ヨーロッパでは5月7日より平和であるという事実を、私たちは知っています。このことは、あらゆる悲しさの中で、確かに喜ぶべきことでした。

昨日、病室と診療所は炎のえじきとなり焼け崩れ、今はバラン（荷物）と共に全ての病人、そして診療所からの病人も、ジフテリア病棟へ連れて行かれ、ジフテリア患者は水路の向こう側にある数棟の小家屋に運ばれました。まだ全焼しなかったグダン（倉庫）から出された全てのバラン（品物）は、大部分カスピタウン（キャッサバ菜園）やこの収容所に移動されました。それを引っぱるのはものすごくたいへんでしたが、それだけの価値がありました。狂犬に噛まれたネリィ・ファレットさんは、病院に運ばれました。皆、最悪の事態を恐れています。

コートウン

1945年7月18日

ついに、起床ラッパ、皆は直ぐに全力で活動。少しすると、勤務のクパラス（責任者たち）、それからバラック主任たちが呼ばれ、彼女たちは山ほどの命令と連絡事項を持って戻って来る。私たちは当分の間、1日2回だけ食事がもらえるだろうという連絡だ。今日は養豚場の豚肉を食べるので、お腹は空かないだろう。運搬作業班、共同炊事場係、皆が来るようにと命令された。12才以上の男の子は神父様と一緒に、何百ぴきもの死んだ豚を片づけなければならなかった。耕作班はクテラ芋（キャッサバ）を掘り出す。児童たちは先生の指導の下で、収容所のアタップ（ヤシの葉の屋根ぶき）と竹を払いのける。大勢の人たちが深い切り傷を負い、足にはとげが刺さった。

用を足すには、森林のずっと奥へ行くようにという緊急指示があった。なぜならトイレがないために、藪の中を皆があちこちで用を足し、狂犬またはヤップン（日本兵）に対する恐怖のため、あまり遠くには行かないからだ。昨日判った事には、狂犬とヤップンは近くにいたらしい。私が耕作班に行くと、ファン・d・メイハートさんは私を「家」に戻させようとする。彼女は私がもう一度お医者さんに行って欲しい言う。私は「家」に帰り、私たちのリュックサックを整理するためにお母さんの手伝いをする。私は日記を下の方へと押し込む。何も取り出せなかった人たちを助ける為に、洋服を渡すよう依頼がある。つまり、私たちの惨めな、数少ない衣服からいくつかあげる訳だ。私の持っている衣服の全ては、青いスーツ3着、HBS（高等市民学校）の古い運動ズボン、ブラウス、タオル、パンツ3枚、ブラジャー3つ、生理用ナプキン3つとハンカチ6枚（誕生日の贈り物）だった。それから、私はローフマンさんのためにバケツに水を汲みに行く。帰りに、ボスカンプ入り口のそばで診療が行われているのを見て、お母さんと私は直にそこへ行く。私たちの前には、ティルマンさんとフレティさんがいる。ティルマンさんが犬に噛まれた箇所は、とてもひどい傷である。彼女の前腕は噛みちぎられて、そこらじゅう膿んでいる。私はフレティさんに、膿んでいることは、もしかしたら良いことなのかもしれないと言って、元気づけることしかできない。それから私たちの番になる。私の傷はだいぶ良くなったので、お湯で髪を洗っても良い。あー、素晴らしい！ しばらくして私は水を沸かしてくれるかどうか、シンに聞くためにカンピリへ駆け出す。

その間に、収容所はヤップンに荒らしまわされる。お偉方さん、報道陣、カメラマンとあらゆる連中が歩きまわっている。あちこち写真を撮り、時々誰かに質問をしている。私たちはできる限り、日本人から避けるように最善を尽くすが、いつもうまくはいかない。子供たちはヤップンからすっぱいあめ玉をもらう。その合間に、時々警報が鳴り、パニック状態が起こる。湿った森の地面で、数百人の人たちが裸足で立てる鈍い音は、本当にぞっとするように響く。全員がどんなに緊張しているか分かるのは、警報がない時でも、誰かが走りだすと、収容所の半分が、素早く逃げ出すからだ。それから、駆け出し禁止、さもなければ、厳罰を受けるという「厳しい命令」が出る。これは子供たちにも当てはまる。本当の空襲警報の際には、で

きるだけ上空から目に付かれないように、全員ただちに身動きせずに、横にならなければならない。この収容所がまた爆撃されると考えてもみてください！ しかし命令はうまくはいかない。にせの警報があるたびに、皆はヒステリックになり、森の奥深くへと走る。その上、又たくさんの大便を踏みつけたり、その上に横になったりという災難に出合う。そうすると命令はもっと厳しくなるのだ。

豚肉の入った食事は本当においしい。食事の後、私たちはもう一度何かを探し出す為にカンピリに行く。私たちはまるで、ばた屋のようである。大型トランクから銀のナイフ、フォークとスプーンを取り出す。鉛がナイフの握りから溶けて流れ、スプーンとフォークにまた固まる。残りものは全て腐り、火で焼かれてしまった。私たちは灰の中から、使えるものなら何でも探す。ボタン、ヘアピン、安全ピン、黒こげになったかたまりの入った砂糖の缶、ビーズ、十字架、ポケットナイフの刃、まっ黒なハサミ、数個の煉瓦、つまりなんでも必要であるものとして扱い、たらいやバケツに入れ、あとでボスカンプへ引きずって行く。

午後には、ティヌク・プルッフちゃん¹²² が埋葬される。担架にいた女の子だ。他の人たちでは、カウマンズさん、フレディ・パウル君、ポップ・ダーラーさん、そしてファン・サンディックさんがマカッサルへ運ばれた。この人たちは全員、容態が悪い。カウマンズさんは足を切断しなければならないという。シィンは共同炊事場から、お湯を水差しに半分ほど入れて持って来て、私はやっとのことで、髪を洗うことができる。この上もない幸福！ そのあと私は、本当に違った人になったような気がする。その日しばらくしてから、お皿、バケツ、そして衣類が分配される。それらは私たちには必要ではない。

お水を汲むのもまた災難である。全てカンピリから持って来なくてはならず、全部のポンプが壊れている。修道女用井戸のポンプはまだ大丈夫だ。マリノ用井戸のポンプも使えるが、さらにずっと遠くへ歩くのだ。ともかく長い間、小さなバケツにお水をもらうために列に並ぶ。男の子たちは豚の埋葬作業から、くたくたになって戻って来る。私たちはとても馬鹿げたことに気がつく。もう、誰も歯ブラシを持っていないし、櫛くしもないのだ。エディは何か解決策を見つける。小さな竹に、数本の魚用のフォークを縛るのだ！ とても大きいけど、髪をとかすことができる！ さらに私たちはめいめい、余分に一人分の食器一揃いをもらい、各自のリュックサックに詰め込む。

ヤウストゥラ

1945年7月

就寝する前に、私は濡れた収容所の服の代わりに、頂いた衣服に着替えました。朝起きた時、私はカーキ色のズボンが、本来は白いズボンであったことに気づきました。それは油のしみ

¹²² 当時、約6歳。

で、汚れた色になってしまったのでした。私は夜中、そのズボンは何の気なしに、自分の素肌に身につけたと考えると少々不快に感じました。幸いにも何も起きませんでした。シャツは非常にきれいでしたので、かなりの間、衣服として着ることができました。

その朝、私たちがヤマジのために最初にやらなければならなかった事は、全員がどこに居るのかという報告書を作成することで、大変な仕事でした。愕然としたことに、人数の合計があっていませんでした。1名不足でした。それは誰なのでしょうか？そして何処に居るのでしょうか？長い間探した後、その人はKN I L（蘭印軍）軍人の現地の妻であったことが分かりました。しかし私はヤマジに行方不明者に関する報告をする前に「何々さん」はどこにいたのか調べさせました。安心したことに、彼女は病人たちの中に混ざってしまったことが分かりました。彼女はカンポン（小部落）に設備された病院にいました。私たちは彼女を連れ戻し、彼女が本来所属するグループのいる応急収容所に連れて来ました。

収容所の運営が再び開始されました。第一に、食事や飲料水を用意しなければなりません。第二に取り出された物、そして、^{ざんごう}塹壕や^{がれき}瓦礫の山から出て来た物も集めなくてはなりません。共同炊事場、そしていわゆる野菜倉庫もまた災難から免れました。炊事班は直に仕事に取り掛かることができました。

マカッサルからカンピリに連れて来られた6人のいわゆる「悪いこむすめたち¹²³」は飲料水の世話をする事を申し出ました。彼女たちは全焼したバラック第5棟と第6棟の食堂に落ち着き、そこで、かゆ用ドラムかんに飲料水を入れて煮ました。彼女たちは自分たちで水を水路から、そして燃料に必要なものを^{がれき}瓦礫の山から運んで来ました。飲料水を必要な人は誰でも、そこで手に入れることができました。これは素晴らしく順調に運びました。私は何も気にかける必要はありませんでした。食事はたらいやブリキ缶に入れて、応急収容所へ運ばなくてはなりません。そこは、共同炊事場から歩いて15分の所にありました。

部分的に惨事を免れた診療所に居住した3人の男性と、前収容所¹²⁴で働いていた女性たちは、共同炊事場で食べ物を受け取りました。私たちはいつものように列に並んで、既に分配されたほうろく引きのお皿に、ご飯を一杯よそって頂きました。それから厄介なことが生じました。3人の男性が皿を手にし、むっとした顔をしながら、私のところに来て、食事が十分でないと言いました。爆撃の前に、彼らは修道女の取り持ちで、診療所でいつも食事を受けていました。私は彼女たちがこの男性たちを、かなり良く世話をしたのだと思いました。さて、どのようにこの問題を解決すれば良いのでしょうか？名案が浮かびました！彼らは食事分配の際、列の前に立ち、自分たちの分を受け取った後、また列の後ろに続けば、女の人たちの2倍得られる訳です。当然のことながら、これは女性たちに、直には受け入れられませんでした。私は次のように説明しました。「何人で私たちは貯水槽の水をポンプで汲み上げますか？」その答えが出されました。「6人です」。給水は6人の女性が1時間、2人ずつ吸い上げポンプ

¹²³ 慰安婦として働いた人たち。

¹²⁴ カンピリ収容所のこと。

を100回押し上げ、これにより水は、古い井戸の一つから給水塔に上げられると決められ、それらは2つの病室と司令所にも接続されていました。私の2番目の質問は「男性なら何人でこれを行ないますか？」今度の答えは「3人です」。そこで私は続けて「男性は私たちの2倍もの腕力があるのです。ですから、ご飯も2倍必要なのです」と言いました。

今日も、救助品がマカッサルから来ました。衣類の中には、記章のない緑色の軍服がありました。ヤマジによると、私はここでもまた収容所リーダーということなので、私はその緑色の制服を受け取りました。最初の数日間、それが思い違いの種となりました。数人の人たちは、私が来るのを見ると、立ち去りました。つまりその人たちは、日本人が、かぎまわっているのだと思ったのでした。「日本の高官」も訪ねて来ます。マカッサルの所長のオスキ(?)s海軍大將は、荒廢の点検に来ました。彼はできるだけ早く、収容所が再建される事を約束しました。第一日目にも、爆撃でおよそ400匹の豚が死んで、その死骸はマカッサルに運搬されました。これは必要なことでした。なぜならば、養豚場の上に、かなりの数の肉食鳥が輪になって飛んでいたからでした。それにその間、強烈な悪臭が収容所全体に漂いました。

第二日目の晩あたりに、フットゥブルトゥ先生は、私の所に来て、重傷者たちを満足のように手当てをする見込みがないと言いました。彼女は私に、これらの患者たちが手術を受けられるであろうマカッサルへ、移られるかどうか尋ねました。私はヤマジに彼女の依頼を伝えると、彼はそれに対し、不意にかつとなりました。彼は私に向かって「日本の医者たちが救助を申し出た時、それを丁重に断わったではないか。今度は自分たちでやるしかないのだ！」とどなりつけました。私は意気消沈して立っていました。ヤマジとマルセイユ先生が、日本人たちと一緒に車の横にいたのを私は見ましたが、これがつまり、その援助を断わった時だったのでした。私はいつものように、ただ話しまくり始めました。これには、誤解があるのだと説明しようと私は努力したのです。負傷者が、日本の医師たちに治療されることを、私は完全に信頼していますと言いました。やっとのことでヤマジは、なんとか落ち着き、私はフットゥブルトゥ先生を呼ばなければなりませんでした。なぜなら、ヤマジは彼女からも、数人の患者は殆ど回復の見込みがないという事を確認したかったからでした。私たちは2人で、できるだけ早く助けを連れて来て下さいと嘆願しました。誤解のために、日本の医師たちの救助を直ちに受け入れなかったという事実に関し、私たちが心から陳謝している事を、彼は医師たちに伝えなくてはなりませんでした。ヤマジは私たちが頼んだことを行ない、負傷者たちはできるだけ早くマカッサルへと移動されました。

フォスカールー リムボーフ

1945年7月19日

11時に警報。「遅いぞ、手のあいている者はカーキー色の服をしっかりとって来い」と大声で呼ばれる。伝達係をはじめ、言われた通りにする人たちが犠牲者となる。なぜならば、彼女

たちが外に出て来る時、飛行機はすぐ頭上において、彼女たちが病院の隣の防空壕に突進するには、わずかな時間しかなかった。防空壕は、常に的となり得る病院に、『接近しすぎている』と警告されていた！ 防空壕に座っていると、私たちの隣にある病院が、確かに『標的』であり、爆撃されるであろうということに気づく。ヤウストウラさん、モンティさん、そして伝達係は、まるで墓穴に座っているようである。3度の連続短撃で、襲撃ごとに、床が揺れ、モルタルやセメントのかたまりが落ちて来る！！ そうして、3度目の襲撃の後、ひとつの出口がボタンと閉まり、伝達係は他の2人に「私は行きます！！」と言った。ヤウストウラさんは、「何が最良であるかについては、自分自身で判断しましょう」と答える。そして彼女は『私はここに残ります』と決心を固くして言い足す！ モンティさんと伝達係は焼き払われたバラック第6棟を通り、鉄条網へと走り、その下を腹ばいになって進む。アラン アラン（茅）に横になろうとするや否や、飛行機が再度やって来て、機銃掃射し飛行機はまた戻って来ると、さらに機関銃で打ちまくる！ やっと、飛行機が飛び去り、モンティさんと伝達係は互いに顔を見合わせて、自分たちがまだ生き残っていることに驚く！！！！

しばらくして全てが落ち着くと、二人はヤウストウラさんが防空壕のそばを通り、「誰か伝達係を見ませんでしたか？ 誰かフォスカウルさんを見ませんでしたか？」と尋ねているのを耳にする。彼女たちが現れると、ヤウストウラさんは、全員何をしても直ちに、ボスキャンプへ行かなければならないと伝える！ そこに着いた時、伝達係は爆撃後の病院がどうなっているか、ちょっと見に行けるだろうと思いつく。全てが破壊され、伝達係の持ち物があつた前方の一部だけが、（彼女はちょうどその日の朝に、病院の後方から前方部へそれを移動したばかりだった）まだ残っていた。そして、彼女は自分の持ち物の一部を取り戻すことができ、たいへん幸せだった。それから私たちは娯楽クラブで食事をし、その日のうちに、学校の建物に寝ても良いことを聞いて嬉しく思う！ 私たち8人は教室で、竹製の長椅子とテーブルの上に横になる。

コートウン

1945年7月19日

カンピリがまた爆撃された！ 今度は本物の爆弾だった。全部の家屋、病院そして共同炊事場は倒れている。司令部（を爆撃しなかったあのばかなパイロットたち！！）、診療所と裁縫作業場はまだ建っている。さあ初めから話しましょう。今晚は雨が降った。どしゃ降りの雨だった。男の子たちはすぐに、雨を受ける為に、全部のバケツ、たらい、そしてローヤン（銅張り鉄板）を屋根の下に置いた。これで今日は、多くの引きずり作業をしなくて済む。しかし、急にケンプおばさんが不平を言い始めた。彼女のタウンパット（場所）に水が流れ、移動しなければならなかった。少ししてから、男の子たちがぶつぶつ言い始めた。水が土間に流れてきた。困った。どうしよう！ 男の子たちはケンプおばさん、シン、エル・ミュールニッケルさん、

イヌク・ペッドゥモースさんと一緒に外に出て、暗闇の中で、パチョルス（鋏）を2本と竹を手にして、スロツカン（下水溝）を掘り、土を堤のように「家」の周りに造った。それから又雨が降った。雨できれいになった時（それを調べることはできなかったけれど！）、最初に、女の子たちが（ケンプおばさんの陽気さ）、その後、男の子が着替えをした。朝になって、私たちは全てをもう一度、掘り下げ、積み上げた。私たちはもう雨水に悩まされないだろう。

今日も、食事は2回だけ。私はクテラ芋（キャッサバ）を掘りに行く。エディはまた豚を埋めなければならない。焼け落ちた養豚場の上には、大きな黒い鳥たちが輪を描き、群れをなして飛んでいる。午後になると、突然警報が鳴り、私たちはまるで気が狂ったように森の中へと走る。偶然にも、私たちは7人で「家」に居た。ローフマンさんは私たちの所にいる。飛行機が低く飛んで来る。何機飛んでいるのか見ることはできない。子供たちが泣き出す。私たちは怯える。空気を通して、何かがピューピューと音をたてる。次の瞬間には、轟音が続く。爆弾だ！ 地面が揺れ動く。また爆弾が落ちる。カンピリだと思うが、はっきりしない。数人の人たちは飛び上って、逃げ出したいのだが、しっかりと捕まえられる。静かに横になりなさい！ 飛行機に私たちが見られないようにしなさい！ 私はただ祈るだけ。収容所にいる人たちの為に、また新たな犠牲者がでないように。私たち全員の、そして私自身の悲しみを表し、平和を祈ることはもう既に十分すぎるのではないのか。ローフマンさんは私の手の上に彼女の手を合わせる。彼女は私にうなずいて、目を閉じる。私は少々きまりが悪かったが、ただ祈り続ける。まだ、数個の爆弾が落ちる。私たちは破片から避けるように、できる限り平らに伏せたまましている。それから静けさ、しばらくして『安全』の合図がでる。まだ身震いをしながら、私たちはリュックサックを背負って戻る。私は様子を見るために、森の外れの方へと駆け出す。やはり、家々は全て粉々。さらに驚いたのは、様々な人たちがカンピリから戻って来たことだ。炊事場の近くにいた共同炊事場の人々は、ひどい恐怖に耐えた。そこらじゅうが揺れ、もうもうとした埃が防空壕の中に吹き込み、そのため窒息しそうになった。しかしけがをした人はいなかった！ それからまた数十人のヤップンが訪れ写真を撮る。

午後になって、ミアが小さな浴室とトイレを見つけたと、伝えに来る。後者は非常に重要である。なぜなら爆撃があつて以来、私はトイレに行かなかったからだ。森の中に行つて、何かキーキーという音を聞くと、もうその必要はなくなるのだ。只、前収容所にはトイレがある。私たちは小さいくらいと彼女たちのバケツを持ち、修道女用の井戸からポンプでいっぱい水を汲む。それから墓地を通り、崩壊したアンボンの小家屋へ行く。もちろんの事、私たちは建物の残骸を片づけなければならないが、そこには本当のトイレがあり、もっと向こうには小さな浴室がある。安全の為に、私たちは初めに、どこに覆い付き防空壕があるのかを探す。飛行機が来るかどうか、もう一度良く耳を澄まして、まるで野ウサギのように素早く水浴した。なんて気持ちが良いのだろう！ それでもまた服を着ると、私たちはほっとする。戻って来たら、雑巾で生理用ナプキンを作つて分けた。これは余分な贅沢品ではない！

夕方、エディは食事ができない。彼は食べ物の匂いを嗅ぐと、吐かなくてはならない。水気なしの米を少し食べただけで、彼は後で口から出してしまふ。これは、あの汚い豚の埋葬

のせいである！ 私はちょうど7月17日の爆撃中、ビラもまかれたことを耳にする。それには次のように書かれてあった。

朗報

オランダ東インドに居る日本軍は、母国より中断されている。オランダ政府はすでにタラカンに引き返した。またニューギニア、モロタイも同様である。連合国の軍隊は北ボルネオにあるブロネイ及びラブハンを奪還した。日本より560キロメートルに位置する沖縄に在する第7軍隊は、征服される事ができるであろう。北ギニア、フィリッピン、ビルマに基地する日本軍は、既に攻略された。日本にいる日本人自身は、連合軍の飛行機により、襲撃される悲惨さを毎日体験している。ドイツが降伏したので、日本は何も期待はできない。連合軍の勝利は確定しているのである。

1945年7月17日

素晴らしいことではないですか？

ファルダールポルトゥ

1945年7月19日

今朝、警報が鳴り、防空壕が全然ない為に、ここで怯えている群衆は、茂みの間に、隠れ場を探さなければなりません。接近する飛行機に対する大人や子どもの恐れを見ること、それなのにそれに対してどうする事もできないことは、つらいものでした。人々は涙を流し、祈りました。ある人たちはまるで頭がおかしくなったようでした。その間に、飛行機はもっと近くにきて、前収容所に30弾ほどの爆弾を落としました。

今度は、高性能爆弾で、ものすごい騒音を立て落下し、病院、共同炊事場、グダン（倉庫）そして数軒の家をばらばらに壊し、火をつけました。そこで働いていた女性たちは、有蓋防空壕に逃れました。中心部より離れていた所にいた人たちは、塹壕ざんごうに隠れ場を探さなければなりません。運よく、誰も不幸に見舞われませんでした。森の中で、数人の子供たちが砲弾の破片に触れ、足に傷を負い、他の子供たちは額にかすり傷を負いました。更に、他の人たちは無傷のままでしたが、多数の人たちはあの「汚れ」に覆われて、起き上がりました。それに水はというと、ここから徒歩で10分の所にあるのです！ ひとつとして使える井戸がなく、一滴の水の為に、前収容所に行かなくてはなりません。

爆撃の直後、ヤマジがここに来て、隠れ場を探す際に、人々がバラックより、あまり

にも遠くに走り去ったことに気づきました。それから、おびただしいわめき声が続き、彼は、誰もバラックより20メートル以上遠くへ行ってはいけない、という命令を下しました。私は、誰も20メートル以上の所に行ってはならないことを注意する女性を指名しました。燃え易いバラックの近くなので、落ち着かないし、これで恐怖がまた増すことでしょう。その上、少し遠い場所に行けば、あちらこちらに、小さい溪谷がいくつかあり、自然にできた塹壕と掘削された塹壕があるのです。一方こういうものは、バラックの辺りでは見つけられません。しかし、あのサディストは、6メートルも深い煉瓦敷きの防空壕、というよりコンクリート造りの防空壕を持っているのです。だから彼の大切な命は安全です！ 私たちの命など重要ではないのです。

また非常に残念なことは、ここからせいぜい30メートルの所に泉があり、洗濯やその外の為だけだとしても、泉を利用できたならば素晴らしいことなのに、水を取りに行ってはならないのです。あらゆる要望に対して、この頃は拒絶の答のみしか得られません。何か新しいことを始めることは、たいへん難しいものです。というのは、下（カンピリ収容所）からの協力が全然ないからです。むしろその逆でした。ヤウストウラさんはそこで再びリーダー格です。フォスカウルさんは、常に自分の為が一番良い地位を選びます。私には何も言わず、ヤウストウラさんに加わり、彼女の伝達係になりました。食べ物、寝場所等、下の方がずっと良いのです。そこには水があり、トイレがあり、森の中よりもニュースを聞く機会があります。森の中で一日だけ鐘を鳴らしたコートウマンさんも下へ行きました。2人の集合バラックリーダー、クレイさんとナニングさんも自発的に下に留まり、ここにいる集合バラックリーダーは、私には何の助けにもなりません。バウマンさんは過度に緊張しており、ラウエンダイクさんは計画を立てるには適していません。幸いにも、ヘアデスさんがすばらしいほど私を援助してくれ、扶助品分配係の女性たちはたくましく働いています。ここで、多くの絶望的な問題を取り扱うのはかなり大変な仕事で、日夜、面倒を見て、考え、行動を取ることさえするのです。ですから、下にとどまっている大部分の人たちが、自分達の快適さの為に、まるで彼女たちはそこで前線に立っているかのように振る舞い、私たちは何もやる事がなく、ただ彼女たちの世話を受けているだけのように、考えていることを知るといふ事はとてもつらいのです。彼女たちは何とかして、ヤマジの注意を自分たちの方へと引かせようとしているのです。なぜなら、全ての関心および援助を、彼はここにではなく、あそこに与えているからです。彼が上（ボスカンプ）に来るのは、扶助品グダン（倉庫）を見に来ることだけです。漏れ、トイレの不足や水について話すと、すぐにむっとなります。それでもこれらの点に関する設備はたいへん必要に迫られているので、私は彼がこれらに注意を配るよう努め続けるでしょう。

ヤウストゥラ

1945年7月

7月19日に私たちは2度目の爆撃に耐え抜きました。これも午後になって直に、落とされました。幸いにも食事を運ぶ人たちは、既に踏みならされた小道を通過して、サワ（水田）に抜け、応急収容所へ向かいました。そういう訳で、飛行機が来た時、前収容所には少数の人たちしかいませんでした。今回は2機だけでした。警報が鳴った時、人々はまだ残っていた石造りの建物より、できる限り遠くへ走り、覆い付き塹壕に隠れました。

私は女性病棟に立っていました。そこには第1回目の爆撃以来、「女性勤労団」が、伝達係のフォスカウルさんとオーストラリア人のパッチイさんと寝ていました。第1回爆撃後に、彼女は私に「イック ブライフ バイ [オランダ語] ユー [英語] (私は貴女と一緒にいます)」と言いました。そして彼女はそのとおりにしました。私は全ての人々がなくなるまで待ちましたが、私たちがもっと遠くにある塹壕に行くにはもう遅すぎました。私たちは女性病棟から数メートル離れた塹壕に入り、まだ中に入る前に、初めの爆弾が投下され、私たちがちょうど、這って行った穴がふさがりました。耳をつんざくような鋭い音と、バンという音を立てて爆発しました。私たちは、伝達係をまん中にして、隣り合わせになり、ぴったりと座りました。彼女は大きな声を出して祈りました。砂が私たちの上を雨のように降り落ちました。

少ししてから、それは私たちには何世紀ものように感じましたが、飛行機のうなる音が遠ざかって行きました。パッチイさんとコア・フォスカウルさんは、塹壕から出るために、まだ残っていた出口に這い上がりました。彼女たちは、私と一緒に行くようにしきりに頼みました。私は飛行機が再び戻って来るであろうし、他の隠れ場所を探す時間がないだろうと思いましたので、断りました。コアさんは私を無理やりに連れて行かせたかったのです。その時私は、「危険な状況の際には、誰でもその時点で、良いと判断する事を行なうべきです」と言いました。私は一人で後に残りました。すると本当に、飛行機が戻って来たのです。再び爆弾が落下しましたが、私は機関銃のガタガタとう音も聞きました。恐怖で私は、はらはらしました。コアさんとパッチイさんが他の塹壕にたどり着くのは不可能なことでした。飛行機はまたかなり早く消え去り、今回はこれで最後でした。

私は部分的につぶれた出口に這い上がり、ばらばらの砂をわけ、手と足を使って、上の方へと行きました。私はまわりを見渡しました。カンピリは見違えるほど変わってしまいました。私はそこらじゅうに大小の（爆弾によりできた）穴、そして大小に盛られた土の山を見ました。至るところに煙が出ていて、裂かれた竹の乾いた爆発の音が、あちらこちらに聞こえました。私は「コアさん、パッチイさん、どこにいるの？」と叫び始めました。答えはありませんでした。私が通りかかる各塹壕で、もしかしたら二人の女性がいるかどうかを尋ねました。しかし、誰も、誰一人として彼女たちを見た人たちはいませんでした。数人の人たちが外に出て来て、探すのを助けてくれました。私たちは既に排水溝を過ぎ、収容所の境である鉄条網の近くまで来ました。その時やっと、応答がり、コアさんとパッチイさんがクテラ芋（キャッサ

バ) の幹から這い上がって来るのが見えました。彼女たちは、鉄条網の下を通過して、私たちの方へ来ました。二人は完全に無傷でした。その上、鉄条網によるすり傷さえありませんでした。私は急に、立ち続ける事ができなくなりました。私は地面に倒れ、啞然としてふたりをじっと見つめました。コアさんは、飛行機が機関銃で打ち始めた時、どのように木の後ろから地面へと落ちたのかという、どきどきさせる話をしました。彼女たちは、木の幹を自分たちと飛行機の間を支えて、飛行機の方向転換と共に、その向きを変えました。飛行機が立ち去った時、パッチイさんとコアさんは走りました。ふたりは隣り合ったクテラ芋（キャッサバ）の間に隠れました。

この第2回目の爆撃で、負傷者は出なかったようでした。一人の男の子は転んで、肘を傷つけ、若い女性はかき傷を負いました。けがはそれだけでした。塹壕は、今回私達を十分に保護してくれました。私が一時ひとりでいた場所は、直撃弾を受け、3弾の爆弾は1メートルも離れていない所で爆発し、塹壕の堆積層が部分的に壊されました。私以外に、塹壕でたった一人でいた人がまだいました。それは、特別食用炊事班長のアントニノ婦長さんでした。彼女は空襲警報の際、初めに、全ての火が消えているかどうか調べました。そういう訳で、遠くにある塹壕にはもう行かれなくなってしまいました。

収容所には残った物はあまりありませんでした。ほとんど全ての小家屋、それに共同炊事場でさえ損害を受けました。司令所もひどくいためられ、女性病棟及び小児病棟は壁の一部が残っただけでした。私たちが校庭に干した洗濯物は、砲弾の破片で穴だらけになり、ところどころ焦げていました。このようにして、私は最後の服を失ったのでした。この爆撃で残存した建物は、私たちの学校で、鉄条網に沿った近くにありました。6つの教室は、完全に元のままでした。それらは、私たち、つまり前収容所で、収容所の家事を切り回していた女性たちや少女たちに、幾つかのバラックが建築されるまで、寝場所として使用されました。

フォスカウルー リムボーフ

1945年7月20日

ヤマジは神父、牧師そしてヤウストゥラさんと話し合いをして、これは次の結果をもたらした。大急ぎで、私たちの赤白青の国旗が草の上に置かれ、その隣に石灰でDutch Women（オランダ人の女性たち）と書く。更に、空からもし物が投げられても、手を出さないように約束しなければならない。さもなければ、所長、神父、牧師とヤウストゥラさんの命に危険がさらされる！！

警報後、防空壕から出て来ても良いのは、修道女たちが最初で、彼女たちは何か落ちたとしたら、拾い上げて良い。伝達係がもう一度7月20日にV（ファルダーポルトゥ）さんに話した時、伝達係は、V（ファルダーポルトゥ）さんが伝達係の陰に隠れ、噂話をしたのを聞いたと言った！このことをV（ファルダーポルトゥ）さんにすぐに知らせなかったこ

とは伝達係の誤りである。しかし今度、ヤウストウラさんが総括リーダーになり、伝達係は自分の役目はまたヤウストウラさんの下であると思ったのだった！

私たちは今、校舎の中で暮らしている。なぜなら、7月17日の爆撃後、まだ残っていた病院の一部を、連合軍は再度、7月19日木曜日に、今回は、決定的に爆撃したからだ！そして今度は、共同炊事場も被害に遭った。抑留者たちは、今はボスカンプに収容され、そこはたいへん原始的であり、トイレもなければ、井戸もない始末だ。

コートウン

1945年7月20日

エディがピラを見つけた！今、何が書いてあるかを知りたかったが、きっと探し当てて見る。今朝、私たちは、キャッサバ菜園でクテラ芋（キャッサバ）を掘り出さなくてはならず、養豚場を通過してそこへ歩いて行った。なんて汚らしいのだろう！私は全力を尽くし息を止め、なるべく前にいる人を見たが、やはりそれを見てしまった。本当に胸がむかついてしまう！膨れ上がり、むき出し裂かれた豚、うじ虫、そして悪臭！ぞっとするほどひどい！かわいそうな男の子たち。これでエディが食べ物など、喉に通らなかったのが私に分かる。ところで、彼が私に話したことには、傷を負った者は、一緒に埋葬作業をしては『いけなかった』。そういう訳で何人もの男の子たちは、手足に切り傷をつくったのだ。

フリイダは学校の前にある原っぱに、大きな文字を作るという手伝いをしなければならぬ。そうすれば、ここに女性収容所があると、空から読むことができる。彼女の両手は石灰でただれている。午後には、私たちは水汲みの列をつくらなければならなかった。突然、警報が鳴った。私たちは皆で、覆い付き防空壕へと走ったが、それらは2ヶ所しかなかった。まるですし詰めになった^{にしん}鯨のようだ！その時、ウジャネン（雨が降り）始めて、水が中へと入ってきた。泥だらけ！水汲みがやっと終わり、ボスカンプに行った時、ローフマンさんは私に、ファン・サンディックさんが亡くなられ、ネリィ・フィレさんが入院されたと話した。それはまるで頭を一撃されたような感じだった。狂犬に噛まれた他のすべての人たちにとって、これはなんて恐ろしいことだろう。

フォスカウルー リムボーフ

1945年7月22日

ヤマジは全てのリーダーを呼び集め、それからリーダーに通知した。第一に、みんな意志を強く持たなければならぬ。第二に、私たち女性が良い性質であることを彼は知っているが、『今や』きびしく、働きたくない者は容赦なく指摘しなければならぬ！第三に、全焼したバラ

ックの代わりに、新しいものが建てられるであろう。第四に、これらの爆撃は、日本兵が近辺にいた為であると私たちは考えるが、そのせいではない事は明確である。私たちオランダ軍は、セレベス、すなわちチャンバやエンレカンの二ヶ所のみ兵隊がいただけだが、日本軍は至る所に兵隊がいたのだ！！

コートウン

1945年7月22日

ミサがあった。森のはずれで行われた。神父様は困難にもかかわらず、また説教をじょうずにひとつにまとめられた。とても時の流れにあっている。大文字の **P. W.** は『**P r o t e c t e d W o m e n** (保護された女性たち)』がここに住んでいる事を意味している。彼に言わせると、あらゆる喧しさのため『**P r u t t e l e n d e W i j f j e s** (不平だらけのがみがみ女たち)』という意味の方が適している。そしてこの言葉は『**P r a y i n g W o m e n** (祈る女性たち)』に変わる時期にあるだろう！と言う。ああ、そのとおり、皆、もちろんそうなりたいのだけれど、誰も、もう、何も耐えることができない。それが問題なのだ。

コートウン

1945年7月24日

2時近くに、午後の警報があった。私はちょうど「家」に行くところだった。いつものように、皆は森の奥へと一目散に逃げる。私はヤマジがわめきどなるのを聞き、2本高く伸びた木の根の間を、稲妻のように這って行った。私が覗くと、ヤマジが2人のヤップンと密生した森林から、ボスカンプへ行くのが見える。まだ女の人たちや子供たちが駆け回っている。ヤマジは怒り狂う！彼はどなり、わめきたる。すると突然2人のヤップンは銃を肩に置く。まだ歩いている人たちは、皆、素早く地面に伏せる。ヤマジは発砲せず、直立している2人のヤップンの方に手を上げる。6才ぐらいの男の子が、収容所を横切り、私がいる木を通り過ぎ、悲鳴をあげて母親を追いかける。次の瞬間、私は、その男の子の首に飛びかかり、ふたり一緒になって地面に転がる。彼は痩せこけた豚のように叫び、私は「しっー、しっー、所長よ。銃で撃たれるわよ！」と言うだけである。かわいそうな坊やは、2人のヤップンがそこで砲撃姿勢で立っているのを見ると、完全にこわばって、とても惨めそうにしくしくと泣く。警報中、ヤマジとあの2人はまるで柱のように立ち続ける。警報の終わった後、彼は私たちに、「歩いてはならぬ。すぐに横になれ。そして注意して見ているぞ」と呶鳴りつける。それから私は坊やを連れて、母親を探す。

ファルダールポートウ

1945年7月24日

熱心に働き、休む暇もありませんが、その進歩がさらに見えて来ます。今、バラックの近くに、4つの原始的な穴式トイレが掘られました。全部で4掛ける4で、16個の穴です。仕切りは乾燥したココナツの葉で出来ていますので、たいへん透けて見えます。悪臭はひどいもので、夜中、時々眠れません。私たちは蠅に非常に気をつけなければなりません。私は今回、石灰を撒き散らし、石油を穴に投げ入れ、トイレを定期的に清潔に保つ女性を数名、指名しました。

今のところ、蠅については、大丈夫ですが、赤痢の全件数は増えています。私は既にヤマジに、医者がここに来られないか、又は集合バラック担当看護婦たちに助言するために、収容所にとにかく毎日来てもらえないかどうか尋ねました。彼の返事は、今までのところ、何も実現されていないという事実だけです。そして彼は、常に診療所で手伝っていた薬剤師の助手であるコンパニエさんが、この医者であるかのように扱います。彼女は医療仕事に関し報告を出さなければなりません。そしてその結果、彼女自身が偉く感じ、集合バラック担当看護婦は激怒しています。目立ったのはモークスさんです。彼女は看病を続けることが出来ず、私が前収容所で、集合バラック担当看護婦の仕事を与えた時、大喜びをした人です。惨事後、彼女の仕事をやり遂げる為、ボスカンプには行かず、やはり下に留まりました。

私はヤウストウラさんに、なぜ彼女はここに来られないのか、ここはより多くの看護婦を必要としていると尋ねた時、下に住んでいる人たち（約40名の健康で、独身の女性達）を世話するという重要性の為に、下にいる方がより役に立つのですという答えを私は受けました。この重要性とは、食事、飲み物そして衣服のことです。そうしてここには、毎日のように、病気にかかる可能性のある1400人の女性と子どもたちが居るのです。

コートウン

1945年7月27日

ホーフフェインさんが亡くなり、埋葬されました。皆とても気持ちが沈んでいます。本当に、ここは全てがわびしいのです。私たちは、重なり合い、自分自身の場所はなく、骨折り仕事、赤痢、マラリア、脚気、神経の高ぶり、犬、警報、食糧と衣料不足、そしてそのわずかな衣類は、汚い井戸水と最少限の石鹼で薄汚れています。もし誰かが、いつか後になってこれを読んだら、その人はこのことを想像する事ができるでしょうか？

ファルダールポルトゥ

1945年7月28日

初めてボスカンプの人たちは、今朝コーヒーをもらいました。下では、彼女たちは既に、定期的にコーヒーを受けていました。それに喫煙者はタバコ1箱ももらいました。全てに対し、皆はたいへん感謝していました。炊事、ポンプによる水汲み、ふるいかけ、唐箕^{とうみ}作業、粉碎作業などの勤務は長くやればやるほど、普通になっていくものです。しかし前収容所に数時間とどまることが、思い切つてできない人は、まだ無理にそれをさせませんでした。とにかく、いわゆる水汲み列の勤務にもボランティアが十分います。私はここでもまた、あらゆる意見や通知を貼る連絡掲示板を、森に用意しました。処理班は毎日下へ行きます。種々雑多の物が灰の中から見つかります。しかしながら、見つけた物を自分のものにしてしまうという、不正直者もたくさんいます。

畑仕事の少年たちは、養豚場の焼け残ったバラックへ働きに行き、処理作業には、毎日下へ行きます。畑仕事の少女たちは野菜を摘み取り、洗い、片付け作業や水運び作業を手伝います。ここ森の中には、連絡掲示板がありますが、その前には、絶えず関心を寄せる大勢の人々が立っていますので、掲示板だけでは、まだ十分ではありません。ですから私は、また4人の女性を放送員（として）を設置します。というのは、一日中、空のバケツやたらいを炊事場に持って行き、パップ、米、野菜または濃いスープのたっぶり入った、たるを持って来る人々が必要だからです。更に、コーヒー、飲料水、特別食そして他のバラン（品物）も同様です。このようにして、一日が過ぎて行きます。

収容所への道は空からもはっきり見られます。道は完全に平らに踏みつけられて、灰色がかった色のサワ（水田）の土手は、壊れてしまいました。初めのうち私たちは、そこを這い登らなければなりません。下では、集合バラックC棟のトイレや浴室の再建が既に始まりました。水浴もむずかしい問題です。ここでは（ボスカンプ）皆は、灌木の後ろで、バケツに入った水（10分かけて遠くから汲んで来なくてはならない）を浴びるか、または、下に行って、小家屋にある、多かれ少なかれ焼けた浴室や泉のそばで水浴します。大勢の人たちはこの点に関し無頓着で、外であるのに、あちらこちらに素っ裸になって立ちます。その結果、クーリーたちや前を通りすがったヤップたちが覗くことができました。そしてあれこれと注意しても、幾人もの人たちは何も気にもしません。

パップの供給は現在、調子良く行っています。最初のころは、森の人たちは朝食として、数個の固いビスケットをもらっていました。そして5才迄の子供たちにはパップができました。それから、年長の子供たちにもパップが渡り、最後には全員がもらえるようになりました。一人につき、初めはさじ1杯、次に2杯、今はさじ3杯です。昼食の深なべはすぐにうまくいきました。それはご飯とハヤシ肉料理（肉とキャッサバの細切り）の種類で、夕方は濃い米スープでした。その上、朝は全員がマグカップにコーヒー又は紅茶、昼間には沸かした飲料水が少しもらえます。これはそれほどの量ではありませんが、初めのころ、多くの人たちがやって

いたように、焼けるような暑さの中で重労働のため、更に喉を渇かせ、骨を負って、危険な汚れた井戸水を飲む必要はもうないのです。しかしながら、赤痢はひどく広がりました。

コートウン

1945年7月28日

ローフマンさんはキャッサバ菜園¹²⁵に行った。私が畑から来た時、彼女はもう行ってしまった。彼女がいけないのはとても変な感じだ。私たちの「家」には、トゥシアさん、ドーシスさんそしてコーニングスベアハーさんが加わった。彼女は小児麻痺にかかったので、よく歩けない。私たちの土間には、バレ（寝台）があり、その上には、座る事も寝ることもできる。地面の上に生活するのは、彼女には無理であった。ところで、赤痢患者がキャッサバ菜園へ行かなければならなかったのが、私たちの「家」に場所があいた。数人の女の人たちは、神経過敏になっているので、『神経症』と人は呼んでいた。そう、物事をただ座って、見ていてはいけないという事を、昨日気がついた。只、こつこつと働き、最善を尽す努力をすることだ。前収容所では、皆、全速力で建築に従事している。

フォスカウルー リムボーフ

1945年7月30日

初めの爆撃の際、ポップ・D（ダーラー）さんは、焼夷弾¹²⁶で地面に釘づけにされ、焼夷弾には、まだ感染物質が入っていたため、それが効きだしてきた。彼女はマカッサルで腰まで切断された。彼女は自分がどのような状態であるか気づいた時、もう生きている気力もなく、数時間後に亡くなられた！ 私たちは彼女の死亡を、ここではまだ知らなかった。それから彼女は赤十字の車で収容所に再び運ばれて来た。私たちは彼女の動かない体が担架の上に置かれ、サロンに覆われ、悪臭が既に発散し、車から担がれた時、やっとそれに気がついた。彼女は直ちに埋葬されなければならなかった！！ フレディ・P君はマカッサルで膝の上まで切断され、私たちは7月26日木曜日に救急車から遺体を引き出した。夜中、彼の遺骸を見張らなければならなかった。彼はまるで大人のように見えたが、まだ16才だった。

所長は火事の後、2度もリーダーを呼び集めた。彼は全バラックが2ヶ月後には、再建されているであろうと伝えた。彼は、私たちはスナン（満足）しなくてはならず、彼を信頼しなくてはならない。なぜならそうでないと彼はここにとどまる事ができなくなる！！ と言

¹²⁵ 赤痢患者隔離場の呼称。

¹²⁶ 高熱で燃える薬剤を入れた爆弾。

った。私たちはマッチを吹き消すように、カバーエンジンス（うわさ）に対処しなければならなかった。リーダーたちはこれから彼の考えのみで、自分自身の考えを述べてはならなかった。会合が終了した時、数人のリーダーは既に外にいて、所長は「ニョニャ ダイブラー（ダイブラーさん）があそこの責任者になる」と軽率に言った。彼はボスキャンプの方を指差し、比喩的表現を用い、付け加えた。「1本の竹があまり強くないので、3本必要なのだ。つまりニョニャ ヘアデス（ヘアデスさん）とラウイェンダイクさんが手伝う」ダイブラーさんは青ざめて「それは、私にはできません！」と言った。「やるのだ」と所長はぶっきらぼうに答えた。その時誰かが「ファルダーポートゥさんはどうするのですか」と聞いた。彼は「あの人は疲れていて、年を取りすぎている！」とそっけなく言った。

ファルダーポートゥ

1945年8月1日

A. バートゥストゥラさんの要望で、今朝10時にヤマジは会合を開きました。ヤマジ自身はバラック主任たちに、戦争の時には、人は無条件に服従するものである。今がそうなのだと話しました。重要な責任のため、全く疲れきった私（ファルダーポートゥ）の代わりに、若い者が来なくてはならないのでした。昨日起った事で、彼は方針を変えました。ダイブラーさんのことは話さず、直接A. バートゥストゥラさんを任命しました。彼女たちは思っていた事を、言わなければなりませんでしたが、私にとってもスナン（満足）していたので、私に続けて欲しいと発言したかった人は、全てを述べる機会がありませんでした。彼は、意見がどの方向に進んで行くのかに気づくとすぐに「それは、お前自身の意見だが、ここでは通用しないのだ。収容所の意見のみが通用するのだ」と言いました。まさにそれが収容所の意見でしたと人が言った時、彼は即座に他の方向に向きを変え、腹をたて、戦争中だから、私たちは命令に従って行動するのだと言いました。そういう訳で、結局このようになったのでした。彼がそうしたいのなら、私たちには何も言えません。ですから、『論議する』のは、よしましょう。彼は現在、全てに決定権も持っていますが、それはやがてきっと変わるのです。

その間、3人の男性は彼の命令により、何か言わなければなりませんでしたが、これらあまり勇気のない紳士がたは、恐れられた人（ヤマジ）を怒らせないように、曖昧に答えました。残念ながら、それは私たちが知っている彼らの態度なのです。その時、警報が鳴り、皆は走り去り、私は、最終的にまた彼のプリンタ（命令）により、警報を発しなければなりませんでしたが。

マカッサル方面で爆弾を投げ落とした12機の爆撃機が来ました。しかし、ひどかったのは、飛行機が絶え間なく飛びまわり、私たちの収容所の上にさえ来たことです。そして、大人も子供も低木の下に体を伸ばし、息をこらえ、耳を澄まし、静かに、又は声を出して祈りながら、運命を待ち受けるということは、あらゆることを体験した後でも、多くの人にとって、

未だなお、みじめなものです。ひどい事には、自分達の味方のために、逃げ隠れしなければならないのだと、再び自覚しなければならないことです。信頼感など今は完全にありません。何回にも渡り、飛行機が前收容所の上に飛び、そこには私たちの旗に『D u t c h W o m e n (オランダ人の女性たち)』の文字が書かれ、はっきりと見る事ができるのです。しかしそれに対し、たった一つの応答もありませんでした。

警報後、私は、ヤウストウラさんのいる所で、A・パートウスウトラさんに仕事を引き渡しました。ヘアデスさんは、すばらしい仕事を勤めた食糧班長として、またバラック主任としての勤務をもう維持できない、というにがい経験をしました。

コートウン

1945年8月5日

ルウロフの誕生日！ 私たちの弟は『畑勤務』の年令になり、自分でも成長したのだと感じる。私たちは彼に2つのプレゼントをあげた。手作りのベルトと、笑わないで・・・袋いっぱいの鍵。すべて丸焼けになった收容所で探し集めたもの。彼はひどく興奮した！かわいそうなルウルブル¹²⁷、あとは何にもなし！ そう言えば、今日は2回警報があった。

シャボットウー コートウマン

1945年8月5日

日が暮れるころに〔1945年7月17日〕、私たちは10棟のバラックと、20軒の小家屋ができて森に行きました。その場所は1人につき44平方センチメートルと非常に狭いものでしたが、2日目の晩に熱帯性の雨が降った時、私たちの頭上にあるこの屋根は（既に漏れているが）、本当にその価値があるのを見せたのでした。翌日、グダン（倉庫）はできる限り、^{から}空にされました。というのは、所長は飛行機が残物を破壊する為に、戻って来るであろうと予想したからでした。そしてそのとおり、7月19日に、私たちは樹木の下に横になりました。その時、16弾の爆弾がグダン（倉庫）、炊事場そして病院に当たりました。所長の住居、学校や数軒の小家屋は残りました。防空壕から3メートルの距離に爆弾が投下されましたが、何の効き目もありませんでした。有蓋防空壕が、やはり優れたものであったことは明らかです。合計で、4000弾の焼夷弾が落とされたそうです。負傷者の数がこれほど少なかったというのは奇跡です。

¹²⁷ 親しみを込めた言い方で、小さなルウロフちゃんという意味。

ファルダールポルトゥ

1945年8月6日

また、粉引き、篩^{ふる}いこし、パン焼きが始まりました。米粉パンはかなりおいしいものです。このように、全てが再び、昔の軌道に乗っていきます。髪をとかしますが、これは必ずしも快く、衛生的とは言えません。非常に人口が密集しているバラックでは、いつかシラミの異常発生が突然起こるという私の不安は、残念ながら、想像以上のものでした。くしの不足の際に、私が再三依頼しても無駄でした。それで人々は自分たちで何とかしなければなりません。最悪の場合には、石油を使って髪を整え、髪を短く切り、または、猿がやるように、次々に列をつくって座り、お互いに頭を調べました。これでボスカンプのスラム街の評判はさらに上がります。

その間、赤痢患者の数が日ごとに増しました。朝から晩まで、医者は便器の中身を調べなければなりません。それらは常に便器とは限らず、便器が足りない時には、平なべ、皿や葉を丸めて作ったものが、時々代用されます。

現在、収容所の人たちの為に、20人の女性により、救出されたミシンで定期的に縫合作業が行われます。その間、下では既にかかなりのミシンが集められ、裁縫作業場が来週からまた開始されるでしょうと皆は言っています。多くの人たちはもうそこへは行きたくありません。なぜなら、その人たちは、裁縫作業場や養豚場の存在により、私たちの収容所が災難に遭ったのだと考えるからです。どのようにこの問題が発展するであろうかは、未だにはっきりしていません。とにかく、それはヤマジの意図であるらしく、当分は、ここにいる人たち用の衣類だけを縫わせ、それは勿論、たいへんに有り難いことです。だいが焼け焦げてしまった米50袋も、収容所に来ました。食べものやポップはその為か、少し焦げた味がしますが、それでも十分な食物なのです。

神父様は水牛の角から、のこぎりを使ってくしを作ろうと試み、素晴らしい成果を上げました。のこぎりやすりが十分あったならば、少年たちも手伝うことができたでしょう。なぜかという、この進み具合では余りにも、はかどらないからです。

ファルダールポルトゥ

1945年8月6日

現在、多くの人たちが、必要な衣服、無事に残った紙そしてアクセサリーの入った袋やバッグを、一日中、持ち歩いています。所長は数人の女性たちに、そうする必要は全くなく、爆撃の再攻撃に恐れることはないと言いました。それは誰かに言った彼のさりげない発言で、彼は公式には、何も言いませんでした。それなのに、うわさだらけとなり、それらが一体、どこから流れて込んで来たものかわかりません。大勢の人たちは、時々それらの噂で、陽気な数時間を味わいます。全員が戦争の結末を切望しています。平和と危険のないことを。もう殆どそれ

らを想像することはできませんが、その時がいつか来る事でしょう。神よ、早くそうして下さい。

コートウン

1945年8月8日

死者への追悼日です。悲しい日だと、私は思います。司令所の前の原っぱに、皆が集まりました。前の方には、長いテーブルがあり、その後ろには、ヤマジ、収容所リーダーと3人の男の人たちが座っていました。白い箱は死者を象徴しました。

ヤウストウラさんが挨拶をし、その中で彼女は、ポップ・ダーラーさんなど、亡くなられた方々の思い出話をしました。そして牧師様は、民族間における寛容さと友好関係について話されました。更に、私たちはこの8月8日という日を、決して忘れないでしょう。もちろんお祈りもあり、歌もありました。本当に、死の悲惨さを改めて感じます。しかしそれは良いことなのかもしれません。私たちは殆ど死にそうになり、次回、私たちが過去帳¹²⁸に載っているかどうか、誰も知りません。

午後、私は墓地を訪ねました。そこに墓がいくつあるのかを見ると、びっくりします。ヤマジの命令で、食事にはご馳走ができました。その為に、彼はお砂糖2袋とサピ(牛)を与えました！とにかくそれは、やはり何か嬉しい日でした。

ファルダーポートウ

1945年8月8日

昨晚遅く、私たちの『スピーチ』がヤマジにまた要求されました。神父様と牧師様はそれを彼のために訳さなければならず、それから彼は各スピーチに点数をつけました。それに関し、彼の評価点数が20点から55点の範囲にあるという、おかしい事実が生じました。100点が最高で、最低の点数は、あきれたことに私のスピーチでした。私は高位の命令により、ただ前置きを少し短くし、気力を出し、新しい将来を見ることを、より強調しなければなりません。どのスピーチも彼の批判を受ける羽目になりました。一つの批判は脳水腫のようで、他は腫れ上がった足であり、そして最悪な批判は馬鹿げた話でした。そのように私たちは「所長様??」のご批判に耐えるだけです。彼は自分が全てについて、分かっていると思っているのです。早くも、スピーチをする人たちがヤウストウラさんの「家」に集まって来まり、そこでは男性が野営をします。儀式の用意は既にできていましたので、私たちは急いで自分たちのス

¹²⁸ 死者の氏名、戒名(かいみょう)、命日などを書きしるしておく帳面。

ピーチの訂正や追加をすることが出来ました。

その日前もって、ヤマジ自身は、牛の牧草地に白い綿布の仕切りをしました。その上に私たちの国旗が木の上に結ばれ固定されました。その前には、真ん中が高くなっている長いテーブルが置いてあり、全てが白く覆われ、脇はヤシで飾られていました。全部の椅子は、大きな輪の形に置かれ、訪れた人々はバラックの棟ごとに、その「祭壇」の前を、アーチ型になるように放射状になって、座わらなければなりませんでした。右側には故人の家族及び友人、その後ろには、ファン・フェイン コーラスがいました。左側には、バラック主任たち、スピーチをする人々、高齢者、花束を運ぶ人々が座っています。その後ろには、修道女と児童コーラス。私がモバツハさんと立って話をしているのを見たヤマジは、私に椅子を指差しました。全てが配置された時、人々は自分の場所につきました。本館から、亡くなった方々の友人7人がゆっくりと続いて入って来ました。各々白い綿布で包まれた小さい箱を持ち、正面には名前と死亡日が書かれてありました。それぞれの箱には、故人の所有物が入っていて、大部分は衣服で、ホーヘフェインさんには結婚指輪が入っていました。行列がやって来ると、修道女たちはレクイエム¹²⁹を歌いました。その後、神父様は柩持ちから箱をひとつずつ取り、白いテーブルの上に置きました。そうして私たちは、それらの名前を読むことができました。ビリィ・ファン・サンディックさん、ポップ・ダーラーさん、マフダ・ティッスンさん、ベアトゥ・ブルウハーさん、フレディ・パウルさん（全員惨事の犠牲者）、そしてトース・ホーヘフェインさんとネリィ・フィレさん（狂犬の犠牲者）。

これが終了した時、神父様は顔をテーブルの方へ向け、^{きとう}祈禱を捧げました。そのあと、ファン・ホーアさんが「私たちは今朝、故人を忍ぶためにここに集まりました。戦争で生命を犠牲にされた方、この痛ましい死は、私たちへの教えなのです。愛と理解と同情心で、戦争の呪いからうち勝つ為に、私たちの戦いを援助して下さい」ということばで儀式を始めました。儀式の順序は（再びファン・ホーアさんより通知されました）次の通りでした。牧師様が（ダニエル書第9章）¹³⁰から祈禱され、続いて詩篇121番、そしてファン・フェインさんのコーラスによる合唱が行われました。亡くなられた方々の家族及び友人たちは、花束で霊を敬うように呼ばれました。それらは小さな花束で、白いテーブルの前方の真ん中にある小さな台の上に置かれました。ヤマジは自分でヤシの枝を持ち、それを置いて、ほんの少し頭を下げました。ヤウストゥラさんは収容所を代表、モバツハさんは高齢者を代表、そして二人の少年は児童を代表して、花の枝を持って来ました。その後、死者追悼式は実際には終了しました。神父様は、さらにこの儀式はヤマジより望まれたもので、（私たちが慣れているものとは違っていました）彼の同情と共感を、故人および遺族の方々に表わす為でありましたと告げました。10分後、第2部が始まり、それらのテーマ全ては、ヤマジにより決められました。

1. ヤウストゥラさんは、故人の人生と仕事を追憶しました。

¹²⁹ 死者のためのミサ。

¹³⁰ 旧約聖書中の一書。

2. 修道院長は、将来への信頼について、そして心配及び苦悩にもかかわらず元気を持ち続けなくてはならないと話されました（これは「神の隠れ場にいる者は、全能の神の加護のもとにいることであろう」に関連）。

3. A. バーストラさんは、心の中にある愛についての感情や思考について述べられました。ヤマジは、彼女に、彼女自身の悲嘆（アンボンにて実子の死去、そして今回、里子のベアトゥ・プルッハーさんの死去）を皆に説明し、誰もが感動した時、彼女は彼女自身と聞いている人たちを、元気づけなくてはならないことを、望みました。もちろん彼女にはそれはできませんでし、やりませんでした。ただほんの少しの文章を聞かただけでした。（注意、彼女の評価点数25点でした！）

4. 私は初めから現在に至るカンピリにおける生活の概要を述べました。

5. 牧師様は「連帯感」について話されました。8月8日は記念日として残らなければならず、どの程度、私たちが戦争に責任があるのか、そして私たちは今、既に平和を受けるに価するかどうか、沈思熟考し、探求しなければなりませんでした。

6. クレイさんは人生における神の指導について話されました。

7. 児童コーラスは平和の祈りを合唱しました。ファン・ホーアさんが結びの言葉を述べました。「これにて、この正式集会を終了させていただきます。慰めを必要とする人たちを元気づけることのできる人は僅かでしょうが、いつか、どこかで、お互いにわかりあい、お互いに悩みを軽くするよう努力いたしましょう。私たちに残っている善に対する感謝の気持ちにより、落胆に陥る入ることにならないよう祈ります。感謝の気持ちと信頼は、所長が休みと指定するこの日の象徴となるのです。所長は私たちに食事を提供なさり、それらは2つのカルン（袋）の砂糖と1頭のサピ（牛）をくださいました！ 全員を代表致しまして、私はこの親切に感謝の意を表します」。私たちの考えでは、砂糖とサピ（牛）について付け足して言ったことは、儀式のひどい終了の仕方であると思いましたが、ヤマジの命令でそれを言わなければならなかったのです。多くの人たちはだいぶ異教だと思いましたが、他の多数の人々は、何か価値あるものだと感じました。日本でのつぼと同じように、小箱は家族によって持ち帰られなくてはなりませんでした。

フォスカウルー リムボーフ

1945年8月8日

儀式は今朝、完全に（所長の！）望み通りに行われた。遺族たちは箱が置かれたテーブルの隣に席をもらった。ズス・ファン・Gさん、神父、ヤウストゥラさん、牧師そしてV（ファルダギーポートゥ）さんのスピーチの後、遺族たちは花をテーブルの上に置いた！！その後、ティヌ・K1さん、そしてヤマジ！の代理として神父がまた話をされた。

ヤマジはこの儀式に関し説明が必要だと思った。彼が昨日、数人の人たちにこの儀式

のことを聞いた後、私たちがこれを内心では異様に感じた！ ことが彼にはっきりした。彼は例えばこのように質問した。「お前たちにとって、これは普通なのか??」。「いいえ」がその答えであった。「だが軍人にとってなら普通だろう」と彼はまた聞いた。「もちろん違います。トゥアン」が返事であった。「しかし、この儀式をやはり喜ばしく思うだろうか??」と再び尋ねた。「貴方が喜んでおられるならば、私たちも喜びます」これは所長にとって不満足な答であった。それから彼は、晩になって神父とさらに話し合い、彼はこの儀式を『行なわない』方が良いと思うかどうか?? ときいた。「はい、もちろん行なった方が良いです」と神父は返事をしたが、所長の代わりに今度は神父が、所長は死者の方々への哀れみと抑留者たちへの同情心から、この儀式をを行ない、そしてまた私たちが『そのように』考えることを望んだ?? と、説明しなければならなかった。その上、所長は豪華な食事を用意した。生き残った豚の一匹で、ヤン・クラスンという名の豚は、初めに逃げたが、その後、食事のために畜殺された。所長は収容所に2袋の砂糖を贈呈した!! また所長は、自分は今日、『新しい』人間になり、古いヤマジは『死んだ』のだとい、V（ファルダーポートゥ）さんも彼によると、同様でなければならなかった。儀式終了後、遺族たちは箱を持参し、私たちは花を墓の上に置いた。

フォスカウル — リムボーフ

1945年8月10日

昨日、ボスカンプでは、全てが消毒された。というのは、赤痢患者がますます増えているからだ。一日につき、19人の新患者が出るのはよくある事だ!! 全ての所有物は太陽にさらされて、石灰がまき散らされ、養豚場のドラムかんの中にある食器類は煮沸されなくてはならなかった!!!

シャボットゥ — コートウマン

1945年8月13日

話変わって、私は他の80人と一緒に赤痢病棟に寝ています。私たちがボスカンプに来た時には、トイレはありませんでした。初めの数日間で、家々のすぐ後ろに、溝が掘られました。病気の流行が今までひどくなかったのは、私たちが丈夫であるからにちがいありません。病状は軽くはありません。少なくとも大人たちはかなり病気ですが、今まで死亡したのは一人で、その人は39才で、脚気と心臓が弱いという特別の例でした。私たちは、昨年12月に病気が流行した時に、キャッサバ菜園に建てられたバラックに寝ています。妙なことは、必需品は全てあるのですが、唯一の贅沢なものやくつろぎになるようなものは、何一つとしてありませんでした。枕を持っている人さえ少数で、他の人は火事の後、数日してから手に入れた黒い帆布で

作ったリュックサックの上に頭を置いて寝ています。血清は何年もの間行われていませんが、お腹をきれいにするために十分なエプソム塩とヒマシ油はあります。初めのころは、朝、自動的にエプソン塩をコップにもらい、下痢が弱まって来るまで5回から7回飲むことは特別ではありません。40人の大人に対し4つの便器があり、そのうち1つは、本当は平なべなのです。修道女はそれらをきれいにする為に走りまわりますが、たびたび順番を待たなければなりません。私たちはバレバレ（寝台）に寝て、重病人は携帯用簡易マットレスに寝ます。食事は紅茶と米の水がゆをこしたものをとります。これを食べるのは既に8日目になります。ひどいものです！ビスケットのようなものは全然ありません。徐々に特別食はブイヨン、すりつぶした肉、キャッサバピューレ、切りつぶした野菜、トーストそしてついに米飯となります。それがうまく行かなければ、また初めから通じをつけます！本当に、2人の女医さんで（1人の男性はトイレを検査するだけで、所長によると、上手な医者ではないそうです）ここまで達成できるとは素晴らしい事です。今のところ、大人では、バチルス性¹³¹赤痢で1人死亡、そしてアメーバ赤痢で1人死亡があったと思います。血清不足で、アメーバ患者はヨードホルム浣腸液を受けますが、もちろん完全には回復しないでしょう。

ファルダーポルトゥ

1945年8月14日

一日に数時間、子供たちが学校関係の事を行なうことが開始されました。これはひどい状況にあるボスカンプに平穏をもたらすことでしょう。800人の子供たちは非常に激しく、全ての音が反響するような葉っぱで作られた屋根の下で、常に同じ限られた環境の中で暮らし、気力を失い、そのために扱いにくくなり、母親たちにとって、彼らを一日中世話しなければならない事は不可能な務めです。その上に、母親たち自身、たいへん神経質になっており、日常の仕事で手がいっぱいなのです。

ファルダーポルトゥ

1945年8月15日

はるか遠くに、爆発する音が聞こえる静かな日でした。それが幸いにも遠くなるので、何にも悩まされることがないのは有り難いものです。今日は既に爆発した物、又はまだ爆発しなかった全ての焼夷弾を、収容所全体探し回って集めなくてはなりませんでした。大勢の少年たちは利口で、まだ発火していない物をバラバラにしていじくりまわし、セルロイドの小さいケースに

¹³¹ 細菌性。

入っている火薬を花火にして使いました。タールと樹脂は強力な燃料です。2弾の爆弾で、十分にドラムかんいっぱいの水を沸騰させることができます。数千のものが落ちていました。キャッサバやピサン（バナナ）園には、列になって、およそ1メートルの間隔をおいて、あちらこちらに横たわっています。パイロットたちは耕作された土地についていったい何を想像したのでしょうか？ 毎日午後、私たちは前収容所にある小家屋6aの焼け落ちた浴室で水浴します。浴室は完全には残っていません。4面の壁と扉がまだあり、屋根はありませんが、邪魔をされずに、ちょっとシラメン（水浴）できます。水は井戸13番から最初にバケツで汲み、帰り道には、もう一度バケツに水を一杯にして、森へ持って行きます。そのようにして、私たちは洗い物などに水を少し備えておきます。衣服を洗うのは、朝早くバラック第1の井戸でしますが、早く来ても、遅く来ても、そこはいつでも混んでいて、自分の番が来るまで、長い間ポンプのところで待っていなければなりません。井戸は網不足のために、殆どが使用できません。食べ物の残りなど全然ないにもかかわらず、「家」の中でのねずみの異常発生は、日が経てばたつほどひどくなります。日中、ねずみは見えませんが、夜になると、私たちが寝ている格子の床で、ねずみは鬼ごっこをします。蚊帳を持っていない場合には、ねずみはその人の上を歩きますが、幸運にも私はそれから免れ続けました。床にある物、缶、お皿など、何でもねずみはひっくり返し、カチャン、カチャンという音で、人々は時々、数時間も寝つくことができません。

抑留所での戦争終結の発表

日記からの抜粋

フォスカールー リムボーフ

1945年8月16日

朝、所長は自分の車で収容所を出て行き、12時ちょっと前に馬で戻って来ると、馬から降りながら直ぐにヤウストゥラさんと呼ぶ。馬は警官に連れて行かれ、それから私たちはヤウストゥラさんが司令所に歩いて行き、その後、素晴らしい車が柵の中に走って来るのを見る。15分経つと、ヤウストゥラさんは古い登山靴を手にし、真新しい黒い紳士靴を履いて、私たちが現在住んでいる学校の教室の方へ再び戻って来る。彼女はマカッサルに行かなくてはならないと叫ぶ。彼女はきちんとした洋服を着なくてはならないが、その様な服は持っていない。しかしプリンスさんの洋服を大急ぎで借りることに成功する。それからヤウストゥラさんが現われ、マカッサルに向かう車に乗るのを見る。『これは一体どういう意味なのだろう??』

2時に彼らが戻って来る。所長が初めに車から降り、ヤウストゥラさんに対し深くお辞儀をする。『このようなことを彼は今までやったことがなかった!!!!』彼らは司令所に入っていく。後ほど私たちは、ヤマジがヤウストゥラさんに彼の部屋に来るように尋ね、そこで窓を勢い良く開け、その後、彼女に手を差し伸べ、ブギトゥ（まさに、そのとおり）と言うのを聞く。そうしてヤウストゥラさんは出て行き、私たちの学校の方へ来て、伝達係に第一教室に付いて行かなければならないと合図し、そこで8月14日以来ここに置かれてある連絡簿に通知を記入する。人々は彼女に、平和の通知を持っているのですか?と興味深く尋ねると、彼女はそれと似たようなものでしょうと答え、微笑む!!!

その後伝達係は、所長が重要な報告を行なうため、可能ならば3時に、牧場へ来るようにという通知を持って、ボスカンプに行かなければならない。伝達係は休息時間にボスカンプに着くと、そこは死のような静けさで満ちていた。だが、この通知を黒板に書き写した直後、まるで野生動物園のようになり、ものすごいやかましさ!!! 3時に沢山の人たちが牧場に押し寄せると、暫くしてカーキ色の服を着て、以前のようにまっすぐな髪をした所長が来る。彼は髪に分け目をつける気分ではないらしい。それから彼は牧場の真ん中にある椅子に座り、皆にもっと近くに来なければならぬと合図して、神父と牧師を呼ぶ!! それから彼は一瞬『非常に』当惑したように見て、彼の隣に立っているヤウストゥラさんに何かひそひそと話す! ビラン セカラン ハビ ペラン ディ マナ マナ (至る所で戦争は終結した、と言いなさい)。ショックはこの言葉を理解した大勢の人たちの間に広まる。所長は直立し、ヤウストゥラさんに、彼の椅子の上に立ち、人々に話しかけるように合図する。彼女は感激した顔つきで語る。私はちょっと前に所長と一緒にマカッサルに呼び出され、私たちは軍事長官『ヨズク』

より次のことを聞きました。

第一に、昨日8月15日に休戦が開始されました。

第二に、軍事長官は私たちをどう処遇しなくてはならないか知りませんが、私たちと一緒に決定を待つように尋ねました。

第三に、1週間後にマカッサルにある軍事病院は引き渡され、カンピリ、パレそして戦争捕虜収容所の重病患者たちはそこで看護されることでしょう。

第四に、私は長官に、ヤマジが私たちの所長として最後まで残って居られるかどうか聞きました。

この最後の言葉は耳をつんざくような『賛成』という叫びで歓迎され、所長は感激して正面を見つめた。最後にヤウストゥラさんは責任者たちに新しい学校の教室に集まるように頼んだ。皆は深く感激し、立ち去った。

沢山の人々が熱狂的に喜んだが、黙ったままで、殆ど泣きそうな人たちも非常に多かった。それは愛しい家族の一員ともう決して再会できないことを知っていた人たちだった。その後リーダーたちは新しい教室へ行くと、そこに男性たちもやって来た。所長が中に入って来た時、彼らは立ち上がり、いつものようにお辞儀をしようすると、所長はもうその必要はない！！と言った。彼は腰をかけ、彼らにもっと近くに座らなければならない！と再び合図した。

それからヤウストゥラさんは伝達係にボスカンプから『国旗』を持って来なくてはならないと叫んだ。それを持って戻りながら、彼女は『赤、白、青』がはっきり見えるように旗をたたんだ。彼女は数人の10代半ばの少年たちのそばを通り過ぎ、『旗』をちょっと通らせて？？と聞いた。一人の少年は、いいよ。おばさん、旗の運び人も通っていいよ！！！！と優しく答えた。その馴染みの旗の色を見て、至る所で興奮が高まった！！次に彼女は会合でヤウストゥラさんに旗を見せ、所長に『旗』をどうしましょうか？？トゥアン。旗を揚げても良いですか？？と尋ねた。彼は落胆したように見え、なるべく人目に付かれないかのようにだった。うーん、と所長は言った。それなら私たちは旗を揚げますとヤウストゥラさんは言った。その時やっと所長は何を尋ねられた分かったかのように、ちょっと待て！！と突然、言った。ヤウストゥラさんは彼に、やはり最初にマカッサルからの命令を待たれたいのですか？？と尋ねた。しかし彼は、ふーん！！と不明瞭に呟いた。晩になって、現地人の態度を考慮し、決定的な平和ではない為、旗を揚げることはまだできない！！と通知された。彼はヤウストゥラさんに、今や彼女が本来の所長であり、彼は警察、つるはし武装兵士について、また収容所外の規則に対してのみ権威を持ち続けると言った。初めにマカッサルにある病院、その後家屋が手配されるでしょう。リーダー会議が終了した時、暫くして所長も出て行くと、数人の人たちと後に残っていた修道院長が、トゥアン、私は貴方と是非握手をしたいのです！！と言い、神父、牧師、伝達係も彼と握手をした。彼はこの握手の際、『非常に』狼狽し、惨めな態度であったが、やはりうれしかったようだった。

後で、私たち自身の安全を考慮し、現地人との連絡を厳しく禁止することを続行す

る！！ という通知が来た。以前の女性病棟にいた病人たちは、爆撃中、カンポンの応急病院に移動され、現在、病院として設備が整えられた裁縫作業場と診療所に戻って来る。

夕方に感謝の礼拝があり、最初に牧師が話をなされた。集会はボスカンプの外側のサワ（水田）で行われ、それはたいへん感動的で真剣さがあった！ 牧師は正直な眼差しで喜びを発散させ、私たちは失ったことを回想してはならず、これからの将来のことを考えなければなりません！！！！とおっしゃった。今朝、牧師は新しく、より広がった裁縫作業所で十分注意を払い働いていた。午後、『休戦！！』の知らせが来ると、彼はお茶目な眼差しで、もう裁縫作業所は必要ないのだ！！と言った。とにかく、彼の説教の全ては楽観的な特徴に帯び、それが皆に移り広がった。その後フレトゥル・コーラスが歌を歌い、神父が説教した。有名な政治家が3年半前に、血と汗と涙！！を予言し、それらを私たちは体験したのである。しかし息子たちを失った母親たちの涙、そして夫を失った妻たちの涙は新しい世界を形作る種となることでしょうと彼は言った。その後、修道婦たちのコーラスが合唱した。

晩になって、ノーアさんは所長に握手をした。うれしい？？と彼は彼女に聞いた。いえ、誰も勝利の感激を持つてはいませんと言うのが彼女の答えだった。勿論、やっと世界じゅうが平和になり、私たちはうれしいです。もう誰も爆撃や機関銃に対し、胸が張裂けるような恐怖を持つ必要はないのです。幸いにも、それによって死亡する人はもういないでしょうが、平和は私たちが常に結び付けていた『あの』心配事のない気持ちにはしてくれません。それどころか、『大勢の人たちは恐怖を感じました！！！！人が自分の運命を心配することは、神の思召しを干渉することなのです！！！！』と彼女は言った。この日を記念して、砂糖5袋が分配され、豚2匹を頂いた！

ファルダーポルトゥ

1945年8月16日

朝は静かでいつもと同じでした。私は自分の古い下着の繕い仕事をし、どのような喜びをこの日に体験するのだろうか、午前中には何も想像さえしませんでした。もう既に長崎が倒れたという噂が数日広まっていました。更に、昨夜ヤマジが引退したことが至る所で話されていました。またインドネシア人が日本人の仕立て屋に対し、敢えてずうずうしく、『ニッポンカラテイダウサラギムルットブザールサマサヤ（日本は征服された。私に大口をたたき必要ない）』と言いました。それに対しヤマジは口答えせず、全く殴りもしませんでした、という話さえが病院から伝わって来ました。既にこの様な出来事により、何か特別なことが起こっているという感じはもちろん持っていましたが、それが何であるかは誰も知らなかったのです。それに空は奇妙なほど静かで、物を考える気分にもなりました。突然、昼ごろヤウストゥラさんはヤマジに呼ばれました。彼は彼女に、綺麗な洋服を着て、靴を履いて、マカッサルに同行しなくてはならないと言いました。きれいな洋服など彼女は持っていませんでしたので、それ

を借りました。彼女の軍隊のどた靴は十分奇麗ではないので、ヤマジ自身の靴を受け取り、それらを身に付け、彼女はヤマジと一緒にマカッサルに行きました。彼女が戻って来た時、直ちに全員3時に行われるだろうという「重要な報告」の為に、下の牧場へ行かなければなりませんでした。私たちはそこへ群がって行き、大人も子供も大変興味津々でした。ヤウストゥラさんを後にして、ついにヤマジが来ました。彼は椅子の上に立ち、メモ帳を見て何か言いましたが、私たちには聞き取れませんでした。彼は大変意気消沈し、臆病に見えました。私たちが何も聞こえませんかと呼んだ時、彼は最初に神父様を呼びましたが、最終的にはやはりヤウストゥラさんに、どうしたのかを説明させました。彼女は「マカッサルに行き、マレー語と英語の通訳と共に、上級の日本軍事将校のところで、交戦が中止されたことを知らされました。現在彼らは協議中ですが、この静観する時期に収容所の為に可能な限り協力することを私たちに頼みました。そしてヤップス（日本人たち）はできる限り私たちの必要な物を用意する努力をし、私たちの安全に対する世話をする事でしょう。マカッサルにある病院は引き払われ、私たちの収容所、パレパレそしてマカッサルの戦争捕虜収容所にいる患者たち用に使用されます」と報告しました。

ヤウストゥラさんはその時、ヤマジが私たち収容所の世話をする責任を持ち続けても構わないかどうか質問し、それは同意されました。交戦が中止されたことを聞くや否や、私たちの感激と喜びは言葉では表わせないほどでした。全員しばらく啞然とし、青少年たちが突然歓声を上げ、喜び、はしゃぎまわり始めなかったならば、大人たちの感激はもっと長く続いたことでしょう。それから私は直ぐに群集の中に立ち、ヴィルヘルムス（オランダ国歌）を歌い始めると、直ちに全員により歌われ、その後「D a n k t , d a n k t n u a l l e n G o d（ダンクトゥ、ダンクトゥ、ヌ アルン ホット・感謝、今こそ神へ感謝せよ）」が続いて歌われました。その感激は素晴らしいものでした。

ちょうど、私たちがヴィルヘルムスを歌い始めました時、ヤウストゥラさんはまだ報告することがあるため、まるで私たちに歌うのをやめて欲しいかのように手で合図をしましたが、この手まねは完全に無視されました。私たちは最初に歌を歌わなければならないのです。それから報告を聞くのです。歌を歌った後、私たちは残りの報告を聞きました。ヤマジが私たちに世話し続けるという最後の通知により、多くの人々の間でぶつぶつと不満や不平が出始め、それは不明瞭ではありませんでした。耳をつんざくような歓声の中を、ヤマジはそっと立ち去りました。大男がまた小男になったのです。その後彼はバラック主任たちを集め、彼女たちの協力に感謝を述べたいと言いました。彼は何度も間違いをしましたが、彼女たちが自分のことを悪く思わないようにと望みました。大勢の人たちは、少なくとも彼が今、私に許しを請うことを願いますが、彼はやはりそうしませんでした。いずれにせよ、私にはどうでも構いませんでした。多くの人たちは簡単に懺悔することができませんし、ブランダ（オランダ人）に対してヤップスが謝罪するのは大変むずかしいことだと私は思います。妙なことは、数百人の人たちが大喜びで、私に特別に礼を述べに来て、抱きしめ、彼女たちは事の成り行きがどちらに転ぶか分からないかったけれども、このようにお礼ができるのは嬉しいことですよと言ったことで

した。まあ、私もこれを体験できましてとても喜ばしく思いました。そして私は人々に、全ての私の役目は神により指示された義務であり、現在生きていけることも神の恩恵なのですよと言いました。

夕方、神父様と牧師様による共同の感謝礼拝が行なわれました。牧師様はテーマとして詩篇150番、神父様は天使の歌を朗読なさいました。その間ファン・フェインのコーラスは「Wilt hede nu treden (ヴィルトゥ ヘイドゥ ヌ トウレイドゥン・今こそ神の下へ)」を歌い、修道女たちは感謝の歌を歌いました。Het 'Loof t den Here, mijn ziel (ヘットゥ ローフトゥ デン ヒア、 マイン ジェル・魂よ、主を賛美せよ)」という心持ちになりました。今は至る所が平和となり、もう誰も銃弾、刀または爆弾の犠牲者になることはないと考えたと無言の喜びと心からの嬉しさが沸いてきました。その上、警報のために不安になる必要はもうないという考えは大人、特に子供たちに大きな安らぎを与えました。人々はたくさん話すことができ、将来への空中楼阁を築き、殆ど寝ることができませんでした。8時にランプを消さなくて良いという事実は既に喜ばしい出来事でした。

コートウン

1945年8月16日

平和！ 平和！ 平和！ 信じられないほど本当なのだ！ 皆さん、平和なのです！ あっという間に、突然、ピシッ、ブン、平和！ 正直言って、その巨大さをまだ完全に実感できない。そして私はここで外見上落ち着いて、日記を付けている一方、心の中では興奮し、何もかも全て同時にやりたくなるけれど、最初から話しましょう。

今日の午後、重要な報告の為、できる限り全員、司令所の前の原っぱに集まるように命令された。この頃私たちは報告を聞くことを決して嬉しいとは思わず、『今度はまた何』という気持ちでそこへ行った。全員が来た時、ヤウストゥラさんとヤマジがやって来た。これもそれほど刺激になるものではない。椅子が運ばれ、ヤウストゥラさんがその上に立ち、物音一つしなくなると「日本は降伏し、今や平和なのである、と所長が私に話しました」と言った。一寸、私たちは啞然とし、その後つんぼになるほどの歓声が起こった。全員が首に抱き付き、キスをし、涙を流し、笑った。平和！ 終わったのだ。私たちは7人一緒にやり抜き、今ここで歓声を上げている他の全ての人たちも同じだ！ 有り難いことだ。私の隣でフレイ・ステインスマさんが戦いのダンスを踊る。どのアフリカ人の原住民もこのダンスを羨ましがることだろう。そして彼女は四方八方から平和、平和、平和！ と声を大にして叫ぶ。私は輪の中に引っ張られ、私たちは大はしゃぎで周りを跳ね回り、踊る。それから反対側では突然、歌声、詩篇が響く。それが私には本当にぴったり合っていると感じ、一緒にハミングする。なぜなら私は歌詞を知らないからだ。その後、歓声が破れ、ヤウストゥラさんが静かにするように尋ね

る。彼女は今から指揮を取ることになるが、様々な問題にもかかわらず、所長は私たちを程よく面倒見たと彼女は考える。彼は度々自分で薬を取りに行き、外科医を手配し、授業を受けさせたりしたのだ。他の収容所からの最初の通知とはだいぶ違っている。感謝として、私たちは彼に声を張上げ、喝采を送ると、驚いたことに、ヤマジはそれに深い印象を受けた。それからいくつかの連絡が続く、それらは余り心良いものではなく、私たちがヘチンチャンゲン（ばらばらにたたき切る）されるかもしれないという事実を指摘していた。しかしそれについて私は今考えたくない。明日それについて書くつもりだ。今はただ喜びだけ、そして安らぎ... 平穏... 新たな動揺などはいらない。ミアとフレイはお祝いのパーティーに行くために私を迎いに来る。今晚はコーヒーが飲める。彼女たちは私が今『そして皆は長く幸せに暮らしました』と書かなければならないと言う。そうなるように願いましょう！しかし私が日記を付けるのをやめるって??? 多分もし何かお父さんの消息ついて聞けば、そうするかもしれない。 1945年8月16日、平和！決して忘れられない日!!!

ファルダールポートゥ

1945年8月17日

今日は水路の反対側にあるカンボンの小家屋にいた高齢者たちと患者たちが前収容所にある家屋、ひどく破損した裁縫作業所と診療所へ再び戻されました。赤痢患者たちは古い赤痢用地に留まります。残念ながら収容所では病気が相変わらずひどく猛威を振るっています。一日に21人の新患者たちが入院されたり、一日で二人だけという日々もありますが、平均は一日で8人です。いずれにせよ、まだ患者数が多いのです。残念なことに、今日の午後キフトゥさんが亡くなりました。彼女は赤痢にかかりましたが、更に長い間ビタミン欠乏症に病んでいました。そのため彼女の手足は大変弱まり、心臓に恐ろしいほど打撃を与えました。惨事の起きた日から、彼女はどんなにぐったりしていても、収容所の為にたいへん熱心に縫い物仕事をしました。体がもうこれ以上持ちこたえられなくなるまで働き、非常に短期間で身体は弱化しました。幸いにも彼女は安らかに逝去することができました。彼女は夫を爆撃の被害者として3月8日に失い、子供がいませんでした。ですから彼女の生命につながっているものはもう何もありませんでした。

今朝、私たちは前収容所に水浴に行きました。爆撃される可能性なく、真昼に入浴することができたのは本当に贅沢なことです。私たちは太陽の日差しを満喫しました。これは太陽の温かさと同様、この密接し、冷え冷えする森の中で欠けているのです。この太陽の欠乏によりボスカンプの全抑留者たちはとても青白く、これは下（カンピリ収容所）に住み、日焼けして見える人たちとは全く対照的です。その上、痩せこけた私たちと比較して、彼女たち何人かはいへん健康に見えるという違いがあります。そこでは未だに（ヤマジにより用意された）国王のようなの食事を楽しみ、従って空腹などに悩まされることは全くないのです。それ

でも私たちの食糧に関して、もう苦情を言うてはなりません。今や平和なのです。ご飯の一盛りはまずまずで、食事はデン・ホントゥさんとスタッフにより、既に過ぎ去った危険な、また困難な日々にも用意されたように、変わらずに面倒が見られています。

たいへん品質の悪いテニス靴ですが、今、年をとられた婦人たちや足や腹部に病のある人たちの為に送られて来ました。また沢山の綿が来て、全員ワンピースを頂き、青少年たちはスーツあるいは制服を貰います。それらは耕作の子供たちが昔も受け取りましたが、その多くは火事により紛失されました。ミルクも到着したようですが、病院に入院し、私たちの牛から最近とった1ないし1.5リットルのミルクを少しもらえた運の良い部類に入らなかった限りは、もうミルクの味すら覚えていません。この森にいた子供はミルクについての知らせを聞いて、『ママ、ミルクってなに？ 着ることができるの？』と聞きました。今、実際にミルクがあるのならば、その時もミルクあったのだと気付くのは痛ましいことです。しかし私たちには手に入らず、ミルクなどの不足の為に様々な子供たちや数人の大人たちが命を落としました！ とにかくマカッサルの戦争捕虜たちの食糧不足はさらにひどかったようです。たった今、フラーヴェロットゥさんは彼女の夫の死因についての知らせを受け取りました。それはペラグラ¹³² でした。有り難いことにこの脚気の最悪症状はここでは発生しませんでした。それは恐らく、私たち女性には非常に重労働でしたが、素晴らしいキャッサバ菜園やサワ（水田）が、多量の野菜を私たちに与えたという事実のおかげでしょう。その為、人々は菜園班長のファン・ディユンさんの気力に対し、今日特別に感謝するのです。

今日の午後1時、キフトゥさんが埋葬されました。彼女のお墓は今、墓地に沿った道の反対側にあります。残念ながら墓地は余りにも小さくなってしまい、今また大きくしなければなりません。午後の集会で所長がここで未だ指揮をとり続けること、人々はここから去れるまで二ヶ月、もしくは二年かかるかもしれませんが、ただ従順でなければならないことが連絡されました。これら全てのことで、単純な人たちや気の弱い人たちはまた完全に意気消沈しました。彼女たちは落胆している時、私の所に話しに来て、その人たちを希望に満ちた気分に変えるのには非常に苦心しました。私たちの収容所の近辺の至る所で、一日中爆発が聞こえます。私たちが如何に大きな危険の近くにいたのかが今はっきりし、この国で更にもう戦う必要のないことを神に感謝いたします。私は今朝ヴェットゥスタインさんやカウマンズさんなどの患者たちのお見舞いに行きました。

¹³² 手足などの皮膚に紅斑を生じ、神経及び消化器障害を併発する疾患。ビタミンB複合体の欠乏が原因とされる。

シャボットウー コートウマン

1945年8月22日

平和！ つまり休戦なのですが、私たちは平和と呼ぶのです。8月15日が公式日ですが、私たちは16日の午後にそれを聞きました。最初にヤウストウラさんがきちんとした服を着て、マカッサルへ呼ばれたという知らせがあり、3時に全員が朗報の為に集合しなければなりませんでした。

所長は初めの言葉を述べましたが、その後はヤウストウラさんに任せました。彼はたいへん心を動かされ、完全に気を落としていました。私たちの要望で所長は暫くここにとどまり、私たちは以前のように振る舞うことでしょう。マカッサルの軍事病院は私たちの収容所、戦争捕虜たち、そしてパレパレの民間人強制収容所の重病患者の為に一週間内で引き払われるでしょう。私たちは既に満ちてくる月を見るだけで恐怖で身震いしましたが、もう飛行機に対し絶え間なく恐れることはなく、やっと安全であると感じても良いと最初に納得するのは認識しにくいことでした。2日後ヤップンが彼らの陣地や弾薬を破壊し始め、収容所の周辺の全方面を爆発した時、どんなに私たちの恐怖が根拠の十分なものであったのか分かりました。私たちは弾丸がピューと鳴るのをはっきり聞きました。もし連合軍がセレベスまで上陸したのならば、私たちの大部分はここで生き残れなかったことでしょう。これも4000個の米軍焼夷弾が落ちた理由であるとより確実に思います。連合軍は私たちがここから立ち去ることを望んでいました。そしてもしヤップンがしたければ、ニッポンはそうすることができました。なぜなら彼ら（ニッポン）は8月1日から15日の間に、戦争捕虜の三分之一をジャワへ移動しました。— ヘンクはこの中にいました。戦争捕虜は私たちの収容所が燃やされたのを聞き、私たちにお金を送金し、その直ぐ後に連れ出されました。ここでの私たちの状況を知っていたのです！ — これは連合軍の上陸を考慮したのかもしれませんが。そしてもし休戦にならなかったならば、他の三分の二も続いて移動されたことでしょう！ 私は今ヘンクからの知らせを非常に聞きたいと思います。通知があつてから最初の数日、所長は静かに自分の部屋にいました。それで私たちは『敗北した人を見ることは気分の良いものではないです』と言うくらいでしたが、これは長くは続きませんでした。彼はまた人をぶちさえし、とりわけ怒りっぽいのです。彼は全てに関して、私たちが今では、8月15日以前と比べ、彼にオルマツト（敬意）を表していないと考えます。下の収容所（カンピリ）では日本人のクーリーの助けを得て建設が行なわれました。これにより私たちはなるべく早くボスカンプから出ることができる訳です。食事や水を運ぶのを続けることはもう殆どできません。ここでの健康状態は悪く、子供たちは木の下では十分な陽射しを受けることなく、赤痢患者が100人もいます。そのうち数人の大人は重病で、チフス熱の人もいます。米国とオランダの協定はどうなるのか。この国の建設に関して米国は何を行なうのか？ について、何が起こるか全てに対し注意を払い、更に私たちは緊張して暮らしています。

人名表

A., van; leidster loods 7	ファン・A、バラック第7棟の主任
Ans, tante	アンスおばさん
Appelman	アプルマン
B., Dicky	B. デイッキイ
B., Ina; tweede loodsleidster loods 5	イナ・B、バラック第5棟の副主任
B., Jeltje	イエルチュ・B.
B., Kitty	キティ・B.
Baden, Gerda	ヘアダ・バードウン
Banck, Jopie	ヨーピイ・バンク
Bank	バンク
Bartstra, A	A. バートウストウラ
Bellemie	ベレミイ
Beltjens, P.L.H.	P. L. H. ベルチュンス
Berend, Theo	テオ・ベアレントウ
Berendsen	ベアレンスン
Bikker, Riet	リイトウ・ビッカー
Bong, zie Boom	ボング、ボーム参照
Boom, C. (To) ten,	(ト) C. テン・ボーム
Bos	ボス
Bouman; complexleidster	バウマン、集合バラックリーダー
Br., Ans de	アンス・ドウ・B r.
Bree, Henkie de	ヘンキイ・ドウ・ブレイ
Bruin, Ada de	アーダ・ドウ・ブラウン
Carry	キャリイ
Chabot, Boudewijn Elise [Boudie]	バウドウヴァイン・エリズ (バウディ)・ シャボットウ
Chabot, H.T. [Henk]	H. T. (ヘンク) シャボットウ
Chabot, Roekie	ルウキイ・シャボットウ
Chabot-Kortmann, J.C.G.M., passim	J. C. G. M. シャボットウ ー コートウマ ン
Christiaan, Billy	ビリイ・クリスティアーン
Christiaan, Hans	ハンス・クリスティアーン
Compagne; assistent apothekeres	コンパンイエ、薬剤師の助手

Corino	コリノ
Corten, Alphons	アルフォンス・コートウン
Corten, Tonny. V., passim	V. トニイ・コートウン
Corten, Eddy	エディ・コートウン
Corten, Frieda	フリイダ・コートウン
Corten, Roelof	ルウロフ・コートウン
Corten, Carla	カーラ・コートウン
Corten-Dolhain, M.H.J.A.	M. H. J. A. コートウン ー ドルハイン
Coumans	カウマンス
Cr., Lies	リース・C r.
D., Leny van	レニイ・ファン・D.
D., Maus	マウス・D
Daantje	ダーンチュ
Dahler	ダーラー
Dahler, Pop	ポップ・ダーラー
Daisy	デイジィ
Deibler	ダイブラー
Diejen, van; de leidster van de tuinploeg	ファン・ディユン、菜園班の班長
Dieudonné; leider van mannenkamp Parepare	ジユドネイ、パレパレ男性収容所のリーダー
Diggelen, Mia van	ミア・ファン・ディッフルン
Dirks	ディアクス
Dijk, van	ファン・ダイク
Dijk, Klaas van	クラス・ファン・ダイク
Dosis	ドーシス
Driest, Olly van	オリイ・ファン・ドゥリイストゥ
Dubois, Miss	ドゥボアさん
Duyn/ Duin	ダウン
Duyvené de Wit	ダウヴネイ・ドゥ・ヴィットゥ
E., Barendien van	バーレンディン・ファン・E
E., Bets	ベッツ・E.
Egmond, C. van; pastoor	C. ファン・エフモントゥ、神父
Elly, tante	エリイおばさん
Els	エルス
Evenraad	エイフェンラートゥ
Faber	ファーバー
Feenstra-Wolthuis, H.G.	H. G. フェインストゥラーヴォルトゥハウス

Filet, Nelly	ネリィ・フィレットウ
Furie	フーリィ
G., Jeanne	ジャーヌ
Gerth, Mevrouw	ヘアトウさん
Goedbloed-Weekhout, H.M.	H. M. フットウブルットウ ー ヴェイクハウ トウ
Goederen, Kees de	ケイス・ドウ・フウドウレン
Gogh, familie van	ファン・ホッホの家族
Goor, Zus van; leidster complex A	ズス・ファン・ホーア、集合バラックAのリー ダー
Gortmans, A.L.	A. L. ホートウマンス
Goslinga, dokter	ホスリンハ、医者
Goslinga-Gerritsen, J.J.	J. J. ホスリンハ ー ヘアリッツン
Graaf, Bea de	ベア・ドウ・フラーフ
Grace	グレイス
Gravelotte	フラーヴロットウ
Gravelotte, Lily	リリィ・フラーヴロットウ
Grebe	フレーブ
Guus	フース
H., Annetje	アネチュ・H
H., Ans; complexleidster, loodsleidster van loods 5	アンス・H、集合バラックのリーダー、 バラック第5棟の主任
H., Arie den	アーリィ・デン・H
H., Frans den	フランス・デン・H
H., Lucie	ルーシィ・H
Haar, Lies	リィス・ハー
Haman	ハーマン
Have, ten	テン・ハーヴ
Hasselt, Carla van	カーラ・ファン・ハッセルトウ
Hemsing	ヘムシング
Herdese; complexleidster	ヘアデス、集合バラックのリーダー
Herdese Ankie	アンキィ・ヘアデス
Heyneman	ハイヌマン
Hölscher	フールシャー
Hond, den	デン・ホントウ
Hoogeveen- de Haze Winkelman, Toos, dochter	トース・ホーフフェイン ー ドウ・ハーズ・

van de Gouverneur	ヴィンクルマン、知事の娘
Ino	イノ
Israël	イスラエル
Jenny	イエニイ
Joustra, A.H. passim	A. H. ヤウストウラ
K. Jo	ヨー・K
Kaa, Greet van der	フレイトウ・ファン・ダァー・カー
Kemp	ケムプ
Kempf, Miss	ケムフさん
Ketel, Wimpje	ヴィムピユ・ケイトウル
Kieft	キィフトウ
Klay, Tine; leidster complex A	ティヌ・クレイ、集合バラック A のリーダー
Kloe, de	ドウ・クルウ
Koning, Gerda	ヘアダ・コーニング
Konings, de	ドウ・コーニングス
Koningsberger	コーニングスベァハー
Kooistra	コーイストウラ
Kortman	コートウマン
Kroeze, Jojan	ヨーヤン・クルウズ
L. Stien	スティン・L
L., Jans	ヤンス・L
L., Truida	トゥラウダ・L
Labiroe	ラビルウ
Lily	リリイ
Livain	リヴァン
Logeman	ローフマン
Loon, van	ファン・ローン
Luyendijk, Jans; leidster complex B	ヤンス・ラウエンダイク、 集合バラック B のリーダー
M., Dougie	ドウギイ・M
M., Rudie	ルディイ・M
'Mama Koen', bijnaam van een Japans officier	「ママ クウン」、日本人将校のあだ名
Margret, J.	マーグレットウ・J
Marseille, A	A. マルセイユ
Mastricht-Pantekoek, N.M. [Noor] van ; leidster complex B	N. M. (ノア) ファン・マストウリフトウ ー パンテクウク、集合バラック B のリーダー

Mayer, Mrs	マイヤーさん
McGillavry, G.E. [Sien]	G. E. (シイン) マギラヴリイ
Meigaart, van de	ファン・ドウ・マイハートウ
Melis	メリス
Mia, zie Van Diggelen	ミア、ファン・ディッフルン
Mobach van der Kouwe, K.	K・モバッハ・ファン・ダアー・カウウ
Moeder Clothilde van Ambon	アンボンのクロティルドゥ修道女
Moeder Overste	修道院長
Molly	モリイ
Monti	モンティ
Morks	モークス
Mühlnickel	ムールニッケル
Mühlnickel, Elly [EI]	エリイ・ムールニッケル (EI)
N., Arie en Kees	アーリイ・Nとケイス・N,
N., Henny	ヘニイ・N.
N., Hermie	ヘアミイ・N
Nanning; complexleidster	ナニング、集合バラックのリーダー
Netty, tante	ネティおばさん
Nita	ニタ
Noll-Seth Paul, Tieltje	ティルチュ・ノル ー セットウ・パウル
Noor, zie Maastricht-Pantekoek	ノーア・マストウリフトウ- パンテクウク参照
Noordaa, van der	ファン・ダアー・ノーアダー
O 'Keefe, Miss	オキーフさん
O., Wieke, leidster loods 11	ヴィク・O、バラック第11棟の主任
Okazima, zie 'Daantje'	オカジマ、ダーンチュを参照
Okhuysen	オクハウスン
Olga	オルハ
P., Bep	ベップ・P
Patsy	パッチイ
Papoe, Jantje	ヤンチュ・パプウ
Paul, Freddy	フレディ、パウル
Peddemors, Ineke	イヌク・ペッドウモース
Peiffer-le Cocq d'Armandville, Phien	パイファー・ル・コック・ダーマンヴィル
Petroli	ペトロリ
Ploeg, Tienieke	ティヌク・プルウフ
Ploeger, Berthe	ベアトウ・プルウハー

Pol, Wil van d.	ヴィル・ファン・ d. ポル
Pont	ポントウ
Prins, M; leidster over de koeienstal en-wei	M. プリンス、乳牛小屋 及び 牧場の班長
R. , Lies	リス・ R.
R., zuster [ws. Rumolda]	修道女 R. (恐らくルモルダ)
Renvoy	レンヴォイ
Rijk, de	ドゥ・ライク
Roekie	ルウキイ
Roele, Suze	スーズ・ルウル
Room, van	ファン・ローム
Royakkers	ローイアッカーズ
S., Manneke	マヌク・ S.
S., Wil	ヴィル・ S.
Sandick, Willy van	ヴィリイ・ファン・サンディック
Schiphorst, Lily	リリイ・スヒッポースト
Seely, Miss	セイリイさん
Seijkens P.C.	P. C. サイクンス
Seth Paul, Saartje	サーチュ・セトウ・パウル
Sien, zie McGillavry	シイン、マギラヴリイ
Sleeuw	スレウ
Smits; dokter in mannenkamp Parepare	スミッツ、パレパレ男性収容所の医者
Smulders, Toetie	トゥティ、スムルダース
Spönhof, Tineke H.	ティヌク・ H・スプンホフ
Spreeuwenberg H.	H. スプレウエンベアフ
Steensma, Gré	フレイ・ステインスマ
Stolk, Tineke	ティヌク・ストルク
Suzan	スザン
Tammo	タムモ
Telip	テイリップ
Ter Vlieraar, Ineke	イヌク・タァー・フリイラー
Thiessen, Magda	マフダ・ティッスン
Tielman, Greta	フレイティ・ティルマン
Tielman, Mary	ミアリイ・ティルマン
To, zie Boom	トー、ボーム参照
Toesja [Touscia]	トゥシャ (トウシア)
Toetie, zie Smulders	トゥティ、スムルダースを参照

Tony	トニイ
Uckerman, L.G.H.	L. G. H. ウッカーマン
Uckerman-Tempelaars, J.C.	J. C. ウッカーマン ー テムプラーズ
V. Marijke van	ファン・V. マライク
V. Mies	ミス・V.
Vaags	ファーフス
Vaags, Lientje	リンチュ・ファーフス
Valderpoort, P.G.W. [Gé]	P. G. W. ファルダーポートウ [ヘイ]
Valderpoort-Wierts van Coehoorn, J.C., passim	J. C. ファルダーポートウ ー ヴィアツ・ファン・クウホーン
Veen, van	ファン・フェイン
Velde, van de	ファン・ドウ・フェルドウ
Verdenius	フェアドウニウス
Voskuil, W.J.	W. J. フォスカウル
Voskuil-Limborgh, C.E.G., passim	C. E. G. フォスカウル ー リムボーフ
Vreede	フレイドウ
W., Henkie	ヘンキイ・W
W., Jaapje	ヤーピユ・W.
Wanja, zootje van Olga	ヴァンヤ、オルハの息子
Waveren, van	ファン・ヴァーフレン
Wehrens, Juul	ユール・ヴェアルンス
Wehrer, Paul	パウル・ヴェアラ
Weiffenbach, Loes	ルウス・ヴァイフェンバッハ
Wetstein	ヴェットウスタイン
Weyers, A.A.	A. A. ヴェイヤース
Wieren, Coenraad van	クウンラートウ・ファン・ヴィアルン
Wieren, Gerben van	ヘアブン・ファン・ヴィアルン
Wieren-Ham, G. van	G. ファン・ヴィアルン ー ハム
Jamadji, Tadashi, passim	ヤマジ タダシ
Zuster Bertillia	修道女ベアティリア
Zuster de J.	修道女ドウ・J.
Zuster Jacobien	修道女ヤコビィン
Zuster Marcaria	修道女マーカリア
Zuster Rumolda	修道女ルモルダ
Zuster Sjane	修道女シャーヌ
Zuster Th.	修道女 Th.

Zuster Willemien

Zuster Willems

修道女ヴィルミン

修道女ヴィルムス

Staff Diary project:

Elisabeth Broers (editor Dutch)
Mariska Heijmans-van Bruggen (project co-ordinator)
Jeroen Kemperman (project assistant)
Elly Touwen-Bouwsma (programme director)
Richard Voorneman (editor Dutch)

Members Advisory Committee for the Diary project:

Dhr. R. Boekholt
Drs. E. Derksen (Stichting Tong Tong)
Dhr. F.N.J. van Dijk
Dr. mr. G. Jungslager (Stichting Japanse Ereschulden)
Dr. E.B. Locher-Scholten (Universiteit Utrecht)
Dr. Osamu Namba
Dhr. H.R. Toorop (Voormalig Verzet Oost-Azie)
Dr. H.L. Zwitzer